岩波講座

日本語 7

文　法 II

岩波書店

岩波講座
日本語

月報
4
1977年2月
第7巻付録

目次

岩波書店
東京都千代田区
一ツ橋 2-5-5

「当世ノ為ニ諱ム」

小倉芳彦

先年、柄にもなく、『大日本史』の論賛部分だけを集めた本(『大日本史賛藪』)の訓読・校註の仕事をしたことがある。

なにせ、江戸初期の水戸藩彰考館総裁の安積澹泊が、中国古典の学識を縦横に駆使して練りあげた「漢文」による名史論だから、日本史の基礎知識に欠ける私には、二重の意味で荷の勝ちすぎた仕事だった。それでも協力者の御好意と編集スタッフの支えとによって、なんとか形をなすことができたのは有難かった。

同書の解題で書いたことだが、澹泊は論賛の草稿を幕府の学士三宅観瀾に見せて、その刪潤を依頼している。観瀾はかつて彰考館に属したことがあり、澹泊より一八歳も若い。そういう手続を踏んだところにも、水戸藩の修史事業を円滑に運ぼうとした澹泊の老熟した配慮があるように思う。

論賛の草稿に加えた観瀾の批評を、澹泊は十分に尊重して定稿としているようである。たとえば草稿では清和天皇の仏教耽溺を直書していたのに対して、観瀾は、

「仏ヲ信ジ誠ヲ効スノ至リニ非ザレバ、則チ孰ゾ能ク此ニ臻ランヤ、藤原氏ノ権、此ヨリシテ盛ナリ」(原漢文)ト如レ此イタシ候ハヾ、仏法ノ聖武ニ盛ニシテ、清和ノ時、骨髄ニ入コミシ時勢モミヘ、時勢ヲカキタツルウチニ自然ニ褒貶アラワレテ婉切タルベキカ。

と評しているが、論賛の定稿はほぼこの趣旨に沿って書き改められたあとがある。観瀾は全体として、澹泊が書いた論賛が「穏妥」を欠いて「発露」に過ぎ、臣子が君上を論ずる体になっていることに不満を抱いたらしい。壬申の乱についても、近江朝廷(弘文天皇)を正統に数える『大日本史』の草稿が、大海人皇子(天武天皇)が吉野で「反」したと直書しているのを批判して、

正統(閏?)之間、反不反之境ハアカラサマニハ論ゼズシテ、婉曲ノ間ニ自然ニ識者ノシル様ニアリタキカ。

と述べる。その基本には、わが国の歴史は「百王一姓」だから、易姓革命の中国のように「改リタル後代ヨリ前代ヲ論ズルトハ史体大ニ異ナルベシ」という考えがある。唐人だとて、たとえば明朝の史臣は永楽帝の帝位簒奪を、あからさまには書かない。

その「アシラヒ」に学ぶべきだというのである。
「婉曲ノ間ニ自然ニ識者ノシル様ニアリタキカ」という観瀾の注文は、しだいに澹泊にも薫染して行ったようである。たとえば藤原公宗を逆臣伝から分離して、先祖の藤原公経の付伝扱いにしたことにそれは示されている。
公宗は鎌倉幕府が倒れたのち、北条の残党と組んで後醍醐天皇の暗殺を謀ったが、発覚して誅殺された人物である。それを逆臣伝から外した理由を、澹泊は次のように室鳩巣に対して書き送っている。
――わが朝の百王不易の史は異朝の革命の史とはちがう。公宗の子孫は、後世西園寺家として歴世伝わっている貴顕の家柄である。その祖先を逆臣伝に入れては「公共之書」とは言いがたい。事実だけを普通の列伝に書いておけばよい。その方が「当世ノ為ニ諱ム」の道理にもかなうものである。
以上の大筋は、さきの解題ですでに書いたことの焼直しである。
当世の名家の祖先を逆臣伝に入れることは「公共之書」たるに反するとは、きわめて興味ある「公共」の概念だが、ここでは「当世ノ為ニ諱ム」の道理と澹泊が言っている点について補足する。
「当世ノ為ニ諱ム」とは、おそらく公羊学にもとづいた表現だろう。魯国の史官の記録である『春秋』の二四二年間を、公羊学では三世に分けて、①孔子が直接体験した六一年間(魯の昭・定・哀三公の時代)を「所見」の世、②それ以前の八五年間(文・宣・成・襄四公の時代)を「所聞」の世、③さらにそれ以前の九六年間(隠・桓・荘・閔・僖五公の時代)を「所伝聞」の世とする。そして、遠い「所伝聞」の世のことならば褒貶をかなりはっきりと文字に表現するが、自分に近い「所見」の世ともなれば、「其ノ辞ヲ微ニシテ」褒貶を曖昧にする。公羊学ではその他にも「賢者ノ為ニ諱ム」などの筆法があるとしており、それらを心得ていないと、一見何ともない措辞の裏に、実は重大な史実がかくされているのを読み落したりするおそれが生ずるわけだ。
公羊学に対立する左氏学でも、『春秋』の措辞には婉曲・微妙な配慮がこめられていることを認める。晋の杜預は『左氏伝』成公一四年の文にもとづいて、「微ナレドモ顕」、「志セドモ晦」、「婉ニシテ章ヲ成ス」、「尽シテ汙ナラズ」、「悪ヲ懲シテ善ヲ勧ム」の五つを『春秋』の義例として数えた。「時勢ヲカキタツルウチニ自然ニ褒貶アラワレテ婉切タルベキカ」という観瀾の見解の基礎はこれらにある。
『春秋』という本が、実際にこれら注釈家の説くような用意のもとで記録されたか否かは、今となっては詮索のしようもない。むしろ「断爛ノ朝報」という王安石の批評が当っている面をもつ。問題は、そういう『春秋』に託して歴史記述の原理を求めようとした後世の注釈家の態度にある。
「所見」の世には「其ノ辞ヲ微ニス」と言い、「微ナレドモ顕」、「婉ニシテ章ヲ成ス」と言う。そういう持ってまわった「諱ム」表現に、彼らはなぜこうまで執着したのか。よほどの具眼の士でなければ見抜けないような微妙な措辞で、果して何人が真意を理解できるだろうか。「当世」の人を批判しても、

当人が批判されたと気づかぬような隠微な表現では、批判の意味がないではないか。それよりも、ズバリ直言、それでこそ史書と言い得るのではないか――

公羊学などの学識をちらつかせながら、時の権勢を憚って直言を避けるかの如き観瀾や澹泊の文章を読みながら、その屈折した表現に対して、私はいささかの憤懣と焦燥をおぼえたものだった。

だが近頃、観瀾や澹泊のことは別として、彼らが依拠した『春秋』の注釈学自体の方には、なぜかしら或る種の共感を抱くようになっている。

『春秋』の二四二年間は、公羊学流に言えば、その末期に孔子の「所見」の世六一年間を含む。言いかえれば孔子は、自己の生きる現代をも含めた二百余年の通史を綴ったことになる。そういう通史を書きあげるにはどういう配慮が必要か。『春秋』の注釈家たちは、そのことについてさまざまに思いめぐらしたように見える。多分それは、彼ら自身の課題でもあったからだろう。

特定の権力者にべったり癒着してはならない。なぜなら、権勢は一時のものであるばかりでなく、百年単位の歴史は、権勢をもってしても如何ともしがたいうねりを持つからである。と言って、権力者に面と向って直言することも無用である。なぜなら、「趙盾、其ノ君ヲ弑ス」と直筆することが認められた太史董狐の「美談」などは例外として、ほとんどの直筆は史官の生命の喪失のみならず、彼らの記録自体の絶滅をもたらした現実があったに相違ないからである。

私は少々『春秋』の注釈学に対して甘い点をつけすぎているのかもしれない。だが、世にすぐれた通史として伝えられているものには、暗黙のうちにこの種の筆法が行われているのではあるまいか、という気がする。公羊学などは、そういう内に秘められた筆法を、『春秋』に託してあからさまに説明しただけのことではないのか。

だから「当世ノ為ニ諱ム」とは、ただたんに一身の保全をはかって、時の権勢のために筆を曲げる卑屈さとは同じではない。自分とかかわりのない過去の時代を高みから弾劾し、忌憚なく批評する歴史にくらべて景気はわるいが、「当世」に対する思いは、かえって深い。

司馬遷は友人の任安に宛てた手紙で、「この思いは俗人にはとても伝わらぬだろう」と再度述べている。能弁の彼の筆をもってしてもなおかつ伝え得ぬ悲しみが彼にはあったのだ。「当世ノ為ニ諱」んだ史書から作者の真意を引き出せるか否かは、いまの「当世」をおもう心の深浅にかかっているように思う。

（おぐら　よしひこ　学習院大学教授）

戯曲の飜訳

喜志哲雄

イギリスの劇作家ノーエル・カワード（一八九九―一九七三）の喜劇に『私生活』（一九三〇）というのがある。以前は夫婦だった男女がそれぞれ新しい相手と再婚し、新婚旅行先のホテル

で偶然に鉢合せした結果、駈落ちしてしまうといった内容である。二人は女のアパートでしばらく仲良く暮し、かつての喧嘩のことなどを回想するが、女がつきあっていたピーター・バーデンという男のことが話に出て、険悪な雰囲気になる。ある邦訳によると、そのくだりはこうなっている――

エリオット　だが喧嘩のほんとうの原因は、ピーター・バーデンだったんだぜ。
アマンダ　だって、あんな人何でもないことは知ってたくせに……。
エリオット　そんなこと知らんよ。君は奴から贈り物を貰った。
アマンダ　贈り物なんて、ちょっとした小さいブローチよ。
エリオット　よく憶えてるよ、ダイアモンドを突き立てた奴だ。悪趣味きわまる。
アマンダ　そうでもないわ。随分立派だったわ。わたし今でも持ってて、時々つけるのよ。
エリオット　君は、僕を苦しめる為にピーター・バーデンと不義をしたんだ。
アマンダ　嘘。そんなことするもんですか。あんたが自分の嫉妬（やきもち）であんなことをこしらえ上げただけよ。
エリオット　だが、奴が君に参ってたことは認めるだろう。そうだろう。
アマンダ　そりゃ、少しはね。でも真剣じゃなかったわ。
エリオット　奴に接吻させたんだろう。そう云ったじゃないか？

アマンダ　でも……それがどうしたの？
エリオット　それがどうした？
さて、『私生活』にはもう一つ邦訳があり、それによると同じ部分はこうなっている――
エリオット　しかし、喧嘩のほんとの原因はピーターのことだったんだ。
アマンダ　あれはなんでもなかったのよ、あなただって分かってたはずだわ。
エリオット　そんなこと知るもんか。そもそもあんな奴からプレゼントなんかもらうからいけないんだ。
アマンダ　プレゼントって……つまんない小さなブローチだけじゃないの？
エリオット　よく憶えているよ、ダイアをびっしり埋め込んだ奴だった。あんな趣味の悪いのってないね。
アマンダ　そんなことないわよ、とってもきれいだったわ。今でも時々着けてるもの。
エリオット　あれは君の趣味にも合わない筈だ。ピーターのことでぼくにいやがらせをしたんだと思うがね。
アマンダ　それは違うわ、あなたは焼餅焼いて、変に勘ぐっただけよ。
エリオット　でも、あいつが君に惚れてたってことは認めなきゃいけないよ。
アマンダ　まあほんのちょっとね、そう深刻なものじゃないわ。
エリオット　でも、キスをさせてやったって、君は言ってた

じゃないか。

アマンダ　それがどうしたって言うの？

エリオット　それがどうしただって！

どちらもなかなかよくできた訳だが、二つの訳を支配している原理は実は正反対のものだと言ってもいい。ごく簡単な例を挙げると、引用の最後のエリオットの台詞は、第一の訳では「それがどうした？」という風にアマンダの台詞をほぼそのまま繰返すかたちになっている。これに対して第二の訳は「それがどうしただって！」で、「だって」という言葉が加わっている。原文にはもちろん「だって」に該当する単語はない。つまり、アマンダが開き直るのを聞いてエリオットが驚いたり呆れたり憤慨したりする芝居は、単語ではなくてひとえに語り方によって表現されねばならないのだ。

私の見聞から判断する限り、わが国の新劇の俳優たちは飜訳戯曲のこの種の台詞の処理が概して極めて下手である。そのことは、あるいは英語と日本語のアクセントの性質の違いと関係があるのかも知れない。英語のようにストレス・アクセントをもった言語なら、ストレスによって感情や意味の変化を表現することが容易であるのに、日本語というピッチ・アクセントの言語ではそうは行かないということがありはしないか。

そこで「だって」という言葉をつけ加えれば、エリオットの驚きや憤慨はその部分で処理することができる。これによって感情の流れはずっと辿りやすくなるが、そのかわりに、台詞の迫力は失われてしまうであろう。同様に、第一の訳の「悪趣味きわまる」という台詞は、第二の訳では「あんな趣味の悪いのってないね」と、「君は奴から贈り物を貰った」は、「そもそもあんな奴からプレゼントなんかもらうからいけないんだ」となっている。どちらの場合にも、第一の訳は原文にない単語は加えていない。第二の訳に含まれているような感情を、第一の訳はストレスの置き方によって表現させようとしているのである。ただし、こういう文体はわが国の演技者や観客には無愛想でとっつきにくく感じられるかも知れない。

そこへ行くと、第二の訳は、台詞と台詞、文と文の論理的・情緒的なつながりを一々説明してくれる。「ブローチだけじゃないの」、「着けてるもの」、「いやがらせをしたんだと思うがね」などといった調子だ。それに、「よ」とか「わ」とか「の」とか「ね」とかいった助詞を、第二の訳は第一の訳よりも多用する傾向がある。そしてわが国の俳優は大抵は文の終りのこういうちょっとした言葉の語り方を工夫することによって、台詞の味を出している。それは言うまでもなくもとの台詞が要求している演技とは別のものだ。英語の台詞の場合には名詞や動詞に置くストレスを調節することによって芝居をするわけである。

「……のよ」とか「……だがね」とかいった文体は、同時に、事態についての最終的な判断を相手に預けているような印象を与える。劇というのはもちろん普通は複数の人物の対話からできているのだから、台詞が互いにからまり合うのは当然だが、それにしてもカワードの原文では、独立の人格と自らの論理とをもった二人の男女が、それぞれ言いたいことを言っているという感じが強い。邦訳では——とりわけ第二のものでは——二人は自分の判断を相手に押しつけるというかたちで甘え合って

いる。大げさに言えば、原作と訳とでは人物たちの自我のあり方が変ってしまっているのである。

種明しをすると、第二の訳は最近(一九七六年一〇月)刊行された加藤恭平氏のもの、そして第一の訳は、『華々しき一族』や『女の一生』で知られる劇作家の森本薫が一九三七年に発表したものである。当時の森本薫はわずかに二五歳だったのだが、この文体の新鮮さはどうだろう。「不義」といった、いくらか古風な言葉を別にすれば、これが四〇年前の日本語だなどと誰が思うだろうか。

しかし、問題はそれではすまない。『私生活』を訳する少し前に、森本薫は『華々しき一族』や『かくて新年は』や『退屈な時間』のような創作戯曲を発表しているのだが、それらはおおむね彼のカワード訳と同じ文体で書かれているのである。ところが、たとえば『女の一生』のような後期の作品では、文体はもっと情緒的なものに変ってしまっている。そして辛うじて『華々しき一族』を例外として、森本薫の初期の戯曲は未だにわが国ではあまり人気がない。

森本訳で『私生活』を上演しようとしたら、新劇の俳優はさぞかしひどい苦労をしなければならないだろう。現在の演技者や観客の言語感覚を念頭において、上演して確実に成功することを狙うならば、おそらく――そしておそらくは観客も――加藤氏の訳のようなものを採らざるをえないだろう。事実これはそういう点の配慮は行届いた訳である。しかしこれだけではどうにも淋しいという気持を、私はおさえることができない。

(きし てつお 京都大学助教授)

文・非文――階層と連続性

今井邦彦

〔一〕 まず、次の「不等式」を見て戴きたい。

(1) robins, eagles=1>chickens, ducks>penguines, pelicans>bats>0

これはアメリカのある心理学者が行った実験結果の一部を概略的に示したもので、不等号の左側のものは右側のものよりも「鳥らしさ(birdiness)」の度合が大きい、つまりロビンや鷲は典型的な bird だが、鶏や家鴨のような家禽となるとその度合は幾分下り、ペンギンやペリカンではさらに下るが、それでも蝙蝠よりは上だ、という被験者の反応を表わしている。より一般的に言えば、「或るものが、或る範疇の成員であるという場合、それは〝全面的に成員であるか、全く成員ではない〟という1か0かの基準に基いて判断されるものか、それともいくつかの段階に分けて判断されるものか」という問題に関して、後の方を支持する結果を齎したものといえる。

実はこの資料、孫引きであるために、実験方法の詳細はわからないのだが、もし直接に「次の生物は bird であるか否か」というような聞き方をされたとすれば、少くとも私の反応は(1)のようにはならないだろう。どうしても「鳥類」という比較的はっきりした分類基準が先立つため、robins から pelicans に至るまでは平等に birds、bats は論をまたずに non-bird とい

う、つまりは1か0かの反応になると思う。しかしもし幼児などに「コーモリって何?」と聞かれれば、「本当はドーブツ(=哺乳類)なんだけど、鳥みたいにハネが生えていて空を飛ぶんだよ」というような答をするに違いない。ここで「……牛みたいに……」とはいえない、つまりこの場合の私は牛の birdiness は0だが、蝙蝠のそれは0よりは大きいと判断しているわけである。

アメリカ人の中にも birdiness に関する直接的な階層づけの要請に対しては、私と同じように1か0かの反応を示す人も勿論いるわけだが、この人々も、角度を変えて調べてみると、やはり各種の birds 間に階層を認めていることがわかる。たとえば、意味を弱める働きをする表現の sort of(「まあ……と言ってよかろう」)を含んだ文を幾つか見てみよう。

(2)(イ) A robin is sort of a bird.
(ロ) A chicken is sort of a bird.
(ハ) A penguin is sort of a bird.
(ニ) A bat is sort of a bird.

生成文法学者のG・レイコフはこれらの文について次のように言っている。アメリカ人のほとんどは(2)(イ)を奇妙に感ずるであろう。ロビンとは典型的な bird なのだから、これに sort of を使うのはおかしい。それに対して(2)(ロ)はまともな文である。これは chicken が典型的な bird ではない(日本人の「鶏」という語に対する反応とは異ると思われる。「鶏」には〃トリ〃という形態素が含まれており、しかも〃トリ〃には「鶏肉」の意味もあるからだ)ためである。ペンギンの birdiness は chickens のそれよりも更に低いため(2)(ハ)は(2)(ロ)よりもまともさが少くなる。(2)(ニ)のまともさは、同じ理由から(2)(ハ)より更に一段下るが、それでも(2)(イ)に比べれば真理を多少なりとも多く含んでいる。

こう見てくると、文というものは正しいか誤っているかに二分されるものではなくて、その「正しさ」は連続性を持った階層をなすものであるように考えられる。

〔二〕 文法で言うところの語類とか品詞とかの範疇にも、同じような連続的階層性が見出される。品詞間の区分が必ずしも截然としたものでないことは古くから知られていることであるが、品詞という範疇間に階層性があるとの主張は比較的新しいといえよう。やはり生成文法学者の一人であるJ・ロスによれば、英語の動詞・形容詞・名詞の間には次のような「不等式」が成立するという。

(3) 動詞>形容詞>名詞

この場合の不等号は、統語上の活発さ・自由度の多寡を示している。つまり統語上の諸規則の中には、動詞に対してもっともよく働き、形容詞に対しては適用度が下り、名詞に対してはさらに適用度が下るかあるいは全く作用しない、というものがかなりの数ある、というのがロスの主張の根拠である。そのような規則の一つである「前置詞消去」について見てみよう。生成文法(の中の一派)では、動詞の surprise も形容詞の surprising も、また名詞の surprise も、おおもとの構造ではすべて前置詞 to を持っているとされる。しかし表面に出て来る構造では、動詞の場合、この to が消去されて His visit surprised me. とならねばならず surprised to me は許されない。一方、形容

詞・名詞ではtoは残しておく必要があり、His visit was surprising to me. や、His visit was a surprise to me. からのtoの消去は不可である。ところが形容詞全般についていうと、前置詞消去を許す、ないしは消去規則が適用されねばならないものも一部見出される。

(4) Miranda is like an angel.

(5) My house is near the station.

の like, near 等がそれで、古い言い方では like unto などというのがあるが、現代英語としては(4)の like のあとに前置詞が残っていては困る。また near to ~は方言によっては認められるが、たとえば英国南部方言では通常不可とされる。この場合も名詞になれば消去は絶対に不可能で、

(6) Miranda's likeness to an angel

(7) the nearness of my house to the station

の to を消去してしまったら、それは「間違った」英語ということになる。

〔三〕 文がその正しさに関して連続的な階層性を示すものであるとすれば、言語研究はこれにどう対処すればよいのだろうか。まず注意すべきはこうした連続的階層性を生ずる原因には、色々なものがあるということである。初歩的な統語規則に違反しているもの、たとえば、I don't know what *is it*. とか He a student is. などに「非文」という刻印を押すことに躊躇の要はあるまい。一方(2)の諸文間に見られる差は、使い手が、外界をどのように「切り取って」見ているかに関連している。蝙蝠を本当に鳥類だと信じている人にとっては(2)(ニ)の「正しさ」は(2)(ハ)のそれと変りがないであろう。しかしもしこのような「世界観」をしも考慮する方法を徹底して採るとなると、「私の薬指を大気圏に写像する部分函数が、限りなく透明な暗黒の中でほくそ笑んでいた」というような代物も立派な文と呼ばねばならないことになるかも知れない。また「正しさ」の判断を(その文内部のみにとどまらず)談話の前後関係に照らして行うか否かによっても差が生ずる。I went to school tomorrow. はこれだけをとれば全くの非文と極めつけたくなるが、もし I had a strange dream. という文につづけて発せられたとすれば、かなりの資格を持ちうることになる。

もちろん、始めから I went…tomorrow. も I went to school yesterday. もコミにして扱ったのでは言語研究は収拾のつかない混乱に陥るほかない。現実には「正常な世界観を持った人が通常の想像力の範囲内で想定出来る場面での使用」というような条件を判断基準の中に設けることから出発することになるわけである。あるいははじめから使い手の世界観などは言語学の守備範囲ではないとする立場もあろう。しかしいずれにせよ、個々の事例に関して、どこで一線をひくか、は決して解決容易な問題ではない。想像力というものは人により、あるいは同一人物でも時によって著しく違うものだからである。そして最後に、多くの言語研究者を悩ませている一つの現象を挙げておこう。当初は全くの非文と思えたものが、典型的好例としてしゃべったり書いたりしてくり返し使っているうちに情が移る(?)ためか、何となくまともな文のように思えてくる事が往々にしてあるのである。

(いまい くにひこ　東京都立大学助教授)

岩波講座 日本語

7

文　法 II

岩 波 書 店

まえがき

およそ人間の思想は、この世界に存在する実質的・具体的な物・動作・作用・性質・状態などを資料・対象として形づくられる。それらの実質的・具体的な対象は、言語の世界では、名詞・動詞・形容詞などの名で分類される語彙として、それぞれの座を占めている。しかし、思想とは、それらの物や動作などそれ自身ではない。それらの物や動作・性質・状態についての一つの判断である。

話し手が下す判断には、肯定・否定があり、さらに、言語の世界では未定・確定も重要な位置を占める。それら肯定・否定・未定・確定などを表現するには、各言語はそれぞれの「様式」を持っている。その判断の「様式」を表現するのが助動詞である。また、表現に登場する名詞・動詞・形容詞などを言語上で関係づけて行く役目を帯びているのが助詞である。これらの助動詞・助詞は数えると一〇〇個前後があるに過ぎず、数万の異なり語数を持つ名詞・動詞等に比較すれば異なり語数では極めて少い。しかし、例えば『源氏物語』は使用度数約四一万の単語から成っているが、その内約二〇万語は助動詞と助詞である。つまり、使用度数からいえば、助動詞と助詞は、それ以外の単語の総和とほぼ等しいだけ使われる。それは、助動詞と助詞とが極めて限られた少数をもって、厖大な数の観念を操っているという事実を物語る。それ故、言語の立場からは、助動詞と助詞とは極めて重要な価値を持つ。

肯定・否定・未定・確定を中心として判断の変容を表現する助動詞は、日本語では重ねて用いることが多い。その配列(相互承接)には明確な順序があり、その順序はまた、日本人の物の判断の仕方の基本的な様式を示すものである。このことは一部の学者によって気づかれていたが、世間一般ではいまだほとんど取上げていない。従って現在の研究

者の間でも配列順序の整理の仕方に関しては、説き方が帰一しているわけではない。それは本巻にも現われているが、ともあれこれは今後注目されるべき重要な問題である。

考えてみれば助動詞と助詞とは古くから注意されて来たものである。したがって、個々の助動詞・助詞を取り上げた総覧風の刊行物がないわけではない。しかしその多くは、多人数の寄り合い書きで、各研究者が二個三個の助動詞・助詞を担当して、語形・接続・意味といった区分に従って個々に説明を加える体のものがほとんどすべてである。だが、そうした取扱いの欠陥はあまりに明瞭である。助動詞・助詞は、それぞれが全体として機能しているのであって、個々の助動詞・助詞は、常に助動詞全体、助詞全体の中に位置を得てはじめて機能するのであるから、個々の語が正当に理解されるには、常に全体としての視野を欠いてはならない。そう考えれば、助動詞や助詞を多人数で分けて解説することは根本的にあやういことであることが理解されよう。

その点を考慮して本巻では、少数の執筆者に、一括して助動詞・助詞の解説を委嘱し、それぞれ統一的な立場に立って個々の語を取扱って頂くことをお願いした。それによって、助動詞と助詞の役割を明らかにし、日本語なる言語の性格を浮き彫りにしうるように仕組みたいというのが編集者の意図であった。実際的には古典語と現代語とに大きく分け、そのつなぎとして、中世から近世にわたる期間を受け持って頂くこととした。

おのおのの原稿を見ると、古典語の担当者は、その意図をうけて全体的な視野を保ちながら詳しく個々の語を説かれた。中世の担当者は従来使われなかった清新な資料によって興味深い研究を披瀝された。現代語また説いて詳密なところが少なくない。これらが、学生、研究者、あるいは教育の実際家の方々に有用であることを疑わない。

一九七七年一月

編集委員

岩波講座　日本語７

目　次

7　助詞(3)……………田中章夫……三五九

1　日本語の助動詞と助詞

大野　晋

一　助動詞のはたらき
二　助動詞の配列順序(相互承接)
三　助動詞の配列順序の意味
四　現代語の助動詞の配列
五　助詞のはたらき・体言にかかる助詞
六　用言にかかる助詞 (1)
七　用言にかかる助詞 (2)
八　終助詞と間投助詞

一　助動詞のはたらき

日本語は膠着語であるといわれる。かつて、ヨーロッパの学者がギリシャ語やラテン語などを、語形変化の仕方等から見て屈折語と名づけ、中国語などを、語形変化がなく、もっぱら文の中での語の位置で文法的関係をきめる点から見て孤立語と名づけた。と同時にトルコ語、蒙古語、満洲語などを、その文法的性質から見て膠着語と名づけた。その膠着語の中に日本語も入るという。私は膠着語とされているトルコ語以下の言語についてほとんど知っていない。それ故、トルコ語などに関しては何とも言えないが、日本語を膠着語と扱うのは次のような事実をとらえて言うものだろうと思う。

たとえば現代日本語で次のようにいう。

結婚させられる。
結婚させられちまう。
結婚させられちまいやがる。
結婚させられちまいやがった。
結婚させられちまいやがったろう。
結婚させられちまいやがったろうけれど……

このように動詞・助動詞・助詞の類が後から後から追加され、膠で着けるようにくっつき、続いて行く。こうした特徴をとらえて日本語を膠着語の仲間に入れたのであろう。

ここにはまず動詞があり、その下に作為・受身・完了・見下げ・確認・推量の表現がある。そしてその下に逆接条件句であることを示す助詞のケレドがある。この、作為以下推量に至る部分が、助動詞と呼ばれる語群である。

だいたい日本語の文のうち動詞で終るものを動詞文といい、形容詞で終るものを形容詞文(または名詞文)という。だから、動詞文も形容詞文も、文末の動詞・形容詞がもつ活用という語形変化によって、中止、終止、あるいは「係り結び」の結びとしての連体形終止、または已然形終止などを区別して表現できる。また、動詞ならば命令形によって命令の終止を表現することもできる。しかし、活用形の変化によって区別できるのは、右のような肯定表現の中の終止の仕方、または連続の仕方の相違にすぎない。否定とか、未定とか、確定など、種々の判断の仕方の違いについては、活用形だけで表現し分けることは不可能で、動詞の下にさらに言葉を追加しなくてはならない。そういう役目をもって、動詞の下に追加されて行く言葉を助動詞という。

古典語では、助動詞は動詞の直下につき、また、形容詞の下には動詞アリを加えて、その直下についた(例えば「悲しくありけり」のように。それが「悲しかりけり」のような形に転じた)。また、名詞の下には助動詞はつくものではなかったが、名詞の下に「……ニアリ」と「……トアリ」を置いた指定表現が、年月のうちに音韻縮約によって、ナリ、タリと変形し、ここに指定の助動詞として名詞につくナリ、タリが発達した。また近代語に至って形容詞の下にも、ある種の助動詞はつくようになった(例えば「美しいでしょう」のように)。つまり助動詞は常に、動詞・形容詞などの下について使われるので、付属語と呼ばれる。

「高し」「面白し」のような形容詞は、はじめ語幹のまま「高山」「高光る」のように名詞や動詞の前に使われ、下に来る語を修飾した。また、「あな、面白(おもしろ)」のように、そのままで文の末尾に来て述語になることもあった。しかし、形容詞の連用・連体・終止という機能を明示するために、ク・キ・シという語尾を加えるようになり、高ク・高キ・高シという活用の変化が発達したと考えられる。已然形の高ケレという形は、奈良時代にはまだ形成の途中で、平安

時代になってようやく一般化した。このように、形容詞は述語として成立することが遅かった。これが形容詞の下に助動詞のつづかない理由の一つであると思う。また、形容詞は、「高し」「面白し」「悲し」など、すべて、表現の意味するところが事物の状態・性質、あるいは情意である。それらは時間によって変化したり、運動したり、推移したりすることとして把握されたものではない(動詞はこれに反して、動作や作用、状態が常に時間という場において、変化し、運動し、推移することとして把握された事柄を表わす。たとえば形容詞「赤い」「細い」は時間的な変化を意味しないが、動詞の「赤む」「細る」は状態の時間的な変化を表現している)。つまり、形容詞の表わす意味は、常に非時間的・没時間的なこととして認識されたものである。したがって形容詞は、もともと、時間を伴う観念である完了とか持続とかと関係がない。また、未来とか、過去とかの観念とも関連がない。それゆえ、動詞に付いて動作の完了・持続、あるいは未来への推量、過去への回想等を表現することを重要な役割とする助動詞は、形容詞と関係が薄く、ことに、古い時代には極めて薄かった。これが、形容詞の下に助動詞がほとんどつづかない理由の二つである。

しかし、時代とともに表現が豊富になってくるにつれて、形容詞の表現にも過去や推量や否定などが求められるようになり、やがて一部の助動詞が形容詞をうけるようになって来た。それでも動詞を承ける助動詞と比較すれば形容詞を承ける助動詞はまだ極めて貧弱である。

二　助動詞の配列順序(相互承接)

さて、助動詞は単独でも動詞の下につくが、複合しても使われる。その助動詞の配列の順序、あるいは相互の承接の仕方について古典語について概観してみよう。まず、動詞の直下について、その動作・作用が、作為的なものであるか、自然生起的なものであるかを明示するス、サス、シム、ル、ラルがある。これを第一類(①)とする。

その下には、尊敬とか謙譲とか、丁寧とか、つまり敬語に関係するタマフ、タテマツル、キコユ、マウス、ハベリなどの一群が位置する。これを第二類(②)とする。

その下には、動作の完了・持続・確認などを表わす、ツ、ヌ、リ、タリなどが位置を占める。これを第三類(③)とする。ついで、最後尾に否定・推量・回想などを表わす語群が位置を占める。これを第四類(④)とする。

これを一覧表にすると次の通りである。

	語	活用形	意味
第一類	(す四段) す下二段 さす しむ る らる (ゆ) (らゆ)	活用形完備	使役・自発・可能・受身・尊敬
第二類	たまふ四段 たてまつる きこゆ まうす (たまふ下二段) はべり さぶらふ	活用形完備	尊敬・謙譲・丁寧
第三類	甲：つ ぬ り たり 乙：ざり べかり まじかり めり	活用形やや不備	完了・持続・確認など
第四類	ず じ まじ (まじじ) む らむ けむ らし まし べし なり き けり	活用形不備	否定・推量・回想

	語	活用形	意味
別類	なり たり ごとし まほし たし		指定・比況・希求

これらの助動詞が重ねて用いられる例を見よう。たとえば、『源氏物語』には、

（イ）　御覧ぜられたてまつりたまふめりしか　（夕顔巻）

（ロ）　知らせたてまつりたまはざりけるを　（松風巻）

のように動詞の下に五個の助動詞の重ねられた例がある。この場合に、助動詞の配列には一定の承接の順序がある。右の表で、第一類、第二類、第三類、第四類と名づけたのがそれである。これらは、その中のどれかを脱落させることはあるがその承接の順序を顚倒することはできない。『源氏物語』からいくつかを例示してみよう。

みそぎをせさせたてまつらまほしく　（東屋巻）

賜はせたりしかば　（橋姫巻）

夜更けはべりぬべし　（桐壺巻）

心もかけきこえじ　（葵　巻）

のたまふめりき　（若菜上巻）

このように、①②③④は、そのどれかが脱けていても何ら差支えはない。また、単独で用いることも何ら差支えない。しかし、それが、②①とか、④②③①のように順序逆転して用いられることはない。

またそれぞれの類に属する助動詞は、その類の中からは一個だけ用いられることが多いが、同じ類の中から二個の助動詞が重ねて用いられる場合もある。前掲(イ)(ロ)の文例では②の助動詞が重ねられており、次の文では①が重ねて使われている。

人に知られさせ給はぬ御ありきも　（浮舟巻）

私は先に掲げたように、尊敬の助動詞を含めて、四類に分けて考えているが、分類の仕方については種々の考えがある。また、尊敬に関する部分を省いて考えて来た人が多い。そのいずれの分類をとるにせよ、先の表に見るように、

第一類・第二類に属する語は活用形が完備しており、第三類に属する語はやや活用形が不備であり、第四類に至ると、無活用の語すらある。それは、第四類の語は常に文中において末尾に位置するのであるから、活用形を具備して下への連続を用意する必要がないからで、その結果、第四類の助動詞は活用形が不備になっているのである。

また、第一類以下、各類は意味的にも共通性を持っている。ということは、助動詞は決して無秩序に配列されるのではなく、助動詞が選択され配列されるとき、その意味の範疇に従って位置が定まるということである。従来、学校教育などでは、古文の読解という見地から助動詞の個々の意味についてはかなり注意を払っているが、この配列順序（あるいは相互承接）についてはほとんど説くところがない。これは遺憾なことであると私は考えている。

三　助動詞の配列順序の意味

次に、このような助動詞の配列順序は何を意味するかを古典語に例をとって考えてみたい。

日本語の動詞について考察する場合に、根本的に重要なことは、日本語の動詞に、人称の区別を示す指標がないことである。日本人にとって動詞は常に無人称で用いられる。したがって、動作の主が、我か、汝か、彼か、彼らか、単数か、複数かなどは意に介しない。そんなことではなくて、動作・作用について個々の動作か、作用の主か、を考えずに、動作作用は生起する事態として把握される。そして、その生起する事態は、それが、何らかの作為、人為の加わった事態なのかそれとも全く自然生起的な、自然展開的な事態なのであるかに注目する。その作為的であるか、自然生起的であるかを識別する指標として、ス・サスと、ル・ラルとが使われるのである。

ス・サスは普通、使役の助動詞と言われる。しかし、これは使役というより作為とか関与とかいう方がよいであろう。古い動詞に次のような対立がある。

あます（余す）	のこす（残す）	にごす（濁す）	たす（足す）	
あまる（余る）	のこる（残る）	にごる（濁る）	たる（足る）	
あらはす（現はす）	こがす（焦す）	こぼす（零す）	つぶす（潰す）	ながす（流す）
あらはる（現はる）	こがる（焦る）	こぼる（零る）	つぶる（潰る）	ながる（流る）

このように、スとルとによって、作為・関与を表わす動詞と、自然生起を表わす動詞とが対立しているものが少なくない。これは、スとル（古くはユ）が基本的にそのような意味を表わしたものであることを示している。

　ル・ラルは、自発・可能・受身・尊敬の四つの用法を持つといわれるが、その基本は自然生起、自然展開にある。日本人は可能ということも自然生起、自然展開の結果であるという観念で把握したので、本来、自然生起を表わしたルを、可能の意にも使うようになった（デキルという可能を表わす言葉が「出デ来ル」から転じたデクルの転であることを思い合わせればこのことは理解しやすいであろう）。また、ル・ラルは受身についても使われる。日本語における受身は、元来他動詞によって作られるだけでなく、自動詞によっても作られる。たとえば、「親に死なれる」のごときである。このような表現が可能なのは、親において、死ぬという事態が自然に生起した（自分は関与していない）ということである。それが日本語における受身の根源的な意味である。また、尊敬にもル・ラルを使うが、尊敬もまた、自分が相手の動作に関与しないこと、相手の動作が自然に生起した事態であるというように表明して、相手に関与せず、相手のなるがままにしていることを表わし、それによって敬意を表現するものである。

　このようにして、一つの動作について、その作為と自然生起との区別を示すならば、そこの段階で動作の主が移動することがある。例えば「彼が金を盗む」という場合に、これを「彼が金を盗ませた」あるいは「彼が金を盗まれた」とするならば、それによって、盗むという動作の主が別人に移動して確定する。つまり、スとルという助動詞は、実は動作の主を確かに限定する役目も帯びている。動詞の人称の区別をしない日本語では、自然生起と、作為の表示に

よって動作の主を区別する表現法を使っているわけである。

第二類には尊敬に関する助動詞が属する。これは、話の中の話題の人物・事柄・動作についての尊敬、あるいは卑下謙譲と、話す相手に対する丁寧とを合わせ含んでいる。すでに第一類の助動詞によって、動作の主は確定しているので、第二類以下では、その確定された主の動作についての話し手の尊敬・卑下謙譲あるいは話す相手に対する丁寧が表明されることになる。

第三類には、ツ・ヌという完了・確認を表わす助動詞と、リ・タリという持続から既定を表わす助動詞とが所属する。何故同じような意味を表わすツとヌの二種が第三類に所属するのかといえば、ス・サスという助動詞そのもの、およびその系譜に属して作為を表わす一群の動詞と呼応するのがツで、ル・ラルという助動詞およびその系譜に属して自然生起、自然展開を表わす一群の動詞と呼応する役目を負っていたのがヌなのである。この二つの助動詞は、はじめ完了の意を表わしたが、後には抽象化して確認を表わすようになり、やがて鎌倉時代に消失した。

リは、持続を表わすアリが四段、サ変等の動詞の連用形を承けて持続・継続を表わすところから発達した。タリは、上二段、下二段の動詞の連用形につくところから発達し、上一段、カ変等にもつくように広まったものである。リが、四段、サ変等についた際には、例えばsakiari→sakeriのようにリの直前の動詞は、奈良時代には、已然形ではなく、命令形と同形になっていたことが、上代特殊仮名遣の研究によって明らかになったことは注意されるべきことである。つまり、リは已然形をうけるのではなく、命令形をうけていた(ただし、命令の意味を承けたのではない)。

リは、四段とサ変というように、承ける動詞が限られていた。それに対してタリは承ける動詞に限定がなかった。すなわち、どんな活用の動詞に対しても、その連用形にタリをつけることができた。それゆえ、リを使うよりタリだけを用いる方が心理的な努力が少なくて済んだ。その結果、次第にタリが多用されるようになり、平安時代中期以後、リは勢力を弱めて鎌倉以後消失したのに対し、タリは優勢となり、今日、タリの子孫のタだけが時の助動詞として使

われる基礎をつくった(タリは、ツ・ヌの消失の後、一層多く使われ、キにも取って代った)。
なお第三類には、ザリ・ベカリ・マホシカリなどアリの複合形がある。これらの助動詞は意味的には第四類に属するが、否定・想定・希望などという時間に関しない判断についても、推量や、回想などの、時間的要素を含む判断を行ないたいという要求が生じるにつれて、否定のズ、想定のベシ、希望のマホシの下にアリを加え、ザリ・ベカリ・マホシカリなどを生じ、アリの仲介によって推量や回想を加えることを可能にしたものである。つまり意味的には第四類のズ・ベシなどが、相互接続の関係から位置としては第三類に押しあげられたものである。
第四類には否定と推量・想定と回想とが属する。推量・想定と回想とは、ヨーロッパの文法では未来・過去というものである。しかし、日本人は時間について、延長のある、区分できるものとは一般に考えて来なかったらしい。日本人にとって未来とは主観的な推量・推定の中にあり、過去とは記憶に確かか、不確かかによってその存在の認識されるものであったと思われる。それは、キ・ケリという助動詞の詳細な意味分析によって得られた考えである。その分析の結果、われわれは、キ・ケリを過去の助動詞といわず、回想の助動詞という。私はむしろ記憶の助動詞というべきであろうと思う。キとは確実な記憶、多くは自己の直接に経験した記憶のあることを指す。ケリとはそれに対して、いつからとも分らない過去の出来事について現在の時点で記憶が喚起されたことを表わす。いわば気づきの助動詞である。いつのことか確かでないが伝聞によって知り、今知っているという意味から、ケリは伝説を表わすためにも使われた。「昔、男ありけり」のごとく。現在の「アッタッケ」という用法がその名残である。
さて、以上のような古典語の助動詞の配列順序を見ると、そこに、日本語による判断の様式を知ることができる。日本語では、ある動詞が使われると、その動作が、①作為的なものであるか、自然生起的なものであるかを判断する。これは同時に、動作の主を確定する。②その動作に対する話し手の尊敬の意の有無、また、話しかける相手に対する尊敬の意の有無を表明する。③そして、その動作が、完了しているか、持続しているか、また、確認できるものかと

いうことを明らかにする。この③の部分はヨーロッパの言語の一部についていう、アスペクトなるものにほぼ当るもののように思われる。そして④において、それらを否定するのか、それとも、推量・想定しているのか、あるいは記憶に確かかどうかを申し述べる。ここまでが助動詞による表現である。日本語では、さらにこの下に⑤として終助詞を加える。たとえば「か」「な」「ぞ」「よ」のごときである。これは④までに述べた判断を話し相手に持ちかける部分であって、ここに、命令や、質問、教示、押しつけ等が含まれ、さらに疑問とか禁止とかいう話し相手への持ちかけも⑤において表明される。以上が動詞を承ける助動詞の主要な役割の概観である。

名詞をうけるナリ・タリは、本来ニアリ・トアリとあったものの縮約形である。これは体言を承けるもので、右にあげた助動詞①②③④のどれでも、連体形にすればその下にナリはつくことができる。しかしナリ・タリはアリの複合した形であるから、本来③の位置にあたる。それ故ナリ・タリの下に①②を置くことは、一般に不可能である。

四 現代語の助動詞の配列

助動詞の配列の順序は古典語においてだけ規則性を持つものではない。現代語においても配列の規則性があり、助動詞の相互承接の基本的位置関係は古典語と同様であるといえる。しかし両者の間には多少、位置のずれの生じているものがある。その理由については次のようなことが考えられよう。

日本語の全体的な事実として、助動詞として用いられる語は本来は何らかの具体的な意味を持った動詞・形容詞であったと考えられる。それが付属語の位置で用いられているうちに、音韻の縮約等を生じてもとの具体的な意味を失い、ある時点以後に抽象的な観念だけを表わすに至って助動詞として確立する。また、助動詞は本来単独の語から転成する場合もあるが、いくつかの語の複合が、音韻の融合によって、変形してあたかも一語のようになり、助動詞と

して扱われるようになることがある。

例えば、現在、行ッチマウ、取ッチマウという形があるが、これが、テシマウの約であることは分りやすいことであろう。丁寧を表わすマスという助動詞があるが、これは本来、参ラスルという動詞であった。それが、mairasuru→marasuru→marusuru→marsuru→massuru→masuru→masu→mas→ma という変化を経て来たのである。今日でも丁寧体として「有リマスルガ」などと演説する人があるが、それは、マスの一時代前の古形を用いたものである。それは右の変化をたどることによって明らかであろう。

助動詞の交代は歴史以前から生じていたに相違ない。例えば、行キタイ、見タイのタイの古形タシは、鎌倉時代には新しい口語形であった。それで、歌を詠むのに用いて可か不可かが問題となったことはよく知られている。タシはマホシに代って使われることになったのだが、タシは形容詞に出自を持つために、それが助動詞の配列順序の中で占める位置については、多少の問題を生じている。

今、現代語における助動詞の配列順序の一覧表を作れば、次のようになる。

タイは第三類に入っている。これについては次のことが考えられよう。タイは希望・欲求を表現するが、そのような希求は古典語ではガモ・ガナ・モガモ・モガナ、また誂えのナによって表現され、相手への働きかけとして、終助詞に属していた。ところが平安時代にマホシという形が現われた。これは奈良時代にあった「見マク欲シキ」などのマクホシの転で、makuFosi→mauFosi→maFosi という経過を経て成立したものと考えられる。マホシは平安時代においても形容詞的接尾語であったとおぼしく、マホシゲナリとか、マホシガルなどの例が見える(助動詞ならば、その下に、ゲとかガルなどの接尾語をとることはない)。

このようにマホシ自身が形容詞的性格を持っていたので、その後をついだタシもまた形容詞に出自を持っている。そして「買いタイ人はいませんか」のような形容詞的な用法もある。してみれば、タイを助動詞扱いすることに、問

	第一類	第二類	第三類	第四類
	せる させる れる られる	なさる 申し上げる ます	ちまう た たい ない ん らしい	う よう だろう でしょう そうだ ようだ
	活用形完備	活用形完備	活用形やや不備	活用形不備
	使役・自発・可能・受身尊敬	尊敬・謙譲丁寧	完了・確定・否定・希望	推量・伝聞・比況

題があるようにも考えられる。

また現代語には、否定のナイ・ンが第三類に入って来る。もともと古典語の否定の助動詞ズに、形容詞的性格があることが指摘されているのだが、現代語のナイには極めて顕著に形容詞的性格が見られる。元来否定のナイは関東方言であり、これはさかのぼって奈良時代の東国方言に見られる否定の助動詞ナフ(ナハ・ナフ・ナへと活用した)の子孫であると考えられる。しかし、今日において否定の助動詞ナイは、形容詞「無シ」から転じたナイと活用の形式を全く同じくしており、その点からも、無自覚的に形容詞「ナイ」と助動詞「ナイ」とが混同されるおそれが少なくない。助動詞ナイが第三類に位置していることはその観点から十分考察の加えらるべき問題である。

以上、概略であるが助動詞の持つ機能、その配列順序の持つ意味、古典語から現代語に至る変化等、助動詞に関する基本的なことを述べた。記して至らない点に関しては、別に掲げられている各氏の詳細な記述を参考していただきたい。

五　助詞のはたらき・体言にかかる助詞

常に他の語の下に用いられて、付属語と呼ばれる語の中で、助動詞と相違して活用を持たない語がある。それを助詞という。もっとも、活用せず常に他の語の下につく語としては、他に接尾語もある。しかし、接尾語はそれの付着する語と一体となって一語を形成する。たとえば「うれしげ」「高さ」「あまみ」における「げ」「さ」「み」のようなものである。助詞は、これらのような、上の語と一体となって一語を形づくり、上の語に一定の品詞としての資格を与える機能を持たない。その点で接尾語と助詞とは区別される。

では助詞の役目は何であるか。それを最も大まかに概括すれば、助詞は文の中の、語と語とを関係づける役目をもつ語であり、また、文の表現する判断を、話し手が話し相手に向って持ちかけ、関係づける役目をもつ語である。そして、その役目に従って七つに分類される。このことを古典語の助詞を中心として順次説明することとしたい。

現代語の助詞についても、構造的には大体同一である。ただ、助詞が承ける言葉の種類(品詞)などについては時代とともにゆるく、広くなるので、ここに記すところは古典語の基本的構造だけだという点に留意していただきたい。

およそ日本語の「文」表現の中で、物や事柄を表わすのに最も多く使われる言葉は、体言と用言とである。この体言と用言とが相互にどんな位置関係をとるかといえば、基本的には次の四つの場合がある。

(一)　体言(およびそれに準ずるもの)↓体言(およびそれに準ずるもの)

(二)　体言(およびそれに準ずるもの)↓用言

(三)　用言↓体言

(四)　用言↓用言

この四つの場合に、それぞれの関係を明確にするのが助詞の一つの役目である。その使われ方を調べてみよう。

(一) 体言(およびそれに準ずるもの)→体言という関係づけをする助詞……連体助詞

もし「花野」と言えば、「花の野」ということで、「花のある野」という意味である。これは、「花」が「野」を修限定していることであり、「花」が「野」に所属しているということをあらわす。あるいは、「野」が「花」を所有していることをあらわすといってもよい。この場合、「の」という助詞は、「花」と「野」との所属、あるいは所有の関係を明確にする役目を果している。つまり、これは「我が国」「山田の研究」などにおける「が」「の」についてもいえることで、このように体言Aと体言Bとの間に位置する「の」「が」「つ」という助詞は、基本的にAがBに所属する、あるいは、BがAを所有することを示す助詞で、このような関係づけをする助詞を連体助詞と名づける。

右の三つの助詞の中では「つ」が最も古いものらしく、奈良時代の用法も、すでに片寄っており、位置や存在の場所を示す場合に多く使われ、平安時代以後は例えばマツゲ(眼ツ毛)のような成句に使われる他は亡びてしまった。

「が」は自分および近しい人をさす名詞や人代名詞の下に多く使われ、他には地名、動植物名の下に使われるにすぎなかったが、やがて主格を表わすようになり、他方では接続助詞へと発展して数多く使われるようになった。「の」は広く使われたが、根本的には存在の場所を示すものであったらしい。そこから、所有・所属の場所を示すように展開し、生産の場所・生産者・人のはたらく場所などを示すようになった。

六　用言にかかる助詞 (1)

(二) 体言(及びそれに準ずるもの)→用言という関係づけをする助詞……格助詞・副助詞・係助詞

これらの助詞を考えるためにはまず用言の内部を細かく吟味しておくことが必要である。

たとえば形容詞「高シ」についていえば、古くはまず「タカ」という体言的な語根があったと考えられる。それを副詞として使うことを明示するために、クという語尾を加えて、タカクとした。肯定判断の終止を示すためにシという語尾を加えてタカシとした。体言に連なることを示す語尾としてキを加えてタカキとした。これらのク・シ・キの加わった、タカク・タカシ・タカキが形容詞の基本的な活用の変化で、この他のタカケレという形は奈良時代にはまだ形成の途中であり、ケレという語尾は平安時代に至ってようやく、形容詞の一活用形として統一的に広く使われるように発達したものである。このように考えると、形容詞タカシは、二つの部分に分けられる。それは事柄を示すタカという部分と、連用か、終止か、連体かという、切れ、つづきの関係を示す、ク・シ・キの部分とである。その、事柄を示す部分をAとすれば、Aはいわば事柄を述べる部分。つまり述事の部分である。それに対して切れつづきを示す部分をBとすれば、Bはいわば話し手の意向を述べる部分。つまり述意の部分である。このように、形容詞はすべてA述事の部分とB述意の部分とから成るものだということができる。この区別は極めて重要である。

動詞もまた、未然・連用・終止・連体・已然・命令という活用形を持っている。活用形を持つ点で動詞と形容詞とは同一であり、同一の名称を与えられている活用形のそれぞれの機能は基本的に共通である。したがって、動詞も、原則的には、A述事の部分と、B述意の部分との二つの部分によって成立している。ただ動詞の場合は、文献時代以前にAとBとの融合が進んでいて形容詞において見ることができたような、明確な語形の上の識別を、AとBとの間に簡単には見出し得ないことが多い。しかし、文献以後の語形の上で簡単に区別し得ないとしても意味機能の上では原則的には、動詞の内部にAとBとが区別され、Aの部分が先にあり、Bの部分がその末尾に付いていることは確かである。また、用言の下に助動詞が加わる場合には、その助動詞の部分は、B述意の部分に参加したものである。

このようにして区別される用言の内部のA述事の部分と、B述意の部分とは、助詞の機能を考えて行く上で極めて重要な、根本的な区分である。

さて、右のようなA述事の部分、B述意の部分という区別を立てると次の二点を明らかにしうる。

(イ)花咲く。　(ロ)花咲け。　(ハ)花咲けよ。　(ニ)花咲くべし。

においては、(イ)(ロ)(ハ)(ニ)ともに「咲く」というA述事の部分には何の相違もないこと。しかし、咲く(終止)、咲け(命令)、咲けよ(命令)、咲くべし(推量)というB述意の部分には、形の変化につれて、表わす意向にも変化があるということ。そこで次のような文例を見ていただきたい。

花を散らすな(禁止)　花を散らし(中止)
花に散らすな(禁止)　花に散りぬ(完了)

ここでは、「花を」は、「散らすな(禁止)」「散らし(中止)」にかかっているが、「花」は下の用言のB述意の部分が表現している、禁止とか中止とかの意向の部分と関係があるのではない。「花」は「散らす」という、用言のA述事の部分と関係があるものである。このことは「花に散らすな」(禁止)、「花に散りぬ(完了)」の場合でも同じで、「花に」は「散らす」「散り」にかかり、「な」(禁止)、「ぬ」(確認)にはかかっていない。してみると、「を」とか「に」とかの助詞は、右のように、体言と下の用言との関係のうち、体言と用言のA述事の部分との、事柄の上での資格関係を明確にする役目を果す助詞であることが分る。別の例でいえば、「山ヲ見ル」のか、「山ト見ル」のか、「山カラ見ル」のかという「山」と「見ル」との対等な資格の関係をきめるのである。このような助詞を格助詞という。格助詞には「を」「に」「と」「へ」「から」「より」「にて」「で」「まで」などがある。

格関係には、主格(動作の主であることを示す)、目的格(動作の目的であることを示す)、補格(動作の位置などを補う)などが区別される。しかし日本語についていえば、歴史以前から主格をもっぱら表わす役目を帯びていた助詞はなかったこと、つまり古代の日本語では動作の主であることを明示することは、文法構造的には、あまり行われなかったのだということをここで記して置きたい。これは先に助動詞のところで、動詞が動作の主を、我・汝・彼・我

ら等と明確に区別しないと述べたところと呼応する事実で、日本語を理解する上で極めて重要なことと考えられる(私ガ行クのような主格のガは、室町・江戸時代以後はじめて行われるようになった語法である)。

また、日本語には目的格をもっぱら表わす役目を帯びた助詞もなかった。今でも「水飲ム」「酒クレ」などと目的格を表わす助詞なしの表現が少なくないが、これは本来の形式にそのまま従っているものである。目的格を表わす「を」が多用されるに至ったについては、漢文の訓読において、目的語から動詞へと反読する際、必ず「を」を加えたことが、大いに与って力があったのだろうと思う。

日本語の格助詞の中で多く使われたのは、静止的に位置を指示する「に」であった。動作・作用を生起・出現することとして把握する傾向を強く持っていた日本語の表現では、その生起・出現の場所についての意識は、主格や目的格の表示よりも強かったと見えて、「に」という助詞は極めて多く使われていて、万葉集の表記などでも省略されることは稀のように見受けられる。

さて、上の体言が意味的に下の用言のAの部分にかかるとしても、格助詞のように、体言と、用言Aの部分との資格の関係(つまり、土ヲ取ルのか、土カラ取ルのかというような、「土」と「取ル」との対等に対立する資格の関係)を確定するのではなく、上の体言が、下の用言のAの部分の表わす動作・状態の、程度とか、様子とかを限定する役目をする助詞がある。言いかえれば、上の体言と直下の助詞とが複合することによって、あたかも一語の副詞と同一の機能を果して下の用言のA述事の部分の程度、様子を限定するものがある。この種類の助詞を副助詞という。

いかばかり恋ほしくありけむ

今二日ばかりあらば散りなむ

袖さへ濡れぬ

これらの例の、「いかばかり」「今二日ばかり」「袖さへ」という場合には、複合したそれぞれが、副詞としての機能

を果す。つまり、「いかばかり」「今二日ばかり」「袖さへ」は下の用言のうちのAの部分の「恋ほしくあり」「あら」「濡れ」の程度を限定している。すなわち、「ばかり」「さへ」などは、上の体言を副詞化する助詞であるともいえる。そこでこれを副助詞というのである。ここにある「いかばかり」「今二日ばかり」「袖さへ」という副詞相当の言葉は、その下にある「恋ほしくありけむ」「あらば」「濡れぬ」の「けむ」「ば」「ぬ」などの助詞・助動詞つまりB述意の部分にかかって行くものではない。そのような、B述意の部分にかかるのは別の助詞(係助詞)である。

以上見た通り、格助詞と、副助詞とは、上の体言と下の用言のAの部分との関係を明確にする役目を帯びている。それに対して、上の体言と、用言のBの部分との関係づけをする助詞がある。それを係助詞という。

係助詞について述べる前に、日本語の係り結びの起源について記しておくこととしよう。

古典語にいわゆる係り結びがあることは周知のことである。しかし、係り結びという現象が何故存在したのか、また、鎌倉室町時代に何故それが亡びたのかについては、従来あまり説かれなかった。しかし、それについて理解を持つことは係助詞というものの理解に必要である。係り結びには三種類ある。一つは連体形終止の係り結び、二つは已然形終止の係り結び、三つには普通の終止形終止である。

まず連体形終止の係り結びについて述べることとしよう。普通、文は終止形で終止するのが一般的である。ところが、連体形で終止する文があった。たとえば次のようなものである。

よそのみに君を相見て今ぞくやしき(遠クデアナタヲ見ルバカリデ、今コソクヤシイト思ウの意)

このように、終止形「くやし」で終止せず、連体形「くやしき」で終止する場合は、上に「ぞ」「か」「や」「なむ」などのあることが多い。これを連体形終止の係り結びというわけだが、こういう表現が何故生じたかを考えるには、次のような表現法が今日でもあることに注意することが必要である。

もし、「欲しいものは本だ」と言えば、これは順直な表現である。しかし、これを「本だ、欲しいものは」と言えば

どうか。これは一つの強調表現である。では、その強調たる所以は、どうして生ずるのか。
一般に順直な表現においては、「欲しいものは」と問題を提起し、その答えとして、(未知の情報を与える意味で)「本だ」と結ぶ。これが普通の形式である。ところが、未知の情報をいきなり「本だ」と提出してしまう。そして「欲しいものは」と問題点を後で表出する。これは倒置表現である。そこではまず未知の情報が先に投げ出されて、一種の驚きを感じさせ、強調が示される。ついで問題が示される。

実は、右の倒置表現による強調と、全く同一の表現心理による表現が連体形終止による係り結びの起源なのである。というのは、右の「本だ、欲しいものは」という強調表現と同一の形式の強調表現が、古典語にもある。「うまし国そ。あきづ島大和の国は」(ヨイ国ダ、大和ノ国ハの意)、「相ひ飲まむ酒(き)そ。此の豊御酒(とよみき)は」(一緒ニ飲ミタイ酒ダ。コノ立派ナ酒ハの意)のごとくである。これを順直に表現すれば「あきづ島大和の国は、うまし国そ」「此の豊御酒は、相飲まむ酒そ」となる。つまり強調表現の一手法としてここに倒置表現が使われたわけである。このことを考慮に加えて先の歌を見る。

よそのみに君を相見て　今そ　くやしき
(遠クデアナタヲ見ルバカリデ　今ダ　クヤシイコト)

この「今ダ　クヤシイコト」という形は、「クヤシイコト(クヤシイノハ)　今ダ」の倒置であることは一目瞭然であろう。これを古典語の形でいえば、「くやしき今そ」が順直な表現である。その順直な表現を、倒置すれば「今そくやしき」となる。これすなわち、連体形が終止の位置に立つことになったのである。別の一例を加えよう。

くやしくも満ちぬる潮(しほ)か、住吉(すみのえ)の岸の浦回(うらみ)ゆ行かましものを

この歌は「(近道をしようと思って来て見たら)口惜しいことに、満ちて(道を通れなくして)いる潮だなあ。(こんなことなら遠くても)住吉の岸の廻り道の方を行けばよかったのに」という意味である。この、「くやしくも満ちぬる潮

か」という表現は順直な表現なのであるが、これを強調しようとすると、

くやしくも潮か満ちぬる

となったはずである。この「潮か満ちぬる」という形に対して、従来は、係り結びだと説明し、上に「か」という助詞があるから、下が「満ちぬる」という連体形になったのだと理解していた。それは、係り結びという表現法が成立してしまって、かなり時のたった時期の表現に対する説明としては正しいのであるが、その表現法の起源を考えた場合には、「潮か満ちぬる」は、「満ちぬる潮か」の倒置表現であったとするのが正しい。つまり、一般的に、連体形終止の係り結びは、起源的には倒置表現に発するということである。

「ぞ」や「か」と並んで、「や」も係り結びを形成するが、「や」は本来的に係り結びを形成する助詞であったのではなく、間投詞的な助詞であったろうと私は考えている。しかし、「や」が一般的に「か」に取って代るという傾向が奈良時代から始まり、平安時代になってそれは一層はなはだしくなり、「や」は「か」と同じく係りの助詞となり、「や」の下の用言は連体形で結ぶ語法が成立した。また「なむ」は丁寧な肯定判断を表現する助詞で、「ぞ」が教示・断言・強調を表現するのと一対になっていた。「なむ」の語源は未詳であるが、「や」も「なむ」も係り結びという一般的形式の成立の後に、「ぞ」と「か」との位置にすべり込んで来たものであろうと私は推測している。

さてそのようにして文献時代以前に成立した連体形終止の係り結びは、何百年かにわたって盛んに用いられたが、鎌倉室町時代に至って亡びた。では連体形による終止の係り結びが何故亡びたかについて一言しておくこととしたい。

はじめ、倒置表現として出発した係り結びも、多く使われているうちに、それが倒置であることが次第に意識されなくなって来た。そして単に、上に強調、あるいは疑問などの特定の助詞が使われた場合に、末尾を連体形で終止するということだけが意識されるようになって来た。すると、文には、連体形による終止と、終止形による終止との二

種類があると意識されることになった。ところが連体形終止の方が強い明確な終止であるから、それが好まれ、広く使われるようになって、本来終止形で終止すべきところにまで進出するに至った。連体形終止はいよいよ多く使われ、ついに終止形終止を室町時代には圧倒する勢いとなり、古い終止形は衰亡し、口語の世界では連体形が、連体の機能と終止の機能とを兼ねるに至った(だから現代語では用言・助動詞の活用表に見える終止形と連体形とはすべて同一の形であり、それは古典語の連体形の系列に属するものばかりになっている)。

そのように、終止形と連体形との活用形の上の区別が失われてしまえば、本来、普通の終止形に対して連体形で終止するという異例さによって強調表現としての機能を表わしていた係り結びが、形の上の区別の喪失によって、機能の区別も表示できなくなった。つまりここに連体形による係り結びは価値を失い、室町時代に消失したのである。

「こそ」の係り結びは「ぞ」「か」など連体形終止の係り結びとは成立の事情を異にしている。「こそ」の係り結びは、一般に、上に「こそ」が投入された結果として、結びが已然形になったと説かれている。たしかに、その表現法が成立してしまって時を経た段階では、その説明で正しいかもしれない。しかし、起源的には実は「こそ」の投入の結果として結びが已然形になったものとは考えられないものである。

もともと、已然形は、それだけで文の条件句を形成する力を持っていた。たとえば、次の通りである。

天づたふ入り日さしぬれ、ますらをと思へる我もしきたへの衣の袖はとほりてぬれぬ(万葉一三五)

これは「入り日が(淋しく)射したので、私の衣の袖は涙でぬれとおってしまった」という歌である。つまり、後世ならば、「入り日さしぬれば」というべきところを、「さしぬれ」という已然形だけで表現している。それは古い時代には已然形は、それだけで既定条件法を表現できたということである。このように已然形だけで条件句を表現できたのだが、そこへ強調の「こそ」が投入されるとどうなるか。

まず現代語について考えてみよう。単純に「全然読マナカッタ」という表現がある。もしこれを「全然読ミハ、シ

ナカッタ」と強めるとどうなるか。このように一つの判断や主張を非常に強く表現すると、その判断や主張が強烈なものとして受けとられ、その表現の持つ意味の輪郭が非常にくっきりと浮き上る。一つの判断や主張が、あまりくっきりと浮き上るとその結果として、それのまわりに、それと異る判断や主張、あるいは事実などがあるということを逆に感じさせる。すると、その対照となる像が姿を鮮明にあらわして来て、「全然読ミハシナカッタ(ガ、スコシ見タ)」とでもいうような意味を表わすことになってくることがある。

これと同じく古典語の場合、「大君の辺に死なむ。顧みはせじ」(大君ノ側デ死ノウ。家ノ方ハ振リ向クマイ)ということを、「大君の辺にこそ死なめ、顧みはせじ」といえば、「辺にこそ」のコソによる強調と、已然形(「死なめ」)の「め」は已然形)によって条件句を作るという古くからの語法とが呼応して、「大君のお側でこそは死ぬだろうが、家の方を振り向くまい」の意を表わす。つまり、「こそ」による係り結びは「コソ—已然形」の呼応によって、逆接の条件句を作るのが最も古い用法だったのである。それが基本となって、慣用のうちに種々の用法が広まり、奈良時代の末期から平安時代にかけて、「コソ—已然形」が次第に単純な強調表現の形式へと展開したのだった。

右に述べて来たような歴史的な事情によって、「ぞ」「か」「や」「なむ」の係りが上にあるときは、下の結びが連体形をとる、「こそ」が上に来れば下の結びが已然形をとるといういわゆる係り結びが成立した。それはつまり、「特定の助詞と用言の結びの部分(つまり、B述意の部分)との呼応の関係が成立した」ということで、こういう働きをする助詞を係助詞という。係助詞は、格助詞・副助詞の下に位置し、格関係を規定しない。

なお、気をつける必要があるのは、そうした連体形終止、已然形終止の場合に関係を持つ助詞だけを係助詞と見てはならないことである。「は」「も」という助詞は、それが上にある場合は、必ず普通の終止形で文を終止する。これもまた一種の係り結びであることに注意したい。従って「は」も「も」も係助詞である。

また、現代語の助詞「シカ」のように、いつも下の否定と呼応する(例えば「コレシカ見エナイ」のような)助詞も

係助詞というべきである。その類例として、古典語の係助詞の中で注意されるのは、「だに」で、古くは「だに」の下に、否定・反語・推量・願望などの表現(これを不確定性表現という)が来ることが多い。この特性は、「だに」がつまり用言のB述意と呼応するということで、「だに」も係助詞だったのではないかと見られる。

また、「も」もその下には大部分不確定性表現が来る点を特に記しておく。

以上によって、体言と用言との関係を明示する助詞としての、格助詞・副助詞・係助詞の概観を終る。

七 用言にかかる助詞 (2)

㈢ 用言と体言との関係

用言が体言にかかる場合には用言は活用形の中に連体形なる一形を持っているので、その連体形によって体言にかかることを明示できる。それゆえ特別の助詞にたよることをしない。したがって㈢の場合には助詞は使わないということである。

㈣ 用言と用言との関係づけ……接続助詞

用言が用言に直接つづく場合は連用形によるので、助詞は用いない。したがって、用言と用言とを関係づけるというのは、次のような場合をいう。

雨が降ったので　行かなかった。

この場合「降ッタ」という判断と、「行カナカッタ」という判断との間を「ので」という助詞が関係づける。これは次の例を見ることによって、はっきりと知ることができよう。

雨が降ったけれど　行かなかった。

つまり「ので」「けれど」などは、それの上にある用言の判断(降ッタ)と、下にある判断(行カナカッタ)との間がどんな関係なのかを明らかにする役をする。このような助詞を接続助詞という。接続助詞は、前の用言の動作・状態と、後の用言の動作・状態との関係が、順当な展開であることをあらわすもの(順接条件を示すもの)と、順当でない、反対の展開であることをあらわすもの(逆接条件を示すもの)とがある。

接続助詞には副詞から転成したもの(と・とも)、格助詞から転成したもの(が・に・を)、名詞との複合によるもの(ものから・ものの・ものゆゑ・ものを)などがある。

八　終助詞と間投助詞

以上に述べた、連体助詞・格助詞・副助詞・係助詞・接続助詞の他には、終助詞・間投助詞がある。

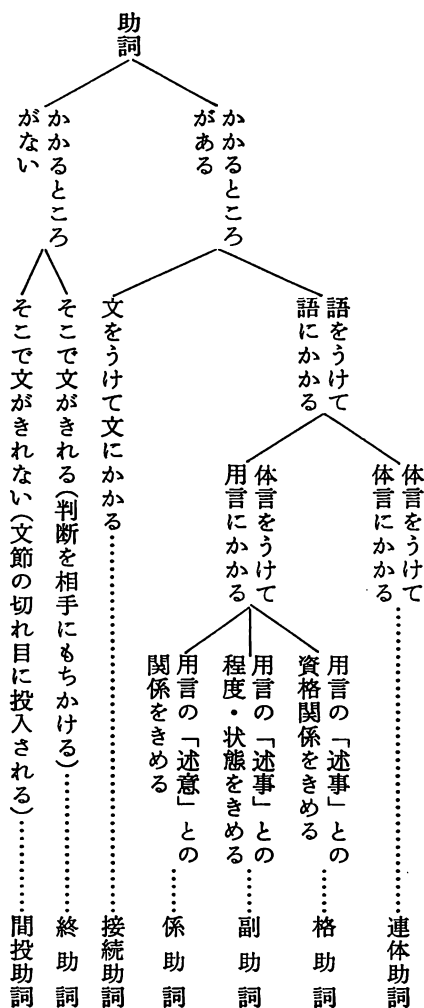
終助詞とは常に文の末尾に位置する特性を持つ助詞である。この助詞は役目の上でも他の助詞と相違するところがある。それは、他の助詞が語と語との間の関係を明確にする役目を持っているに対して、この助詞は、文の判断全体を話しの相手に持ちかけ、関係づけをする役目を持つ。例えば、「雨が降るか」といえば、「雨が降る」という判断全体を相手に持ちかけて問うことであり、「雨が降るぞ」といえば、「雨が降る」という判断全体を相手に教示するわけである。つまり文の判断を相手に持ちかけて禁止したり、希望したり、誂えたり、教示したり、質問したり、念を押したりするもので、自分みずからを相手として文の判断に疑問を表明したり、慨嘆したりするにも使う。

質問・疑問の表明には、ヨーロッパの諸言語では語順が変動することが多いのに対して、日本語では文の語順は不変で、文の終末部に終助詞を添えることで表現する。これは推量の表現において、文の終止形の下に推量の助動詞を加えて表現するのと基本的に同一の表現法である。日本語では文の最終部分まで聞きとらないと、疑問・否定・推量

などを聞き手が受け取り得ないが、つまり終助詞や助動詞がそれらの疑問・教示・禁止・推量などを表現するからである。

この他に助詞には間投助詞がある。いわゆる「文節」の切れ目に投入される助詞で、「あのデスネ、今夜デスネ、会合がデスネ、あることになりました」「あのナア、今夜ナア、会合がナア、あることになったよ」のように、相手に対する話し手の人間関係の近さ、遠さ、親しさ、上下関係についての意識、または呼びかけなどがここに表明される。

以上によって助詞の大体の仕組みを略説した。助詞がどんな語を承けるか、どんな語にかかるかについては時代的な変化があり、ここには到底記しきるわけには行かない。それらは各時代別の記述を見ていただきたい。次に助詞の分類の基本を表示しておく。

助詞
- かかるところがある
  - 語をうけて語にかかる
    - 体言をうけて体言にかかる……連体助詞
    - 体言をうけて用言にかかる
      - 用言の「述事」との資格関係をきめる……格助詞
      - 用言の「述事」との程度・状態をきめる……副助詞
      - 用言の「述意」との関係をきめる……係助詞
  - 文をうけて文にかかる……接続助詞
- かかるところがない
  - そこで文がきれる（判断を相手にもちかける）……終助詞
  - そこで文がきれない（文節の切れ目に投入される）……間投助詞

参考文献

山田孝雄『日本文法論』宝文館、一九〇八年。
山田孝雄『日本文法講義』宝文館、一九二二年。
橋本進吉『助詞・助動詞の研究』岩波書店、一九六九年。
石垣謙二『助詞の歴史的研究』岩波書店、一九五五年。
国立国語研究所編『現代語の助詞・助動詞』秀英出版、一九五一年。
渡辺実「叙述と陳述」(『国語学』一三・一四輯、一九五三年)。
大野晋「日本人の思考と述語様式」(『文学』三六巻二号、一九六八年)。
大野晋「日本語の助動詞の役割」(『解釈と鑑賞』三三巻一三号、一九六八年)。
大野晋「古典解釈のための助詞」(『解釈と鑑賞』二三巻四号、一九五八年)。

2　助動詞(1)

竹内美智子

はじめに

助動詞とよばれている語群は、述語の部分の構成に関与するもので、述語の中心となる自立語――主として動詞――を補助するはたらきをもち、その補助機能がある程度定式化されているものの集合体である。これらの語の補助機能の質を検討して、助動詞とよぶべき語の範囲を限定することも試みられている。ここではそうした問題も考慮に入れながら、一応これまで普通に助動詞とよばれているものを考察の対象にしていくことにする。

このような意味での助動詞に属する語は、平安時代では二〇語余りにのぼる。これらは普通「活用・接続・意味」の三方面から説明されることが多かった。ことに、いわゆる古典文法では、古典を解釈するという目的に支えられてきた歴史的事情もあって、意味の研究に主力が注がれてきた。しかし、文法研究は文の構成に関する法則を求めるものであるから、助動詞についても、それが述語の部分を構成するにあたってどんな役割を果しているか、さらには文全体の構成にどう関わるものであるかを問題としなければならないであろう。それには、文を構成する場合、助動詞がたがいに承接する順序に一定の法則があることを、助動詞の構文上のはたらきを考える上で重要な事実として、まず認めるべきである。そして、これを軸として、意味・活用・接続の研究をこれに関連させ、総合的に把握していくことが、助動詞研究のあるべき方向だと私は考える。以下、このような立場から、奈良時代・平安時代の助動詞を相互承接と意味との関連を中心に考察していきたい。

一　相互承接を考慮した助動詞の分類 ――これまでの主な研究――

助動詞は単独で用言を助けるだけでなく、他の助動詞と連接しても用いられる。その相互承接の仕方には、あるきまりがみられる。この点について現在われわれが継承すべき研究を遺したのは、山田孝雄と橋本進吉であると思う。山田孝雄は、奈良・平安の各時代の助動詞について相互承接の実際を詳しく調査した。[1] 山田は、助動詞を用言の語尾の複雑に発達したものとして用言の一部分と見なし、これを複語尾とよんだ。そしてこの複語尾を、用言のもつ二つの性質、a事物の属性をあらわし、b陳述の力(=統覚作用)を有する　ということのどちらを補助するかによって、a′属性の表現の方法に関するもの、b′統覚の運用に関するもの　に二大別した。山田がa′に属する複語尾としてあげているのは、奈良時代においては「す・ふ・ゆ・らゆ・る・しむ」、平安時代においては「る・らる・す・さす・しむ」である。その他の複語尾はすべてb′に属する。山田はa′属性の表現の方法に関する複語尾が、b′統覚の運用に関する複語尾よりも、相互承接の場合、

「聞か-せ-ず」「言は-れ-けり」「折ら-しめ-つ」

のように常に上位で用いられることを証明した。

助動詞の相互承接の順序が助動詞の研究にもつ意義を最も明確に指摘したのは、橋本進吉である。橋本は、昭和六年「助動詞の研究」と題する講義で、助動詞がいくつか連接して用いられる場合の順序に一定のきまりがあることに注目し、これを助動詞の分類の基準とすることを試みている。この講義は、一九六九(昭和四四)年刊の橋本進吉博士著作集第八冊『助詞・助動詞の研究』の中に収められているが、[2] そこに示された、用言のみにつく助動詞の相互承接表〔表1〕を次に掲げる。(『助詞・助動詞の研究』二五三頁参照)

表 1　橋本・助動詞の相互承接表

ついで、橋本は、この相互承接の順序を、助動詞の意味および接続と関係づけているが、それは次のように概括できると思う。

A 意味	B 承接順序	C 接続
一 格に変化を及ぼすもの		
1 相の助動詞(す さす しむ・る らる)	I・II段	未然形接続
2 希望の助動詞(たし)	III段	連用形接続
二 格に変化を及ぼさないもの		
1 確定の意味をもつもの		
A 肯定するもの		
a 完了の助動詞(ぬ り・たり・つ)	IV・V・VI段	連用形接続
b 過去の助動詞(けり き)	X段	連用形接続
B 否定するもの		
c 打消の助動詞(ず ざり)	VII段	未然形接続
2 不確定の意味をもつもの		
A 客観性のつよいもの		
d 推定の助動詞(べし べかり まじ まじかり・めり)	VIII・IX段	終止形接続
B 主観性のつよいもの		
e 推想の助動詞(らし らむ けむ む まし じ)	XI段	未然・連用・終止形接続

上段の「意味」と中段の「承接順序」とを対照するとわかるように、助動詞の相互承接の順序と意味との間には、

非常に密接な関係がある。また、下段に記した「接続」と「承接順序」との関係でも、XI段を除くと、すべて同類の助動詞は同一の活用形に接続している[3]。

さらに、相互承接と活用との関係について橋本は次のように述べている。I段からVIII段までに位置する助動詞は、各活用形がすべてそろっているか、あるいはほとんどそろっている。これに対して、IX段からXI段までに位置する助動詞は、下位のものほど活用形の欠けるものが多く、XI段の「じ」のごときは終止形・連体形の二つの活用形しかない。これは承接の終りの方で用いられるものが、他の助動詞を下接させるための活用形を必要としないことからおこる現象であるから、助動詞の承接する場合の位置と助動詞の活用形の完備・欠如との間には密接な関係がある。橋本は以上のように、用言のみにつく助動詞の相互承接の順序が、助動詞の意味と密接に関連していることを明らかにし、それが助動詞の接続や活用形の完備・欠如とも対応するものであることを明らかにした。

これとは別に、橋本は「助動詞の分類について」という論文で、活用ということを、単に語の形が変化するという形式の面からだけではなく、活用形の用法や他の語との連接の仕方という語の使われ方の面からも捉えている[4]。

橋本は、この論文で、まず次のような点を規準として、動詞・形容詞・形容動詞の三種の用言を分類している。

(1)補助活用(形容詞カリ活用)の有無。　(2)命令形の有無。　(3)連用形副詞法の有無。　(4)助動詞への接続の可能性。　(5)助詞「して」への接続の有無。　(6)仮定の助詞「とも」に接続する活用形。　(7)語幹用法の有無。　(8)用言に「は・も・こそ」などの助詞を付けた下に用いる補助用言が「照りもせず」のように「す」であるか「遠くはあらねど」のように「あり」であるか。

ついで、これと同じ基準に照らして、助動詞を(1)動詞性の助動詞、(2)形容動詞性の助動詞、(3)形容詞性の助動詞、(4)どの用言の性質に一致するか不明な、特性なき助動詞　の四つに分類している。その結果は活用形式による分類と大体において一致する。しかし、活用形式としては特殊型に属する「ず」は、この方法によって形容詞性であること

が明らかになった。橋本のこのような方法は、助動詞の性質について、単に活用の型や活用形の有無といった形式面だけからは解決できない部分をも解明する射程をもつものであったといえる。

助動詞の相互承接の順序を考慮したり、活用に対して形式だけでなく用法をも顧慮することは、橋本の文法が、いきなり意味という捉えにくいものに拠ることを避け、音の断続・アクセント・語形・語の承接など、形として捉えられる限りのものを拠り所にして意味の問題に迫る立場をとる、その基本的姿勢の表われである。橋本の用言および助動詞についての研究の全容は、講義集の『国文法体系論』[5]『助詞・助動詞の研究』が刊行されてはじめて一般に知ることができるようになった。橋本が助動詞研究において、形から意味への方向をとりながら、意味と形との対応を、考えうるかぎり多方面から追究したその方法と成果は、今後の研究の基盤となるべきものである。[6]

二　奈良時代における助動詞相互の承接について

1　相互承接表

先に掲げた表1における助動詞の位置は、実際のさまざまな相互承接の場合を総合した結果、抽象的に与えられた基本的位置である。(甲表)に「上にかへる印」の付いている助動詞がいくつかあることからもわかるように、実際の相互承接においては、ある種の助動詞は基本的位置以外のところでも用いられる。

しかしながら、ある助動詞の位置が変ると、助動詞相互の承接の順序に変動をきたすことになるわけであるから、その原因・理由が明示できなければ、助動詞の相互承接に一定の順序があるということはできない。このような位置の変動が生じる原因としては、主として次の二つが考えられる。(1)助動詞は意味の変化・語彙の交替のおこりやすい

語彙であるから、そうした歴史的変化が助動詞の位置を変動させるのではないか。(2)助動詞の位置の変動は、その助動詞のもつすべての活用形について一様におこるのではなく、限られた活用形にだけおこる場合が多いのではないか。ところが橋本の相互承接表(三三頁参照)は文語助動詞と口語助動詞という大まかな時代区分に基づいて作られたものである。そこで本稿では、もっと詳しく時代による変化を考慮して、奈良時代・平安時代のそれぞれについて相互承接の表を作り、両者を比較する方法をとることにした。(2)の点については、助動詞の各説のところで述べる。)

奈良時代における助動詞相互の承接を表示すると、次のようになる。

表 2　奈良時代助動詞の相互承接表

	用言および用言相当	動詞	形容詞	形容動詞	体言なり	体言とあり
使役自発受身	①	しむ　ゆ(る)　らゆ	×	×	×	×
(敬意)	①	(敬語補助動詞)	×	×	×	×
(希望)	①					
成り行き存在決着	②	り　ぬ　たり　つ	／	×	×	×
否定推定	③	ず－ざり　べし－べかり　ましじ				
現時点での状況判断	④ a	けり　⌴ずや　終止なり				
記憶・回想	④ b	き				
予想・推量推定	④ c	む　けむ　らむ　らし　まし　じ				

×承接なし，／承接稀．

奈良時代における助動詞は、右の表に示したように、助動詞相互の承接の順序と、助動詞が用言のうち動詞だけに接続するか、それ以外の用言にも接続するかという、助動詞の接続の範囲とを基準にして、四つのグループに分類することができる。第一グループから第四グループまでの助動詞が、同じ述語の部分で重ねて用いられる場合は、常にこの順序で相互に承接される。奈良時代においては、

都の風習(てぶり)忘らえにけり(万・八八〇)

屋戸(やど)の梅の散り過ぐるまで見しめずありける(万・四四九六)

などが助動詞を多く重ねて用いた例である。また、同じグループ内で相互承接する場合は、

白髪生ひにたり(万・六二七)

のように、表2の同じ段の右側のものは左側のものより原則として上位で用いられる。(しかし、同じグループ内での承接の順序は簡単に表示できない場合があるので、細部については助動詞の各説にゆずる。)

この表で明らかなように、奈良時代の助動詞の相互承接では、各助動詞の承接上の位置が確定していて上下に移動することがない。この点、平安時代になると、ある種の助動詞は承接上の位置が上下に移動するようになる。(奈良時代でも「けらずや」のように否定の「ず」が反語表現に用いられた場合、承接の順序の変ることがある。しかし、否定的反語表現は結局肯定判断を導くものであり、実質的な意味での否定ではないから、一般的に「けり」に否定表現「けらず」があり、「ず」が「けり」に下接するということではない。)

以下、この分類に従って、四つのグループごとに助動詞が述語の部分を構成する際に果している役割を検討する。

2　動詞に接続する助動詞　その一　——使役・自発・受身の形式——

助動詞は、まず用言のうち動詞だけを承けるもの(第一・第二グループ)と、それ以外の用言も承けるもの(第三・

第四グループ)とに分けることができる。このうち第一グループの「しむ・ゆ(る)・らゆ」は、使役・自発・受身など、動作の行なわれ方に関する助動詞である。これらの助動詞が動詞に接続すると、「うらめしく君はもあるか屋戸(やど)の梅の散りすぐるまで(我に)見しめずありける」(万・四四九六)のように、もとの動詞「見る」の主語「我」が補語となるなど、格に変化を及ぼす点が、他の助動詞にはない特質である。奈良時代においては、

〔使役1〕他人(ひと)よりは妹そも悪(あ)しき恋もなくあらましものを思はしめつつ(万・三七三七)

〔使役2〕隠口(こもりく)の泊瀬(はつせ)の川の上(かみ)つ瀬に鵜を八頭(やつ)潜(かづ)け……上つ瀬の鮎を食はしめ(万・三三三〇)

〔自発〕瓜食(は)めば子ども思ほゆ　栗食めばまして偲(しぬ)はゆ(万・八〇二)

〔受身〕か行けば人に憎まえ　かく行けば人に厭はえ　老男(およしを)は　かくのみならし(万・八〇四)

のように、基本となる述語動詞に接続して、使役・自発・受身形式の述語内容を構成する。

a　可能の形式の成立について

可能の形式は、まだ、次の例のように、下に否定の語を伴う場合に限られているとみてよい。

君が心は忘らゆましじ(万・四四八二)

妹を思ひ眠(い)の寝らえぬに(万・三六六五)

右の例のように、可能の意味にとれる場合は、いずれも「〔おのずと〈忘れていく〉・おのずと〈眠っていく〉〕ようにはならない」とも解釈できるもの、つまり自発的行為の否定とも取れるものである。「ゆ(る)」の可能としての用法は、自発の否定用法から発達したのではないか。可能の形式が「冬はいかなる所にも住まる」(徒然・五五)のように否定を伴わず独立して用いられるのは、中世に入ってからのことと思う。自発には「自分が意図しないのにおのずからそうなる」という消極的性質の外に、「他の力によらないでみずからそうする」という積極的性質が本来含まれている。この積極的性質としての自発的行為を否定すること、すなわち、他の力によらないでみずからそうする能力がないと

する不可能の形式がまず成立し、平安時代を経て中世に至り、独立した可能の形式が成立したとみることができる。

奈良時代においては、使役形式は「しむ」、自発形式は「ゆ・る・らゆ」、受身形式は「ゆ・る」で表わした例がある。全体に已然形の用例は乏しく、自発・受身形式の命令形はみえない。「しむ」には体言化の接尾辞「く」のついた「しむらく」(万・二二五〇)がある。「らゆ」は先にあげた「寝らえず」の場合の未然形がみえるだけで、用法・意味ともに局限されている。活用形式は「しむ・ゆ・る・らゆ」すべて動詞下二段活用と同型である。

b 使役・自発・受身の助動詞が未然形に接続する意味

ところで、これらの助動詞がすべて動詞の未然形につくことは、注目すべき事実である。未然形という活用形は、現在普通六つに分けられている各活用形の中でも、非常に特殊な性質をもっているからである。すなわち、他の活用形は「流る。流れよ。…ぞ流るる。…こそ流るれ。」のような叙述を終止する用法や、「流れ、」のような叙述を中止する用法をもっている。つまり、これらの活用形は、それ自身で述語の部分を構成し、言いさし、言い切るはたらきをもっているのである。しかし、未然形だけはそれが単独では果せず、「咲かば」「咲かしむ」のように常に助詞・助動詞を下接させてはじめて述語としての役割を果す。いいかえれば、未然形は一種の被接尾形であって、他の活用形に比べると独立性が弱い。「動詞未然形＋助動詞」の場合も、これ全体で一つの動詞に相当するとみることができる。この意味において、「動詞未然形＋助動詞」は「動詞語基＋接尾辞」と隣合せの性質だといえる。

そこで語構成の領域にまで視野を広げると、自発・受身形式の「ゆ・る」に対応するものとして動詞を派生させる接尾辞「ゆ・る」があり、平安時代へかけて形成される使役形式「す」に対応するものとして同じく動詞派生の接尾辞「す」があることに気づくのである。なかでも「る」「す」は動詞派生辞として奈良時代に最も生産力の大きかったものである。以下、これらの接尾辞がどのようなはたらきをするものであるか、それが助動詞「ゆ・る・す」の成立にどう関わるものであるかについて考察していきたい。

まず、動詞を派生させるに当って、同一の語基に「る」「す」がそれぞれついた場合を比較してみると、

- 残る〔四段〕(万・八四九)／残す〔四段〕(万・四一一一)
- 流る〔下二〕(万・八二二)／流す〔四段〕(万・四〇九四)
- 寄る〔四段〕(万・一一六三)／寄す〔下二〕(万・三六二九)

のように、「る」はいわゆる自動詞を、「す」はいわゆる他動詞を構成するという対立がみられる。また、

- うまる〔下二〕(万・九〇四)／うむ〔四段〕(記神代)
- 結ぼる〔下二〕(万・四一一六)／結ぶ〔四段〕(万・四三三四)
- 重なる〔四段〕(万・四一一二)／重ぬ〔下二〕(万・四一一六)

の場合には「る」は他動詞を基としてそれから自動詞を派生させる接尾辞として用いられている。一方「す」は、

- 照る〔四段〕(万・一七七)／照らす〔四段〕(万・四四八六)
- 明く〔下二〕(万・三七六九)／明かす〔四段〕(万・八九七)
- 過ぐ〔上二〕(万・三三五二)／過ぐす〔四段〕(万・八〇四)

のように自動詞を基としてそれから他動詞を派生させる接尾辞として用いられている。このような接尾辞としての「す」「る」が助動詞「す」「る」の成立に深く関わっていることは、当然考えられるであろう。「ゆ」も、

- 消ゆ〔下二〕(万・三〇三九)／消(け)つ〔四段〕(万・一五七二)
- 絶ゆ〔下二〕(万・三三八〇)／絶つ〔四段〕(万・四四二九)

のように他動詞に対する自動詞をつくる接尾辞として用いられている。しかし、接尾辞「る」が四段・下二段両様の活用形式をもつのに比べて、「ゆ」は下二段形式にしか活用しなかったようである。阪倉篤義は、下二段活用が情態的性質の強いもので、その意味・機能が「しばしば能相(筆者注、使役)あるいは、そのうらがへしとしての所相(筆者注、自発・受身)の色調をおびてくる」ことを指摘すると共に、「る」はあらゆる性質の語基に接尾しているのに対して、「ゆ」は主として形容詞的語基・動詞的語基に接尾し、名詞や形容動詞語幹・副詞などの独立性の強い語基には接尾していないと述べている。[7] 四段活用・下二段活用などの各種活用の成立や性質上の相違については、現在まだ十分に

解明されているとはいえないので、簡単に論断することはさしひかえなければならないが、おそらく、このような接尾辞「ゆ」の性質が自発の意味を担わせるのに最も適したものであったところに、「ゆ」がまず自発の助動詞として成立した事情があったのであろう。そして「ゆ」によって自発の形式が成立し、さらに受身の形式が派生した後に、性質としても「ゆ」に近く、より生産力の大きい「る」がその跡をおそったのではないかと思われる。

「しむ」の成立の過程は明らかでない。しかし、平安時代の日常語において使役形式として用いられた「す」は、奈良時代にすでに少数ながら使役動詞を構成している。たとえば、

見る〔上一〕(万・八三九)
見す〔下二〕(万・七九七)

知る　〔四段〕(万・七九三)
知らす〔下二〕(万・四三六六)

聞く　〔四段〕(万・八四一)
聞かす〔下二〕(万・四〇六七)

などである。『万葉集』では助動詞「しむ」を表記するのに「令」文字が用いられているが、右にあげた使役動詞を表記する際にも「令視(みす)(万・一六六)・令知(しらせ)(万・二四一三)・令聞(きかせ)(万・一〇〇四)」の如く、この「令」文字を用いているのは注意すべきである。使役動詞をつくる「す」は、「手に持てる吾(あ)が子飛ばしつ」(万・九〇四)のように四段に活用することもあるが、下二段に活用する方が普通である。このような「す」が平安時代になって四段・ラ変・ナ変の動詞の未然形に接続するという一般性を得て、助動詞「す」となったことは明らかである。

c　自発・受身の意味の性格および、その相互関係

以上、助動詞「す」「ゆ」「る」の成立する基盤に動詞を派生させる接尾辞があったとみられることを述べてきたが、このことは使役や自発・受身の意味の性格の形成にも深く関係していると思われる。以下、このような視点から、まず、自発・受身の意味の性格および自発・受身の意味の相互関係について考察していきたい。

先に掲げた自発の例「偲はゆ」などの「ゆ」が、「消(け)つ→消ゆ」「絶つ→絶ゆ」のように、他動詞に対して「おのずからそうなる」自動詞をつくる接尾辞「ゆ」と同源のものであることは疑いない。自発の意味の方が接尾辞「ゆ」と

の関係が深いことから考えると、自発・受身の形式は、おそらく自発をもととして受身へ転化したものと思われる。

それでは、自発の形式はどのような意味の性格をもつものであろうか。「偲はゆ」のように自発の助動詞が付いた動詞を述語とする文の叙述様式は、シク活用形容詞を述語とする文の叙述様式に近い性質をもつ。すなわち、「沖つ藻に臥やせる君を今日今日と来むと待つらむ妻しかなしも」(万・三三四二)の述語「かなし」は、「かなし」と思う主体を主語とするのではなくて、「かなし」と思う対象である「妻」を主語の形でとりたてる。同じように、先に掲げた〔自発〕の例「瓜食めば子ども思ほゆ　栗食めばまして偲はゆ」における「思ほゆ・偲はゆ」は「思ふ・偲ふ」主体よりも、その対象「子ども」を主語の形でとりたてるのである。この場合、自発形式は「思ふ・偲ふ」という主体心の作用を述べるのではなく、「思ほゆ・偲はゆ」という主体の心理状態を述べているのであるといえよう。

ところで、このような自発形式の文は、受身形式の文と比べると、叙述様式に次のようなちがいがある。すなわち、自発形式は、おのずからそうなったことを状態的に述べるにあたって、そのような状態を引き起こさせたもの(自発作用の因＝子ども)とそういう状態になったもの(自発作用の主＝われ)との相互関係を、格関係として明確に規定しない。これに対して、受身の形式は、〔受身〕の例「人に憎まえ、……人に厭はえ」に示したように普通有情のもの(またはそれに擬せられたもの)が主語となり、「憎む・厭ふ」などの他動詞的動作の主体(人)とそれを受ける主体(我)との格関係が、「―に」という形で明確に規定される。従って、そこには動作を受ける側の利害感情もただよいやすいのである。このように、典型的な受身の形式と自発の形式とでは叙述様式も異なり、両者をつなぐ線を見出すことはむつかしい。ところが、受身の文には、次のように典型的な受身とはちがう性質のものがある。

沫雪に降らえて咲ける梅の花君がり遣らばよそへてむかも(万・一六四二)

「沫雪に降らえ」たのは梅の木であるから主語は非情のものであり、受ける動作は「降る」という自動詞である。この歌にはいささか殊更らしい見立ても感じられるが、平安時代の資料から、これと同種の、

夕暮あかつきに河竹の風に吹かれたる、目さまして聞きたる。（枕・あはれなるもの）

のような例を見つけることは、それほど困難ではない。これらの例は、雪が降り風が吹くことを、降り積む梅の枝や吹き過ぎる河竹の側からみて「降らゆ・吹かる」と受身形式で表現したものであるが、それは「降られて枝に雪が積もる・吹かれて河竹が鳴る」状態を表わすことになるのだと思われる。また、次の例のように、動作の主体が明確にされないで、受身の形式が用いられることもある。

唐絵の屛風の、黒み、おもてそこなはれたる。（枕・昔おぼえて不用なるもの）

この場合、屛風の面が傷つけられたのは何によってなのかということは不明のまま、「おもてそこなはれたる」で「屛風の面がいたんだ状態である」ことを表わしているのだと思われるが、このたぐいの用例も少なくない。以上の二種類の受身の形式は典型的な受身の形式に比べると、自然状態的である点で多分に自発の形式に通じる性質をもっている。橋本進吉はこの種の受身形式が自動詞と似た意味をもつことを指摘し、自発から受身への推移はここから始まったのではないかとしている。また、受身の場合の動作主を「―に」の形であらわすのも、自動詞の「風に乱るる」などの「―に」の形から出たものであろうと言っている。[8] このように、受身といっても、日本語の場合は、他からの動作を受けるという意識よりも、自分が関与しないのにある動作によって、自分がある状態に置かれるという意識の方が強いのである。いずれにしても自動詞をつくる接尾辞「ゆ」から自発形式が成立し、それから一方には受身形式が、他方に可能形式が派生したとみるのが妥当であると思う。

d　使役の性格および、使役と自発・受身との意味の相関関係

次に使役の意味の性格について考察する。動詞に使役の助動詞「しむ」が接続すると、

あしひきの山行きしかば山人の我に得しめし山つとそこれ（万・四二九三）

のように「山つとを得(え)」た主体「我」は「―に」の形であらわされ、その主体にそのような動作をさせる主体「山人」

が使役文の主語となる。また、

海若(わたつみ)はくすしきものか……夕されば潮を満たしめ明けされば潮を干しむる（万・三八八）

のように動作の主体を「―を」の形であらわすこともある。この形は動詞が自動的である場合用いるのが普通である。

このような使役の形式の意味については、自発・受身の形式との対応を考えることが必要であると思う。接尾辞「る」「す」の間にみられた自動詞対他動詞の対応関係を支えている意識は、この場合にも基底にあると推測されるからである。ことに日本語の場合は、先に述べたように、自発がもとで受身が派生したと思われるから、当初から使役と受身が対応しているのではない。使役と自発との対応が、その根底にあると見なければならない。この場合、自発形式に対応する使役として「誘因としての使役」とでもいうべきものが考えられるのではないか。(9)〔使役1〕にあげた「他人(ひと)よりは妹そも悪(あ)しき恋もなくあらましものを思はしめつつ」の例などがそれである。この場合使役の主である「妹」は動作主体「我」の行為「(妹を)思う」を自身の積極的な意志によって「我」に行なわせるのではなく、その行為を引き起こす誘因となっているにすぎない。従ってこの事態を「妹」の側からではなく「我」の側から捉えると、「我は妹に(妹を)思はしめらる」というような「……させられる」形式の文になるのではない。

相模路(さがむぢ)の余綾(よろぎ)の浜の真砂(まなご)なす児らは愛(かな)しく思はるるかも（万・三三七二）

などの例と同じように、「妹は恋しく思はるるかも」のような自発形式の文になるのだと思われる。つまり、この場合の使役では、行為者「我」の意志にもとづくことなく、おのずからそうなってしまう自発的行為（それは行為というよりは心理状態に近いものである）に、そのような行為の発生する誘因となるものがあり、それが使役の主としてとりたてられているのである。従って普通の使役形式の場合とちがって使役の主自体にそうさせる意志が無い場合が多く、また、意志が有るか無いかは問題とならないのである。平安時代以後の例であるが、この種の使役の文に、

若菜ぞ今日をば知らせたる。（土左・一月七日）

歎けとて月やはものを思はするかこちがほなるわが涙かな（千載・九二六）

のように、「若菜」「月」などの非情のものが使役の主として用いられることがあるのも、誘因としての使役の性格からいえば当然のことである。それでは、このような誘因としての使役と〔使役2〕に例示した「（鵜に）鮎を食はしめ」のような典型的な使役とは、どのような関係にあると見るべきであろうか。従来使役には、(1)ある動作を積極的にさせる拘束性のものと、(2)他が動作をすることを妨げない許容性のものとがあるといわれている。〔使役2〕の例は、この(1)の拘束性の使役のケースに相当する。奈良時代における(2)の許容性の使役の例としては、

うらめしく君はもあるか屋戸の梅の散り過ぐるまで見しめずありける（万・四四九六）

などがある。（ただし、許容性の使役の例はいずれも否定や禁止の語を伴う場合に限られるようである。）しかし、この(2)の場合でも(1)と同じく使役の主の意志によって他のものの動作が行なわれる（行なわれない）のであることに変りはない。ところが、使役動詞のところであげた、

手に持てる吾が子飛ばしつ（万・九〇四）

の例では、わが子をあの世へ行かせてしまったことは、使役の主である親としてはむしろ不本意なことであり、「子供が死ぬ」ことは、親の意志ではどうにもならないことである。それを使役形式で表現したのは、子供を死に到らせた原因が自分にあることを言うためである。これは、「子供に死なれる」「雨に降られる」のような、いわゆる迷惑の受身と対応する使役の形式といえる。そして、このような形式としては使役であるが、意味上は反意志的な使役の性質は、前述の使役の主に積極的にそうさせる意志の無い「誘因としての使役」の性質と関連するところが深いと思う。[11]

これらすべての用法を通じて、使役形式の本質は、使役の主が他のものの動作に関与するということであると思われる。使役の主が有情でも非情でも、またその関与する動作が自動的でも他動的でも、使役の主の意志があっても無くても、それは使役の形式にとって本質的なことではないのである。

e　接尾辞「す・ゆ・る」と、使役・自発・受身とのちがい

ところで、使役・自発・受身の助動詞が動詞に付け加えられると、「鵜が鮎を食う」から「漁夫が鵜に鮎を食わせる」になるように、その文を構成する素材間の関係、すなわち格関係に変動が生じる。この事実は、使役・自発・受身の助動詞が、自動詞・他動詞をつくる接尾辞と密接に関連しながらも、以下に述べるように、やはり異なる形式のものであることを示している点で注意すべきである。使役の形式と、その母体となった他動詞構成の接尾辞「す」とのちがいは、次のような点にある。例えば、

遊士(みやびを)とわれは聞けるを屋戸(やど)貸さずわれを帰せりおその風遊士(万・一二六)

の場合に、他動詞「帰す」の動作が及ぶ対象は、「われ」すなわち他のものである。これに対して、先に掲げた「鮎を食はしめ」のような使役形式においては、「しむ」は漁夫が鵜に「鮎を食ふ」動作を「させる」ことを表わすのである。従って「しむ」が関与するのは、他のものの動作「鮎を食ふ」である。このことを、「述語の構造」という視点から捉えれば、他動詞文の述語「帰す」は、主語「遊士」の「われ」に及ぼす動作を表わすだけの「単純な述語構造」である。しかし、使役「しむ」が動詞についた場合の述語構造は、「鮎を食わしめ」における使役の主の使役行為「しむ」と、それが関与する動作「食う」との「二重の動作を含む述語構造」である。この点は受身形式の場合も同様で、例えば「人に憎まゆ」の場合、受身の主の受身行為「ゆ」と、受身の主に及ぶ動作「憎む」との二つの行為を述語内容として含むといえる。自発の形式では、「子ども思ほゆ」のように「思ふ」動作の及ぶ対象「子ども」を形式上の主語として、それによって生じる自発行為「ゆ」とその実質となる動作「思ふ」とを述語内容とするが、これも使役や受身と同類のものとみることができる。この章の始めに、このグループの助動詞が動詞に付くと、格関係に変化が生じると述べたが、それは、このような述語の二重構造によるものなのである。

f　使役・受身の相互承接

使役と受身とが相互に承接した例は、奈良・平安の両時代を通じて、和歌・和文系のものには普通みられない。『万葉集』巻三の「大津皇子、被死之時……」という詞書を「みまからしめらゆる時」と古典文学大系本『万葉集』では訓んでいるが、「……させられる」という表現はこのような「させる」側の拘束意志と「される」側の他から動作を被る意識とがはっきりしている場合に成立しやすいのではないかと思う。しかし、前にも述べたように(四四頁参照)、この時代の受身は、自分が関与しないのにある動作によって自分がある状態におかれるという意識を根本とする。この受身の性質は自発に密着したものである。このような受身に対応する使役は、使役の主が他の動作に関与することを本質とはするが、使役の主の拘束意志の有無は必ずしも本質的な問題ではなかった。ここに、この時代に使役と受身の承接した「……させられる」意の表現が成り立ちにくかった原因があるのではないか。

以上述べたところからもわかるように、動詞文の場合、格に変化を及ぼす使役・自発・受身の助動詞が述語動詞に付くか付かないかが決まらなければ、その文の主語は確定しない。述語に付いて敬意を添える敬語の補助動詞は、話手の主語に対する扱い方を表わすものである。従って、使役・自発・受身の助動詞の接続の有無が定まり、動詞文における主語が確定した後に、主語の動作と密接に関連する敬語の補助動詞「ます・います・たまふ・たぶ・めす・まをす・まつる」の類が下接するのである。そして、その下には、話手の判断を表わす肯定確認・否定・推量等々の助動詞が接続することになる。本稿では、敬語については敬語の巻にゆずり省略する。

3　動詞に接続する助動詞　その二 ――いわゆる完了・存続の形式――

相互承接の上でこの第二グループ以下に位置する助動詞は、すでに述べたように、それが述語の部分に接続しても格関係に影響を及ぼすことはない。第二グループの「ぬ・つ」「り・たり」は、動詞の動作・作用が本質的にもっている属性――生起し、継続し、完了し、結果が存続するなどの諸様態――を言語主体が自分との関係においてどう受

けとめているかを表わす助動詞である。私は一応、「ぬ」を「成り行き」の形式、「つ」を「決着」の形式、「り・たり」を「存在」の形式としておく。各形式の意味上の特色をよく表わしている例を次に掲げる。

〔成り行き〕梅の花咲きて散りぬと人はいへどわが標結ひし枝ならめやも(万・四〇〇)

〔決着〕わが屋前の花橘をほととぎす来鳴き動めて本に散らしつ(万・一四九三)

〔存在1〕うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも独りしおもへば(万・四二九二)

〔存在2〕ひさかたの月は照りたりいとまなく海人の漁火はともし合へり見ゆ(万・三六七二)

a 「ぬ・つ」「り・たり」の活用に関する問題点

活用は「ぬ」がナ変型、「つ」が下二段型、「り・たり」がラ変型である。活用形はほとんどそろっているが、「ぬ」と「たり」の命令形の例はみえない。

助動詞のうち奈良時代に命令形の用例のあるものは、「しむ」と、このグループの「つ」「り」だけである。

〔しむ〕あざむかず直に率ゆきて天路知らしめ(万・九〇六) 〔り〕忘れ貝寄せ来て置けれ沖つ白波(万・三六二九)

〔つ〕ほととぎすここに近くを来鳴きてよ(万・四四三八)

質量ともに限られたこの時代の資料による結果ではあるが、これらの助動詞は、使役・決着・存在確認の意を表わすもので、自発・成り行きのような自然的発生や自然的推移の意味を表わす助動詞よりも、意味上命令形の使われやすい助動詞であったと思われる。

古く命令形には「よ」を添えないのが普通であるが、「つ」の命令形「て」の場合は助詞との識別などの事情もあってか「よ」が添加した形になっている。この外「ぬ・つ」と「り」には体言化の接尾辞「く」のついた「ぬらく」(万・三七一九)、「つらく」(万・四八五)、「らく」(万・九九六)があるが、「たり」にはこの形がない。動詞・存在詞型の活用をする助動詞には「く」のつく形をもつものが多いが、この「たり」の外にも「体言十なり」「終止形十なり」「ら

む」にはこの形がみられない。「く」のつく形をもっていない助動詞は「く」のつく形をもっているものに比べると比較的新しい時期に成立した助動詞なのではあるまいか。(10)

第二グループの助動詞は、活用形の用法のうち連用形中止法をもっていない。第一グループの「ゆ・る」「しむ」は、「唐(もろこし)の遠き境につかはされ」(万・八九四)(「ゆ」「しむ」の例は三九頁に既出)のように、用言と同じく連用形がそれ自身で中止法となりえた。これはつまり、これらの助動詞が上にくる動詞と結合して用言相当のはたらきをしているものだからである。ところが第二グループの助動詞はこの用法を欠いている。このうち「ぬ・つ」には「家の妹にものいはず来にて」(万・三四八一)、「夜は更けにつつ」(万・二八二二)、「見る人の語り継ぎてて」(万・四四六五)のように助詞「て・つつ」を伴った中止法の例が僅かながらあるが、「り・たり」にはそれもみえない。このことは、これらの助動詞の連用形が、ほとんど助動詞を下接させる機能しか持たないことを意味する。元来、連用中止法は、「なつかしう、らうたげなりしを思し出づるに」(源・桐壺)の「なつかしう」のように、叙述を中止し、次の叙述「らうたげなり」と並列させるはたらきをもっている。この例で〔aなつかしう、bらうたげなり〕全体を記憶・回想の助動詞「し」が承けているのでもわかるように、このような連用中止法は叙述を中止するにとどまり、話手の判断は「らうたげなりし」の「し」に至ってはじめて加えられているのである。「ぬ・つ」「り・たり」は、このような連用中止法を欠き、もっぱら助詞、助動詞へ連接してゆく。これは、これらの助動詞を動詞につけて用いる場合、話手は、その動詞の表わす動作が、既に現実に生起し、継続し、完了し、結果が存在しているものとして叙述しているからであると思われる。この点については、さらに「ず」のところで述べる。

b 「ぬ・つ」「り・たり」の成立

次に、これらの助動詞の成立について述べる。このグループの助動詞は「り」を除いてすべて動詞の連用形に接続する。そのうちナ変型の「ぬ」、下二段型の「つ」については、もと「往(い)ぬ」「棄(う)つ」という独立の動詞であったとい

う語源説が、すでに江戸時代頃から行なわれている。「ぬ」の語源が「往ぬ」であることは、おそらく確実であろう。ナ変型活用に属する動詞は「死ぬ・往ぬ」の二語だけであり、助動詞「ぬ」がこれらの動詞に接続した例は奈良時代にはみられない。また、『万葉集』では「ぬ」を「去・往」の文字で表わすことがあるが、「往ぬ」にも同じ表記がみられる。次に「往ぬ」が他の動詞と複合して語頭の母音音節「イ」を脱落させた確例はないが「己藝伝なむ君がみ舟」(万・三七〇五)の「こぎいで→こぎで」のように語頭の「イ」の脱落した例はある。さらに複合動詞の後項が意味の形式化を起こし補助動詞性のものになることは奈良時代にも「敢ふ(万・四二九六)、わたる(万・三六三三)」などにみられる。これらの点から考えて、「往ぬ」語源説はかなり確実なものとみてよい。

「棄つ」は奈良時代に下二段に活用し、「捨つ」の類義語である。「掻き・投げ・脱き・吹き」等を承けて複合動詞を構成している例がみえ、その際「穿沓を奴伎都流如く」(万・八〇〇)のように「ウ」を脱落させた例もみえる。しかし、『万葉集』の表記からは語源意識はうかがえない。また補読ではあるが「命者棄」(万・二五三一)で「命はすてつ」と読むべき例があり、類義語「捨つ」についたことも考えられるので「ぬ」ほど確実性のある語源説とはいえない。ただ、「ぬ・つ」は共に動詞の連用形に接続し、動作の様態のみとめ方を表わす助動詞であるから、もと独立の動詞である公算は強い。そうなると、語頭に母音音節をもつ動詞で助動詞「つ」との間に意味の類縁性があり、活用形式の一致するものとして、「棄つ」が語源に擬せられるのも、状況的には妥当なことと思われる。

「たり」は「て」に「あり」が結合し、te+ari→tari と変化して成立したもので、「て」の接続上の性質をそのまま受け継いで連用形に接続する。記紀歌謡には「てあり・たり」共に例が無く、『古事記』には、

　葦原の中つ国はいたくさやぎてあり(帝阿理)なり(記神武)

のような「てあり」の形だけがみえる。『万葉集』には「たり」の形がみえるが、両形は、

　梅の花咲きて散りなば桜花継ぎて咲くべくなりにてあらずや(万・八二九)

常人の恋ふといふよりは余りにてわれは死ぬべくなりにたらずや(万・四〇八〇)

のように併存している。春日和男は「てあり」は当時における散文的用語であり、「たり」は韻文の調子を整える役割を果しながら発達して次第に散文の領域に入っていったものであるとしている。[12]

このように成立過程の辿りやすい「ぬ・つ」「たり」に比べて、「り」の成立を解明するには困難な問題がつきまとう。「り」は四段・サ変につき、他の動詞にはつかないと普通いわれるが、奈良時代においては「この吾が着る妹が衣」(万・三六六七)、「玉梓の使の来れば」(万・三九五七)のように上一段やカ変にも接続したとみることができる。従って奈良時代に「り」が接続しないのは、この時代にまだ成立していなかったとみられる下一段活用および「り」と同義語のラ変の「あり」とを除くと、上二段・下二段・ナ変の三種の活用の動詞ということになる。「り」の接続については、「り」のつく動詞語尾の仮名に甲・乙の区別がある場合、「於毛敝里(思へり)」(万・四二二〇)のようにエ列甲類の仮名が用いられていることが、橋本進吉の上代特殊仮名遣の研究によって証明された。従って、「於母倍婆(思へば)」(万・四二九二)のようにエ列乙類の仮名が用いられている已然形に、「り」が接続するという従来の説は是正しなければならない。命令形には「伊波敝(斎へ)」(万・四二四〇)のようにエ列甲類の仮名が用いられているので、形態的には「り」の上にくる形と一致する。しかし、命令形につくとするのも、命令形の機能を考えると形式的処理にすぎる嫌いがある。大野晋は、これらの点を顧慮して「動詞連用形＋あり」原形説をとっている。[13] これは「咲き－あり」「為－あり」「着－あり」「来－あり」の連用形の末尾母音「イ」と、「あり」の語頭母音「ア」の連続により ia→e(区別のある場合はエ列甲類)という変化が生じて「咲けり」などの語形が成立したとするものである。この説は「り」の接続を統一的に説明できる点で有力である。

では、何故「り」が上二・下二・ナ変に接続しないのであろうか。この点に関する大野の説を要約すると、次のようになる。上二段・下二段の連用形末尾母音「イ」「エ」は乙類相当の音で、起源的には ui→ï, oi→ï, ai→ë のように

母音連続の縮約の結果生じた合成母音である。それゆえ、この「イ」「エ」は多少長い母音であったろう。従って、上二段・下二段の連用形に「あり」が接続すると、この合成母音に更に「ア」が連続することになる。奈良時代の日本語では、母音の連続を避ける傾向が非常に強かった。しかし、ïa, ëa という母音連続を避けて一つの母音にすることは、これらの母音の性質上不可能である。そこで、上二と下二には、語頭が子音で始まる「て-あり→たり」が接続したのである。ナ変に「り」が接続しないのは、ナ変に属する「死ぬ」「往ぬ」が消滅、消失する意味の動詞であるから、存在・存続の「り」を下接させることは意味上起こり得なかったのである。

しかし、これは、動詞の活用形の起源に関係する問題であり、なお今後の研究にまつべき処が残されていると思う。[14]

c 「ぬ」「つ」の意味のちがい

第二グループの助動詞のうち、「ぬ・つ」は動作動詞性、「り・たり」は存在詞性のものである。以下「ぬ・つ」と「り・たり」とに分け、おのおのについて、それらがどのような意味を表わすものであるかを検討したい。

「ぬ・つ」が接続する動詞の範囲は、「ぬ」がナ変に接続しないという以外、活用形式の種類という点では特にちがいはない。しかし、動作概念の性質の面からは、それぞれ接続する動詞を異にする傾向が著しい。「ぬ・つ」と動詞とのこのような対応関係は、おそらくこの助動詞の成立期へ遡るほど密接なものであったと思われる。「ぬ」「つ」が承ける動詞にどんな性質のちがいがあるかについては、

(1) 「ぬ」は自動詞につき、「つ」は他動詞につく。[15]
(2) 「ぬ」は無作為的・自然推移的動詞につき、「つ」は作為的・意志的動詞につく。[16]
(3) 「ぬ」は動作結果表現型または状態帰結表現型の動詞につき、「つ」は動作過程表現型または状態過程表現型の動詞につく。[17]
(4) 「ぬ」は将来的時点→現在的時点→過去的時点の方向をとる動作の、「つ」はその逆の方向をとる動作の完了態

を表現する。(18)

などの意見がある。いずれもそれぞれの観点から「ぬ」「つ」の承ける動詞の動作の性質の相異を解明している。

それでは、「ぬ」「つ」がそれぞれ承ける動詞の間にみられる動作の性質のちがいは、「ぬ」「つ」における言語主体の側からの認め方のちがいと、どう対応しているのであろうか。

私はこの章の始めに、「ぬ」を「成り行き」の形式、「つ」を決着の形式と名づけた。先にあげた「散りぬ↕散らしつ」や「暮れぬ(万・一七二二)↕暮らしつ(万・一九四二)」などに、その典型的対応がみられる。「ぬ」の場合、「ぬ」の承ける動作に対して、言語主体は、それを、自分が意識的・意志的に関与することのない(または関与できない)世界において、おのずと発生し過ぎ去ってゆく性質のものとして捉えている。その捉え方は動作の進行を「成り行き」として傍観的に眺め見送る態度である。「つ」の場合は、その承ける動作・作用が、言語主体にとって決着のついたものとして受け止められている。従って「つ」で受け止めた時点で動作・作用の継続が断ち切られ却けられているのだと考える。この点については、なお相互承接のところで再論したい。

d　「り」「たり」の意味

「り」と「たり」の意味については、普通次のように言われている。「り」はその承ける動詞の動作・作用そのものが存在していることを表わす。「たり」は、(1)その承ける動詞の動作・作用が継続しているか、または(2)動作・作用の結果が存続しているかを表わす。

しかし、奈良時代における「り」「たり」の意味を、このようにはっきり分けることは妥当ではない。「り」と「たり」では成立の時期がちがい、「り」が古いことは、形態的な面からも推測できる。すなわち、接尾辞「く」による体言化が「嘆きふせらく」(万・八八六)のように「り」にはあるが「たり」にはない。また、「たり」はte+ari→tariと変化する際に、ariの語頭母音aが残り、eが脱落している。これは「ざり・べかり・なり」等と同型の「あり」結

合方式で、比較的新しい成立のものとされている。これに対して「り」は、先にも述べたように四段・サ変・カ変・上一段の動詞の末尾母音eの形を承ける。これがi＋ari→eriと変化して成立したという説に立てば、「り」は「たり」などとは異なる「あり」結合方式によって成立したことになる。これは「居り」がwu＋ari→woriと変化して成立した場合などと共に、「あり」が結合する際のより古い方式とみることができる。

「り」が、ラ変・上二・下二・ナ変に接続しないことは先に述べたが、「たり」は類義のラ変動詞を除いたすべての動詞に接続する。以上のような状況と、先に述べた「り」「たり」の成立とを考え合わせると、「たり」は「り」の機能が形式的に欠けた部分を補う役割もあって新たに成立した助動詞で、意味の面ではこの時代、両者の間にさほどのちがいはなかったとみるべきではないかと思う。事実、先にあげた『古事記』の例「さやぎてありなり」(五一頁参照)が『日本書紀』では、

聞喧擾之響焉、此をばさやげりなりと云ふ。(神武即位前紀)

となっているような例もある。春日和男は『東大寺諷誦文稿』の施点で「たり」と「り」の使い分けが上の動詞の活用形式によってなされているだけで、意味にちがいはないことを指摘している。[19] 従って、「り」と「たり」の成立の時期的なずれを考慮して、「り」と「たり」の意味の範囲が、どの部分では一致し、どの部分ではずれているのかを捉える必要があると思う。奈良時代の「り」は、先に掲げた「たり」の(1)(2)の意味と同じ意味範囲をもっている。(1)動作・作用の継続を表わす場合としては、先に掲げた〔存在1〕の「照れる春日」と〔存在2〕の「月は照りたり」を比較してほしい。(2)動作・作用の結果の存続を表わす場合としては、次のような対照例があげられる。

わがやどに盛りに咲ける梅の花散るべくなりぬ見む人もがも(万・八五一)

春なればうべも咲きたる梅の花君を思ふと夜眠も寝なくに(万・八三一)

普通(1)の意味は承ける動詞が継続性の動作を表わすものである場合、(2)の意味は承ける動詞が瞬間的動作を表わす

ものである場合に生じる。ただ、奈良時代における「たり」はこの(1)(2)いずれかの意味で用いられているけれども、「り」には、この(1)(2)の用法の外に、

　遊士とわれは聞けるを屋戸貸さずわれを帰せりおその風流士(万・一二六)

のような、(3)動詞の継続性・瞬間性にかかわらず、そのような動作そのものが存在したことを表わす例がある。この場合の「り」の意味は、「たり」と共通する(1)(2)の意味よりも存在概念がより抽象化され形式化されているといえる。しかし、このような存在概念の抽象化・形式化はやがて平安時代に入ると「たり」の上にも生じるのであって、それが成立の古い「り」に一足早くあらわれたとみるべきであろう。

e　相互承接について

次に、これらの助動詞の相互承接について考察する。この第二グループの助動詞は、上に第一グループの助動詞を承け、下にも種々の助動詞を接続させる位置にある。こうした位置にあって、「ぬ」「つ」は、その承ける動詞の動作概念の性質に、先に述べたようなちがいがあり、言語主体の認め方にも、動作の成り行きを傍観的に見送る「ぬ」と、動作を決着したものとして捉える「つ」との間には、不関与の「ぬ」対、関与の「つ」ともいうべき対立があった。このような対立の傾向が他の助動詞との相互承接の面にはどのようにあらわれているかという問題を中心に、相互承接についてみていきたいと思う。

まず、第一グループとの関係についてみると、「ぬ」は自発の形式に、「つ」は使役の形式に接続するという顕著な傾向がみられる。「ぬ」が使役の「しむ」に下接した例は全くみられない。これに対して「ぬ」は自発の「ゆ」に、

　天ざかる鄙に五年住まひつつ都の風習忘らえにけり(万・八八〇)

のように下接する。一方、「つ」は、「しむ」に下接した例はみえないが、動詞に「しむ」がついたのと同じ性質をもつ使役動詞には、

わが欲りし野島は見せつ底深き阿胡根の浦の珠そ拾はぬ(万・一二)

のように下接する。先に掲げた「飛ばしつ」も同類の例である。「てしか」の「て」も、もと「つ」の連用形かとされているが、「過無くも奉仕しめてしかと念ほしめして」(三六詔)のように「てしか」も「しむ」には接した例がある。「つ」には「聞こゆ」「見ゆ」など「ゆ」の接尾した動詞に下接した例もあるが、これらの例を個別に検討すると、

道に闘ふや尾代の子　母にこそ聞こえずあらめ　国には聞こえてな(雄略紀・八二)

の「聞こゆ」は、この歌の作者が尾代の子の武勇を国に「伝える」の意で使われており、「おのずと伝わる」自発の意ではない。「見ゆ」も、

わが恋ふる君そ昨の夜夢に見えつる(万・一五〇)

の類や、「袖振る見えつ」(万・三二四三)の類例である。これらの「見ゆ」は「鳰鳥のなづさひ行けば家島は雲居に見えぬ」(万・三六二七)などの自然と見えてくる意味の「見ゆ」と比較するとわかるように、心にかけて逢いたい見たいと思う人が見える意で、やはり無意志的自発ではない。これらの特定の場合を除くと、「つ」は自発の形式の下につくことはない。以上のことから奈良時代においては「ぬ」は自発の形式に続き「つ」は使役の形式に続くという対応関係があったとみることができると思う。

第二グループ内の相互承接では、「たり(てあり)」が「ぬ」には下接して「にたり」となり、「つ」には上接して「たりつ」となる。「にたり」の例には、「われは死ぬべく成りにたらずや」(万・四〇八〇)がある。「たり」が「つ」に上接する例には、「あり」の形式化の度合が問題ではあるが、

旅なれば思ひ絶えてもありつれど家にある妹し思ひがなしも(万・三六八六)

がみえる。いずれも例は少ないが、「つ」に「たり」が下接しないことは、「つ」が「決着」を表わし、存続しえない性質であることを示していると思う。

下位のグループの助動詞との承接のうち「ぬ」「つ」の対立と関係のあるものとして、「ぬ」「つ」と「けり」との承接を問題として取りあげたい。この場合、「ぬ」から「けり」へ続く「にけり」の例は極めて多い。先に掲げた「忘らえにけり」などもその例である。ところが「つ」から「けり」へ続く「てけり」の例は記紀歌謡にはなく、『万葉集』にも次の一例がみえるだけである。

あしひきの八峰(やつを)の椿つらつらに見(み)とも飽かめや植ゑてける君(万・四四八一)

この歌は大伴家持が大原今城の宅の宴で庭に植えてある椿に目をとめて詠じたものであるという。平安時代には「てけり」の例が珍しいものではなくなるのに、何故奈良時代にはこのような著しい偏りがみられるのであろうか。「つ」の側からは、「つ」が作意的・意志的な性質の動作と密接な関わりをもっており、そのような動作の決着を表わすものであったことによる。いいかえれば、より抽象的ないわゆる確認判断といえるほど「つ」の意味が形式化していなかったことが原因として考えられる。「けり」の側からは、奈良時代の「けり」が「過去から継続して現在に在る」という意味の基本的な形式を崩さず保持していたことに原因があると思う。また、このように「つ」とは疎く、「ぬ」と深く関わる「けり」の性質として、次のような「けり」における「過去」の捉え方の特質があることも注意すべきである。すなわち、「けり」の表わす過去は、何時何時(いついつ)からとはっきり限定された起点をもっていない、何時からともない無限定な過去であるという点である。これは「き」が過去を明確に限定されたものとして捉えるのとは極めて対照的である。そして、このような無限定な過去から在り続けているものの存在を、現在の立場において「在る」と認めるところに「けり」の意味の基本的な性質があると思う。つまり「けり」の世界は過去への拡がりをもつが、それは現在の時点ではじめて経験された過去からのつながりの世界なのであって、過去から現在までの継時的な経験の世界ではない。「けり」のこのような性質が、主体の不関与の世界を「成り行き」として捉える「ぬ」とは結びつきやすくさせ、意識的に「決着」をつける「つ」の世界とは疎々しいものにさせたのではないかと思われる。

以上述べたところから、「ぬ」「つ」を中心にみた助動詞の相互承接では、(1)「ゆ」→「ぬ」→「けり」の系列「えにけり」と、(2)「しむ(す)」→「つ」→「き」の系列「しめてき」とを、際立った二つの対立として認めることができる。(「き」は「ぬ」にも「つ」にも偏りなく下接するが、一応偏りのある「けり」と対比的に位置させておく。)なお、否定の助動詞との承接についても問題がある。ことに、「ぬ・つ」が否定系の助動詞「ず・まじ・じ」のすべてと承接することがないのは、極めて注目すべき現象である。すなわち、「ぬ・つ」は肯定系列の助動詞として、否定と斥け合う性質をもっていたといえるのである。このことについては第五節で改めて述べることにする。

f 「ぬ」「つ」の性質の変遷

以上のような「ぬ」「つ」の基本的な用法では、「ぬ」「つ」はその承ける動詞の動作概念の性質と密接な関係があった。しかし、先の「り・たり」の場合にも類似の現象がみられたように、一度「ぬ」「つ」それぞれに固有の言語主体の認め方が「成り行き」「決着」の形式として成立した後には、「ぬ」「つ」の承ける動詞の動作概念との関係はゆるんできた。成立した「成り行き」「決着」の形式は、やがて述語の部分の叙述の性質を形式の側から規制するだけの独立性を獲得していったのである。例えば、

春日(かすが)の山は……春さりゆくと山の上に霞たなびき高円(たかまと)に鶯鳴きぬ(万・九四八)

霞立つ野の上の方(かた)に行きしかば鶯鳴きつ春になるらし(万・一四四三)

の例で、前者は自分の目の前を去っていく春の情景として鶯が鳴くことを叙述するのに「ぬ」を用い、後者は春を待つ心に春の訪れを知らせてくれたものとして鶯の鳴くことを「つ」の形式で受け止めているのだと思われる。これらの例は、動作概念の性質にかかわらず、むしろ「ぬ」「つ」の形式の側から述語の部分の叙述の性質を規制する機能を、この形式がもつに至ったことを示すものである。

また、次の例では、動詞の表わす動作概念「たもとほり来(く)」とよりも、そのような動作の行なわれる理由である

「君に逢はむと」「君を思ひ出」という条件句の内容と「つ」「ぬ」とが対応しているとみるべきである。すなわち、

雲の上に鳴くなる雁の遠けども君に逢はむとたもとほり来つ(万・一五七四)

女郎花咲きたる野辺を行きめぐり君を思ひ出たもとほり来ぬ(万・三九四四)

では、「……遠けども君に逢はむとたもとほり来」たことが「つ」で受け止めるべき内容であり、「……行きめぐり君を思ひ出(思わず知らず)たもとほり来」てしまったことが「ぬ」の承けるべき内容なのである。

「ぬ」「つ」は、平安時代において、話手の単なる確認判断を表わす用法を派生させ、その性質を変化させてゆく。(二〇四頁参照)奈良時代にも、

わが背子にまたは逢はじかと思へばか今朝の別れのすべなかりつる(万・五四〇)

のように、稀ではあるが「つ」が動詞以外のものをも承ける例があるのは、その兆候を示すものといえよう。

4　用言および用言相当の単位を構成する助動詞「なり」「たり」について

第三グループ以下に位置する助動詞は、動詞以外の用言にも接続する。そこで、これらの助動詞の検討に入るに先立って、各種の用言の性質を、その叙述様式のちがいを中心に述べ、あわせて、体言に用言相当の資格を与える助動詞「なり」「たり」について考察したい。

叙述文の述語となる機能をそれ自身でもっているのは、三種の用言——動詞・形容詞・形容動詞——である。また、体言も「なり・たり」を下接させることによって用言相当となり、述語として用いられる。(以下、体言に「なり・たり」の下接したものをも含めて便宜上用言とよぶことがある。)叙述文の様式は、述語の部分の中心になる用言の性質によって規定され、それぞれ特色をもっている。

第一に動詞文であるが、これは、

我も見つ人にも告げむ葛飾の真間の手児名（てごな）が奥つ城（き）ところ（万・四三二）

の「見る」「告ぐ」のような動作概念を述語の内容とするものである。従って、動作の主体を表わす主語「我」の外に、動作の性質によっては、補語「人に」、目的語「奥つ城（き）ところ（ヲ）」のように、その動作の成立に必要な動作対象をとりたてる。

　第二に、シク活用形容詞を述語とする文がある。これは、

　難波人葦火たく屋の煤（す）してあれど己（おの）が妻こそ常めづらしき（万・二六五一）

のように、「常めづらし」と思う主体「我」よりも、そう思う対象である「己が妻」を、主語の形式でとりたてる。そして、その対象に対して抱く情意の内容をシク活用形容詞で表わすことにより叙述として充足する場合が多い。

　第三に、事物の性質や状態などを表わす形容詞および形容動詞を述語とする文がある。これらは、

　月夜（つくよ）よし河の音清し（万・五七一）　梅の花今さかりなり（万・八二〇）

のように、その性質や状態の持主を主語としてとりたてることで充足した叙述となるのが普通である。

　以上のような叙述様式をもつ用言は、これを形式的にみると、(1)終止形の末尾が「ウ」の母音で終る動詞性のものと、「イ」の母音で終るものとに分かれる。「イ」で終るものは、さらに、(2)「リ」で終る存在詞性のものと、(3)「シ」で終る形容詞性のものとに分かれる。この末尾の音のちがいがそのまま用言の活用形式のちがいと対応するものであることは、いうまでもない。

　松下大三郎は意味の面から用言の叙述性を比較した。それによると、用言の表わす動作・状態のうち、(甲)動作の本性はそれが時間の形式によって認識された作用であるという点にある。(甲)は、(1)時間における変化をあらわす運動性のものと、(2)時間における不変をあらわす静止性のものとに分けられる。(乙)状態の本性は、それが時間の形式によらないで認識されているところにあるとしている。[20] (甲)の(1)は動作動詞によって、(甲)の(2)は存在詞「あり」によって、(乙)

は形容詞によって、もっとも典型的に現わされている。形容動詞は状態性の語幹に、「に」と「あり」が結合して ni+ari→nari と変化した「なり」の接尾したもので、(甲)(2)の存在詞性の用言ということができる。

このような三種の用言と比較すると、体言に「なり・たり」の接続した単位はどのような性質をもっているだろうか。「なり」は形容動詞の場合と同じく「に」と「あり」が結合し融合したものであるし、「たり」も「と」と「あり」が結合して to+ari→tari と変化して成立したものである。従って存在詞性のものであるという点では三種の用言のうち形容動詞にもっとも近い性質をもっていると考えられる。しかし、体言に「なり・たり」の接続した単位を述語とする文は、

たづきも無きはあが身なりけり(万・四〇七八)　世の中は空しきものとあらむとぞこの照る月は満ちかけしける(万・四四二)

のように「——は——なり(とあり)」型の叙述様式をもつのが特色である。(奈良時代には融合形「たり」の例はみられない。) この形式で文を言い切る場合、主語が「は」で導かれるのを本来の型とする点も、他の叙述様式には見られないところである。春日和男は、この種の叙述様式を指定表現と名づけ、それが、

琴頭に来居る影姫　玉ならば吾が欲る玉のあはび白珠(武烈紀・九二)

のような体言と体言とを重ねるだけの原始的な表現法から、

我が見が欲し国は　葛城高宮我家のあたり(記仁徳・五八)

のように「は」が介入した様式となり、

この御酒は　我が御酒ならず……少名御神の……献り来し御酒ぞ(記仲哀・三九)

のように「——は——ぞ」の様式が成立して、「——は——なり」様式と共に奈良時代の指定表現を代表するものとなったことを詳しく考察している。[21] この「ぞ」が活用する「なり」に置き換えられることによって指定表現が得た自

由は大きいものがある。「なり・たり」は元来述語となる機能をもたない体言を述語構成に関与させるとともに、体言が語彙としてもつ豊富な実質概念を、述語内容として提供させる役割を果した。それと同時に、指定表現自体に対してもその述語に用言と同じさまざまな機能をもたせたのである。中田祝夫が「体言はその数が多く、国語の最重要の部分を分担している。その圧倒的多数を占める体言が、語の性質上でも語の連接の上でも表現の上でも一種の金縛りにあい、甚だしい不自由さをもっていた。それを解放したのが、「なり」や「たり」であると、わたしは考える。」[22]と述べているのは至言である。なかでも「なり」は、「たり」が体言を承ける用法しかもたなかったのに対して、用言や助動詞の連体形を承ける用法を派生させ、それによって「命にもまさりて惜しくあるものはみはてぬ夢のさむるなりけり」(古今・六〇九)のように、用言や助動詞の連体形の統括する叙述内容全体を承けるはたらきをもつに至る、注目すべき助動詞である。この点については、平安時代の「連体形+なり」のところで再論したい。

第三グループ以下の助動詞には、動詞性のもの、存在詞性のものの外に、形容詞性のものも含まれている。そこで、考察に当っては、次の点に留意したい。まず、用言と助動詞とは、(1)活用するということにおいて共通しており、(2)その活用の形式や活用形の用法においても密接な対応関係を示している。従って、この章で述べたような、各種の用言の活用形式とその叙述様式との間にある一定の対応関係についても、助動詞の場合も用言と同じようにあると予測してよいと思われる。

また、動詞以外の各種の用言と助動詞との承接を考察するに先立って形容詞の「ク・シク活用」と「カリ活用」との関係をどう扱うかを決定しておく必要がある。形容詞は、本来の活用系列である「ク・シク活用」からは、普通助動詞に直接続くことがない。[23]いわゆる形容詞の補助活用「カラ・カリ・カル」の系列が成立してはじめて助動詞を下に接続させる機能をもつに至る。この系列は「ク・シク活用」の連用形に「あり」が接続して ku+ari→kari と変化

して成立したものである。この「あり」については、(1)形容詞の語尾における文法機能を補助するためのつなぎの役割を果しているとみる補助活用説、(2)形容詞と「あり」が結合した全体を形容動詞の一種とみる説、(3)「あり」は形容詞連用形を副詞格として承け、それによって概念内容を補足して主格と関係する形式動詞であるとみる説などがある。しかし、「ク・シク活用」と「カリ活用」を比較すると、活用形としては両形並存していても活用形の用法としてはむしろ相互に補い合っている。また「カリ活用」系列は言い切りの形をもたない方が普通であり、特別の場合を除くとカリ活用系の各活用形は助詞・助動詞に連接する非独立用法しかもっていない。以上のところから、「あり」または「——かり」を、もとの形容詞とは別の独立した単位として認めることには、なおためらいを感じる。それゆえ、本稿では、補助活用説によることとする。この扱いは、形容詞性助動詞についても同様である。

5　用言に接続する助動詞　その一

第三グループ以下に位置する助動詞は、先にも述べたように、動詞以外の用言すなわち「形容動詞」「形容詞」「体言十なり(たり)」にも接続する。これらを、他の助動詞を下接させる能力の有無によって第三グループと第四グループとに分ける。第三グループに属する助動詞は、「ずーざり」「べしーべかり」「まじ」[24]である。助動詞は、それが承ける用言の内容を実質的意味として、これに形式的意味を付け加え、それぞれ固有の形式による叙述内容を形成するものである。従って、他の助動詞を下接させるということは、下接する助動詞よりもそれだけ用言寄りの位置で叙述内容の形成にあずかることになる。これは、下接する助動詞の側からいえば、その助動詞が承ける叙述内容の一部を形成しているということになる。第三グループの助動詞が他の助動詞を下接させるのも、この意味においてである。

このグループは、一応形容詞性助動詞のグループとみることができる。ただし、「ず」は後に述べるように動詞性から形容詞性への転換が平安時代へかけて起こっているが、奈良時代においては、状態存在詞性の助動詞とみるべき

かと思う。形容詞自体の活用形式にも、この時代には未発達の部分があるが、これらの形容詞性の助動詞も、形容詞と軌を一にして、平安時代にみられるほど活用形式を発達させきってはいない。しかし、否定・推定というような思惟性の強い意味をもつ第三グループの助動詞が、事物の状態を時間の形式によらないで認識する形容詞と同じ活用形式をもち、あるいは形容詞性のものへと転換していく方向にある。このことは、極めて興味ある現象だと思う。以下、各助動詞ごとにその性質を検討していくことにする。

(1) 否定の形式

否定の形式「ず‐ざり」は、いうまでもなく肯定の形式に対応するもので、判断の基本的形式の一つである。

a 「ず」の活用形式の成立

奈良時代における「ず」の活用には、次のような三つの系列を認めることができる。

表 3 奈良時代における「ず」の活用

	未然	連用	終止	連体	已然	命令	ク形
第一系列	な	に	○	ぬ	ね	○	なク
第二系列	○	ず	ず	○	○	○	
第三系列	ざら	ざり	○	ざる	ざれ	○	

第一の系列は活用形式が四段活用に類しており、動詞性のものと考えられる。第二の系列は、

梅の花み山と繁(しみ)にありともやかくのみ君は見れど飽かにせむ(万・三九〇二)

さす竹の皇子(みこ)の宮人行方(ゆくへ)知らにす(万・一六七・一云)

などの例によって、第一系列の連用形「に」に「す」が付き、ni＋su→nzu→zu と変化して成立したものであろうといわれている。この「す」は「あり」とも転換しうる性質をもっており、[25] 副詞や形容詞の連用形を承けて「そのような状態である」と判定する用法ももつ形式動詞である。ただ、「す」が結合しただけの段階では「にせ・にす」と語形変化しているのに、融合して「ず」となった場合、どうして語形変化を起こさなかったのか、「す」接尾形による交替が何故全活用形に及ばなかったのかなどは、第二系列の成立と性質を考える上で問題として残ると思われる。第三系列は第二系列の成立後その連用形「ず」に「あり」が結合して zu＋ari→zari と変化して成立したものである。「ず」系と「ざり」系の関係は、形容詞とその補助活用に似ているが、「ず」の成立の経緯を反映して複雑である。

「ざり」系が助動詞を下接させることを主な役割としている点は形容詞の補助活用と同様であるが、一方で「ず」は、「根白の白腕(しろただむき)枕かずけばこそ知らずとも言はめ」(記仁徳・六一)、「現(うつつ)にも夢(いめ)にも吾は思はずき」(万・二六〇一)、「見れど飽かずけり」(万四〇四九)、「咲き出来(で)ずけむ」(万・四三二三)のように、「き・けり・けむ」に直接続く用法をもっており、[26] 動詞的性質がある。また連体形「ざる」は助動詞を下接させる以外に「夕(ゆふべ)だに知らざる命」(万・二四〇六)のような連体法や、「花のみ咲きてならざるは」(万・一〇二)のような準体法としても用いられる。また助動詞を下接させない已然形「ざれ」の用例も、「あらたまの年の緒長く逢はざれど」(万・三七七五)など稀ではない。この点形容詞性の「べし」に対する補助活用「べかり」とはかなり異なった様相を呈している。以上のことから、奈良時代において否定の助動詞は第一→第二→第三系列へと状態存在詞としての性質を明確にさせながら発達してきたと考えることができるのではないか。そう考えることによって「ず」と「じ」との関係も明確に捉えることが出来ると思うのである。

b 「ず」と「じ」との関係

すでに山田孝雄は「ず」は「す」を接尾させた動詞的のものであり、「じ」は「し」を接尾させた形容詞的のもの

であろうといっている。[27] この考えをいますこし敷衍(ふえん)して、次のようにいうことができるのではないか。「ず」は先に述べた「す」の性質に基づいて汎主観的、客観的に「否定的状態と判断する」意味である。これに対して「じ」は主観的に「自身の考えるところでは……ではない」というのが基本的な意味である。「じ」は語形変化しないけれども「じ」が接尾して成立したと思われる「ましじ」が形容詞シク活用系のものであることから、「じ」に接尾した形容詞語尾の性質もシク活用的なものであったと思われる。奈良時代の形容詞には、「ク活用形容詞は状態性の意味を表わす。シク活用形容詞は情意性の意味を表わす。」という対応がかなりはっきりしているという。[28] シク活用形容詞が述語となった文は、「己が妻こそ常めづらしき」のように対象に対する話手の主観的情意を表現して、「(私には)……ガ……ダ(ト思ワレル)」型のものであった。シク活用系語尾をもつ助動詞は、「じ」だけでなく、すべてこの形式による主観的な想定判断を表わすものとして、統一的に捉えることができると思う。その意味において、このシク活用性助動詞の系列は「む・らむ・けむ」などの予想・推量判断を表わす動詞性助動詞の系列に対立するものであると思う。これについては次節で改めて述べることとする。

c　否定の助動詞の接続する範囲と、日本語における否定の性質

否定の助動詞「ず」は上述した助動詞のすべてに下接するものではない。先に触れたように、第二グループの助動詞のうち、「ぬ」「つ」には否定の助動詞が下接しないのである。このことは一体何を意味するのであろうか。以下、このことを手がかりに、否定の性質について検討していきたい。奈良時代における否定の形式は、用言および用言相当の単位を構成する助動詞「なり・たり」、第一グループの使役・自発(可能)の助動詞に下接した例がみえる。

〔動詞〕息だにもいまだ休めず(万・七九四)　さ寝し夜の幾許(いくだ)もあらねば(万・八〇四)

〔形容詞〕少なくも妹に恋ひつつすべ無けなくに(万・三七四三)　身(み)も惜しからず(万・七八五)

〔形容動詞〕ただならずとも(万・四二九五)

〔なり(にあり)〕秋にあらずとも(万・一五二〇)
〔たり(とあり)〕なかなかに人とあらずは(万・三四三)
〔しむ〕見しめずありける(万・四四九六)
〔ゆ〕妹が恋しく忘らえぬかも(万・四四〇七)　目には見て手には取らえぬ月の内の楓(かつら)の如き(万・六三二)

第一グループの助動詞は、それが接尾することによって使役動詞などの各種動詞を構成するという意味で、用言相当の単位を構成するものと考えられる。従って、用言および用言相当の単位を構成する助動詞によって統括された叙述内容には、すべて否定の助動詞が下接し、肯定に対する否定を表わしているといえる。

ところが第二グループの助動詞と否定の助動詞との関係をみると、まず「ぬ・つ」は奈良時代においてその下に否定の助動詞が来ることはない。平安時代になると、

見るめなきわが身をうらと知らねばや離(か)れなで海人(あま)の足たゆく来る(古今・六二三)

のような否定の意味をもつ助詞「で」の付いた例が稀にある。また、

かくながら散らで世をやはつくしてぬ花のときはもありと見るべく(後撰・九五)

道しらでやみやはしなぬ相坂の関のあなたはうみといふなり(後撰・七八七)

のような反語表現で「ぬ・つ」に否定の助動詞が下接した例もわずかながらみられる。しかし、奈良時代においては、「ぬ・つ」は「ず」を下接しないだけでなく「まじ」「じ」をも下接させていない。以上のところから、「ぬ」「つ」は奈良時代において、もっぱら肯定表現に用いられたということができる。これは、奈良時代における「ぬ・つ」の意味と否定とが却(しりぞ)け合う性質をもっていたために生じた現象なのか、また否定の形式というものが奈良時代においてまだ「ぬ・つ」との相互承接を発達させていなかったためなのか、いずれかである。私は、おそらく成り行きの意の「ぬ」や決着の意の「つ」、ことに「つ」と否定とは意味上結びつきにくい面があった為であると思う。

「り」に否定の助動詞が接続した例としては、

　松の花花数にしもわが背子が思へらなくにもとな咲きつつ(万・三九四二)

がみられるが、「たり」には先に掲げた「われは死ぬべくなりにたらずや」のような反語表現の例がみえるだけである。しかし、「じ」に「いくばくも生けらじ命を」(万・二九〇五)、「如己男(もころを)に負けてはあらじと」(万・一八〇九)のように接続した例があるから、「り・たり」は否定との対応をもっていたと考えてよいと思う。

同じグループ内の「べし」についた例は、

　雷(いかづち)の光の如きこれの身は死(しに)の大王常に偶(たぐ)へり畏(お)づべからずや(仏足石歌・二〇)

のような反語表現が、それも仏足石歌にみられるだけである。「ざるべし」の用例も奈良時代にはみられない。しかし、「べし」は平安時代に入って本格的な発達を遂げる助動詞で、その時期においては「べからず・ざるべし」両様の承接がみられるので、これは「べし」の用法の未発達による現象とみてよいと思われる。

このほかでは、第四グループの「けり」に「ず」がついて、

　この花の一枝(ひとよ)のうちは百種(ももくさ)の言(こと)持ちかねて折らえけらずや(万・一四五七)

のような反語表現として用いられている例がみえる。しかし、「けり」の場合には結局は肯定表現になるこの種の用法に限られているので、肯定に対応する実質的な意味での否定の形式はもたなかったとみるべきである。

以上の考察を通して、奈良時代の否定表現の性質を次のように考えることができると思う。

否定の形式は、用言あるいは用言相当の単位を承ける場合を中心とするものである。それ以外では存在詞性の「り・たり」と僅少ながら形容詞性の「べし」を承ける用法がある。動作の行なわれる際の様態をあらわす「ぬ・つ」のような、動作性が強くもっぱら肯定へ叙述を導くものを承けることはなかった。

この否定の形式の性質は、平安時代においても、基本的には変っていない。これは、おそらく各時代を通じて一貫

しているのではないかと思われる。松下大三郎は、日本語の否定について次のように述べている。「否定が不変的性質として考へられることは著しい。……否定の助辞「ず」の活用も形容詞性である。又過去のことをいふ時肯定ならば「昨日は行つた」と云つて決して「昨日は行く」とは云はないにも拘らず、否定ならば平気で「昨日は行かない」といふ。必ずしも「行かなかつた」とは云はない。日本人は否定を不変的に考へる癖が有るのである。[29]」これは、日本語の否定の性質を鋭く見ぬいた言であると思う。以上、否定の性質の考察に当っては、単純な否定の「ず」を中心にしてきたが、この性質は「まじ」「じ」にも共通するものなのである。

(2) 推定の形式

「べし」は、経験や論理や道理の上から、(1)事の成り行きの必然性を予測し、(2)論理としての当然性・妥当性を推論し、(3)事の可能性を推測し、(4)事の必要性を推定する形式である。

〔推定(1)〕妹が見し楝（あふち）の花は散りぬべしわが泣く涙いまだ干なくに(万・七九八)

なかなかに死なば安けむ君が目を見ず久ならばすべなかるべし(万・三九三四)

〔推定(2)〕心なき鳥にそありけるほととぎす物思（も）ふ時に鳴くべきものか(万・三七八四)

こちごちの花の盛りにあらねども君が御行（みゆき）は今にしあるべし(万・一七四九)

〔推定(3)〕袖振らば見もかはしつべく近けども渡るすべなし秋にしあらねば(万・一五二五)

〔推定(4)〕大夫（ますらを）は名をし立つべし後の世に聞き継ぐ人も語り継（つ）ぐがね(万・四一六五)

ここで「べし」の意味の細かな揺れを追及することは避けるが、「べし」の表わす意味といわゆる予想・推量とのちがいは明確にしておく必要がある。予想・推量系の代表的助動詞「む」と「べし」とを対応させてみると、例えば同じく事の成り行きを予測する場合でも、

明日よりはわれは恋ひむな名欲山石踏み平し君が越え去なば(万・一七七八)

のように「明日よりは」という現実の時間の流れに立って予測する時は「べし」は使われていない。また、予測するに当って、

大君の三笠の山の黄葉は今日の時雨に散りか過ぎなむ(万・一五五四)

のように疑いを残して予測することも「べし」にはみられない。「べし」は自問的な「か」と共に用いられないし、「――や――べき」「――べしや」の形をとることは多いが、それも反語的用法に限られている。「べし」の世界は本来あくまで思惟の世界であって、現実の世界における動作・状態などを、不確実なものとして推量したり、非現実の事態の実現を予想するのとは異なる性質のものである。従って、「べし」に命令の意味があるとするのも、普通の用言や助動詞の場合のような、将来において事を実現させることを求める命令形による命令とはちがい、あくまで事の必要性を述べることによる命令なのである。

「べし」は形容詞性の助動詞で、ク活用型の活用形式をもつ。この時代、已然形を欠き、補助活用も「カリ」と融合した確例はまだ未然形のみである。形容詞の語幹に「み」の接した形に相当する「べみ」(「人知りぬべみ」(万・二〇七)の用例もある。上一段の「見る」に下接する場合は「見べし」(万・三九五一)の形をとるが、一般には用言および上接する助動詞の終止形(ラ変型活用には連体形)につく。

一般に終止形は(1)叙述を終止させ、(2)文を完結させるはたらきをもつ活用形である。従って、助動詞が終止形に接続することは、終止した叙述を承けることになる。そして、終止形に接続する助動詞は終止し統括された叙述内容に対して、ある主体的意味を付加するものであると考えることができる。つまり、述べることの内容を構成するのではなくて、述べられた内容に対する言語主体の判断を表わす助動詞なのである。第三グループに至って初めて終止形を承ける助動詞が現われたことと、その助動詞が「推定」という言語主体の側からの判断を表わすものであることとを

関連させて考えると、助動詞の相互承接の順序と助動詞の意味との関係が、いかに密接なものであるかが明らかになると思う。

「べし」の語源については、肯定的叙述と対応する副詞「うべ」(記仁徳)が挙げられており、これに形容詞構成の接尾辞「し」が付いて「うべし」となり、語頭の母音音節「ウ」が脱落して「べし」となったと推定されている。「うべ」は「うべなり」(神武即位前紀)という形でも用いられており、同一語基から「―なり」「―し」が派生する例はあるから、可能性のある語源説である。しかし、情態性語基に「し」が付いて構成される形容詞は普通シク活用になるのに、(30)「べし」がク活用である点などに問題が残る。

「ましじ」は「べし」に対応する否定の形式である。「べし」の意味としてあげた推定のタイプ四種のうち(1)(2)(3)に対する否定の用法がみられる。

(1)必然性の否定)布当山山並見れば百代にも易るましじき大宮所(万・一〇五五)

(2)当然性・妥当性の否定)寄るましじき川の隅々寄ろほひ行くかも末桑の木(仁徳紀・五六)

王等は己が得ましじき帝の尊き宝位を望み求め(四五詔)

(3)可能性の否定)山越えて海渡るともおもしろき今城の中は忘らゆましじ(斉明紀・一一九)

玉くしげみむろの山のさなかづらさ寝ずはつひにありかつましじ(万・九四)

ただし、(3)可能性の否定)の場合は「かつ・敢ふ」などの耐えぬく意を表わす補助動詞や自発の「ゆ」と共に用いられることが多い。また、「汝の志をば暫くの間も忘れ得ましじみなも」(五八詔)のように補助動詞「得」と共に用いられる例もみえる。「ましじ」の用例の大半はこの(3)の類の用例が占めている。平安時代に成立した「まじ」は、「ましじ」から転じたものであるが、「え――まじ」と対応する用例が極めて多いことは注目すべきである。

次に、「ましじ」における否定の性質について検討する。「ましじ」は連体形「ましじき」であるところから形容詞

シク活用型の活用形式をもつといえる。「まじじみ」の形をもつのは形容詞的性質のあらわれである。しかし、「ず」や「べし」のように補助活用を発達させることはなく、従って他の助動詞を下接することもない。これは平安時代の「まじ」とは非常にちがう点である。これは、「まじじ」の活用がこの時期に未だ十分発達していなかったと考えることもできる。しかし、一方他の助動詞を下接させないということは、同じシク活用型の「らし・けらし」などにも共通する現象である。従って、この現象は、先にも「じ」について触れたように、話手の主観的想定を表わす「らし・けらし」など、奈良時代におけるシク活用型助動詞の共通の問題として捉えるべきだと思う。この点については、「らし」の項を参照されたい。「まじじ」は普通「べからず」の意であるといわれるが、この意味においては客観的な「ず」で否定するのではなく、主観的に「じ」で否定するのだということを、奈良時代においては考慮すべきかと思う。なお、「まじじ」は「べし」に比べて上接する語の範囲も狭く、用言の中では動詞に、助動詞では「ゆ」に接続している例がみえるだけである。

6 用言に接続する助動詞 その二

第四グループに属する助動詞は、奈良時代においては他の助動詞を下接させず、また同じグループ内の他の助動詞と相互に承接することもないという点ですべて共通である。しかし、平安時代における承接関係や、「けむ」のように過去と推量という二つの要素が複合している助動詞の場合の、各要素の上下関係などを考慮に入れて、相互承接表には三段に分けて位置づけた。このグループの助動詞は、その活用形式によって(1)存在詞性の「終止形十なり・けり」、(2)特殊型の「き・まし」、(3)動詞性の「む・らむ・けむ」、(4)形容詞(シク活用)性の「らし・じ(ざらし・けらし・あらし・ならし)」に分けられる。この活用形式は、各助動詞の意味とも深く関係している。(2)の中の「まし」は一応形容詞性のものとして(4)に入れ、その上で(1)と(2)、(3)と(4)を対照させながら考察していくことにする。

このグループの助動詞は、活用形のうち欠けるものが多く、また活用形の用法の面でも欠けることが多くなっている。これは、一つにはこれらの助動詞が常に叙述内容を構成する場合の最終段階で用いられることと関係している。また、このグループの助動詞の意味は、他に命令してそうさせるような客観的なものではないので、命令形はすべて欠けている。これは形容詞性の助動詞がこの時期に已然形を欠いているというような活用形式の未発達によるものではない。それゆえ、平安時代に入ってもほとんど変化することはない。以上の点は、このグループ全体に共通した性格として注意すべきものである。

(1) 存在詞性のもの ——現時点における状況判断の形式——

「終止形＋なり」(以下、これを「終止なり」という)と「けり」は存在詞性の活用形式をもっている。

「終止なり」は、奈良時代においては、(1)物音、鳴き声に関した叙述を承けることが多く、(2)人から聞いた話の内容を承ける例もある。(1)の場合でも、

御執らしの梓の弓の金弭の音すなり(万・三)

瀬を速み落ち激ちたる白波に河蝦鳴くなり朝夕ごとに(万・二一六四)

のように、(イ)直接的に物音・鳴き声を表わす語を承けるだけでなく、

天の河相向き立ちてわが恋ひし君来ますなり紐解き設けな(万・一五一八)

聞きつやと妹が問はせる雁が音はまことも遠く雲隠るなり(万・一五六三)

などのように、(ロ)櫓の音や雁が音のかすかさから想像される状態を承ける間接的な用法もある。(2)の例は、

里人の吾に告ぐらく……少女らは思ひ乱れて君待つとうら恋ひすなり(万・三九七三)

の如く、里人が吾に告げた「……少女らは思ひ乱れて君待つとうら恋ひす」という内容を「なり」が承ける類である。

次に、「終止なり」の成立と、その意味について述べる。先に掲げた(1)の例の「なり」に「鳴」字を宛て(万・一一四三)、(2)の例に「聞」字を宛てる(五五頁の神武即位前紀の例参照)ことがあるのは、「終止なり」の意味に対する当時の意識の反映とみてよいと思う。春日和男は「終止なり」の成立と意味について、「終止形十見ゆ」(以下、これを「終止見ゆ」という)と関連させて次のように説いている。[31] 奈良時代の「見ゆ」には、用言の終止形を承ける次のような例がある。

潮瀬の波折(な)りを見れば遊び来る鮪(しび)がはたでに妻立てり見ゆ(記清寧・一〇八)

わたつみの沖つ白波立ち来らし海人娘子(あまをとめ)ども島隠る見ゆ(万・三五九七)

この「見ゆ」と同様、「なり」についても、例えば「河蝦(かはづ)鳴くなり」の場合、「……終止形」で表現された聴覚的叙述内容「河蝦鳴く」を「なり」が承けているとみることができる。この「なり」は、「終止見ゆ」が「……と見える」意を表わすと同じように「……と音が聞こえている」の意に用いられている。ところで、視覚動詞「見ゆ」に対応する聴覚動詞「聞こゆ」は「梶の音聞こゆ」(万・三六六四)のような音響を直接知覚する意の、単純な主述関係の文しか構成していない。「聞こゆ」は「終止見ゆ」に対応する「終止聞こゆ」の用法をもたないので、これに相当するものとして「終止なり」が成立したが、平安時代に入ると「終止見ゆ」も「終止めり」にその領域を譲ったとするものである。北原保雄は文構成の面からこの問題をとりあげた。それによると、「終止見ゆ」の構文は、先に掲げた例でいえば、主語「妻」を「立てり」「見ゆ」の二つの述語が承けている「複述語構文」とみるべきものである。「なり」が終止形に接続するのは、「音(な)あり→鳴(な)り」というラ変動詞が複述語構文を構成していたなごりであり、「終止なり」はこのラ変動詞から助動詞化したものである。従って、「なり」は「音がある」という音声の存在の断定的表現であるとしている。[32] 北原は、複述語構文という考えを「なり」のみならず「らむ」「らし」にも及ぼし、[33] 終止形接続の助動詞の文構成上の機能一般の解明を目ざしている。ただ、「終止見ゆ」を複述語構文と考えるとしても、述語「見ゆ」が二

つの述語の中で常に後に位置する点は考慮すべきであると思う。「妻立てり見ゆ」は「妻見ゆ立てり」とはならないから、「立てり」と「見ゆ」とは同格の述語とみることはできない。「ゆ」のところでも触れたように「見ゆ」は「見る」主体ではなく、「見える」対象を形式的主語とする叙述様式をもつ動詞である。この場合「見る」主体は、そのような知覚の状態が生じる場として「……に(は)」として位置づけるのが普通である。三上章は、知覚の状態を表わす語や情意を表わす形容詞が文の述語となる場合は、「……に(は)」の位格を要求することが強く、その場合の位格は、むしろ主格より上位にあってこれを抑える性質をもつとしている。[34]「見ゆ」がこのような文構造を要求する性質を本来もっている語であるとすれば、それは「……終止形」の部分を包みこんで「……には……と見ゆ」という文構造をとりうるわけである。そして、このような「……には」の位格の内容が言語主体そのものに限定されていくところに、概念的な視覚動詞「見ゆ」から視覚的存在判断を表わす判断辞としての「見ゆ」への転換が生じるのである。「終止見ゆ」の用法が、最も陳述性の強い終止形の例に限られていることからも、この場合の「見ゆ」には辞的性質の強いことがわかる。「天の海に雲の波立ち月の船星の林に漕ぎ隠る見ゆ」(万・一〇六八)の例で、実際の情景そのままではなく、歌の作者によって見立てられた情景の叙述を「見ゆ」が承けているのも、「……が見える」のではなく、「……と見える」の意だからである。このような「見ゆ」は「妻立てる見ゆ」のような視覚動詞としての「見ゆ」とは表現の次元を異にしているものである。「終止なり」も、このような「終止見ゆ」の性質に相当するものとして成立したのだと考えるのが妥当であろう。奈良時代における「見ゆ↕なり」の対応も、平安時代には「めり↕なり」の対応に変ってゆくのであるが、この二つの助動詞は、「べし・らむ・らし」とちがって、平安時代に入ってもラ変型活用の語に接続する際に「——るめり・——るなり」ではなく「——ンめり・——ンなり」の形を保持する傾向が強い。

先に掲げた(1)の(イ)(ロ)に属する用例は、すべて現在聴覚にうったえている音によるものではあるが、それは「……の音がしている、……の音が聞こえている」という音の存在そのものを表わす単純な客観的聴覚表現ではない。聴覚に

うったえる音によって、「あの音は……している音なのだ」と、その音の生じる状況を推定しているのであると思う。だから(1)の(イ)の場合でも、音の生ずる情景を直接目にしていない場合に用いられるのである。(2)の用法も、話す声が物理的に聞こえているのではない。他人が話すことによって、自分が直接体験していない事態を間接的に知るに至る伝聞の経過を「なり」が表わしているのだと思う。奈良時代の「終止なり」は現在直接聴覚にうったえている音との関係が非常に強い。けれども、「なり」の承ける状況は、その音だけによって言語主体が心に描いた状況であるという意味で、どんなに確実性が高くても断定ではなくて推定とみる方が適切だと思う。(1)の用法にこのような推定的性質を認めることによって、(2)の間接体験としての伝聞の意味との関連も辿りやすくなる。また、

　荒磯辺に着きて漕がさね杏人の浜を過ぐれば恋しくありなり（万・一六八九）

のような、現在聴覚に直接うったえているものがあるとはとりにくい例も、(2)の中の「現在その言葉を耳で聞いている」場合から「いつか聞いたことがある」場合への転化として位置づけることができると思う。[35]

次に「けり」について述べる。助動詞の「けり」は、動詞「来」と「有り」との結合である、

　筑波嶺を外のみ見つつありかねて雪消の道をなづみ来有かも（万・三八三）

などの、「離れた処から近づいて来て現在ここに居る」意味を表わす「来有」と、おそらく同源のものであろう。『万葉集』の「けり」が「来有」の表記をもつことからも、当時において同源意識があったと推測される。このような空間的性質の「来有」から時間的性質へ転換して、助動詞「けり」が成立する。「けり」は、「いつからとなく過去から継続してきて現在にあることを話手が現在の立場において認識する」意味を基本的性質とするものである。

奈良時代の「けり」の意味には、二つの流れがあるように思う。一つは伝承の「けり」であり、一つは経験の「けり」である。伝承の「けり」は、高橋虫麿の「勝鹿の真間娘子を詠む歌」の冒頭に、典型的な姿をあらわしている。

　鶏が鳴く吾妻の国にいにしへに有りける事と今までに絶えず言ひける葛飾の真間手児奈が……（万・一八〇七）

伝承の「けり」には、「いにしへに・遠き世に」という伝承の事実を伝承的時の流れの中に位置づける「けり」と、その事実が「いにしへゆ人の言ひける」(万・一〇三四)、「今までに絶えず言ひける」というように語り継がれて今に至っていることを表わす「けり」との二つの方向があるように思う。しかし、この二つの方向は、前者が無限に遡行していく過去を志向し[36]、後者が今後も「遠き世に語り継がむ」(万・一八〇九)と永久に伝承されていく未来を予定しているという点で共通の性質をもっている。伝説歌人として著名な虫麿は、先に掲げた伝承歌を「遠き世にありける事を昨日しも見けむが如も思ほゆるかも」と結んでいる。「けり」で語られる伝承の世界での時間は、経験の「けり」の世界における時の流れのように、言語主体に経験として捉えられることによって現実となって終息するものではなく、言語主体の経験を超えて無限に流れてゆくものである。けれども、その世界は、その時々にそれを語り継ぐ人々にとって、自己の経験とは別の次元におけるまぎれもない事実として受けとられていたのだと思われる。

経験の「けり」は、時間的に過去から継続してきて現在にあることを、話手が現在の立場で認識するものであるが、空間的に他者を現在地に迎え取る「来有」との別は、

大夫の高円山に迫めたれば里に下りける鼯鼠そこれ(万・一〇二八)

のように必ずしも分明でない場合がある。

(1)常磐なる石室は今もありけれど住みける人そ常なかりける(万・三〇八)

(2)み吉野の耳我の嶺に時なくそ雪は降りける間なくそ雨は降りける(万・二五)

(3)玉梓の君が使の手折りけるこの秋萩は見れど飽かぬかも(万・二一一一)

のように、(1)過去から現在まで、あるものがずっと存在していること、(2)ある動作がずっと継続していること、(3)ある動作の結果が存続していることを現在において認識するのが最も原義に近い用法といえよう。動詞に「けり」が単独で接続した場合の例にこれら(1)(2)(3)の類の意味が多い。

ここから、何時しか生起していた事柄・状態に言語主体が今になって気づいたことを表わす用法が派生する。この気づきの意味の代表的スタイルは「にけり」型である。「たりけり」「りけり」「形容動詞＋けり」も同類とみてよい。[37]

み立たしの島の荒磯を今見れば生ひざりし草生ひにけるかも(万・一八一)

大夫(ますらを)や片恋せむと嘆けども鬼(しこ)の大夫なほ恋ひにけり(万・一一七)

前者は、草壁皇子の亡き後の島の宮の荒廃を悲しむ歌である。「にけり型」の構成要素である「ぬ」は、動作を言語主体の関与しない(できない)ものとして、成り行き的に捉える形式であった。だから、「ぬ」には思うままにならない事の成り行きを嘆く気持、自然や時の流れを感慨をもって眺める気持などが伴いやすい。そのような「ぬ」で表わされた成り行きを話手の確かな現在経験として認識する「けり」で承けることによって、「ぬ」の感情的意味は主体的にしみじみとした経験となるのである。先に「ぬ・つ」のところでも触れたが、相互承接上「けり」は「つ」に疎く「ぬ」に親密な助動詞である。この事実や、伝承の「けり」における時の流れの捉え方をみても、「けり」によって現在に迎え取られる過去は、その起点の茫漠とした、主体によって明確に捉えられていない(捉えることのできない)ものである。またそこで生起し継続している事柄は、一旦現在に迎え取ったとしても、それは認識するだけで、それに主体が関与することは困難な性質のものであり、結局主体を通り過ぎ、主体を超えてゆくものなのである。

「けり」は動詞以外の用言をも承けるが、形容詞を承ける「かりけり」型は、普通、体験的に「はじめて(改めて)こういうものだと思ひ知らされた」の意味を表わす。

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり(万・七九三)

秋の夜を長しと言へど積りにし恋を尽せば短かくありけり(万・二三〇三)

また、経験を通して「今にして思えばこういうこと(もの、わけ)だったのだ」と納得する意味で用いられている例も多い。指定表現に「けり」の付いた「――は――なりけり」型や、「如(し)かずけり」型、「ずけり」型、「べかりけ

り」型は普通この意味で用いられる。

奈良山の峯なほ霧らふうべしこそ籬が下の雪は消ずけれ(万・二三一六)

今日なれば鼻ひ鼻ひし眉痒み思ひしことは君にしありけり(万・二八〇九)

斯くのみし相思はざらば天雲のよそにそ君はあるべくありける(万・三二五八)

黙然をりて賢しらするは酒飲みて酔泣するになほ如かずけり(万・三五〇)

これらの「けり」のうち、前二例は現状に立って事の次第をふりかえっているものであるが、後二例はこれまでの経験を通してあるべき帰結を導き出しているものである。「かりけり」型以下すべて「にけり」型で代表される気づきの「けり」の変型であるが、「けり」が基本的にもっていた時間的性質が次第に後退していく過程を、各型を通して辿ることができると思う。そして、「けり」が何を承けているかということと「けり」の時間的性質の後退とが、かなりはっきり対応していることも注意すべきである。時間性の強い気づきの「けり」とそれ以下の時間性の弱い「けり」とを分ける線は、助動詞の相互承接の上からは第二グループの動作の様態を表わす助動詞と第三グループの思惟性の強い形容詞性の助動詞「ず・べし・まし・じ」との間に引くことが出来る。つまり、動作性の叙述内容を承ける「けり」は時間性が強い。状態性の叙述内容を「けり」が承けることによって、「けり」の時間性は後退するのである。同じように用言でも、動詞・形容動詞を承ける「けり」は時間性が強く、形容詞・体言なり(たり)を承ける「けり」は時間性が弱いといえる。

いわゆる伝聞の「けり」は、

今聞くに……と謀りけり。又……とも謀りけり。……といひけり。(二九詔)

のような用法をさすが、これは伝承の「けり」が過去から現在への伝聞であったのに対して他者から自身への伝聞である。そこには「けり」における伝聞の様式が時間様式から空間様式へと転換していることが認められる。

以上述べたところから、「終止なり」も「けり」も基本的性質としては現在の時点に立つ判断の様式であるという点で共通しており、その性質は共に存在詞性の活用形式をもつという形態面での一致にも裏付けられていると思う。これらを一応「現時点における状況判断の形式」として一括した所以である。

(2) 特殊活用型のもの ——記憶・回想の形式——

「き」は話手の主体的な経験の連続として捉えられている時間の流れの中に、今とは断ち切られたものとして、過ぎ去った経験を位置づけるはたらきをもつ助動詞である。従って

(1)帰りける人来れりといひしかばほとほと死にき君かと思ひて(万・三七七二)
(2)夜昼といふ別知らずわが恋ふる心はけだし夢に見えきや(万・七一六)
(3)沖つ波高く立つ日に逢へりきと都の人は聞きてけむかも(万・三六七五)
(4)香具山と耳梨山とあひし時立ちて見に来し印南国原(万・一四)

のように、(1)話手自身の経験の位置づけを主な用法とするが、同時的経験の所有者として、(2)聞手の経験を問いかけの形で、(3)第三者の経験を引用の形で位置づけることもある。また(4)話手の経験の域を超えた過去の事柄でも、話手が自己の経験的時間の延長線上の事として捉える場合には、やはり「き」で位置づける。

このように「き」は話手(聞手・第三者)にとって、現在体験としてではなく記憶として確かに辿りうる過去を表わし、非経験の事実をも経験的世界の出来事として経験の系列に位置づけ、話手の記憶の射程内のこととして回想するものである。「き」が客観的な過去を表わすのではなく心内の回想作用を表わすものであるとしたのは山田孝雄であるが[38]、松下大三郎は山田説を承けて、「き」の本質が話手自身の確実な記憶として過去の事を述べるところにあることを説いている[39]。「けり」に担われている時間は、無限定の過去から言語主体の経験の外で流れ続けていたものであっ

た。しかし、「き」は主体の経験の連続の中に位置づけられている過去の時間を担うものとして、主体の経験としての現在に対立するものである。

先にも述べたように、助動詞の相互承接の上で「ゆーぬーけり」と「しむーつーき」は対立する系列であった。このうち、決着の「つ」から記憶回想の「き」への連接「てき」が「き」独自のものであり、「てけり」はほとんど用いられなかったことも、「き」の性質をよく表わしていると思う。また、奈良時代頃までは、「昔」という語は「今」と対峙する関係をもち、過去へ無限に遡行する「古」とは異なる意味で用いられていたと思うが、『万葉集』の歌では、「昔……けり」は用いられず、「昔……き」は用いられているという事実も、「き」における過去の捉え方を表わすものである。このような既経験の記憶↓経験的現在の先には未経験の予想の世界が位置するのであって、「けり」に流れる超主体的時間とは異なる主体的時間の系譜がそこにあるのだと思う。

「き」にはカ行系の「け・き」と、サ行系の「せ・し・しか」との、系列の異なった活用が併存しており、「ず」と共に活用形式の成立過程の複雑さがうかがえる。[40] 否定「ず」の場合は、まだナ行系とザ行系との関係を辿ることができたが、「き」の場合はそれも不明である。また体言化の接尾辞「く」が付いた形も、「水たまる依網の池に蓴繰り延へけく知らに」(応神紀・三六)、「わが背子を何処行かめとさき竹の背向に寝しく今し悔しも」(万・一四一二)のように「けく」「しく」二形あり、「く」の直上の母音が他の「なく」「らく」などのク形の場合のように「ア」ではなく「エ」「イ」になっているのも特異な点である。

「き」は普通連用形に接続するが、「来」「為」には特殊な接続をする。奈良時代には「来し」(万・七九六)、「来しか」(万・三五三一)、「せし」(万・八四五)、「せしか」(万・三八九三)の接続例がみられる。

「き」は、相互承接の面では、各種の用言を承け、上位グループの助動詞にも「べし」を除いてすべてに接続している。平安時代に入れば「べかりーき」の承接例は普通にみられるのであるが、奈良時代では推定のもつ非現実性が、

また「べし」と「き」を疎い関係にしているのだと思う。しかし、全般的にみて「き」の承接範囲は広い。これは、「き」が述語の概念内容を展開させるという意味で叙述内容の構成に参加するものではなく、叙述された事柄を記憶の中に位置づけるもので、事柄の置かれている状況を叙述内容の外から規定するものであることと関係がある。「き」は時を表わす「古・昔・去年・昨日・昨夜」などと対応して用いられることが多いが、時間的に現在に近い「昨夜」では、

　昨夜こそは児ろとさ寝しか雲の上ゆ鳴き行く鶴のま遠く思ほゆ(万・三五二二)
　玉ならば　手に巻き持ちて　衣ならば　脱く時もなく　わが恋ふる　君そ昨夜　夢に見えつる(万・一五〇)

のようにその事態を話手がどう捉えるかによって「つ」と交錯する例がみられる。

(3)　動詞性のもの　――予想・推量の形式――

(4)　形容詞性のもの　――想定の形式――

(3)の「む・らむ・けむ」は、「む」を共通要素とする予想・推量の助動詞である。これに対応するものとして、(4)の「まし(←む)・らし(←らむ)」および「じ(←ず)」がある。(4)のグループの助動詞は、「まし」に問題があるものの、一応形容詞シク活用性の語尾をもっている点で共通している。先にも述べたように、形容詞シク活用に属する語彙は、元来情意を表わす性質のもので、語尾「し」は、ある対象に対して主観的に「……と感じる、……と思う」意味を表わすものであった。このような性質の語尾「し」を接尾させている(4)の助動詞の性質も、従って主観的立場の判断が加わっているものとみることができる。以下、(3)の動詞性助動詞と、(4)の形容詞性助動詞との中で、それぞれ対応している助動詞ごとに、両者を対比させながら検討を加えていきたい。

a　む・まし

「む」は、(1)まだ実現していない動作・作用について予想し(a)、(2)まだ実在していない状態について想像し、(3)事態を仮定的に述べ、(4)判断を断定的でなく蓋然的に、また疑問の余地を残した形で下す時に主として用いられる。

(1)の場合には、主語の人称に応じて意味の変化することがある。すなわち、b一人称の場合は自己の行為について予想するのであるから、意志や希望の意味になるのが普通である。c二人称の場合は話手が聞手の行為を予想するところから勧誘や命令の意味になる場合がかなり多い。

a遠き世に神さびゆかむ行幸処(万・三二二)
b熟田津に船乗りせむと月待てば(万・八)
cいざ児等あへて漕ぎ出む(万・三八八)
cほととぎす他時ゆは今こそ鳴かめ(万・一九四七)

(2)のまだ実在していない状態について想像する意味になるのは、普通形容詞・形容動詞を承ける場合である。

なかなかに死なば安けむ(万・二九四〇)
栲領巾の懸けまく欲しき妹が名をこの勢の山に懸けばいかにあらむ(万・二八五)

(3)の事態を仮定的に述べる意味になるのは、a仮定条件の句を「こそ……め」で承けて反実仮想的な意味を表わす場合や、文中でb連体形の連体法やc準体法に用いられた場合に多い。このような仮定的「む」は、今日では用いられなくなった表現である。dいわゆる反語や婉曲の用法も、この類とみてよい。事柄を仮定的に述べ、それに強い疑いを投げかけて結果的に否定するのが反語であり、断定を避けて仮定的に述べることが婉曲な表現になるのである。

a真澄鏡直目に君を見てばこそ命にむかふわが恋止まめ(万・二九七九)
b洗ひ衣取替川の川淀のよどまむ心思ひかねつも(万・三〇一九)
cわが屋前の花橘の地に散らむ見む(万・一九五四)

d　ささなみの志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも(万・三一)

(4)は「——は——なり」「——なれば——なり」「——なればなり」などの断定的判断を推量的判断にかえる用法であり、次の例のように疑問の助詞と共に用いられることが多い。

隠口の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ(万・四二八)(←いさよふ雲は妹なり)
駒造る土師の志婢麿白くあれば諾欲しからむその黒色を(万・三八四五)(←白くあれば黒色欲し)
吾妹子に恋ふれにかあらむ沖に住む鴨の浮寝の安けくもなし(万・二八〇六)(←恋ふればなり)

このような用法から転じて、現在の事実でもそれが非経験のことであれば「む」で推量する用法があらわれる。

しなが鳥猪名山響に行く水の名のみ縁さえて恋ひつつやあらむ(万・二七〇八、一云)

この段階では「む」と「らむ」とが同じ意味領域をもつことになる。
従って、『万葉集』で「将有」を「あらむ」とよむか「あるらむ」とよむか、

鴨山の岩根し枕けるわれをかも知らにと妹が待ちつつ将有(万・二二三)

の例のように訓の分かれるところである。

「む」には、終止・連体・已然の三形のほかに「わが里に大雪降れり大原の古りにし里に降らまくは後」(万・一〇三)のク形の「まく」があり、頻度数が高い。意味上は(3)の仮定的用法の一類とみることができる。「む」は各種用言に接続し、上位の助動詞にも「べし」を除いては接続している。「べし」との承接も平安時代に入るとみられる。「ぬ・つ」と連接して「なむ・てむ」となる場合に感情的意味が強く出るのは「けり」の場合と同様である。例えば、

大津皇子、被死らしめらゆる時、磐余の池の陂にして涕を流して作りましし御歌一首
ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ(万・四一六)

の「なむ」には動かしがたい運命として、死へ赴かせられる人間の悲哀がこめられていると思う。また、

この時雨いたくな降りそ吾妹子に見せむがために黄葉取りてむ(万・四二二二)

の例では、思う人のために、美しい紅葉の一枚を取って、しっかりと自分の手中におさめたいという切実な願いが、「てむ」で表わされている。

「まし」は「む」に言語主体が「……と思う」意の主観的判断を表わす「し」の添加したもので「「む」と思う」意、つまり「仮想的想定」を表わすものであると思う。「む」よりも用法が限定されており、「む」の(3)に相当する仮定的用法しかないようである。連体形の用法には、

うち靡く春見ましゆは夏草の茂くはあれど今日の楽しさ(万・一七五三)

のような「まし」の主観性があまり感じとれない例も稀にあるが、多くは、

高光るわが日の皇子の万代に国領らさまし島の宮はも(万・一七一)

のように「自分としては……であろうと思っていた(それなのに皇子は亡くなってしまった)」というような主観性のはっきりした用い方である。前の例も、現実としては既に春は過ぎ去っているという状況をふまえて、仮に春見るということを想定しているのであり、その本質に変りはないと思う。「む」が現実とのかかわりを持たず、それに拘束されないのを本質とするのに対し、「まし」はこのように常に現実の状況に立脚した上でもはや現実にはありえないことを想定する。このことが「まし」の本質から結果的に招来されたものか、「まし」は本来このような表現を担うものとして成立したのか、奈良時代の用例から明らかにすることは困難であるが、いずれにしても「まし」が主観的想定であることがこの種の表現を可能にする根源であると考えられる。

「まし」は普通「――ませば――まし」の文型で用いられる反実仮想の助動詞だと考えられている。しかし、奈良時代における「まし」には、いわゆる「――ませば――まし」型の反実仮想の例は、それほど多くない。「――まし」の前提条件を表わす句としては、むしろ「――せば」「――ずは」の方が多く用いられている。また、前提句を伴わ

ない反実仮想の「まし」も、「未然形＋ば」による普通の仮定条件句をも含めた各種の前提句をもつ「まし」と、ほぼ同数位ある。時代的に古い記紀歌謡の「まし」には、「――せば」型が多く、「未然形＋ば」を前提句とするもの、前提句の無いものもあるが、「――ませば」型の例は無い。従って、「――ませば」型は奈良時代としては最も新しい型であろう。「ませば」の「ませ」は、「き」の未然形「せ」に「ば」の付いた「――せば」型を源として「まし」との呼応形として成立したものではないかと思う。形容詞性でない活用形「ませ」の成立をこのように考えれば、平安時代に「き」の已然形からの類推によると思われる「ましか」が成立することも順当に理解できる。

次に、「まし」の用いられる文型の種類を実例に即して検討する。「――まし」の前に前提句の無い場合は、

引田の若栗栖原若くへに率寝てましもの老いにけるかも(記雄略・九三)

葛城の高間の草野早領りて標さましを今そ悔しき(万・一三三七)

のように現実の状態や現在の心情を述べる句の後続することがある。「――せば」という前提句は、ほとんど「まし」と対応し、

一つ松人にありせば太刀佩けましを衣着せましを(記景行・二九)

と現実には反する仮定条件を表わすが、稀には次の例のように、単なる予想の前提句と解釈できる例もある。

わご王皇子の命の天の下領らしめしせば春花の貴からむと望月の満はしけむと天の下四方の人の……思ひたのみて……仰ぎて待つに(万・一六七)

「ずは」については橋本進吉の詳細な研究が知られているが、[41]「――ずは――」型の文は、現実を「ず」で否定して、むしろこうありたいと希望する意味の句が後続する型の文であると私は考える。[42]「――まし」はその後続句の中で最も多用されている型の句であるにすぎない。

かくばかり恋ひつつあらずは石木にもならましものを物思はずして(万・七二二)

などがその例である。

「ませば」は「まし」の呼応形かと先に述べたが、

わが背子(せこ)と二人見ませば幾許(いくばく)かこの降る雪の嬉しからまし(万・一六五八)

のような典型的なもののほかに、

かくばかり恋ひむとかねて知らませば妹をば見ずぞあるべくありける(万・三七三九)

のような対応の例も稀にみえる。「べかりけり」型の叙述は、この時代としては新しい表現の一つであると思う。普通の「未然形+ば」による仮定条件句になれば、

ぬばたまの甲斐の黒駒鞍着せば命死なまし甲斐の黒駒(雄略紀・八一)

国に在らば父とり見まし　家に在らば母とり見まし(万・八八六)

のように「まし」と対応することもあるというにすぎない。要するに、反実仮想の「まし」と前提条件句とを必要以上に堅い結びつきと考えるのは、奈良時代については必ずしも当っているとはいえない。

また、「まし」は反実仮想以外にも用いられる。

十月(かみなづき)雨間(あまま)もおかず降りにせばいづれの里の宿か借らまし(万・三二一四)

のように、「まし」の承ける句の中に疑問の「か」が用いられたり、

大船に戕牁(かし)振り立てて浜清き麻里布の浦にやどりか為(せ)まし(万・三六三二)

のように、「——まし」を疑問の「か」で承ける例がある。

吾妹子(わぎもこ)が形見の衣(ころも)なかりせば何物もてか命継がまし(万・三七三三)

のような反語になる場合は別として、このような疑問の場合の「まし」は反実仮想ではない。この場合の「まし」の意味は、「——か——む」の例、

何処にかわれは宿らむ高島の勝野の原にこの日暮れなば（万・二七五）

と比べるとその性質がよくわかる。すなわち、「か――む」が「宿る」こと自体には迷い・疑いをもたないのに対して、「まし」の場合には「――(しよう)かしら、どう(しよう)かしら」と「宿を借る」「やどりす」という行為について、言語主体が決断を下しかねてためらっている。事態を想定してその決定に迷うのが「まし」である。これは、

神岳の山の黄葉を今日もかも問ひ給はまし明日もかも見し給はまし（万・一五九）

のように、他の行為についていう場合も同様である。「か――まし」にこのような自ら思い迷う意が生じるのも、先に述べた「まし」の主観的判断を表わす性質によると思う。山田孝雄が「ず↕じ」と同じく「む」を断言的、「まし」を遅疑的であるといっているのは、このような「む」と「まし」のちがいを実に的確に言い得ている。[43]

「まし」は自らのことについて用いる場合が多いが、八八頁に掲げた（雄略紀・八一）（万・八八六）や、この頁の（万・一五九）などは他についていう用例である。「まし」には「じ」と同じく語形変化がなく、係助詞「か・や」の結びにも、体言「もの」、助詞「を」に続く場合にも、「まし」の形をとる。已然形を欠くのも、この時期の形容詞性助動詞に共通の現象である。

b らし・らむ

「らし」「らむ」の「ら」の源については諸説があるが、存在の意味を表わす要素であるという点では一致している。「らし」は「らし・らしき」と語形変化し、シク活用形容詞性の語である。「らし」の性質としてまず顕著なのは、現に話手が目に見、耳に聴いている客観的事実aを依り所とすることが多いということである。

〈a梅の花今盛りなり〉百鳥の声の恋しき春来たるらし（万・八三四）

海少女棚無し小舟漕ぎ出らし〈a旅のやどりに楫の音聞こゆ〉（万・九三〇）

この客観的事実を依り所とする性質は、

〈a常止まず通ひし君が使来ず〉今は逢はじとたゆたひぬらし（万・五四二）

のように、その依り所が視聴覚以外の話手の経験にまで拡大されても、なお変らず保たれている。「らし」はこのような客観的事実に基づいて「（だからそれは）……ということなのだと思う」と主観的に現状を想定する意味を表わすものである。「らし」は、その承ける事柄を想定する場合、その内容に対して疑問をさしはさむことをしない。また、「らし」と想定した後に、その想定を疑うこともしない。だから、「らし」の承ける句の中には、「らし」に係る疑問表現の語が使われることもないし、「らし」は終止する時もそれだけで言い切りになることが多く、「らし」の後に疑問の助詞が付くこともない。

吾妹子を行きて早見む〈a淡路島雲居に見えぬ〉家つくらしも（万・三七二〇）

のように詠嘆の「も」が付くだけである。以上を要するに、「らし」は、ある客観的事実を述べ、それに基づいて「らし」の承ける叙述内容を話手が確信をもって想定するところに、その基本的意味形式があるということができよう。そして、それは話手の経験している事実に基づくものであるから、話手の経験にもとづく現状の想定ともいうべきものである。

「らし」の基本的性質に関することとして、「らし」は「ぬ」を承けるが「つ」は承けないという現象がある。

〈b今よりは秋づきぬらし〉〈aあしひきの山松かげにひぐらし鳴きぬ〉（万・三六五五）

これは後述する「らむ」が「ぬ」も「つ」も承けることと比較する時、一層意味のある事実となると思うが、「らし」がa客観的事実によってbそこから当然考えられる事柄を想定するものである以上、aの客観的事実とbの想定内容とを関連づける話手の態度は、論理的・傍観的にならざるをえない。従って想定される側の事柄に、話手にとって不関与の世界を表わす「ぬ」を用いることはありえても、話手が積極的に関与する「つ」を用いることはありにくいのだと思う。

これに対して「らむ」の基本的性質はどのようなものであろうか。「らむ」の構成要素である「む」は非現実の事柄について予想し想像するのを基本的性質とした。これに存在の意の「ら」が添わった「らむ」は、現在の事態について、その事態が話手にとって経験されていないことであるために、「現在おそらく……という事態であるのだろう」と推量する意味である。現在の事態に関する表現であるという点では、「らし」も「らむ」も共通の性質をもつが、「らむ」の推量は「らし」のように客観的事実を依り所としたものではない。

　高円(たかまと)の宮の裾廻(すそみ)の野司に今咲けるらむ女郎花(をみなへし)はも(万・四三一六)

のようにひたすら心の内に描かれる事態を述べて、今そうであろうことを「らむ」で推量するのである。従って、推量している事態の内容についても、あらゆる部分に対して疑問がさしはさまれる。

　夫(つま)かあるらむ……独りか寝(ぬ)らむ(万・一七四二)　いづく行くらむ(万・四三)　漁(あさり)する海人(あま)とや見らむ(万・一二三四)

などのごとくである。

また「らむ」と推量した後にも、

　潮満つらむか(万・三六一〇)　年にありて一夜妹に逢ふ彦星もわれにまさりて思ふらめやも(万・三六五七)

と疑問の助詞「か」を添えて疑い、「やも」と強く疑って、推量している事態の存在を否定する。この点「らし」とは極めて対照的である。

何の根拠もない推量にはこのように絶えず疑問が伴うのであるが、このことは逆に「らむ」の承ける内容が、「らし」の場合のように客観的事実との関連において想定される、相関的・論理的・傍観的なものに限られない、無限定なものであるということにもなる。「らむ」が「ぬ」も「つ」も選ばずに承けるのは、この性質によるものである。

次に「らし」と「らむ」の派生的用法について述べる。「らし」による想定表現の基本的構造は、先に掲げた例、

　〈b今よりは秋づきぬらし〉〈aあしひきの山松かげにひぐらし鳴きぬ〉(万・三六五五)

の如く、客観的事実aと想定内容bとを独立の文で対比的に述べるものである。このab両者を一つの文にまとめ、

〈a今造る久邇の都は山川の清けき〉〈b見ればうべ領らすらし〉(万・一〇三七)

〈b牽牛し嬬迎へ船漕ぎ出らし〉〈a天の河原に霧の立てる〉は(万・一五二七)

のように、aに「見れば」を添えて条件句としたり、「――は――なり」型文の主語としてaを位置づけている例がみえる。これらの例では、想定内容bを「らし」が承ける点は基本的用法の場合と変りはない。ところがさらに、

〔b玉に貫く花橘を乏しみしaこのわが里に来鳴かずある〕らし(万・三九八四)

〔b靫懸くる伴の男広き大伴に国栄えむとa月は照る〕らし(万・一〇八六)

のように「bという事情でaである」ということ全体を「らし」で想定する例もあらわれる。これらの例では、bの想定内容がaの客観的事実に先行するので、「らし」が直接承けるのはaの容観的事実の方である。「らし」は元来客観的事実との関連の上に成り立つ想定表現なのであるから、このような形式が派生することは当然である。ところが、これと類似の用法は「らむ」にもある。

〔bうるはしと吾が思ふ妹を思ひつつ行けばかaもとな行きあしかる〕らむ(万・三七二九)

〔bしましくも独り在り得るものにあれやa島のむろの木離れてある〕らむ(万・三六〇一)

現実の事態aを「らむ」が承けて、その理由が条件句bとして前提されている。しかし、「らし」とちがって条件句bを疑問の助詞「か・や」で承けており、そこに疑問が投げかけられている。さらに、

柔田津に舟乗りせむと聞きしなへ〔b何そもa君が見え来ざる〕らむ(万・三二〇二)

のようにb全体が疑問の句であることや、次のように逆接条件句を前提とし、それを疑問の「か」で承ける例もある。

相思はずあるものをかも菅の根のねもころごろにわが思へるらむ(万・三〇五四)

この点、基本的用法においてみられた「らし」と「らむ」のちがいと全く同様である。これらの「らむ」の用法は、

客観的事実を依り所として想定する「らし」の場合にはありえない所であり、いずれも現実に対する強い不安・不満などが「何故」と疑い問いかける心を起こさせるところに成り立つ表現である。従って、それは客観的に因果関係を述べるところに主眼を置く「らし」の場合とはちがい、何故なのか、もしかすると……ではないのか(万・三〇五四などの場合)と、疑わずにはいられない現実を述べるところに重点が置かれる。

　恋しけく日長きものを逢ふべかる夕だに君が来まさざるらむ(万・二〇三九)

のように現実のみを述べて九二頁に掲げた「うるはしと吾が思ふ妹を思ひつつ行けばかもとな行きあしかるらむ」(万・三七二九)の「——ば」のような理由を表わす条件句を伴わないことがあるのも、この性質によるものである。

「らむ」にはこの外に、その非直接経験的性質から、

　人皆の見らむ松浦の玉島を見ずてやわれは恋ひつつ居らむ(万・八六二)

のような「……だと聞いている」意に用いられる伝聞の場合があり、「らし」には、その想定的性質から、

　大君の継ぎて見すらし高円の野辺見るごとにねのみし泣かゆ(万・四五一〇)

のように、現実に客観的根拠があるわけではないが「きっと……の筈だと思う」意に用いられる場合がある。さらに「らむ」には、次のような、「む」の仮定的用法に対比させることのできる用法もある。ただし、「らむ」の場合は、「む」のような一般的仮定ではなく、「現に……である」ことを仮定するのである。

　天地の極のうらに吾が如く君に恋ふらむ人は実あらじ(万・三七五〇)

「らし」は終止法の外連体法(万・四五一〇)に用いられ、「らしき」は文末で用いられる(推古紀・一〇三)外「こそ」(万・一三)の結びとして用いられる。「らし」「らむ」は、「煮らし」(万・一八七九)、「見らむ」(万・八六三)のように、上一段には連用形「煮」「見」に接続している。防人歌には「恋ひらし」(万・四三二二)の例も見える。大野晋が、連用形は起源的には動詞語幹にiという接辞がついて成立したものであり、そのまま名詞形ともなり、古くは終止形として

も用いられたのではないかとするのによれば、これはその古い終止形に相当すると考えられる。(44)

c　けむ

「けむ」は話手の経験していない事態が、過去に生起し存在したであろうと推量する意を表わすもので、過去と現在とのちがいはあるが、その用法は「らむ」と対照させて理解することができる。

　秋さらば写しもせむとわが蒔きし韓藍の花を誰か採みけむ(万・一三六二)

のように、事態の内容に疑問をさしはさみ、

　帰り来て見むと思ひしわがやどの秋萩薄散りにけむかも(万・三六八一)

のように「けむ」で推量した後に疑問の助詞を添えて疑う。また、次の例のように、過去の事態について、何故そうなったかその事情を推量する。

　葛城の襲津彦真弓荒木にもたのめや君がわが名告りけむ(万・二六三九)

　時時の花は咲けども何すれそ母とふ花の咲き出来ずけむ(万・四三二三)

前の例のように条件句を疑問の助詞で承けること、後の例のように条件句全体が疑問の句である場合もあることなど、すべて「らむ」と同じである。その底には、やはり現実に対する不満や嘆きがこめられている。

また、「けむ」は過去の事態に関する伝聞の場合にも用いられ、「……だったという」の意を表わす。

　古に在りけむ人の倭文幡の帯解きかへて伏屋立て妻問ひしけむ葛飾の真間の手児名が奥つ城をこことは聞けど

(万・四三一)

同じく真間手児名の伝説でも、(万・一八〇八)のように伝承として語る立場の場合は「けり」を使い、この歌のように伝承を伝え聞く立場で述べる場合は「けむ」を用いるのである。

仮定的用法としては、

遠き世にありける事を昨日しも見けむが如も思ほゆるかも(万・一八〇七)

などがみえる。

d じ

「じ」は「む」に対応する否定の助動詞といわれている。しかし、このことの意味はあまり明確ではない。「じ」が、主語一人称の場合、否定的意志を表わすことは「む」と対応した用法とみることもできる。

わが袖は手本とほりて濡れぬとも恋忘れ貝取らずは行かじ(万・三七一一)

など、この種の用例は「じ」の大半を占める。また、二・三人称の主語について用いられる場合に、「む」と対応させて、

〔二人称の主語〕闇夜ならば宜も来まさじ梅の花咲ける月夜に出でまさじとや(万・一四五二)

〔三人称の主語〕若ければ道行き知らじ幣はせむ黄泉の使負ひて通らせ(万・九〇五)

などの例を否定的推量を表わすものとみることもできる。しかし、この種の用例が「ざらむ」と同じ意味であるといえるかどうかは、検討の余地があると思う。それは、「じ」の承ける句の内容に疑問の語が含まれる例が、ほとんど見当らないからである。

ほととぎすまづ鳴く朝開いかにせばわが門過ぎじ語り継ぐまで(万・四四六三)

の家持の歌が「じ」の承ける句の中に疑問が含まれる稀な例である。これに対して「ざらむ」の場合は、

朝に日に見まく欲りするその玉をいかにしてかも手ゆ離れざらむ(万・四〇三)

などをはじめ、数多くの例がある。また、次のような場合にも、「じ」は「ざらむ」とは性質のちがうものと思われる。すなわち、

わが背子に復は逢はじかと思へばか今朝の別れのすべなかりつる(万・五四〇)

などの例における「じか」は「二度とはお逢いしないのではないかしら」というような不安の表現であって、「逢はないのだろうか」という漠然たる予想ではない。「む」と「じ」の対応の例としてよくあげられる、

梅の花咲きて散りなば吾妹子を来むか来じかと吾はまつの木そ(万・一九二二)

などの場合も「来るだろうか、来ないだろうか」ではなくて、「来るだろうか来ないのではないかしら」という不安の気持を下の「待つ」が承けてこそ歌が生きるのである。このような疑問の助詞の付いた場合の意味は、先に述べた「ましや」の意味とむしろ対応するものである。また、憶良の「惑へる情を反さしむる歌」の結びにある、

かにかくに欲しきまにまに然にはあらじか(万・八〇〇)

も、「あらずや」と断定的に言うよりも「あらじか」と主観的にやわらげて「そうではないのかしら」と相手に共感を求めたものと思われる。疑問の「か」と共に用いられる場合は「……ではないのかしら」と疑ったり、反語的に問いかけて肯定へ誘ったりする意になるということができると思う。

これらの点を考え合わせて、先の「ず」と「じ」の対応でも触れたように、「じ」は客観的な否定の「ず」に対して主観的に「「ず」と思う」性質をもち、それが非現実の事態に用いられることによって、主語一人称の場合は否定的意志表現に、主語が二・三人称の場合は、ある事態を否定的なものとして予感し、予測することの表現になったのではないかと思われる。前掲の家持の歌などは、「じ」を「ざらむ」と同じ意味で使った異例に属するといえよう。

以上のように、(3)(4)の助動詞は、非現実、あるいは非経験の世界での事態について予想し、仮定し、推量する「む」の系列(3)と、同じく非現実、非経験の世界での事態について主観的に想定する「し」の系列(4)に二分することができる。「し」の系列には、この外に「らし」の派生形として「らし」に準じた用法をもつ「あらし」「ならし」がある。また「けらし」は「けり」に対応する想定の形式とみるべきものである。

三　平安時代における助動詞相互の承接について

1　相互承接表

平安時代における助動詞相互の承接を表示すると、次のようになる。

表 4　平安時代助動詞の相互承接表

用言および用言相当	動詞　形容詞　形容動詞　体言なり　連体なり　体言タリ
① a	す　さす　る　らる　シム
①	敬語補助動詞
① b	まほし　⊔侍り
②	り　たり　ぬ（⊔まほし）　つ
③	ず・ざり（⊔つ　シム）　べし・べかり（⊔つ　シム）　まじ・まじかり（⊔つ）
④ a	けり　終止なり（⊔つ）　めり（⊔つ）
④ b	き
④ c	む　けむ　らむ　らし　まし　じ

⊔は上にかえる印．「体言タリ」「シム」は主に漢文訓読系で使用．

以下、〔表2〕と対照しながら、奈良時代から平安時代へどのような変遷がみられるか、紙幅の許す範囲で主要なものをとりあげ、検討してみたい。

2　指定表現の変遷

奈良時代から平安時代へ、助動詞は全般的にみれば語彙的にも機能的にも、その表現領域を拡げ、発達していく傾向にあったといえる。その中で、この時代の助動詞の相互承接全般に最も大きな影響を及ぼしたのは、「連体形十なり」(以下、これを「連体なり」という)の成立と盛行である。先に二の4で「体言なり」の成立が日本語の表現領域の拡大に果した役割について触れたが、「連体なり」の成立は、「体言なり」によって形式的に完成された指定表現「……は……なり」の述語の部分を、

　ゆく水に数(かず)かくよりもはかなきは〈思はぬ人を思ふ〉なりけり(古今・五二二)

のように連体形によって体言相当句を作り、述語によって統括された叙述内容相当のものを体言に代置させ得るようになったことを意味するのである。このような「連体なり」は、奈良時代にもすでに稀ながら用例がみえる。家持の、

　春の裏(うち)の楽しき終(をへ)は〈梅の花手(た)折り招(を)きつつ遊ぶ〉にあるべし(万・四一七四)

や、上句の訓に問題があるが、旅人の、

　世のなかの遊びの道にすずしきは〈酔泣(ゑひなき)する〉にあるべかるらし(万・三四七)

などは、その先蹤とみてよいと思う。『万葉集』の中でも、旅人・憶良・家持とその周辺の人々の表現には言葉の機能の推移を敏感に捉えて平安時代への流れを指向するものがあるように思われるが、このような「連体なり」による表現は、音数律の制約を受けない散文の世界で一層発達した。

　人は出でにけるなるべし。(枕・七月ばかりいみじうあつければ)　　なほ負けぬべきなゝめり(源・藤裏葉)

などに、その到達点をみることができる。連体形によって統括されるいわゆる準体句が文中で体言相当に用いられることは、奈良時代においても、

黙然(もだ)をりて賢(さか)しらするは酒飲みて酔泣(ゑひなき)するになほ及(し)かずけり(万・三五〇)

のように決して珍しいことではない。しかし「連体なり」はそれを述語の部分に持ち込み、「なり」の上にも下にも助動詞の連接した複雑な述語部を構成する要(かなめ)の役割を果したのである。北原保雄は「連体なり」が助動詞の相互承接上重要な意味をもつものであるとして、「連体なり」を中心に、それとの相互承接から、平安時代の助動詞を(a)常に「連体なり」に上接するもの、(b)常に「連体なり」に下接するもの、(c)「連体なり」に上接することも下接することもあるもの、に分類した[45]。北原の論はここから更に展開して、独自の構文論に基づいて、助動詞を(a)・(c)を中心とする接尾語(詞的助動詞・有格の助動詞)と、(b)・(c)を中心とする超格の助動詞(辞的助動詞)とに分類するのであるが[46]、ここでは当面の課題に添って、奈良時代から平安時代へかけて生じた助動詞の変遷を検討する際に、その成果を参考にしていくこととする。ともかく「連体なり」の成立によって、用言と第四グループまでの助動詞および「けり・き」の連体形で統括された句は、「(ソレハ)〔餅餤(へいだん)といふ物を二つ並べてつつみたる〕なりけり」(枕・頭の弁の御もとより)のようにすべて指定の助動詞「なり」の素材概念相当のものとなり、指定表現の内容はそれだけ豊かさを増したのである。

これと併せて、「なり」は次のような順接的条件句を承ける語法を発達させた。

間(あひだ)無く恋ふれにかあらむ草枕旅なる君が夢(いめ)にし見ゆる(万・六二一)

また、次のように、引用を示す「……と」を承ける形式も発達させた。

常世辺(とこよへ)にまた帰り来て今のごと逢はむとならばこの篋(くしげ)開くなゆめと(万・一七四〇)

これらは奈良時代にすでに散見するが、平安時代になると、

みやこへと思ふをものの悲しきは帰らぬ人のあればなりけり(土左・十二月二十七日)

のように指定表現の述語部を構成して一つの表現の型を成すに至る。また、「……となり」は、「なり」に直接上接することのない「む」や「じ」で統括された句を、

この障子に向ひて開きたる障子よりあなたに通らむとなりけり(源・椎本)

気色知らせじとなるべし(源・総角)

のように「なり」による指定の対象とする役割を果している。以上のような指定表現の発達は、この時代の和歌・和文の表現にとっても重要な基盤になっていると思う。

3 「まほし」の成立

第一グループの助動詞として、新たに希望を表わす「まほし」が成立する。「まほし」の原形は「見まくほしきを見えぬ君かも」(万・二八〇一)の「まくほし」が makufosi→maufosi→mafosi と変化して成立したのではないかといわれている。「まくほし」は、助動詞「む」の体言化した「まく」に形容詞「欲し」が結合したもので、「見まくの欲しき君」(万・四四四九)のように間に助詞「の」が入ることもある。奈良時代において「欲し」が補助形容詞的に用いられている場合の形式としては、この外にも、「あやに着欲しも」(万・三三五〇)、「見が欲し山」(万・三八二)、「在りが欲し住みよき里」(万・一〇五九)などがある。いずれも動作・存在概念を承けて、「そのようにする(そのようである)ことが望ましい」意を表わしている。ただ、これらの承ける動詞はまだ非常に限られており、用例のほとんどは「見る」につく例である。各形式の中では「まくほし」が比較的多くの種類の動詞を承けているようである。「まほし」の形成は、このような状況の中でなされたと思われるが、和歌系では、『古今集』にはまだ「見まくほしき君」(九〇〇)、「見まくのほしければ」(七五二)の類の例がみえるだけである。『延喜十三年九月九日陽成院歌合』に、「惜秋意」の題で、

したひても留めまほしきは今はとて秋のゆくらむ方ぞしられぬ

とあるのなどは時代の早い例である。『後撰集』になるとかなりの用例がみられる。和文系では『土左日記』『伊勢物語』には用例がなく、『竹取物語』には例がみえる。一〇世紀に入って程なく成立した語であろうか。

活用は、命令形を欠く外は全く形容詞と変るところがなく、補助活用も整っている。ことに、独立の形容詞と同じく、「絵にかかまほしげなり」(源・夕顔)、「きこえうけたまはらまほしさに」(源・椎本)、「ふたこもりせまほしみ」(後撰・八七五)、「まうのぼらまほしがる」(源・若菜下)など、「げ・さ・み・がる」を語幹に接尾させていることから、動詞に「まほし」が接続した単位は、全体でシク活用形容詞相当となるとみてよいと思う。それゆえ、「動詞＋まほし」が述語となる文には、

　経に心をいれてよみ給へるさま、絵にもかかまほし(源・手習)

のように、「かかまほし」と思う対象である「……さま」を主語とするシク活用形容詞文の形式をとるものも勿論ある。しかし、

　心のうちをもへだてなく参りうけたまはらまほしきを(源・若菜上)

のように、「うけたまはらまほし」と思う対象である「心のうち」が、「まほし」の上にくる動詞の目的格として「を」をとる例がかなりある。これは「心のうちを……うけたまはる」こと全体を「まほし」が承けるとみるべき構文であるから、その点現代語の「たい」と比較すれば、上にくる動詞と「まほし」との結合度はゆるいと思う。

相互承接上問題になるのは、「ぬ」との承接である。「まほし」の上で用いられる語のうち、相互承接表で「まほし」より下位にあるものとして「ぬ」があり、次のように「まほし」の上で用いられている。

　げにあぢきなき世に心のゆくわざをしてこそすぐし侍りなまほしけれ(源・少女)

　うちすぎなまほしけれど、あまりはしたなくやと思ひ返して(源・紅葉賀)

ている「すぐ」にも自動詞「すぐす」にも接続しており、奈良時代のような「ぬ」と動詞との密接な対応関係は失われている。このような場合の「ぬ」は、むしろ単なる確認強調の役割を果しているとみるべきである。

「まほし」の成立によって、奈良時代には主に終助詞によっていた希望表現が、活用をもつ助動詞でもなされるようになった。終助詞による希望表現は、話手の希望しか表わせない。また、その希望も文末でしか表わせない。しかしながら、「まほし」は情意性形容詞相当の単位を構成するはたらきをもつ。従って、話手の希望は勿論、聞手や第三者の希望についても表現することができる。また、その希望表現を、叙述内容の中に位置づける場合にも、活用することによって一層自由に位置づけることができるようになったのである。

先に掲げた例は話手の希望を表わすものであるが、

〔聞手の希望〕大宮も「……そのほかに〔アナタガ〕たづねまほしくおぼさるる人あらばまいらせて……」ときこえ給へど（源・総角）

〔第三者の希望〕ものの情知らぬ山賤も花の陰にはなほやすらはまほしきにや（源・夕顔）

などの例もある。これらはいずれも当事者自身の行為に関する希望であるが、稀には、他のものに対してこうあってほしいと願う例もある。

花といはばかくこそにほはまほしけれな（源・若菜上）

しかし、平安時代においては、これは一般的用法とはなっていない。

4　「ぬ」「つ」の性質の変化

奈良時代における「ぬ」「つ」は、上接する動詞の表わす動作の性質との関係が深く、その動作を「ぬ」は成り行

きとして、「つ」は決着として捉えるものであった。従って、動詞や、動作の行われ方に関する助動詞以外を承けることは、ほとんど無かった。平安時代に入ると、次第に「ぬ」「つ」はその性質を変え、単なる確認判断あるいは強調の用法へと転じていく。この点を、用言および助動詞との相互承接の面から明らかにしたい。

「ぬ」は平安時代に入ると、動詞の外に、形容詞カリ活用、形容動詞、「体言なり」にも下接する。また、第二グループのうちの存在詞性の助動詞「り・たり」の下にも付くことがある。このように存在詞性の語の下に「ぬ」が付くことは、奈良時代には全くみられなかったことである。ところが、「ぬ」がこれらの語に接続する場合についてみると、「ぬ」は単独ではこれらの語に接続することが無い。

ひきこめられなむは、からかりなまし(源・末摘花)

親としつべき御手より弾き取り給へらむは、心ことなりなむかし(源・常夏)

女宮たちのあまた残りとどまる行く先を思ひやるなん、さらぬ別れにもほだしなりぬべかりける(源・若菜上)

この御方々の、すげなくし給はむには、殿のうちには立てりなむや(源・常夏)

かの家にも、隠ろへては据ゑたりぬべけれど(源・東屋)

などのように、常に「なまし・なむ・ぬべし」など助動詞が下に連接する形で用いられている。これらの助動詞は、想定・予想・推定などの主観的判断を表わすもので、従ってこの場合の「ぬ」は、それらの主観的判断の確かさを強調する役割を果しているとみるべきである。このような、相互承接の順序の変化は、そのままこの時代に入っての「ぬ」の意味の変化に相応しているわけである。

「つ」は、奈良時代においても、「今朝の別れのすべなかりつる」のように、既に形容詞に下接したが(六〇頁参照)、平安時代に入ると、「あはれなりつる事」(源・桐壺)、「さて絶えなむとは思はぬ気色なりつるを」(源・花宴)のように形容動詞や「体言なり」にも接続するようになる。また、助動詞のうち、相互承接の順位としては普通下位にある「ざ

り・べかり・まじかり・終止なり・めり」の下で用いられることがある。このように「つ」の上にくる助動詞の範囲は、奈良時代に比べて大幅に拡大されている。また、平安時代における「ぬ」と比べても、同様に上接する助動詞の範囲は広いといえる。しかも、内容的にみて、「べかり・まじかり・終止なり・めり」などの終止形に接続する助動詞つまり終止した叙述内容を承ける助動詞の下に「つ」が付くようになった。これは「つ」の意味が奈良時代の「動作の決着」を表わすものから、「話手の確認判断」を表わすものへと変化したことを前提としなければ、理解できない現象である。

また、これらの助動詞の下で用いられる「つ」の活用形は、「つ・つる・つれ」に限られており、その場合「つ」の下にくる助動詞は「らむ」のみに限られてしまう。例えば、

かかる姿の人見えざりつ(枕・あはれなるもの)　いときなくものの心しろしめすまじかりつるほど(源・薄雲)

大納言の君、小宰相の君にもののたまはんとにこそははべゝめりつれ(源・蜻蛉)

などかはかく定かに思ひ知り給ひけることを今までは告げ給はざりつらむ(源・明石)

のごとくである。このような「つ」は、活用形の完備している第二グループの助動詞というよりも、活用形の欠如が目立つ第四グループの助動詞の性質にむしろ近いといえる。この意味においても、「つ」は、単なる確認判断を表わすものとみるべきである。

以上のように「ぬ」「つ」は平安時代に入って、単なる確認判断や、判断強調の用法をもつに至ったとみることができる。このことは、「ぬ」に下接している「まし・む・べし」や、「つ」に上接している「ざり・べかり・まじかり・終止なり・めり」の側からみれば、これらの判断に対する確かさの強調や確認などという話手の志向を表現する手段を得たことになる。平安時代に入ると、推量系統の助動詞が発達してくるが、推量を表わす「べし・まじ・終止なり・めり」が「ぬ」「つ」のこのような用法の発達によって得た表現効果は、極めて大きいと思われる。

5 「まじ」の成立と平安時代の「べし」

「まじ」は、奈良時代の「ましじ」が音韻変化によって成立したものと思われる。「ましじ」はシク活用形容詞性のものではあったけれども、活用形式も未発達のまま衰退した。しかし、これに代った「まじ」は、シク活用系活用も補助活用としてのカリ活用系活用も整い、「べし」に対応する否定の形式として、この時代に盛んに用いられた。しかし、本質的な点においては、「ましじ」と変るところはない。「まじ」で否定する形式をもつものは、三種類の用言と「す・さす」「る・らる」「り・たり」などの助動詞である。これは、奈良時代の否定表現の性質と全く一致する。「まじ」は補助活用を発達させたので、他の助動詞を下接させるが、その範囲は「けり・終止なり・めり・つ・き・連体なり」などで、広い意味での話手の確認判断を表わす系列の助動詞である。「まじ」は、意味の面では、「べし」と共に、平安時代に入ると、話手自身の意志や、話手の聞手に対する意向を表わす用法がみられるようになる。

〔意志〕親王(みこ)となり給ひなば世の疑ひ負ひ給ひぬべくものし給へば、……源氏になし奉るべく思し掟てたり(源・桐壺)

〔勧誘〕あやしきことなれど、幼き御後見(うしろみ)に思すべくきこえ給ひてんや(源・若紫)

〔命令〕むつましう思す修理(すり)の宰相を、くはしくつかうまつるべくのたまひて(源・絵合)

〔否定的意志〕大人(おとな)しく見なしては、ほかへもさらにいくまじ(源・紅葉賀)

〔禁止〕いと親しき人さしそへ給ひて、ゆめもらすまじく口かため給ひて遣はす(源・澪標)

奈良時代における「べし」は、先にも述べたように、経験や論理や道理の上から、(1)事の成り行きの必然性を予測し、(2)論理としての当然性・妥当性を推論し、(3)事の可能性を推測するのを主な用法とした。「ましじ」はそれに対応する否定の形式であった。これらは、いずれも客観的に事の運びを推定するものである。ただし、奈良時代にも、

「べし」には既に、

剣大刀いよよ研ぐべし古ゆ清けく負ひて来にしその名そ(万・四四六七)

のように、事の必要性を述べる、主観性を帯びた用法もあった。しかし、平安時代に入ると、奈良時代における「べし」「まじ」の用法の外に、先に掲げた話手の意志や意向を表わす主観性の強い用法があらわれたのである。

「べし」の場合は、これに加えて、次のように単なる推量を表わす意味でも用いられるようになった。

一日の花なるべし、枯れてまじれり(源・葵)　人は心づきなしと思ひ置き給ふ事もあらむに、我は今すこし思ひ乱るる事のまさるべきをあいなしと、心づよく思すなるべし(源・賢木)

「べし」が「体言なり」や「連体なり」の下に用いられる場合には、「べし」は普通この意味になる。この用法は、物語などにおいて、客観的な叙述の流れを、一時的に(葵の例)、または最終的に(賢木の例)、語り手の推量の世界へと持ちこむ役割を果している。ことに、「賢木」の巻の例は、ある事柄の叙述を「……と思すなる」のように「連体なり」の連体形「なる」で承け、そのような事柄全体に対する話手の推量を、「――なるべし」と「べし」で表わしているのである。平安時代に入って「連体なり」は盛んに用いられるようになった。この「連体なり」に下接する助動詞は、「べし・めり・終止なり・む・けむ・らむ」などの、広い意味での推量系の助動詞群によって大半が占められており、北原保雄のいうように、「文相当の単位によって表現される事象・事態についての言語主体の把握・認識の仕方を表現する」[47]ものである。「賢木」の例のような「――なるべし」型の構文をはじめとして、「連体なり」に推量系の助動詞が下接した文構造が、この時代の「語る文章」において果している役割については、今後、なお十分に検討される必要があると思うが、紙幅の関係で本稿では省略せざるをえない。

「まじ」は「べし」とちがって「連体なり」に下接することは普通無かった。意味の面でも、「まじ」は「べし」ほど主観性の強い用法を派生させてはいない。しかし、全般的にみて、平安時代の「べし」「まじ」は推定表現から

推量・意志表現へと、話手の主観的表現としての性格を強めていったということができる。

6 「めり」の成立と平安時代の「終止なり」

先に述べたように、奈良時代における「終止なり」に対応するものは、「妻立てり見ゆ」などのような「……終止形、見ゆ」形式の表現であった。平安時代に入って、これに代る「終止めり」が成立する。

乎久佐壮子と乎具佐助丁と潮舟の並べて見れば乎具佐勝ちめり〔馬利〕(万・三四五〇)

東歌にただ一つみえるこの例が、「めり」の先蹤であろうと大野晋はいう。[48] 四段活用の連用形に「めり」が接続していること、東国方言の孤例であることに問題が残る。大野は、「馬利」の「馬」が万葉仮名のエ列甲類に属する文字であるところから、「見十あり」が、mi+ari→meri となったものとみている。

「めり」の平安初期の例は、

竜田河紅葉乱れて流るめりわたらば錦なかや絶えなむ(古今・二八三)

のように動詞を直接承けることが多い。その動詞も視覚的に捉えうる現象を概念内容としている。また、助動詞の中では「ぬ」が「めり」の上で用いられる程度である。

睦言もまだ尽きなくに明けぬめりいづらは秋の長してふ夜は(古今・一〇一五)

このような状態は、奈良時代の聴覚的現象に対して用いられた「終止なり」にほぼ対応するものである。「めり」も成立期においては、視覚的現象に対して用いられることがほとんどであったとみられる。「めり」は、このような視覚的現象について述べた叙述内容を承けて、「自分には……の情景だと見える」と、主観的に状況を判断しているのだと思う。これは、視覚的現象を、そのまま直写するのではなく、話手の主観的視野の内の事象として捉える点で、断定を避けた婉曲な表現としての趣きも生じるのである。

しかし、平安時代も中期に入ると、「めり」も視覚的現象以外の概念内容をもつ動詞や形容詞・形容動詞、さらに「体言なり」「連体なり」などの下について用いられるようになる。助動詞も、動詞につく助動詞だけでなく、各種用言につく第三グループの助動詞「ず・べし・まじ」までに位置するものを承けるようになる。そして、このような変化は、「終止なり」についても同様に起こっているとみることができる。このことは、「めり」や「終止なり」が本来もっていた視覚性・聴覚性の後退を示すものである。

そのかみ思ひ侍りしやう「かうあながちに従ひ怖ぢたる人なゝめり……」(源・帚木) 母君「……この君は人がらもめやすかゝなり。心さだまりて、物おもひしりぬべかゝなるを、人もあてなりや。……」と思ひて(源・東屋)

などの例を見れば、「めり」と「なり」を交換しても差支えないほど、両者共に単なる推定判断を表わす語に変化していることがわかると思う。

「めり」「終止なり」共に、下には確認判断的「つ」と、記憶・回想の「き」が接続するだけである。「めり」「終止なり」の上にくる助動詞は、相互承接表で上位にあるもののほとんど総てである。ただし、「めり」も「終止なり」も、共に「つ」の下に直接ついて「つめり」「つなり」として用いられることは普通にはないようである。これは、先に述べたように「らし」にも見られた現象である。このことを考え合わせると、「めり」「終止なり」の場合も、これらの助動詞が、その承ける叙述内容に対して、客観的・傍観的に推定するものである為に「つ」を承けないのであろうと思われる。「つ」は、相互承接上の本来の位置で用いられる場合、「暮らしつ」のように動詞を承け、その動作がすでに決着のついたものであると話手が認めることを表わした。これは「ぬ」の動作の成り行きを傍観的に眺める姿勢とは極めて対照的である。「めり」「終止なり」が「ぬ」を承けること多く、「つ」を承けることが無いのは、このような「つ」「ぬ」の性質と「めり」「終止なり」の性質との相関関係からみれば、当然のことと思われる。

本稿の分担範囲は、奈良・平安時代の助動詞であった。しかし、平安時代については、紙幅の関係で、極めて粗略

な記述しかできなかった。ことに、物語文における「けり」について、手短かに述べることができないために全く触れられなかったのは遺憾である。また、平安時代の漢文訓読語系統の文献における助動詞にも言及することができなかった。これについては、注の末尾に掲げた文献を参考していただきたい。(49)

(1) 山田孝雄『奈良朝文法史』宝文館、一九五四年、三三一—三四九頁。同『平安朝文法史』宝文館、一九五二年、二一一—二三七頁。
(2) 橋本進吉『助詞・助動詞の研究』著作集8、岩波書店、一九六九年、二五一—二五八頁。
(3) 完了の助動詞「り」の接続については注2、二六〇頁では「已然形・未然形」説、三五〇頁では「命令形・未然形」説であるが、今「連用形十あり」説に拠って完了の助動詞はすべて連用形接続として扱った。
(4) 橋本進吉『国語法研究』著作集2、岩波書店、一九四八年、一三一—一八六頁。
(5) 橋本進吉『国文法体系論』著作集7、岩波書店、一九五九年。
(6) 助動詞の相互承接について述べている主な文献を以下に掲げる。芳賀矢一『中等教科明治文典』冨山房、一九〇四年。三矢重松『高等日本文法』明治書院、一九〇八年。徳田浄『国語法査説』文学社、一九三六年。金田一春彦「不変化助動詞の本質上・下・再論」(『国語国文』二二巻二・三・九号、一九五三年)。阪倉篤義『語構成の研究』角川書店、一九六六年。大野晋「日本人の思考と述語様式」(『文学』三六巻二号、一九六八年)。渡辺実『国語構文論』塙書房、一九七一年。北原保雄「「あり」の構文的機能について論じ、助動詞の構文論的考察に及ぶ」(『和光大学人文学部紀要』六号、一九七一年)。
(7) 阪倉篤義『語構成の研究』(前掲)三〇五頁。同上、一三四頁以下。
(8) 橋本進吉『助詞・助動詞の研究』(前掲)二八二頁以下。
(9) 和田利政「「す」の研究」(『国文学』四巻二号、一九五八年)四八頁で「誘発」としているのはこれに近い。
(10) 大野晋「ク語法ということ」(『万葉集一』日本古典文学大系、岩波書店、一九五七年、五七頁以下)。
(11) 平安時代には、本来自発動詞である「見ゆ」に「をさな心地にも、はかなき花紅葉につけても、〔藤壺に〕心ざしを見え奉り」(源・桐壺)のような、「見す」に通じる例がある。また、中世には、「上総太郎判官が射ける矢に、源大夫判官内甲を射させ

てひるむ処に」(平家・四)のような、「射らる」に通じる「射さす」の例がある。使役と受身にこのような相関関係があること は、受身も使役も、例えば「見ゆ」は「見ることのできる状態にする」、「射さす」は「射ることのできる状態にする」という 点で共通する面があるからだと思う。

(12) 春日和男『存在詞に関する研究』風間書房、一九六八年、二三九頁。

(13) 大野晋「万葉時代の音韻」(『万葉集大成 6』平凡社、一九五五年)三二八頁。『岩波古語辞典』基本助動詞解説。

(14) 「り」の接続、活用形の起源に関する主な文献を以下に掲げる。阪倉篤義、前掲書、第二篇第三章。春日和男、前掲書、 第一編第二章第一節。浜田敦「助動詞」(『万葉集大成』6)。大野晋「日本語の動詞の活用形の起源について」(『国語と国文学』 三〇巻六号、一九五三年)。

(15) 宮田和一郎「助動詞「つ」「ぬ」の論」(『平安文学研究』三〇号、一九六三年)。

(16) 大野晋「古典語の助動詞と助詞」(『時代別作品別解釈文法』至文堂、一九五五年)。

(17) 井手至「古代日本語動詞の意味類型と助動詞ツ・ヌの使いわけ」(『遠藤博士還暦記念国語学論集』中央図書出版社、一九 六六年)。

(18) 長船省吾「助動詞「つ」と「ぬ」――アスペクトの観点から――」(『国語国文』二八巻一二号、一九五九年)。

(19) 春日和男、前掲書、二六七頁以下。

(20) 松下大三郎『改撰標準日本文法』紀元社、一九二八年、二五〇―二五四頁。

(21) 春日和男、前掲書、一五一頁以下。

(22) 中田祝夫「日本語の助動詞の役割――断定――」(『解釈と鑑賞』三三巻一二号、一九六八年)一一六頁。

(23) 奈良時代の形容詞には、「逢はずして行かば惜しけむ」(万・三五五八)、「妹に恋ひつつすべ無けなくに」(万・三七四三)の ように未然形に「―ケ・―シケ」の形があり、助動詞「む・ず」に接する。

(24) 「まじ」は他の助動詞を下接させていない。しかし、「べし」との対応を考え、平安時代の「まじ」の用法を考慮に入れ て第三グループに所属させた。

(25) 山田孝雄『日本文法論』宝文館、一九〇八年、七八八頁以下。

(26) 過去の助動詞でも、カ行系の「け・き」には「ず」から続く例があるが、サ行系の「せ・し・しか」には「ざり」から続

いた例しかみえない。

(27) 山田孝雄『奈良朝文法史』(前掲)二七四頁。

(28) 山本俊英「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相異について」(『国語学』二三輯、一九五五年)。

(29) 松下大三郎、前掲書、四一八頁。

(30) 阪倉篤義、前掲書、三七九頁以下。

(31) 春日和男、前掲書、一八二頁以下。

(32) 北原保雄「〈なり〉と〈見ゆ〉——上代の用例に見えるいわゆる終止形承接の意味するもの——」(『国語学』六一輯、一九六五年)。

(33) 北原保雄「〈らむ〉〈らし〉の成立——複述語構文の崩壊——」(『言語と文芸』四三号、一九六五年)。

(34) 三上章『現代語法序説』刀江書院、一九五三年、一〇七頁以下。

(35) この歌「杏人」に定訓がないが、「恋布在奈利」は「なり」が「形容詞十あり」を承けている例の唯一のものとして重要である。

(36) 「き」八二頁参照。

(37) 「たりけり」型は「夏の野にわが見し草は黄葉ちたりけり」(万・四二六八)、「妹もわれも千歳のごとくたのみたりける」(万・四七〇)などのように用いられており、「にけり」型に準ずるものとみてよい。「石竹花は秋咲くものを君が家の雪の巌に咲けりけるかも」(万・四二三一)、「山吹の咲きたる野辺のつぼすみれこの春の雨に盛りなりけり」(万・一四四四)のような「りけり」「形容動詞けり」型も同様に考えてよいと思う。

(38) 山田孝雄『日本文法論』(前掲)四〇九頁。

(39) 松下大三郎、前掲書、四三八頁以下。

(40) 未然形には「根白の白腕枕かずけばこそ知らずとも言はめ」(記・六一)、「十月雨間もおかず降りにせばいづれの里の宿か借らまし」(万・三二一四)の「け」「せ」二形がある。

(41) 橋本進吉「奈良朝語法研究の中から」「上代の国語に於ける一種の「ずは」について」(『上代語の研究』著作集5、岩波書店、一九五一年)。

(42) 橋本進吉は、「たちしなふ君が姿を忘れずは世の限りにや恋ひわたりなむ」(万・四四四一)の「ずは」が、従来の解釈「(忘れ)んよりは」では解けず、「(忘れ)ずして」と解釈すべきことに注目して、宣長が「んよりは」の意と解した一種の「ずは」はすべて「ず」または「ずして」と解釈すべきであるとした。しかし、この例は、上総国朝集使大原真人今城が京に向かって出発する時、郡司の妻女等がよんだ餞(はなむけ)の歌である。私は、この歌を「世間では去っていった人のことは忘れてしまうのが普通でしょうけれど、私たちは去っていかれる貴方のことを忘れないで、むしろ云々」と解釈する。従って、この歌も現状を否定して、「それよりはむしろ……」と希望し予想する意のものとして、他の諸例と同様に扱うことができると思う。

(43) 山田孝雄『日本文法論』(前掲)四五八頁。

(44) 大野晋「万葉時代の音韻」(前掲)三一八頁。

(45) 北原保雄「中古の助動詞の分類」(『和光大学人文学部紀要 3』一九六八年)。

(46) 北原保雄、注6論文参照。

(47) 北原保雄、注45論文参照。

(48) 大野晋『万葉集 三』補注、日本古典文学大系、岩波書店、一九六〇年。

(49) 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会、一九六三年。同『平安時代語新論』東京大学出版会、一九六九年。

3 助動詞 (2)

山口明穂

一　鎌倉・室町時代における助動詞の大要

二　第一類の助動詞

1　「す」「さす」・

2　「る」「らる」

三　第二類の助動詞

四　第三類の助動詞

1　「た」の一般化

2　過去の意識

3　「つ」「ぬ」の問題

4　時の感覚

5　助動詞の重ね合わされた表現

五　第四類の助動詞

1　打消と推量、打消と過去、過去と推量のとらえ方

2　推量の助動詞

3　打消の助動詞

一 鎌倉・室町時代における助動詞の大要

日本語の近代語化の時期は、鎌倉時代から室町時代にかけての約四〇〇年の間に置かれる場合が最も多い。それをさらに狭く区切って、いつと定めようとすれば、近代語化したという判定の基準が人によって異なるなど問題となるのであるが、助動詞の面について見ても、この時期の末になると、現代語にかなり近い言い方のされているのが認められる。

平安時代に使われていた助動詞のうちで、「き」「けり」「らし」「けむ」等を始めとして、かなり多くの語が姿を消して行くが、その中では、例えば「けむ」の消えたあとに「たらう」「つらう」という、新しい形の語が使われることもあれば、「き」の消えたあとに「過去の時を表す語……た」という言い方が見られるようになるということもある。

本項では、この、日本語の近代語化という時期における助動詞の変容を追究する作業を、やや時期を広げ、江戸時代初期のものをも含めて行おうとするものである。

まず、作業を、この時期の助動詞の概略を把握する意味で、前項の記述を承け、助動詞相互の承接の関係を眺めるという所から始めてみたい。

ここに二つの表を提示するが、表1は、鎌倉時代初期から室町時代初期にかけての助動詞の承接関係を示したものである。この作製にあたっては、『無名草子』『松浦宮物語』といったものから、『徒然草』『平家物語』といったものまでが中心になっている。表2は、室町時代末期の、天草本『平家物語』、天草本『伊曾保物語』といった、いわゆ

る口語的性格の強いものを中心にして作製してある。

表 1　鎌倉時代初期から室町時代初期の助動詞の承接

類	助動詞
第一類	す　さす　る　らる　しむ
第二類	ぬ
第三類	たり　まほしかり　べかり　ざり
第四類	つ
第五類	む　むず　らむ　けむ　まし　べし　まほし　たし　なり　き　けり　ず　じ　まじ
別類	なり　たり

表 2　室町時代末期の助動詞の承接

類	助動詞
第一類	せる　させる　れる　られる
第二類	たい
第三類	た
第四類	う　うず　らう　つらう　やうな　さうな
別類	なり　であ　ぢや

ぬ(打消) まい まじい なんだ

二つの表を比較して大きく変わったと見られる点は、表2において、第三類に「た」があって、いわゆる時の助動詞が、この一語になるということである。その他、前表に見られたいくつかの語が消え、また、見られなかった語がいくつか見出されるということもあるが、この間の時の隔たりを考えれば当然なことと言える。

この時期には、前時代には助動詞であった語が、ただ形だけ残って使われるという場合もあるが、この表には、そのような一般性を失ったと考えられる助動詞は含まれていない。文献の上で例があるにもかかわらず、この表に現われない語の出て来るのはそのためである。

以下、この表2を基にして、各類の助動詞につき検討を進めることにする。

二 第一類の助動詞

1 「す」「さす」

「す」「さす」「る」「らる」の四語は、動詞下二段型の活用から、動詞下一段型の活用へと、活用の形式が変化して行く。これは、これらの語に限ってあることではなく、この時期に二段活用の一段化と呼ばれる現象があって、その一般的な傾向の一つとしてあったことである。

この四語の中では、「す」「さす」が「らる」の上に来る(この場合「る」は使われない)のが一般であるが、稀に「る」「らる」が「さす」の上に使われる(この場合も「す」は使われない)こともある。ただし、これは、「さす」が「給ふ」もしくは「らる」に続いて敬譲の機能を果す場合に限られる。その意味では、例えば表2では「まらす」をも含めるなどして、第二類にこれらの敬譲関係の枠を設けることも考えられるのであるが、本講座には敬語を取り扱う巻が別に用意されていることでもあるので、それに譲り、ここでは注記的に触れるだけにとどめたい。

平安時代には第一類の助動詞として「しむ」の語があったが、この時期には一般性を失う。「しむ」は、平安時代に漢文訓読語的性格を有する語であったが、この時期の文献では、漢文的性格を顕著に示す『平家物語』に使われたのは当然として、その他『宇治拾遺物語』や『徒然草』などの作品にもかなりの量の例が見られる。

天草本『伊曾保物語』には、

　驢馬が立ち留つて言ふは、「……」と恥ぢしめて過ぎた

という例が見られるが、これが同書に見られる唯一例であること、『日葡辞書』にも、Fagixime, -uru, -eta とこの形で項目が立てられていることなどから言って、「恥ぢしめ」という形で一語の動詞としての認識があったと考えられる。

鎌倉時代には「しむ」に使役を表す「せ」を重ねて「——せしむ」と使われた例も見られる。

　頓に涅槃を悟ることを得せしめ(日蓮『開目抄』)

　后呂太后、良医を迎へて見せしむるに(『平家物語』巻三「医師問答」)

すでに平安時代に「——さしむ」という形で使われていた訳であるが、右の「せしむ」は、「す」もしくは「しむ」と言った場合と同じ機能を果したと考えられる。ただし、使役の表現としては「す・さす」が一般的であったことを基に右の例を見ると、「しむ」には使役の意が弱くなったと言える。しかし、見方を変えて、「せしむ」と「す」に補われているとは言え、使役の文脈で使われていることから考えると、「しむ」を使役の意に結びつける感覚は残ってい

たということになる。一条兼良は、『伊勢物語愚見抄』の中で、

こさせけりは来らしむると云詞なり

と、「さす」の使役の意を「しむ」によって説明している。これは取りも直さず「しむ」に使役の意に結びつくものの残っていた証左である。

「す」「さす」が使役の意で使われることに前代と大差ないが、その中で次のように受身の意に使われたことがよく知られている。

桑原、安藤二かけ出て、悪七別当にくつけ射させて落ちにけり(『保元物語』中「白河殿攻め落す事」)

須藤刑部俊通は、六条河原にて子息うたせ、うち死せんと思ひけれども(『平治物語』中「義朝敗北の事」)

受身で表すべき部分に使役の「す」「さす」の使われた例であるが、これは軍記物特有の表現であって、相手に勝つことを旨とする武士が、受身の言い方に満足せず用いた言い方に基づいたものと言える。武士の好みに関連していることはもちろんであるが、

一の矢を射させて試みんとて(『保元物語』中「白河殿へ義朝夜討ち」)

船も漕ぎかくれ、日も暮るれども、あやしの臥しどへも帰らず、浪に足うちあらはせて、露にしをれて(『平家物語』巻三「足摺」)

のような使役の言い方があり、これを展開させて先の言い方ができたものであろう。

なお、受身の意に使われる「す」「さす」は、軍記物以外に、天草本『伊曾保物語』に、

散々に切り立てられ、精兵数多討たせ

のような例があるが、これも軍記物の表現に連続したものであることは文脈の上から言って間違いない。

2 「る」「らる」

(1) 可能の表現

かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに（『徒然草』第一一段）

家の作りやうは、夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まる（同第五五段）

右の例は、可能の意に解される「る」の例である。「る」「らる」の二語が可能の意に使われるのは前代から見られたことではあるが、そこでは打消の意を含んで使われるのが一般であった。つまり、可能というよりも、不可能という意味で使われていたことになる。延慶本『平家物語』での用法について、山田孝雄は、「いづれも下に打消の助動詞を伴ふもののみなり。かくて、可能の意ある場合の「ル」「ラル」の例はかく打消の助動詞を伴ふもののみなるは注意すべき現象なり。」[1]と述べている。鎌倉時代においても、平安時代までと同様に、不可能の意味で使われる傾向が強かったと言える。『徒然草』でも、打消を伴った、不可能の意味の例が圧倒的に多いのであるが、そのような中で、打消を伴わない、つまり可能の意味で使われている右の例は注目に値する。

頸に掛けたる経袋より、冊子経取り出でて読みゐたれば、「暗うてはいかに」などあれば、「今は口なれて、夜もたどるたどるは読まれ侍る」（『無名草子』序）

この例は、可能を表す意に解されることが多い。ただし、この例は、主語「法華経」を想定し受身に解することもできる。先の例のように、可能以外に解しようもないのとはやや異なっている。『無名草子』以前にも、このように、打消を伴わず、可能に通ずるかと見られる例が時に見られることもあるが、それは、あくまで通ずるかどうかという段階のものであり、可能と言い切れるものではない。

「る」「らる」が可能の意で使われる場合、打消の意を伴うのが一般であったというのは、「る」「らる」を通しては、「できる」という考え方をせず、「できない」と考えるのが一般的であったということにほかならない。延慶本『平家物語』の場合も、すべての用例が打消を伴っていたというのは、偶然そのような結果になったということもあり得るが、この書の著者が、「できる」という考えをしなかったということになるのである。『徒然草』の場合も、打消を伴った例が多いわけであるが、それは兼好法師の考えが、「できる」という方向になかなか進まなかったからということになる。その中で、先の例があるのは、そのケースは少なかったにしろ、そのように考える機会もあったことを示している。

一般に、肯定の場合に限らず、打消の場合も、現代語であれば可能の語を入れてしかるべき文脈で、古語ではそれを用いないことがある。佐伯梅友は、『古今和歌集』の例を検討し、古語のそのような傾向を、結果的な面をことばとして出すものだとしている。[2] ただし、それについての検討は本項の範囲を逸脱するので避けたいが、これに関することとして、『古今和歌集』の、

白雲のたえずたなびく峯にだに住めば住みぬる世にこそありけれ(「雑下」九四五、惟喬親王)

の歌が、北村季吟の『八代集抄』では、

雲の絶ぬ峯にも住みてみれば、住まるる世にてありと也。

と解釈された例がある。歌の「住めば住みぬる世」という表現が、「住みてみれば住まるる世」と、もとの表現「住み(動詞)ぬる(完了の助動詞)」にはない、可能を表す語「るる」を補った解釈になっている。ちなみに、この歌は現代語に解釈した場合も、「住んでみれば住める」のように可能の意に解するのが一般である。

『八代集抄』において、可能の意を補って解釈した例は、右に限らず他にも数例見られる(九〇〇、九三九、一〇二五等)が、そのことから、可能の意を補っての解釈は、右の場合のみの特殊な例ではないことが知られるのである。

もとの歌と解釈との間の言い廻しの差は、それぞれを支えた人々の考え方の差に基づくものと考えられる。先の例で言えば、『古今和歌集』の時代には、「住めば住みぬる世」ととらえていたものが、『八代集抄』の時代には、「住みぬる世」の形ではこの歌の内容をとらえられず、「住まるる世」と可能の形にしなければならなかったのである。例えば、歌の表現を直訳して、「住むので住んだ世」としても現代語を話すわれわれには理解できず、「住むことのできる世」として始めて納得できるように、季吟が「住まるる世」としたのも、この、現代語の場合と同様のことがあったに違いない。

室町時代末から江戸時代にかけての可能表現の目立った点を挙げると、四段活用の下一段化した、いわゆる可能動詞が室町時代に見られるようになること、肯定文に使われる、可能の「る」「らる」の例が江戸時代初期にかなり多くなること等がある。

前者の例としては、

此ヲ中トハヨ(読)メヌソ(『史記抄』一五)

のような形が見られる。可能動詞の出現は、「る」「らる」という、種々の意味を表す助動詞では使い分ける不便が感ぜられるようになったためと考えられる。可能動詞の出現は、当時の人たちの可能という事柄に対する鋭敏な感覚の反映と言える。

後者の例としては、

俺でも持つて退かるる(『今源氏六十帖』上)

そちは禿ぢやゆゑ此の百両でらくに請けらるる(『傾城江戸桜』中)

代へらるるものならば……代へて欲しい(『傾城壬生大念仏』上)

のようなものがある。

前に『八代集抄』の解釈の仕方を通して、当時の人たちの考え方の一面を見たのであるが、そのことは、ここに見た可能表現の一般化の傾向と密接に関わっているに違いない。

このように、この時期に可能の考え方が一般化して来たことを述べたのであるが、それとても現代との間に差があったに違いない。現代語では可能としてとらえる場合でも、『八代集抄』では、そのようにしないケースもある(三七三・三七六・九六五番の各歌)ところにその一端が見える。

(2) 受身の表現

「る」「らる」が受身に使われることについては、今更、ここで論ずる必要もないことであろう。ただ、その中で、受身の「る」「らる」が謙譲語の上につき、「れ(られ)奉る」式の表現となることに触れたい。

この言い方は、平安時代にも一般的に用いられており、例が多いが、鎌倉時代に入って、例えば『平家物語』などでもしばしば使われており、廃れた言い方ではなかったことを感じさせる。室町時代に入ると、

これほどにうしろめたう思はれ奉つては、世にあつても何にいたさうぞ(天草本『平家物語』巻一)

のような例はあるが、従来見られたほどには多くない。しかし、例は少ないにしても、このような表現のなされたのは、受身に対する感覚が従来通りにあったものと言ってよかろう。

現代語では「れ(られ)奉る」的な言い方は全くと言ってよい程に使われず、きわめて稀に、

そのとき、本能寺の変がおこり、信長公は明智光秀のために弑され奉った(司馬遼太郎『関ヶ原』)

と使われることもあるが、この「奉る」の敬意の向きは、室町時代までに見られたのとは逆になる(この用例を現代語的に解すれば、「奉る」は「信長公」に向くが、古語的に解すれば「明智光秀」に向く)。これは、古語と現代語との間の受身の感覚の相違に基づくもので、この面では、室町時代までは旧態を存していたと言えよう。

三　第二類の助動詞

「まほし」から「たし」への変化に関しては、『千五百番歌合』での、藤原定家の判詞がよく知られている。それは、藤原季能が、

いざいかに深山の奥にしをれても心知りたき秋の夜の月(七七一番左)

と詠んだのに対して、定家が、

しりたきといへる雖聞俗人之語未詠和歌之詞歟

と評したもので、ここには、当時「たし」の語が口頭語として使われていたこと(聞俗人之語)が述べられている。実際には「たし」の例は院政期の和歌にも稀に見られるので、『千五百番歌合』で季能が用いたのも全く唐突と言う訳ではない。ただ、稀であったことから言えば、口語性の強い語であったと推察され、定家が抵抗を感じたのももっともと言える。

鎌倉時代末期のもの、例えば、『平家物語』や『徒然草』などでは、量的には、この両語がほぼ同程度の使われ方をしている。

「まほし」と「たし」とが併用される訳であるが、「まほし」は古語性のある語として地の文や改まった物言いに使われる傾向があり、「たし」は対話文に使われる傾向のあることが報告されている。(3)

動詞について自己の動作の実現を希望する語としては、「たし」「まほし」のほかに終助詞「ばや」がある。鎌倉時代末には、「ばや」は、「まほし」と「たし」との中間の性格を有する語とされるが、(4) 室町時代末には、「まほし」と共に「ばや」もまた消滅する。

「たし」は、室町時代末には「たい」の形に変わるが、これは、形容詞型の活用が、「――し」から「――い」に変わる、一般現象の一つである。

四 第三類の助動詞

1 「た」の一般化

この類での変化は大きく、室町時代末には「た」一語が使われるだけとなった。

「つ」「ぬ」「たり」「り」「き」「けり」の六つの助動詞は、しばしば一括して時の助動詞と呼ばれる。この中で、「り」は平安時代に早々と一般性を失うが、他の五つの時の助動詞も、鎌倉時代から室町時代にかけて次々と姿を消して行き、「たり」から転じた「た」一語のみが残ることになり、この面では現代語とほぼ同様の状態になるのである。

「た」以外では、「つ」が、限られた文脈の中で使われることがある。その限られた文脈とは、「――つ――つ」という、動作の並列を表す時、「らう」と結んで「つらう」の形で過去推量を表す時、それと、次のように、次の文に続く勢を残しつつ、文を一たん休止させる場合である。

妓王が申しすすむるによつて見参はしつ。見参するほどではなぜに声を見聞かいであらうぞ。(天草本『平家物語』巻二)

手塚の別当は自害しつ。手塚の太郎は討死する。(同巻四)

いかに大海よう聞け。有る程の串柿は皆汝に与へつ。又先の如くわだかまつて身をたばかるとも、再び串柿をば

食はすることはあるまじいぞ。（天草本『伊曾保物語』）

「た」は「たり」から転じたとするのが一般であるが、その例は、すでに平安時代の末に見られる。

ゐたりける所の北のかたに声なまりたる人のものいひけるを聞きて

あづま人の声こそきたに聞ゆなれ　永成法師

みちの国よりこしにやあるらむ　律師慶範（『金葉和歌集』「連歌」六九二）

時来ぬとふる里さして帰る雁こぞきた道へまたむかふなり（『藤原為忠朝臣集』）

などの例である。どちらも「来た」と「北」とを掛けたものであるが、『金葉和歌集』の例を見ると、この言い方が訛ったものであると考えられていたことが分かる。なお、『金葉和歌集』の例は、「きた」が「こし（来し）」と対をなしており、「た」と「し（き）」とが、意味の上で通うものと感ぜられていたと思われ、さらに、『藤原為忠朝臣集』の例も、「北」と掛けることを意図しなければ、「来し」と使われたはずで、この場合も、「た」と「し（き）」との意味の通じ合いが考えられ、後の時期における、「た」の優勢、「き」の後退を考えた時、注意される例と言える。

2　過去の意識

「き」は、連体形の「し」がかなり後まで使われたが、「り」以外の時の助動詞の中では最も早い時期に使われなくなる。「し」の形は、後の時期まで使われているのであるが、百二十句本『平家物語』の中には次のような例がある。

大臣殿ばかり、これらが頭をはねらるべしと宣ひけるを、平大納言と新中納言と申されけるは、「これら百人千人を斬らせ給ひて候ふとも、御運つきさせ給はん後は、世をとらせ給はん事難かるべし。国に候ふなる彼等が妻子ども、さこそ歎き候ふらめ。今や今やと待ち候ふらんところに切られたりと聞えしかば、いかばかり歎き候はんずらん。……」（巻七「一門都落」）

右の「聞えしかば」は、仮定、すなわち、未実現の事態であるにもかかわらず、「しか」(過去の助動詞「き」の已然形)が使われている。「百二十句本」よりも古態を有するとされる「屋代本」では、この部分、

今ヤ下ルヽヤト、待候覧ニ、切レ進セタリト聞ヱ候ハ、何斗ノ思ニテカ候ハンスラン

と、「き」は使われていない。過去の助動詞という見地から言えば、「屋代本」の方が理に叶っていると言える。

あはれその人が滅びたらば、その国はあかうず、その人がうせたらば、その官にはならうずるなどいうて(天草本『平家物語』巻一)

もしもれきこえたらば、天下の大事に及びまらせうずると、いはれたところで(同巻一)

右のように使われた「た」の例があるが、この「たらば」の用法は、先の「しかば」と同じである。「たらば」の形が口語における一般的な表現形式であることを見ると、「しかば」はその文語的表現であることになる。「しかば」は「き」の表現としては理に叶わないが、「たらば」を前提にして考えれば、このような表現のなされたのは何故か、その表現の機構も理解できる。(5) つまり「たらば」によって形成された論理を、文語の形式に合わせて「しかば」という表現にしたという機構が考えられるのである。

「し」は、右のように使われた例のある一方、「過去のし」という意識が強く持たれていた。「過去」の語は、「昨日」「一昨日」などという語と簡単に結びつき得るだけに、「過去のし」という意味をとらえるのは全く苦にならなかったようである。

『六百番歌合』で、

知らざりしわが恋草や茂るらん昨日はかかる袖の露かは(恋一、一番左「藤原良経」)

の歌の「昨日はかかる」が、相手側の方人や判者の藤原俊成から、「昨日はかかりし」とあるべきだと批判され、また、『千五百番歌合』で、

氷せし嵐を春に吹かへて昨日は聞かぬ谷のした水(二七番左「藤原保季」)

の歌の「昨日は聞かぬ」が、判者の藤原忠良から、「昨日は聞かざりし」とあるべきだと批判されている。批判する側の意識に、「昨日」という以上、それを受けて「し」を使うべきであるというものがあったのに違いない。「昨日……き」という関係は、平安時代の表現でも一般化しており、この批判はあって少しも不思議ではなかった。しかし、一方、これらの和歌を制作した側の立場に立って見た時、「昨日」という語を使っている以上、過去の事態ととらえていたことは言うまでもないが、にもかかわらず「き」(「し」)をここで用いなかったのは、これらの人たちにとって、過去の事態であるという感覚が、「昨日」の語によって充足されていたからに違いない。そのため、「き」をもってそれを受けなかったとしても差し支えはなかったのである。

このような形で、過去という概念が、助動詞の次元を離れて行けば、「き」の語は表現の面においては不要ということになる。それ故、もし、「き」を使うとするならば、先の百二十句本『平家物語』の例に見られたように、他の身近かな助動詞の代わりに用いるという形になりやすかったのである。

江戸時代初期の『耳底記』は、細川幽斎(一五三四—一六一〇)の口授を烏丸光広(一五七九—一六三八)が筆録したものであるが、その中に、

面影のほのかに見えて霞みしは都に近き春の山の端

の歌の「霞みし」という表現に関して、光広が、

霞めるやといひて可然候哉。過去のし如何。

という質問を出し、それに対して幽斎が、

霞めるまさるべし。霞みしと言うても苦しからず。霞みしと言うてもあながち昨日一昨日より霞みたる事にてあらじ。今朝からのうちに霞みしとも言はるるなり。

と答えたという問答が記録されている。

「霞みし」と「霞める」とは意味上の差はない、「霞みし」は過去であって「昨日」「一昨日」といった語を連想させる、この二つのことを、右の問答からは、読み取ることができる。

「霞みし」「霞める」が通ずるということについては、歌の内容からも、また、幽斎の答えに、「昨日一昨日から」「今朝からのうちに」とあることからも分かるように、「霞みし」は、今霞んでいる状態を表すものでもあったのである。ただ「霞みし」と言えば「霞みたる」と同じになり、それについては「霞める」も同様であって、その結果、「霞みし」「霞める」の二語は互いに通用したのである。幽斎は、「霞める」を「優る」としているが、「霞みし」に「昨日」「一昨日」を連想させる「過去のし」という事柄があったからに違いない。しかし、その「過去のし」ということも、それがいつであるかを明示する語がなければ、それは「た」の意味に通じ、現在の事態に通ずるものになり得たのである。「過去」ということが助動詞の次元を離れていた事実がここにも認められるのである。

3 「つ」「ぬ」の問題

「つ」「ぬ」の二語のうちでは、「ぬ」が早く消滅したと言われる。

ただし、『宇治拾遺物語』『徒然草』『平家物語』などには「つ」よりも「ぬ」の例が多く、「ぬ」の優勢を思わせるが、この二語は、平安時代から用例数の上で「ぬ」が「つ」を上まわっていたので、形式的にその関係が続いていたとすれば、さして異とすることではない。

室町時代に、抄物の中では、『史記抄』に「……ヲ以テ知ヌ」の形でしばしば用いられていることを除くと、用例は非常に少なくなる。(6) そして、天草本『伊曾保物語』では、

腹を立て、身のほむらを燃やいてそしりまはつて猶足んぬせねば

という例が見えるが、これ以外には例のないこと、および、『日葡辞書』の中でも、"Tannu" という見出しの立てられていることを考えると、「ぬ」という単位よりも「足んぬ」という単位を考えるべきである。この時期には、完全に消滅していたと考えてよかろう。

『平家物語』には、「ぬ」の例が多いが、その中に、

次に刀の事、主殿司にあづけおきをはんぬ(巻一「殿上闇討」)

と、「をはんぬ」という形で使われた例が数例見出される。そして、この「をはんぬ」という言い方は、室町時代になると、いわゆる完了の「ぬ」を説明するためにしばしば用いられる。ロドリゲスの『日本大文典』の中でも、

Vouannu(畢んぬ)、Nu(ぬ)、Nuru(ぬる)の三つの助辞の中で、最初のは書状に多く用ゐる。

と書かれるが、「をはんぬ」の一般への広がりが察せられる。

「をはんぬ」の形は、言うまでもないことながら、動詞「をはる」に助動詞「ぬ」が付してでき上ったものであるが、「ぬ」の意を完了ととらえるとすれば、この「をはる」「ぬ」の二語は相似た意を表した語ということになる。その点では、この二語はどちらかで表現としては充足されており、二語を重ねることは余分ということになる。右の例などは、「あづけおきぬ」としたとしても決して不足ではなかったはずである。

この「をはんぬ」の言い方は平安時代の漢文訓読に始まるものであるが、鎌倉時代以降それが人々の言語生活の中に深く入り込んだのは、「ぬ」が完了の助動詞として意識されると同時に、完了の意味に不足なものが感ぜられ、それを「をはる」の語によって補った形でこそ表現が果たされるという感覚が働いたからにほかならない。古くは、それなりの意味を表したに違いない「ぬ」が、「をはる」と同じ意味でとらえられるようになれば、語としての独自性はなくなり不要になるという過程は当然生じて来るのである。完了の意味は、現代語の「……てしまう」「……てしまった」という形に向かって行くのであるが、「をはんぬ」は、言わばその中間の形ということになろうか。

「つ」は鎌倉時代初期まではそれなりの意味が感じ取られていたようである。

先に引いた『六百番歌合』の「知らざりし」の歌の番いになっている歌は、

今朝までもかゝる思ひはなきものをあはれあやしき袖の上かな(恋一、一番右「源信定」)

であるが、判者の俊成は、「かゝる思ひはなかりつるものを」をこの歌のあるべき形としている。前述したごとく、この左の歌で、「昨日は」に対して「き」が想起されていたのに対して、「今朝までも」に対しては「つ」が想起された訳である。過去に「き」を用いるというのとは異なる意識をここに理解できる。

室町時代になると、「つ」は過去の語という意識が顕著になり、前述したように、特殊の文脈での時の助動詞という使い方に変わる。

『自讃歌』にある「詠めつる今日は昔になりぬとも軒端の梅は我を忘るな」(『新古今和歌集』「春上」五二「式子内親王」)の歌が、宗祇の『自讃歌註』には、

つるといふことは必ず過去ならねど言へり。その類ひいかほども侍り。……つるはぬるといはん事をことば強くて悪しければつると言へるなり。又、過ぎにし方をつるといふ事も侍るべし。

とある。

「つる」の意味を「ぬる」によって説明した例は、兼載の『自讃歌註』にも、右の歌について、

ながめつるのつるはぬる也。

とある。「つ」の意味を「ぬ」によって明らかにする方法がこのように見られるのは、この方法が人々に受け入れられるだけのものを持っていたということになろう。「ぬ」は、当時、「畢んぬ」の意識が人々の間に広がっていただけに、「ぬ」を用いれば、その意味が理解されやすかったのに違いない。

宗祇や兼載がここで説明したかったのは「畢んぬ」、すなわち、完了の意味でこの「つ」は使われているというこ

とであろう。それは、つまり、「つ」は、他の意に解される傾向のある語であったのである。そして、その意が何であったかと言えば、宗祇の文中に、「つるといふことは必ず過去ならねど言へり」「又、過ぎにし方をつるといふ事も侍るべし」などとあることから窺われるように、過去の意である。彼は、この「つ」が過去の意ではないことを説明するために多くの語を用いている。それは、取りも直さず、彼の中に「つ」と過去との結びつきが相当に強かったことを物語るものであると言える。

宗祇は『詠歌大概註』の中でも、「道の辺に清水流るる柳かげしばしとてこそ立ち止りつれ」(『新古今和歌集』「夏」二六二「西行法師」)の歌の「立ち止りつれ」という表現に関して、

たちどまりつれと云本多分あり。堯孝法印の自筆の本にけれとあり。けれにてもこころおなじ。しからばけれはまさるべきか。

と注を付けているが、そこでは「つ」と「けり」との意味が同じである旨記されている。「つ」を過去に結びつける意識がここにも働いていたかと思われる。

4 時の感覚

室町時代に到る時期に、時の助動詞として使われる語が「た」一語になることを見たのであるが、平安時代に六語の時の助動詞が使われていたのは、助動詞の次元で、時を六つの形にとらえ分ける感覚があったからと考えざるを得ない。それに対して、このように「た」一語になったのは、時の感覚が一つになったということを考えるべきであろう。そのような中で、従来、「き」の表していたものはどうなったか、「つ」「ぬ」と使い分けられていたものはどうなったか等のことが問題として浮び上がって来る。

それに対する解答を、ここまでに述べて来たものを整理する形で示してみれば次のようになる。

「き」によって持たれていた過去の感覚は助動詞の次元ではきわめて稀薄になった。これは「過去のし」などというとらえ方からも明白であるが、この過去を表すのに適当な語、例えば「昨日」「一昨日」等の副詞的機能を果たす語によってとらえられるという形になったのである。もちろん、この時期の「た」の使い方に、過去の事態の表現というものもあったので、それでとらえることがなかった訳ではない。ただ、その方法に拠った場合、前代までには見られなかった用法が生ずるという結果になったが、それも当然と言える。

「つ」「ぬ」の二語の区別は異なる形に代わる。「つ」は過去の意味に傾斜し、「ぬ」は「畢んぬ」の形を得て完了の意味を保つが、それとても、完了の感覚は動詞の次元に移るということになるのである。

「た」が「たり」から転じた語ではあっても、用法が従来の「たり」と同じであった訳ではない。むしろ、「たり」が表していたと思われるものは、この時期には「……てあり」「……てをり」の形で表すようになっている。そして、「た」の表したものは、現代語とほとんど同じに、その動作が確認されたことを表すという形で、過去に限らず、現在にも、未来にも使うというようになっているのである。

5 助動詞の重ね合わされた表現

助動詞をいくつか重ねた形の表現は、時の助動詞で言えば、「たける」「たし」(「たつし」となることもある)という形が見られる。それぞれ、「たりける」「たりし」の転じたものであることは明らかである。この「たりける」「たりし」というのは平安時代にも見られた形であって、この続き方が、この時期における特異なものとも言えないのであるが、ただ、この形が一語の助動詞的な使い方に変わって来ている点に注意しておきたい。

これに関連して、次のような例を指摘しておく。それは、『平家物語』で、「覚一本」と「流布本」とは類似した本文を有するのであるが、時々、次のような差が見られる点である。

（A）〔覚一本〕是に都より流され給ひし丹波少将殿（巻二「足摺」）
〔流布本〕これに都より流され給ひたりし平判官康頼入道（同右）
（B）〔覚一本〕三返うたひ澄まされければ（巻五「月見」）
〔流布本〕推返し推返し三返うたひ澄まされたりければ（同右）
（C）〔覚一本〕この由ひそかに奏せられければ（巻五「福原院宣」）
〔流布本〕この由ひそかに奏聞せられたりければ（巻五「伊豆院宣」）

これらの例では、「覚一本」にはない「たり」の語が「流布本」の場合には補われている（もちろん、「覚一本」の同様の例が、「流布本」ですべてそうなる訳ではないが）。そして、これらの例は、どれも「たり」の補われる必要性は全くないものである。それが、何故、このような形が生じたのであろうか。

そこで考えられることは、当時、時の助動詞としては「た」が唯一の語であったということである。右の例のような場合、ちょうど前述した「畢んぬ」と同様に、「流布本」の編纂者が、「し」もしくは「けれ」を使う時に、意味の確認とでも言えるであろうか、「たり」を補ってしまったという過程が考えられて来るのである。先の「たける」「たし」という形の発生も、ここに述べたことと無縁とは思えない。

なお、「覚一本」と「流布本」との関係で言えば、
〔覚一本〕此院宣をば錦の袋にいれて、石橋山の合戦の時も、兵衛佐殿頸にかけられたりけるとかや（巻五「福原院宣」）
〔流布本〕此院宣をば錦の袋にいれて、石橋山の合戦の時も、兵衛佐殿頸にかけられけるとぞ聞えし（巻五「伊豆院宣」）

と、前とは反対に、「流布本」で「たり」の省かれるような場合もある。ただし、右の場合について言えば、合戦場

面の描写として考えると、「覚一本」の「たり」の必要性があることは言うまでもない。

五 第四類の助動詞

1 打消と推量、打消と過去、過去と推量のとらえ方

室町時代末の表現では、これらは、それぞれ、「まい」(「まじい」)、「なんだ」、「つらう」(「たらう」の形も使われる)の語が使われている。第四類に属する、これらの助動詞は、現代語では、それぞれ、「ない・だろう」「なかっ・た」「た・だろう」のように二つの助動詞を重ね合わせた形で表すようになる(打消推量、打消過去、過去推量などという概念化のあり方は、この表現形式と密接に関連する)訳で、その点で、打消——過去——推量という順も考えられるであろうが、この時期には、前記助動詞の存在により、第四類の中に一括される。

もっとも、古くは、「ざら・む」「ざり・き」といった言い方もあったことであるし(「けむ」もまた「け・む」の語構成の可能性は十分に考えられる)、この時期の「なんだ」は打消・過去の結びつきから出たことであろうし、「つらう」は「つ・らう」、「たらう」は「たら・う」と過去、推量の構成をとっていることから見ても、この事態に対する、人々のとらえ方には変化はないと言えるかも知れない。天草本『平家物語』には、

昔は聞いたこともあらうず、木曾の冠者、今は見るか、左馬の頭朝日の将軍ぞ(巻四)

というような例がある。これは、いわゆる文語体で言えば、

昔ハ聞ケン物ヲ、木曾冠者、今ハ見ラン左馬頭兼伊与前司朝日将軍源義仲ソヤ(百二十句本『平家物語』巻九)

となる。当時の口語体では、「……た……うず」のように、過去——推量という形での表現がなされており、この形

での事態のとらえ方、すなわち、思考形成のパターンのあったことが知られるのである。

2　推量の助動詞

(1)「らし」と「らん」の同化

かも、らしなどの古詞などは常に詠むまじ。

藤原公任の『新撰髄脳』の一節であるが、すでに平安時代(一一世紀初)に「らし」の語が古語と意識されるものになっていたことが分かる。

「らし」は確度の高い推量表現の役割を果たし、疑問の語と呼応することがないなどという点で「らん」と区別されるが、「らし」の古語化に伴って、必然的に、従来、この語によって表されていたものが、他の語によって代わられるということが生ずる。その時、その代わりになった語が「らん」である。

聞きつるや初音なるらしほととぎす老いは寝覚めぞ嬉しかりける(『後拾遺和歌集』「夏」一九六「法橋忠命」)

平安時代に見られる、この「――や――らし」の形式は、その後、用例数も増して行くが、このような形式においては、「――や――らん」との差がなくなっていると言える。

さらに時代が下って、『耳底記』の中では、烏丸光広の、「ならしといふてには疑ひか」と質問した記事がある。この時期には、「らん」を「疑ひたるてには」とする感覚を多くの人が持っているが、右の光広の質問も、この感覚に基づいたものに相違なく、「らし」を「らん」に結びつけたとらえ方の例をここにも見ることができるのである。

例えば、『平家物語』には、

我御前は今様は上手でありけるよ。この定では、舞も定めてよかるらむ。一番見ばや(巻一「祇王」)

那智新宮の者共は、さだめて源氏の方人をぞせんずらん（巻四「源氏揃」）

是ぞ一定そにおはしますらんと思ひ、いそぎ走り帰ってかくと申せば（巻一二「六代」）

のような例がある。ここで、「らん」と推量していることが、確度の高さを有していることは間違いないが、その確度の高さが読者に伝わるのは、「らん」に拠っている訳ではなく、「定めて」「一定」といった、確度の高さを表すための語が使われているからなのである。このように、「らん」もまた、他の語と呼応する形でもって、確度の高い推量表現に使われることもあったのである。「らし」が、疑問を伴った推量表現に使われる形で「らん」に接近したのと同様に、「らん」もまた、確度の高い推量表現に使われるというように「らし」の表していた事態を表せるようになったのである。

この、「確度の高さを表す語――推量（らん）」という形式は、そのまま、この時期の人たちの考える形の一つを示していると言える。先に、「らし」は確度の高い推量を表したと述べたが、右の『平家物語』の表現形式は、従来「らし」が表していたもののうち、確度の高さを表すために一語を、推量を表すために一語をという形で分化した形式になっていると言え、同時に、当時の人たちの思考形式が分化したものになっていると言えるのである。「らし」と「らん」の差が、推量の確度の高さ、低さにあるとすれば、右のように表現形式が変われば、二語の表す意味は同じにならざるを得ず、その結果、どちらかの語は不要となるのである。そして、この場合は、「らし」が消えたのである。

なお、その推量表現に関して言えば、『新古今和歌集』の「見るままに山風荒くしぐるめり都も今や夜寒なるらん」（「覊旅」九八九「後鳥羽院」）の「らん」が宗祇の著と伝えられる『分葉集』の中で、

これはしかと夜寒にあると云心也。

と解釈されている。この解釈が適切かどうかは別にして、歌の表現にある「らん」の意味は、解釈では助動詞としては全く表されず、「しかと」という副詞に移っている訳で、助動詞の変化する方向が示されていると思う。

(2) 「らん」の変化

「らん」は現在の事態に関する推量を表すとされているが、現代語ではそれを表すのに「……テイルダロウ」あるいは「今……テイルダロウ」と、現在の事態、推量という二つの過程に分けてする(それであるが故に現在推量と呼ぶ訳である)のが一般であるが、これに変化して行く傾向は、すでに、この時期に認められる(先に「けん」の構成は「け・ん」とも考え得ると述べたが、同様に「らん」をも「ら・ん」と分け得るとすれば、古くからそのパターンは認められることになる)。

先に、『新古今和歌集』の「都も今や夜寒なるらん」の例を引いたが、ここには、「今……らん」という形が見られる。また、

宮門をまもる蛮夷の、よるひる警衛をつとむるも、先の世のいかなる契にて今縁を結ぶらんと、仰せなりけるぞ忝き(『平家物語』巻三「城南之離宮」)

文覚存ずる旨あって、獄守にこの十余年頸にかけ、山々寺々をがみまはり、とぶらひ奉れば、今は一劫もたすかり給ひぬらん(同巻五「福原院宣」)

のような例を拾うことができる。

これらの例を通してみると、現在の事態の推量という表現に関して、この時期の人たちが、現在の事態を表すためにはそれなりの語を用いる方法を採る場合のあったことが分かる。この方法は、前の時代にも見られたことであって、この時期になって始められたという訳ではないが、現代語の表現形式というものを考えれば、この時期に、このような形式のあったことは注意しておいてよいことであろう。

前項の「らし」の場合にも見たことであるが、「——らん」という形式に、この「今——らん」という形を比較す

ると、後者の形式は、より分化した表現ということになり、これは同時に、より分化した思考形式ということになるであろう。

「今――らん」という形について考えた時、これを現在推量としてとらえるとすれば、「らん」は、現在の意味合いを失い、ただ推量を表すだけになったということにもなろう。確かに、例えば天草本『平家物語』に、

木曾は河原を上りに落ちゆいてござるを兵どもに追ひかけさせてござる、今はさだめて討ちとりまらせうずると、こともなげに申されたれば(巻四)

のように、「今――うずる(推量)」という形で、現在の事態の推量を表している場合もあり、これと対照すれば、先の「らん」は推量を表すだけの表現と言うことができるかも知れない。もっとも、このように「む」の語が現在の事態の推量に使われるのは古くから行われていたことであって、「今」の類の副詞や「あり」の類の動詞を伴って現在推量の役割を果している例のあることが、松尾捨治郎によって指摘されている[7]ことを念のために付け加えておきたい。

さて、天草本『平家物語』の中には、

水の底には大綱を張らうぞ、馬乗りかけて押し流されて不覚すな佐々木殿(巻四)

のように、「う(推量)」によって、「らん」に該当する事態を表すといった場合もある。現存する『平家物語』諸本の中で、「天草本」と内容的に最も近く、口語体、文語体の対照資料としてしばしば利用される百二十句本『平家物語』では、この部分が、

水ノ底ニハ、大縄張タルランソ、馬乗カケ、推ナカサレ、不覚スナ佐々木殿(巻九)

とあり、「覚一本」でも、

いかに佐々木殿、高名せうどて不覚し給ふな、水の底には大綱あるらん(巻九「宇治川」)

とあるように、この文脈では「らん」が一般であったのである。それが、「天草本」の場合には「う」が使われるの

であるが、これは「う」と「らん」との意味識別の曖昧化の一例と考えられるが、このように、室町時代には、現在推量と言われる中の、現在の部分が助動詞から離れようとする傾向が認められる。前に述べた過去推量の「つらん」なども、「らん」を推量とする感覚があって始めて成立した語であるかも知れない。

さらに例を示せば、宗長が『雨夜記』の中で「覧と云に過去現在未来有」として、

蓬生にいつより月の澄ぬらん

を過去の例とし、

夕顔や筧の軒をめぐるらん
時のうつるや水にしるらん

などを、未来の例としている。これについて言えば、宗長の感覚には、「らん」を現在の事態にのみ結びつけようとするもののなかったことが知られる。彼にあったのは、「らん」はただ推量を表すというだけのことであったと考えられる。

「らん」が、現在の事態との関わりをなくし、ただ推量を示すだけの語となって行ったとすれば、推量を表す語としては、「む」から転じた「う」などの語があったのであるから、「らん」は語としての必要性がなくなり、「らし」と同様に古語と意識されるようになるという過程が、当然、考えられて来る。

「らん」は室町時代になると「らう」の形で使われるようになる。「らん」から「らう」の変化は、平安時代に「む」と使われていたものが「う」と転じたのと同様の過程を経たものと考えられる。

「む」を「う」と表記した例としては、平安時代の漢文訓読語において、

〔不〕顧念し、言説を接(マジ)ヘ叙ヘタマハサラウ(『大般涅槃経』巻第十九、平安後期点)

と使われているのが古い例であると、築島裕が指摘している。(8)

鎌倉時代に入ると多くの例が見え、『平家物語』では、

もし此事もれぬるものならば、行綱まづ失はれなんず。他人の口よりもれぬ先に返り忠して、命いかうど思ふ心ぞつきにける(巻二「西光被斬」)

入道かたぶけうどするやつがなれる姿よ。しやつここへ引寄せよ(同)

などを始め、かなりの量の例が見える。そして室町時代には「う」が一般的になる。

「む」から「う」への変化の過程は、m→ū→uというように、中間に鼻母音の存在することを橋本進吉は推定している。(9)

現代語では、「う」と同じ機能を持ち、上接する動詞の活用の差によって使い分けられる「よう」という語がある(五段活用には「う」に、他の活用には「よう」が使われる)。

天草本『平家物語』には、

その儀ならば、北面のともがら矢をも一つ射ようずる(iyôzuru)侍どもにその用意をせよとふれい(巻一)

という例があるが、この時期には「よう」の形は一般化しておらず、これが「う」と並行的に使われるようになるのは、江戸時代も中期を過ぎて、いわゆる江戸語になってからの事であって、室町時代にはまだ、例えば、「見ょう」(ロドリゲス『日本大文典』等)、「見ゅう」(ロドリゲス『日本小文典』等)と拗長音に発音されていたと考えられる。

このように、「む」が「う」に変わると同様に、「らん」もまた「らう」の形が現われ室町時代には「う」と同様に「らう」が一般的になる。

しかし、前述したように、「う」の勢いが強くなっている段階で、「らう」が、果たしてどこまで「らん」の表していたものを承け継ぐことができたかは疑わしい。

天草本『伊會保物語』では、「つらう」の形以外には、

げにそれはさぞあるらう

と一例があるに過ぎず、あまり使われなくなっていたかと思わせるものがある。しかし、天草本『平家物語』には、

今朝の清盛の気色さる物狂はしいこともやあるらう(巻一)

木曾が勢はこの辺にこそあるらう、旗があるか差し上げて見よとあつたれば(巻四)

樋口がわが党に結ぼほれたもさこそ思ふらう(巻四)

などを始めいくつかの例があり、消滅したとも言いにくい状態にある。ただし、江戸時代に入れば例は見えなくなることから言って、消えかけていたことだけは間違いない。

本居宣長は、「らん」を推量の意味から離れて、例えば「春は来にけり」と言うべきところを「春や来ぬらん」のように用いることを正当ならざる表現として戒めている。これは「艶」を求めてなされた表現であると宣長は説明している。その表現の動機が、宣長の指摘通りであるかどうかはともかくとして、そのような表現は、この時期にも例がある。

八日は薬師の日なれども、南無と唱ふる声もせず、卯月は垂跡の月なれども、幣帛を捧ぐる人もなし。朱の玉墻神さびて、しめ縄のみや残るらん(『平家物語』巻二「山門滅亡」)

「朱の玉墻」から「らん」までは、眼前の事態を表すものであって、「らん」をもし推量の助動詞とするならば、この文脈には不適切な語と言える。推量の意を離れた語として使われたものと考えざるを得ない。

『平家物語』諸本の間の語句の異同の中で、源三位頼政が鵺(ぬえ)を退治した時に藤原頼長の詠んだ歌が、「覚一本」では「ほととぎす雲居に名をもあぐるかな」となっているが、「百二十句本」では「ほととぎす雲居に名をやあぐるらん」となるという違いがある。頼政の手柄を称讃したものであるから、「覚一本」のように「かな」の形をとるのが妥当であるが、「百二十句本」で「らん」としたのは、この書の編纂者に、「らん」の形で、「かな」と同じ事態を表

し得るという感覚があったに違いない。

推量の語が、表現の固い感じを除くというのは平安時代からあった感覚であるが、「らん」は、この時期に日常言語生活からは消えかけており、推量の意味が直接的に感ぜられないということも合わさり、さらに、古語的な雰囲気を持った語という要素も加わって韻律を持った表現では活用されたものと考えられる。

3 打消の助動詞

打消の助動詞としては、「ず」の形が「ぬ」にかわるが、これもまた、従来の連体形の形式が頻繁に使われることによって優勢になり、終止形の形式を圧倒するという、いわゆる終止、連体両形の合一という一般的現象の一つと考えられる。

鎌倉時代には、前代と同様、「ず」が使われるが、室町時代になると「ぬ」が一般的となる。

現代語では、「ぬ」と並んで「ん」が使われるが、「ん」の形の一般化するのは江戸時代になってからで、そこでは、

見付けられても大事御座んせん(『好色伝授』下)

ア、ほんにどこでやら落してのけた。誰ぞ拾たか知らんまで(『心中天の網島』中)

というような例が、「ぬ」と並んで見られるようになり、現代語に続く。

なお、この「ん」の例として、天草本『平家物語』に、

院の御所は大膳の大夫が宿所西の洞院であったれば、御所の体もしかるべからん(xicarubecaran)所で、礼儀を行はれうずることでなければ、よろづ政もなう、もの寂しい体でござった(巻四)

とある例が注意される。ここは「百二十句本」に、

……御所ノ躰、然ルヘカラス、サル所ニテ礼儀行フヘキニアラネハ、拝礼モナシ……

とあるので、打消の意に使われた「ん」と解すべきであろう。ただし、この「天草本」の例は当時としては稀な例であって、一般的には「ぬ」の形が使われている。

現代語の打消の助動詞は、「ない」「ぬ」の二語が使われるが、知られるように、関東方言の「ない」、関西方言の「ぬ」の関係であって、ロドリゲスの『日本大文典』に、三河より東の地域の方言として、西で用いる「ぬ」の代わりに「ない」を用いると説明されているように、室町時代の末に、この二語の対立関係は存在していた訳である。この二語が合流するのは、江戸語になってからである。江戸時代の上方の文学作品では、地方出身者を中心に「ない」を使わせており[10]、それが方言であることは意識されていた訳である。

なお、この東西方言の対立ということで言えば、「ぢゃ」と「だ」という断定の助動詞がある。「である」から「であ」を経て、「ぢゃ」になる場合と「だ」になる場合とがあったもので、関西では「ぢゃ」、関東では「だ」という関係になる。「だ」は、当時、関東において禅宗(多く曹洞宗)関係の僧侶が抄物を残しているが、そこに多く現われる語である。上方の文献にはほとんど見られず、「ない」と同様に、文学作品の中で、作者が、東国出身者の語として語らせる形で現われる程度である[11]。

最後に、打消の助動詞の問題として、

かげろふの夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし(『徒然草』第七段)

と、打消の「ぬ」が直上の「知る」だけでなく、数語を隔てた「待ち」をも受けるような機能のあることに注意したい。このような打消の用法が現代語において皆無であるという訳でもないが、しかし、古い時代の表現ほどの一般性はないはずである。右の『徒然草』の例も、「かげろうが夕方をまたずに死に、夏のせみが春や秋を知らないというようなこともあるのだ」(『日本古典文学大系』頭注)と、現代語で解釈されるのを見ても、そのことは明らかである。天草本『伊曾保物語』には、

威勢、威光の天下に聞ぇ渡るやうな者とても、誰をも卑しめず、賤しい者にも仇を為さず、却って情を先とせう
ことぢや

我が年盛りの時は、鹿、猪をも遣らず、過さず、生きとし生けるものを食ひ止めて忠節を尽いたれども

のように、「――ず、――ず」と打消を重ねる形が一般的になっているように見え、この面での打消に関してのとらえ方が現代語に近づいているように見えるのであるが、そうであるとの結論を得るまでには、さらに検討を加えて行かなければならない。

(1) 山田孝雄『平家物語の語法』宝文館、一九五四年、一一四〇頁。
(2) 佐伯梅友「古今集の解釈と文法上の問題点」(『講座解釈と文法 2 記紀歌謡・古今集・万葉集・新古今集』明治書院、一九六〇年、一八一頁)。
(3) 宮地幸一「移り行く希望表現」(『金田一京助米寿記念論集』三省堂、一九七一年、四五三頁)。
(4) 同上。
(5) 拙稿「江戸時代における時の助動詞把握の一形式」(『国文白百合』七号)参照。
(6) 湯沢幸吉郎『室町時代の言語研究』大岡山書店、一九二九年、一九〇頁。
(7) 松尾捨治郎『助動詞の研究』文学社、一九四二年、四五頁。
(8) 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会、一九六三年、七〇三頁。
(9) 橋本進吉『助詞・助動詞の研究』岩波書店、一九六九年、三九二頁。
(10) 湯沢幸吉郎『徳川時代言語の研究』刀江書院、一九三六年、三四八頁。
(11) 同上、三三〇頁。

4 助動詞 (3)

北原美紗子

はじめに

現代語の助動詞を考えるにあたって、次のようなことを、目標に置いた。
江戸語の助動詞の大体にふれて明治・大正時代の、いわゆる言文一致体が成立するまでに、助動詞にどんな消長があったか。また現代語の助動詞の起源がどの辺にあるかを明らかにしたい。また、個々の助動詞を取りあげ、意味と用法を詳しく述べる。
結果としては、現代語の助動詞の個々の意味と用法とを述べ、そして、約一六〇年前にさかのぼって、江戸時代の『浮世風呂』の助動詞と、現代語の助動詞との比較を試みることになった。
できるだけ丹念に、現代語と江戸語の助動詞の、あるがままの姿を再現してみたいと思う。
なお用例は次のものからとった。そして、用例には、出典と頁数を明記した。また、『浮世風呂』のふり仮名は適宜つけた。

『浮世風呂』　中村通夫校注　日本古典文学大系63　二編巻之下、一七〇頁まで。岩波書店。
「小さい妖精の小さいギター」『立原えりか童話集 IV 妖精たち』から。角川文庫。
「午前零時の男と女」『五木寛之対話集 2』　山下勇三・篠山紀信両氏との対談から。角川文庫。
「ありがとう」　高峰三枝子編『おかあさん (上)』から。角川文庫。
さらに、現代語の助動詞については、
『現代語の助詞・助動詞――用法と実例――』　国立国語研究所、一九五一年。
を参照した。

また、現代語の助動詞の細部にまでわたる綿密な用例の検討は、この書の他に、次のものを参照していただけたらと思う。

『日本文法大辞典』松村明編、明治書院、一九七一年。

『古典語現代語助詞助動詞詳説』松村明編、学燈社、一九六九年。

『品詞別日本文法講座 7・8』鈴木一彦・林巨樹編、明治書院、一九七二年。

ところで、古典語の助動詞は、普通次のように分類されている。㈠受身・尊敬・自発・可能 ㈡使役・尊敬 ㈢希望 ㈣否定 ㈤推量 ㈥過去・完了 ㈦断定 ㈧敬譲 ㈨比況。

そして『浮世風呂』『現代語』の助動詞を分類してあてはめてみれば、これら九つに一応所属させることが出来る。

しかし、助動詞を、この漢字の意味の通りに、「動詞を助けるもの」として考えれば、体言にも接続する断定の助動詞、そしてまた比況を表現し、助詞「の」を受ける「ようだ」を助動詞として考えてよいものかどうか、さらにまた、「れる、られる、せる、させる、しめる、たい」など、時枝誠記が接尾語として、助動詞のわくから外したものを、どう考えたら良いのか、という大きな問題を避けて通るわけにはいかない。

このことに関しては、また後に考えることにして、とにかく古典語の助動詞が日本語の中で果していた九つの働きは、そのまま江戸語まで、現代語まで、継承されてきたと言うことは出来る。

ただ、たとえば、古典語で過去・完了を表現した「き・けり・つ・ぬ・たり・り」の助動詞は、江戸語では、まだこの内のいくつかは残っているが、現代語では「た」に統一されたと考えて大体あたっている。どうして「た」に統一されたのかはいろいろ考えなければならないが、形としては「た」だけが残っている。

とにかく現代語の助動詞を、順を追って見ていこうと思う。

一 受身・自発・可能・尊敬・使役・希望

1 れる・られる

(イ) 白いリンゴの花びらにかざられています(「小さい妖精の小さいギター」四一頁。以下小・四一と略記)

(ロ) 風にゆれているシラカバは、わかいむすめと、似ているようにおもわれることも(小・二四)

(ハ) いま健康で心が穏やかでいられる人間ってのは(『五木寛之対話集 2』二〇八頁。以下五・二〇八と略記)

(ニ) 今度出された写真集のことだけど(五・二〇七)

(イ)が受身、(ロ)が自発、(ハ)が可能、(ニ)が尊敬をあらわす。合計七〇例の用例中、受身が五三例、自発が四例、可能が一一例、尊敬は二例である。受身では、

そしておとうさんに「ばか」/といってしかられる(『おかあさん(上)』六八頁。以下お・六八と略記)

のように、上に「に」がくるのがもっとも多い。また、可能の場合は、

公園へ行かれない、小さい妖精は(小・一一)

のように、用例の半分に、否定のないがついているのが特徴である。なお、自発は、「思い出されます」「思われる」の用例だけである。尊敬は、二例ともに話し相手の行動に対してのものである。いずれにしても「追いつかれた――殺される」(お・四〇)に端的に示される、なすがまま、なされるがまま、の当事者(人ばかりとは限らずに)の姿が、「れる・られる」の全用例から浮びあがってくるように思われた。

それでは『浮世風呂』の中で、「れる・られる」が、どんなふうになっているのか見てみたい。六五例中、受身三

九例、可能一五例、自発三例、尊敬八例である。この中で、現代語と明らかに違っているのは、次の四例だけである。

(イ)　あたま切らるゝやつもあり(『浮世風呂』九六頁。以下浮・九六と略記)

(ロ)　腕を切らるゝやつもあり(浮・九六)

(ハ)　又明後日も下らるゝ(浮・九五)

(ニ)　いつも初湯の心地せらるゝ(浮・五三)

ただし、(イ)(ロ)(ハ)は座頭のうたう仙台浄瑠璃の中にあり、(ニ)は、『浮世風呂』前編巻之上のはじめ、式亭三馬の前口上の中にある。共に、当時の口語とは言えないであろう。

私が不断にとつざまにしかられます(浮・九四)

おかしくてこてへられねへよ(浮・一六二)

子の産は何か案じられまして(浮・一二〇)

お気をつけられい(浮・六六)

受身・可能・自発・尊敬ともに、現代語とほとんどかわらない。なお、尊敬のうち五例は「下らるゝ」と、仙台浄瑠璃の中のことばである。また、否定のこない可能として、

湯遣ふ度に、アイ、はねがかゝりやすと断られる物か(浮・一四五)

将棊をさして飯のくはれるほどになれば能けれど(浮・九三)

などがある。

なお、現代語で、可能の「れる」「られる」がそれほど用いられないのは、「書ける」「読める」などの、いわゆる可能動詞が江戸時代以後に発達して来た結果と思われる。「れる・られる」の中では、現代語・江戸語ともに、受身の使われ方がもっとも多い。

誰かに、あるいは、自然に、無防備のまま、あるがまま、「……される」というのは、とても、日本的な表現と思われる。そして、同じく、未然形に接続しながら、この「れる・られる」の正反対に、「せる・させる」があって「自然に発生するものとして受け入れる」のではなく、自分の力で、他者に関与し、それにさせるという使役の言い方が存在するのは、興味深いと思う。「れる・られる」「せる・させる」を、古代から、日本人が同じひとつの助動詞のグループの中に、共存させてきている事実は、受け入れるだけ、されるだけでは済まされず、人にかかわって行くことを対立的に考えていく人間というものを、背後に、感じさせるように思われるのである。

2 せる・させる・しめる

あれを料理しょうか　これを料理しょうか／久しぶりに帰った息子に／なにを食べさせようと　迷いに迷い／ぶつぶつ　ひとりごとだけ／いっているあいだに　年末休みも過ぎ／とうとう　なにも食べさせてくれなかったかあさん(お・五四—五五)

わたしを公園に連れて行って、町の人たちに会わせてください(小・一二—一三)

生き生きと他者に働きかけるのが、使役の本質であろうか。意志を持たない自然現象でさえも、使役の言い方によって、意志あるもののように動き出すようである。

風は、うれたくだもののにおいをただよわせながら、通りから通りへと、吹いて行きます(小・一一三)

次に江戸語の使役を見てみたい。

(イ)　風呂の壁はとん〳〵と扑きて湯汲の睡を寤さしむ(浮・五四)

(ロ)　子供といふ者は熱い湯で懲させると(浮・六三)

(ハ)　あの人を床から出して聞人にして聞せたい(浮・一〇四)

『浮世風呂』の中の、私が集めた限られた用例だけからみると、自然現象に使役が使われた例はない。いっさいが人についてである。それからまた、「しむ」以外は、現代語と同じく、「せる・させる」の形である。(イ)の用例は、式亭三馬の前口上の部分にあるものだから、口語の用例とはできまい。

なお、「せる・させる・しめる」の尊敬の用法、および「しめる」の使役の用法は、あまり使われていないようである。「れる・られる」「せる・させる・しめる」は、未然形に接続するが、このグループの中では接続の面で異質の連用形に接続する「たい」について、次に述べる。これは時枝誠記が、接尾語に入れたものであるので、続けて述べることにした。

3　たい・(たがる)

「たい」は、希望を表わす。用例で見る限り、自己の願望を表わす。

ぼくは、そういうつくり方とは、きっぱり別れたい(五・二一三)

「たい」は、自己の希望を表わすが、「たい」の上にくる動詞は、

ぼくは一ぺん答えてみたい(五・二一三)

のように、「……てみたい」がもっとも多く、続いて、「……になりたい」「やりたい」が多い。その他、「言いたい」「食べたい」「読んでいたい」「ふとんにはいっとりたい」「ぼくの終わりを確かめたい」「もとのむすめにもどりたい」「写真に撮っておきたい」「もの書きたい」「行きたい」「絵かきの目をなおしたい」「えがきたかった」「聞きたい」「願いごとをとなえたい」などがある。

これらの例をみていると、自分の意志で、行動を起せば実行可能なことへの願望、と言えるような気がする。もちろん、

元気だったおかあさん／遊んでくれたおかあさん／もう　元気ではない(お・七八)

ではじまって、最後に、「もういちどいっしょに遊びたい」と希望する場合には、事実としては実現不可能であっても、出来るに違いないと思いたいことへの希望というふうに考えられる。

そして、『浮世風呂』の「たい」も現代語と使われ方が同じである。

寒からぶつかけを食てへのと(浮・一二六)

おめへ死たい／＼といふから(浮・一二七)

酢でも呑んで痩たいよ(浮・一三一)

この他には、次のような言い方がある。「上の風に丸を料理して食て見たい」「おれも目をさましたいの」「眠てへ時分に」「鶏卵を食たいと」「たべたいと思はゞ」「どうぞして参りてへもんだ」「悪くいひたくはねへが」「チト拝見いたしたうございます」「先刻から傍で口を出したかつたが」「おらが所の水瓶をたのみてへ」「ホンニちつとおすそわけしてへ位よ」「此方で上たいと思へは」「煎じてあげたいよ」

なお、現代語で「みっともない」という言い方は、『浮世風呂』の中では「見たくでもねへ」(浮・九三)となっていた。現代の方言の中に「見たくない」が醜いの意になっているのは、これと関連があるだろう。

「たい」は、自分の希望を、はっきりと述べているが、「たがる」となると、自分以外の人の希望を表現する動詞となる。……したいという動作をするという意味である。

かあちゃん　ぼく赤ちゃんやないんやよ／三年生にもなったのに／ぼくのほっぺたなでたり／だっこしたがったり／かなわんなあ(お・二八)

『浮世風呂』でも同じ用い方である。

死たい／＼といふ人の、死たがつた例はねへ(浮・一二三)

二　丁寧体の「ます」

次に、助動詞の大きなグループのふたつめとして、丁寧体の助動詞「ます」について述べる。普通、「ます」は、同じ丁寧体の助動詞「です」と並べて説明されることが多いが、「です」は、体言および助詞「の」にも接続する点で断定の助動詞「だ」の丁寧体として、この稿では、最後の第五章で述べることにした。

「ます」は、常に、動詞、助動詞の「せる」「させる」「しめる」「れる」「られる」の連用形につく。そして、話題そのものに敬意を表わすのではなく、話しかける相手に対して、丁寧を表わすものである。

現代語の「ます」は、「ます」「ました」「ましょう」「ません」「ませんでした」に分けられた。

また、何年かが過ぎました(小・一九)

「ました」の用例をみると、童話の「小さい妖精の小さいギター」に七〇例、詩の『おかあさん』に八例、『五木寛之対話集』に四例あった。童話の中に「ます」が多いということは、この童話が丁寧体で語られていることを示す。

(イ)　勇を鼓してうかがいます(五・一四一)

(ロ)　ひとつ答えてみてくれませんか(五・二一三)

(ハ)　ぼくたちはいっしょに、死ぬときまで、はなれずにくらしましょう(小・二二)

用例(ロ)(ハ)は相手への話手の勧誘をあらわす。現代語の勧誘の言い方には、話手が希望する動作をそのまま(ハ)のように述べて表現する場合と、(ロ)のように、希望する動作をいったん打消しの形にすることによって、話手の相手への希望、勧誘を表現する場合の、ふたつがあると言える。

次に、『浮世風呂』の「ます」について述べる。「ます」「まする」「ませぬ」「ません」「ました」「ませう」の形をとる。使われ方は現代語と変らない。

(イ) 嘘でございますよ(浮・一六四)
(ロ) どうも銭金といふやつはたまりませぬ(浮・六九)
(ハ) 落着て流しては居られません(浮・一五〇)
(ニ) ハイ〱、畏りました(浮・一六〇)
(ホ) 最うあがりましょ(浮・一四九)

そして、「まする」は次の四例で、(イ)(ロ)が医者の質問に答えた隠居のことば、(ハ)は仙台浄瑠璃、(ニ)は「番頭曰ク」として、作者の言ったことばである。「まする」は、普通の会話ではすでにあまり使われなかったと見られる。

(イ) 吐まする(浮・六五)
(ロ) 俳諧が好でこまりまする(浮・六六)
(ハ) 俵藤太秀郷と解まする(浮・九五)
(ニ) 後編に猶くはしくおめにかけまする(浮・一〇五)

さて、この時期には、「給ふ」のような、話題における動作に対する尊敬を表わす助動詞は、存在せず、話題の動作に対する尊敬は別の形式を用いる。例えば、

それに部屋親さまがいつそお気立のよいお方で、これを御自分の子のやうになすつて、お世話なさりますから、至極勤ようございます。ソシテ奥様の御意に入りまして、名をばお呼び遊ばさずに、おちやツぴいヤ、於茶ヤ〱とお召遊ばして、お客様の入らつしやる度に、此子を御吹聴遊ばすさうでござります(浮・一二九)

この例からみると、「お屋敷さま」の「部屋親さま」に対しては、「お気立」「お方」「御自分」「なすつて」「お世話

なさります」を使い、「奥様」に対しては、「御意に入る」「お呼び遊ばさずに」「お召遊ばして」「御吹聴遊ばす」を使い、「お客様」に対しては、「入らっしゃる」を使っている。(イ)「なさる」、(ロ)「遊ばす」、(ハ)「入らっしゃる」は普通、次のように解釈される。

(イ)①「する」「なす」の尊敬語。②他の動詞の下について、尊敬の意をあらわす。

(ロ)①「遊ぶ」の尊敬語。②ひろく「する」の尊敬語。③「お」「ご(御)」を添えた動詞連用形または名詞に添えて尊敬の意をあらわす。…なさる。

(ハ)(イラセラルの転)「居る」「在る」「来る」「行く」の尊敬語。

いずれにしても、動詞の尊敬語である。また、尊敬の助動詞の融合したものである。

「遊ばす」の用例をみると、下女が、御新造さんや、御新造さんの御主人を話題にした中で使い、また同じ下女が話し相手である女房に対して、またこの御新造さんと言われる嫁がしゅうとめに対して、直接「遊ばす」を使っている。

あなたも能くお覚なすつてお出遊ばすネ(浮・一五四)

これは、下女が話し相手である女房に言ったことばである。「なすって」と「遊ばす」とを、同等の資格で使っている。

また、次の例は、下女同士が、「せめて湯へでも来た時は持前の詞をつかはねへじやア、気が竭らアナ」と、さんざん「やアがる」ことばを使い合った果てに、言ったものである。「遊ばせ詞」とは対照的に、江戸の庶民のことばとして、「やアがる詞」があったことが分り興味深い。

●そんなら、うぬが所のかゝアめは、髪を引束やアがることが、上手だナ■ヲイ、上手だがどうした。うぬが所の旦那めは、今おらが内へ来やアがつて、おらが親玉めと一緒に酒を食つて居やアがるが、まだ滅多に仕舞やア

がらねへから、かゝアめに預けて置て、おれ独で湯へ来やアがつたら、いつの間にかうぬも来て居やアがる。(浮・一六一)

是じやア喧嘩をするやうだ。ア、、是でさつぱりした。モウ〳〵〳〵内に居ると、あなた、どう遊ばせ、斯遊ばせで、おそれぬかせるのう。しみ真実否だ(浮・一六一)

また、

堀の内さまを信心さつし(浮・五八)

の「さっし」は、

「させらる」の転じた尊敬を表わす助動詞「さしゃる」の命令形である。これは「させられい」から「さっしゃれ」が「さっしゃい」「さっせえ」「さっし」と転じたもので、語形が簡略になるにつれて敬意が薄くなる。

という原則通り、この簡略形が現わす敬意はうすい。

また、

おのしはよく温りやれよ(浮・一五〇)

この「やる」は、動詞「ある」の転である。他の動詞の連用形について、四段型に活用し、(「お」を伴って用い)尊敬の意をあらわすものである。その意味は「…なさる」にほぼ同じである。

そして、

コレ、御あいさつを申しやれ(浮・一三〇)

のようにも使う。この「申す」が、動詞の連用形について謙譲の意をあらわすことがある。

いつウでもおもらひ申てばアつかり(居やすネ)(浮・一四一)

次の例は、仙台浄瑠璃の中のことばで、「おっしゃると」という意味にあたる。

おぎやり申せば(浮・九五)

また、

お宿へよろしくおつしやつて下さいまし(浮・一一二)

あまりたいくついたしますから(浮・八六)

「おっしゃる」が尊敬を、「下さい」が敬意を伴った懇願を、そして、「いたす」が謙譲をあらわす。

こんなふうに、尊敬は、相手を敬う動詞、自分をへり下らせる動詞が示し得た。「遊ばす」にしても、「なさる」にしても、動詞としての使い方と、補助動詞としての使い方とが共存している。動詞そのものの使い方が存在するあいだは、まだ、助動詞としての道を歩みはじめたとは言い切れないものと思う。

林巨樹が、『品詞別日本文法講座 8』において、「転化の助動詞」について述べているが、助動詞とは何か、の問いは、すぐに答えるにはむずかしいさまざまな問題を持っている。そして助動詞の発生を考えると、そこには、不明ながらも、動詞の存在が言われることも多い。

けれども、例えば、完了の助動詞「ぬ」の語源は、動詞「往ぬ」かも知れないという説があって、活用のしかたも同じと言われるのであるが、そうだと断言できるかどうか、私としては疑問に思っている。助動詞とは、原形をよび戻すのが困難なもの、もう戻れないほどに、形の変化してしまったもの、逆にその生れをたどることが困難であればある程、助動詞としては完成していると受け取っていいようにも思われる。

古田東朔は、相手への丁寧をあらわす「ます」の、語源について次のように述べている。

(1)「座す(サ行四段動詞)」説(大槻文彦・松下大三郎)、(2)「おはす」説(松尾捨治郎)、(3)「まゐらす」説(安田喜代門・春日政治)、(4)「まゐらす・座す(サ行四段)混合」説(湯沢幸吉郎)、(5)「まゐらす・座す(サ行四段)申す混合説(吉沢義則・石田春昭)、などがある。これらの説のうち、現在は「まゐらす」説が妥当と考えら

れている。「まゐらす」を起源と考えた場合、まゐらす→まゐらする→まらする(まいする)→まっする→ます、のように変化してきたと考えられる。

いずれにしても、既に、「ます」は「ます」以外の何ものでもなく、動詞や一部の助動詞の連用形にだけつづいて、存在する。だから、助動詞であると言えるのである。

なお、『浮世風呂』では、「ます」の転じた「やす」の例も見える。

こつちは王を取やすツ(浮・八九)

なお、現代語の尊敬表現として大きな力を持つ「なさる」は、「浮世風呂」でも、すでに、相当、尊敬表現としての地位を得ている。

イヤ、角を突込(つっこ)めとお出なされたかつ(浮・八九)

あのまアざまを見なせへ(浮・一二五)

御免(ごめん)なさいと(浮・四七)

そして、現代語では

おやすみなさい　かあさん(お・五五)

言ってごらんなさい(小・一五)

対象とした用例では、命令形ばかりだった。

また、現代語の敬意の表現としては、この他、「くださる」「いたす」「おっしゃる」「いらっしゃる」「ございます」などがある。

自分のセルをきれいに染めて　小さな上っぱりをつくってくださった(お・八一)

おいしい空気をいっぱい吸わせ／しあわせつかんであげるから(お・二五)

やはり、集めた用例の中では、命令形に、敬意表現が多かった。親しい中でも、願いごとの場合には、相手への敬意を増すことによって、願いの叶えられるようにという心を表現する、日本語の敬意のひとつのあらわし方とも考えられるであろうか。

おかあさん／おかあさん　学級費ちょうだい（お・七六）

母よ　嘆かないでください（お・七〇）

なお、「おくれ」は、『浮世風呂』でも、現代語でも同じ用い方である。

爰（こゝ）へ水（おひや）を少しお呉れ（浮・一四九）

ぼくを許しておくれ（小・三八）

三　過去・回想

次に、助動詞の大きなグループの三つめとして、過去・回想の助動詞を見ていきたい。過去・完了の助動詞としては、大まかに「た」一つがあると考えられるが、古典語の過去・完了の助動詞である「き・けり・つ・ぬ・たり・り」の現代語訳にあてはまるもの、すなわち、現代語としては既に滅びてしまったこれらの助動詞を、現代語の表現の中に復元してみると、どんな言い方となるのかを考えて、それらのひとつずつにあたってみようと思う。現代語としては、「た」「ていた」（「ている」）「ちゃった」「てしまった」（「てしまう」）などであり、江戸語としては、「た」「ていた」（「ている」）「ちいまった」「てしまった」などがある。その他に古典語のままの「たり」「けり」「ぬ」「き」「り」も見える。

1 た

遠い日には争いあった私たち(お・七〇)
今夜はせっかく山下勇三さんをお招きしたので(五・一五〇)
とうちゃんは胃がんで死んだ(お・三四)

すべての「た」の用例は、単純な過去をあらわす。仮定法で使うときなどは、確認を表わす。

どうしたって、どこへ行ったって、地球の裏側行ったって、ヨーロッパ行ったって、日本ってものがあってそこを見ちゃうわけだ(五・二〇九)

江戸時代に戻って、『浮世風呂』でも、「た」は、単純な過去と確認とをあらわしている。

ヲヽ、さむくなつた(浮・一二七)
あきれたお人さネ(浮・八八)
きのふ大師河原へ参つたが(浮・一〇五)

2 ていた・(ている)

「た」が使われているのは、「ていた」という形であるが、古典語の助動詞で、存続をあらわす「たり」「り」は、ほとんどの場合、「ている、てある」と口語訳した方がいいので、「ている」の用例もあわせて目を通してみる。

さいふのなかには　いつも二百円がはいっていた(お・三四)
生きるのに精いっぱいで／ふと　忘れていたおかあさん(お・五六)

「ていた」の用例をみていると、過去のある時点での動作の存続をあらわしていて、そして、その動作の存続が、既

に過去のことであることを、「た」が示しているのである。これにくらべて「ている」の用例は、すべて動作の存続をあらわしている。

大輪の菊よりも　野に咲いている菊が（お・四五）

五木さんのほうでかえってむずかしく考えてるんじゃない？（五・一三九）

過去のある時点を、「いま現在」とする時に、「ている」が使われる。

どれほど　ねたのか／ちゃわんのわれる音／とうさんのだみ声に　目がさめた／かあさんの　小さな小さな声も聞こえる／かあさんが　なぐられている／かあさん　なぜ泣いてあやまるの／悪いのはとうさんよ　お酒を飲むとうさんなのよ／どうやって　家をでたのか／どうやって　とうさんから逃げることができたのか／いま　かあさんと私は／暗い　寒い夜道を歩いている（お・三八―三九）

『浮世風呂』に、「てゐた」は、用例数が少く五例しかなかった。当時は新形だったのであろうか。

今しがたまでおめへの来るのを待て居たはな（浮・一一四）

しばらく考てゐた所が（浮・六〇）

「てゐる」の方は、用例数も多く、現代語の用い方と少しも違わない。

そばにねてゐるいぬにむかひ（浮・五六）

此あまめ覚てゐろ（浮・一六三）

3　てしまった・ちゃった・（てしまう）

古典語の助動詞の「つ」「ぬ」を「てしまう」と完了の意味で現代語訳することがある。ここでも、「た」は使われないが、「てしまった」「ちゃった」とともに「てしまう」にもあたってみる。

おまえは、じぶんの力をまちがえて使ってしまった(小・二六)

事態の確実な完了を「てしまった」はあらわす。

かあさん　ぼく恋人できちゃったよ(お・三六)

「ちゃった」は「てしまった」と同じ使われ方だが、一層口語的で、現代語ではよく使われる。

(イ)　手がつけられなくなり　つい　いってしまう／「駄目じゃない!」ということば(お・八二)

(ロ)　小さい妖精は、わかものとむすめのすがたが、白いリンゴの花の向こうに消えてしまうまで、見ていました(小・四一)

(ハ)　この顔をみると　いつも頭がさがってしまう(お・九四)

「てしまった」が、「た」という過去の助動詞の力で、過去における一回限りの確実な事態の完了を示しているのにくらべると、「た」のない「てしまう」「ちゃう」は、一回ごとの完了、その時ごとの完了というようにも考えられる。もちろん、(ロ)の用例のように、一回だけの完了の場合もあるが、(イ)(ハ)のように、同じ事態が、一回ごとに完了する場合にも可能な表現と思われる。次に「ちゃう」の用例をあげてみる。

一回行っちゃうと、なんかもう見ちゃったっていう感じがあるわけですよ(五・二〇八)

このごろ　やっと涙が帰ってきたの／ひとりで　ぬいものなんかしていると／わけもなく涙がでるの　そのうち大きな声で泣いちゃうのよ(お・六五)

なお、『浮世風呂』では、「てしまつた」が五例、「てちイまつた」が一例、「てしまふ」が一例、用例としては少い。

(イ)　御親父の身の脂をとう〳〵なくしてしまつた(浮・七〇)

(ロ)　おべそがあんまり云ばねだるから、昨日三絃を一挺買てやつたら、夫をも踏びしいて、撥をば何所かどう迷子にしてしまつた(浮・一四三)

（ハ）　金「みんな嘗て　妹「ちイまつた（浮・六五）
（ニ）　ゆびでかきまはしてけしてしまふ（浮・一六九）
（ハ）は、四十余の父親が六つばかりの男の子と、三つばかりの女の子を連れてきて、おふろの中で「おウ月さまいイくウつゥ十三なゝつ」と親子で歌い、下の子が、口がまわらないで「ちイまつた」と言ったものである。
ところで、『浮世風呂』には、「き・けり・ぬ・たり・り」の用例もある。
（イ）　はみがきのふくろをやうじにてつらぬきしを（浮・五六）
（ロ）　目出度のぶるそ愛たかりける（浮・一七〇）
（ハ）　竟に二冊の草紙となりぬ（浮・一一〇）
（ニ）　仍て再び増補して上梓せんことをはかれり（浮・一一一）
（ホ）　せなかをながしに来たり（浮・一一五）
「き」の一五例は、すべて連体形の用法で、講談師の口ぶりを真似た例（浮・五四）と、仙台浄瑠璃の例（浮・九六）をのぞくと、（イ）のように、作者が、おふろに入る人のさまざまについて述べたものである。「けり」の八例は、（ロ）の用例が、祝歌の最後にでてくるもので、後の七例は仙台浄瑠璃からのものである。「ぬ」の三例は、「女湯之巻自序」の中のもの、「り」の三例は、一例が医者のことば、後の二例は、（ハ）のように作者の前口上の部分にある。また、「たり」は二例が、前述の祝歌の中に、三〇例が状態・情景の描写で、後の一一例が会話の中のものである。
ソレ、王手　後「そこで合馬サ、ヲツト、待たり（浮・八九）
以上から考えると、当時話しことばの中に、「たり」が時々用いられることがあっても、「き・けり・つ・ぬ・り」はほとんど使われていなかったと言えよう。それらは、講談とか浄瑠璃とか祝歌とかに使われ、そして作者の地の文の中にも用いられているが、既に、文語的表現として意識されていたと思われる。

なお、現代語および『浮世風呂』の中に、

自分でさし絵なんかをかいたりする時(五・一三九)

利口をじこうといつたり、立派をぎつは、狐をけつねといふより能のさ(浮・一三四)

の言い方があるが、この「たり」は、やはり存続の助動詞「たり」と同じ流れのものと考えてよいであろう。

また、「た」の仮定形に「たら」がある。

おまえがおとなになったら、わたしのかわりに、公園へ行ってもいいよ(小・一一)

もしほかの分野にほうり込まれたら、そこでそれなりの才能を発揮しただろうという感じがする(五・二〇三)

確実にある事態が実現したら、完了したらという条件をあらわす。そして、その後には、推量や命令の形をとるものが多い。また、動作がすぐ続いて行われる意味をあらわす。

(イ) なんのことをいってるんだと思っていたら、そのことをイラストレーションっていってるんですね(五・一四五)

(ロ) そしたら/「かあちゃんは　たつ年生まれだから強いんだよ」といった(お・三四)

「た」は過去であり、回想であるとともに、判断の確実であることを示す用法がある。また、仮定そのものが強調されるようにも使う。

わたくしの願いは、この赤んぼうのことなのです。どうか、この子が大きくなったら、心も体も美しいむすめになりますように。そして、美しいむすめになった、いちばん良い日に、この子には、木のすがたを、あたえてやってくださいますように……(小・一五)

なお、『浮世風呂』の用例をみると、その用い方は現代語とほとんど変らない。ただ、(ロ)(ハ)のように、条件を示さず、単純に完了を示して、すぐ続いて次の動詞の作用や行為が起る意を示すものが、現代語よりも多い。

(イ) どうしたら楽になるだらうか(浮・一五九)

(ロ) 内へ這入つたら温になつたぞ(浮・一一六)

(ハ) 麦飯かと思つたら鼈かへ(浮・一三一)

現代語の「た」の活用形を見ると、終止形、連体形が多く、未然形の「たろ」、仮定形の「たら」はあるが、命令形はない。連用形としてはないが、「雨が降ったり、止んだり」の「たり」は、もとをさかのぼれば、連用形に行きつくであろう。とすると、「き・けり・つ・ぬ・たり・り」の中で、『浮世風呂』でただ一語だけ、当時の会話の中に生きていた「たり」が、現代語の過去の助動詞の「た」の源と考えられる。

四 推量・否定

次に、助動詞の四つめの大きなグループとして推量と否定の助動詞について述べる。はじめに推量の助動詞について述べる。

1 う・よう

2 たろう・だろう・ましょう・でしょう

吹雪くまえにクリーム送ってやろう(お・七五)

それは小説家をちょいとやってみようと思うんだっていいし(五・一四九)

さて、『現代語の助詞・助動詞』では、「う」について、次のように述べている。(二四二―二四三頁)

①意志を表わす。(四段活用の動詞、助動詞「ます」の未然形につく。)②勧誘を表わす。(①に同じ。)③推量・想像を表わす。(用言に直接につくよりも、「であろう」「だろう」「でしょう」などの形の方に多く用いられる。)

また、『古典語現代語助詞助動詞詳説』において、堀田要治が次のように述べている。

口語の「う」「よう」は、文語の「む」のような、係り結びのための連体形・已然形もなく、もっぱら終止法のための終止形中心であり、意味・用法でも、推量はむしろ「であろう」にゆずり、「う」「よう」はおもに意志を表わすのに用いられ、推量としては、わずかに、存在状態の動詞「ある」につくときと、形容詞・形容動詞につくときに限られている。(一五六頁)

これらの現象は、私の限られた用例にもあてはまっており、現代語の推量の助動詞における、極めて重要な事実なのであろうと思う。

とうさんには　きっと最後までわからないだろう(お・三九)

大阪は寒かったろ(お・五四)

ところで、普通、「う」の意味を考えるときに、①意志②勧誘③推量・想像にわけられる。そして、①は多く一人称単数につき、②は多く一人称複数につき、③は多く三人称につく、と言われる。このことについて、確めてみたい。

だれしもが思い　それを求め　そして　つかもうとし(お・八三)

それまでは写真家になろうなんてのは(五・二〇三)

一緒にブラジルへ行った連中が、一番印象に残っている言葉っていうのが「オレレ・オララ」だったわけ。じゃ、それにしようってわけで(五・二〇七)

自分で区役所の受付やってみよう(五・一四九)

母は　六人の子供をかばうように抱き　まんじりともせず見つめていた／これから身を投じようとしていること

が（お・四〇）

主語をその周辺からさがすと、自分であり、わたしであり、母であり、連中である。

日本語は、古来、かならずしも主語をたしかに表現しない。主語をいちいち言わなくても、誰が主語なのかを、表現全体で理解する言語なのである。それと同じことが、意志の意味をあらわす、「う」「よう」と一人称単数との間にもあると考えてはいけないであろうか。右の用例を見ると、「う」「よう」は話手の意志であり不特定のある人の意志であり母の意志であり連中の意志であるように見える。と同時に、それらは「つかもう」「写真家になろう」「それにしよう」のように、括弧でくくるべきもので、やはり一人称の用法である。

希望の助動詞「たい」は、ここにあげた資料では常に自己の希望をあらわす。時枝学説では、「たい」は接尾語とされる。それは「行きたい人はいませんか」のような例もあるからであろう。しかし実際にはほとんど「たい」は一人称に使われ、助動詞的である。そして、誰の意志であるかということは、主語が誰であるのかを明らかに言わなくても自然にわかるように、自然にわかるのではないだろうか。

次に、②の勧誘の例であるが、話手の勧誘である。

（イ）　ぼくたちはいっしょに、死ぬときまで、はなれずにくらしましょう（小・二二）

（ロ）　では最後に五木さんにうかがってみましょう（五・二一四）

なお、（ロ）は、アナウンサーに、五木寛之がなっての表現である。これはマスが相手に対する丁寧を表わしているので、その下のウが相手に対する働きかけであることがよく分る形となっているのである。

また、次の場合は、意志ではなく、推量の形で仮定を示すもののようである。

どんなにこの手が／母のそれに似ようとかまわないけれど／たとえ　どんなことがあろうとも／あのときの母のように／幼い　わが子との別離の涙に／この手をぬらしたくない（お・八五）

次に③の推量の用例をみてみたい。これらは「でしょう」「だろう」「ただろう」「たろ」「であろう」の形をとっている。この中では、「だろう」がもっとも不確実な推量をあらわす。

ごめんね　かあさん／はがゆいだろうと思う／くやしいだろうと思う(お・八三)

木になるなんて、なんということだろう(小・二三)

がんばっているんだろうね(お・五一)

ほかの道にいっても、一国一城の主になっただろうって感じがある(五・二〇三)

汽車は混んでたろ(お・五四)

雑誌の中であろうと、室内であろうと、つまりある空間において、周囲とかかわり合いを持つ絵というものがイラストレーションであるという(五・一四三)

なお、用例数のもっとも多かったのが、丁寧体の「でしょう」であった。

つまりイラストレーション・ブームという現象があるでしょう(五・一四〇)

そうでしょうね(五・二〇三)

イラストレーターに最もふさわしい日本の造語ってのは、やっぱり画家でしょうか(五・一四九)

育ちざかりの五人の子どもをかかえ、あなたは、どんな思いだったでしょう(お・六六)

丁寧体の「でしょう」は、どこかに、相手の確認というか、同意というか、それを求めながらの推量と言えるように思う。「でしょう」の推量が持っている不確実さは、相手の心がはかりかねるという、そこに原因したものと思われる。自分の知っている事実や、事態や、判断を、口に出して述べ、その事柄を丁寧に相手に伝えて、同意あるいは確認を求めて、その上で推量の「う」を用いるのである。なお、推量の場合は、すべて、話手の推量であったことが大きな特徴である。これは、助動詞は話手の判断のみを表わすとした時枝博士の見解の正しさを裏づけるものである。

ここで『浮世風呂』の推量の助動詞の「う」について述べる。

お目覚にお薩をやらうヨ（浮・一三六）

コレ、貴さまたちに湯を進ぜよう（浮・九八）

あの哥にせうネヱ（浮・一三九）

現代語と同じく、動詞の未然形に直接「う」がついたものは、ほとんどすべて、意志をあらわす。そして、『浮世風呂』では、主語の意志をあらわすというよりも、話手の意志をあらわすことがもっとも多い。また、次の例は、引用の形になっており、相手が一人称として意志を表明している例である。つまり「喧嘩をせう」が相手の意志である。

また喧嘩をせうと思つて（浮・一一六）

さらに、外山映次が『古典語現代語助詞助動詞詳説』において「う（よう）とする」形で、動作・作用が実現の一歩前にある状態を表わす（二二一頁）と述べているものにあたる言い方もある。

兄さんはの、わん〳〵のばゝつちいを踏うとしたよ（浮・六二）

来年ごろばんとうにぬけやうといふ人物（浮・一一五）

ところで、勧誘には、自己の意志を相手に強力に及ぼそうという面がある。また、相手の意志をそれとなく聞くという場合もある。それから、また、相手の勧誘を受けて答えるという場合もある。いずれにしても、聞手と話手の両者がいつも含まれての表現と言える。ここから、相手に対する丁寧をあらわす「ます」が勧誘に使われることの多い理由もわかるように思う。

おまへとわたしと遊ぼうねへ（浮・一三七）

いかゞ致しませう（浮・六七）

おかみさんヱ。チツトお流し申ませう（浮・一五〇）

この他、「あらう」「出来やう」「形容詞カリ活用にうがついたもの」などは、推量である。

手負があらうて(浮・八八)

どなたもおやかましからうが(浮・九三)

そして「だらう」「たらう」「ござらう」「であらう」は、すべて推量である。話手の推量をあらわす。

おつかアが待てゐるだらうぞ(浮・六五)

お如来さまのお授(さづけ)だらうよ(浮・六一)

なんのこつちやろな(浮・一三三)

ゆふべはおねむかつたらうネ(浮・一一二)

せつなうございましたらう(浮・一五四)

目へはいつては眼病であらうな(浮・一〇〇)

相かはらず碁でござらう(浮・六五)

3 らしい・べし・そうだ・まい

「う」「よう」以外の推量の助動詞である。これは想定・伝聞・見込み、およびその否定である。

職業として志望している若い連中が何万人もいるらしいってことは判る(五・一四〇)

「らしい」は古典語では確かな根拠をもった推量をあらわすが、現代語でもやはり根拠をもつ推量をあらわすようである。ただ、古典語ほど明確にその根拠は示されない。一方、「らしい」には、

だから、町の人たちは、お祭りの日らしく(小・八)

のように、体言について、「いかにも……にふさわしい」という意味をあらわす場合がある。そして、「べし」は当然

をあらわす。

なだめるべきだと　わかっているの(お・八三)

また、「そうだ」については、私が集めた二六例の用例中、一五例が形容詞の語幹についたもの、七例が動詞の連用形に、二例が形容動詞の語幹に、残り二例が「てしまう」の連用形についたものであった。そして、終止形について、伝聞をあらわす用例は、この中には見当らなかった。実際に使われることが少ないことを示すのであろう。

皆、恥ずかしそうにうつむきながら(五・一四四)

おとうさん、シラカバといずみは、こんなに幸せそうです(小・二九)

動詞の連用形、「てしまう」の連用形についたものは、「今にも〜しそうな」という意味をあらわす。

すぐに死にそうな爺さんでも　みっけっかな(お・五二)

わたくしのたいせつな、バラの木が、かれてしまいそうなのです(小・九)

次に『浮世風呂』におけるこれらの助動詞について述べる。

「らしい」はすべて体言か、形容動詞の語幹についたものばかりである。

モちつと若者(わかいもの)らしくして(浮・一五五)

おまへのがほんまに尤(もっとも)らしいが(浮・一三四)

なお、「べし」の約半数は、作者の、前口上や、登場人物についての説明である。後の半数のほとんどは、田舎出の男のことば(浮・七〇―七二)と、仙台浄瑠璃の中(浮・九五―九六)にあった。その他は、「あくたれとよはれたるおしやべりかみさま、お舌(した)」のことばの中に二例(浮・一四二・一四六)、そしてもう一例が、かみがたすじの女と関東の女とのことばくらべのところにある。つまり「べし」は江戸時代すでに文章語または方言の用語となっていたのであって、すでに普通には使われなかったことがわかる。

かみ「……扨また関東べいじゃ。どうしべい、斯しべい、行べい、帰るべいとは、扨見とうむないナア 山「それもネ。万葉集とやらその外神さまの時分の本にネ。へい〱詞かあるとさ。可とは可といふことで、行べい、帰るべいは、可行、可帰といふ詞で、いまでも万葉とやらの哥よみは、べい詞を遣ふさうさ(浮・一三四—一三五)

また、「まい」は打消の意志で、集めた現代語の用例の中にはなかったが、現代語とまったく同じ用い方である。

あの五十両で一生は食まいよ(浮・一五四)

一言もあるまい(浮・六九)

また「さうだ」には伝聞推定のものもあった。

啼さうな顔をしたつけがの(浮・七九)

傘屋の六郎兵衛さんが亡たさうだネ(浮・八八)

さらに、以上のほか『浮世風呂』には「あらじ」一例、「ん」九例があった。文章語または方言であったことを示す。

早うおこして、其体雪がんセ(浮・七七)

穢者 有羅之(浮・一一二)

4 ない・ず・ぬ・ん

否定の助動詞としては、「ない」がほとんどを占めていて、「ず」「ぬ」がわずかあるだけである。動詞の未然形についたものばかりである。

どうか泣かないで(小・三八)

そして 一週間も十日も帰らない(お・七六)

まあ、行かなくっちゃ、お金をくれそうもないから(五・二〇八)

おまえは、この花を、シラカバになったむすめと、いずみになったわかものがいる草むらに、植えなければならない(小・二七)

否定とは、上につくことばの否定である。上の動詞が実現しないことを示す。

動かぬ手をいくどもたたく(お・八三)

顔に似合わず　きれいな声だ(お・五三)

うるさいな　なにもいらんぞ(お・五四)

これ、間違いありませんね(五・一三九)

つづいて『浮世風呂』の否定について述べる。「ねへ」がもっとも多く、「ぬ」「ず」「ん」と続く。そして、わずかに「ない」の形があらわれている。次の用例をみていると、江戸時代の風呂屋での、生き生きとした人々のざわめきが、伝わってくるように思われる。

今年のどろぼに由断がならね(浮・一三七)

女の利口はやくにたゝねへ(浮・一五九)

ナニてめへが気のきかねへくせに(浮・五六)

向三軒両隣のつき合(あへ)をしらねへとんちきだ(浮・一四五)

兎角姑が口を出すと納らねへよ(浮・一二七)

仏になつて食ふやら食(くは)ねへやらしれねへッ(浮・一二四)

なお、「ず」の用例四四例のうち、一七例は、作者の口上あるいは説明の部分にある。

出来ずともいゝ子は出来て(浮・一二五)

銭湯天明(よあけ)ていまだ店を開(ひら)かず(浮・五五)

また、「ぬ」の用例は、八〇例のうち一一例が前口上の部分にある。

幼さまがお乳におこまりなさらぬと(浮・一二〇)

せめて半分売てくれぬか(浮・八四)

他人の飯をたべねばネ(浮・一二一)

「ん」は、「せん」が七例、その他が八例である。そして、「せん」の内五例は「やせん」の形で、相手に対して強気の口調である。

歯かけでもおまへのお世話にやアなりャせェん(浮・一三七)

私はしらんよ(浮・一三六)

また「ざる」が一例となっている。

いらざるお世話さ(浮・一四六)

現代語の否定の助動詞である「ない」は、七例だけあった。使った人も明記していくと、

(イ) 湯でばかりは食ないか(浮・八三)(通りがかりのよっぱらい)

(ロ) 逆上ないで至極よいおくすりでございます(浮・一二〇)(嫁いだ娘もいるかみさま)

(ハ) 鰻なども御当地のは和いばかりでもみないがナ(浮・一三二)(かみがたすじの女)

(ニ) こんな穢いものは入らないよ(浮・一三七)(憎まれっ子のおにく)

(ホ) あんな馬鹿はしんに入ないよ(浮・一三八)(おはる)

(ヘ) おまへとは遊ばないよ(浮・一三七)(同じくおはる)

(ニ)(ホ)(ヘ)の三例は、「七八歳をかしらにして、六歳ばかりなる娘の子、四五人」の中の、「おにく」と「おはる」のことばである。わずかではあるが、「ない」がすでに使われていたことがわかる。

五　断　定

さて、次に断定の助動詞について述べる。

1　みたいだ・ふうだ・ようだ

はじめに、古典語ならば比況の助動詞の系列に入るのではないかと思われるもの、すなわち「みたいだ」「ふうだ」「ようだ」について述べる。

もしも、仮に、助動詞を「動詞を助けるもの」として限定して考えるならば、これら「みたいだ」「ふうだ」「ようだ」を直ちに助動詞と言い得るか疑問である。これと同じようなことは古典語にもあり、「ごとし」を助動詞とする説があるが「ごとし」は「……ノゴトシ」「……ガゴトシ」とも使い、助詞ノ、ガを承ける。それゆえ、これを形容詞と見るべきだと言う意見がある。しかし、今はその意味によって「みたいだ」「ふうだ」「ようだ」を助動詞とする立場に立って考えることにする。

　フグみたいだろう　赤ちゃん産まれるのよ(お・九一)

だけど、テレビっていうのは、本当にそれだけみたいな気がする(五・二一四)

ふつうにして、息するみたいに(五・二一二)

毎年、何万っていう人間が卒業していて、そういうふうなことに対してどんなふうに考えるかって、いってこられるわけです(五・一四八—一四九)

では最後に、紋切型ふうに、きょうは大変面白いお話をありがとうございました(五・二一五)

「ふうだ」は、「いうふうな」という言い方がもっとも多い。両者を比較してみると、「みたいだ」は、たとえの対象が、具体的であり直接的である。

それに対して、「ふうだ」の方は、具体的に事柄をあげながらも、むしろどこかであいまいな言い方に流れていくような表現のしかたに見える。そのために、そんなふう、あんなふう、の言い方が生まれるのであろう。

五木さんみたいにものを書けっていわれても(五・二〇三)

カルピスのコマーシャルっていうふうな感じ(五・二一五)

次に、「ようだ」を現代語と『浮世風呂』との比較で見てみる。

星のような目や(小・八)

現世をいわば地獄と見るような(五・二一二)

写真っていうのは、原稿広げて日常しゃべっているように書くっていうわけには(五・二〇五)

「ようだ」には、いつも「と同じように」という意味がついてまわっている。

そこでわたしは、たくさんのわかものたちと同じように、わかいむすめと知り合いました(小・二〇)

このように、事態の類似を言うところから転じて、未来に実現して欲しい事態を具体的に述べて、願う言い方の中に、「ように」が使われている。

どうか、やすらかに死ぬことができますように(小・一〇)

冬になっても、おかあさんの手に、あかぎれが切れないようにしてください(小・九)

次に『浮世風呂』の「ようだ」を見てみる。

鼠の糞のやうな垢(あか)がよれるよ(浮・一一六)

などゝてにはのやうな事をいふ(浮・六七)

体言に「の」がつくもの二一例の内、一五例は、「おのし」「おめへ」「此子」「御自分の子」「姑」「私」「男」のように、「人」についている。

粕兵衛さんのやうに酒乱でないから能よ(浮・一一二―一一三)

おらア女だけれど心は男のやうだから、愚痴なことは嫌だ(浮・一二七)

また、「やう」は、動詞・助動詞の連体形につづき、さらに「さやう」「かやう」「あのやう」「このやう」「どのやう」の言い方があって、そのほとんどが「さやう」である。

虫の這ふやうにあゆみ来るは(浮・五五)

耳の脇にばゞツちいの溜らぬやうに(浮・六四)

そふいふ声は聞たやうな声だ(浮・九七)

ハイ、さやう(浮・八八)

また、次のような言い方は、体言のはたらきを示している。

おめへは些ヅヽも酒がいけるだけ気の持やうが違う(浮・一二三)

また、「ごとし」の用例が一四例ある。三例が話しことばの中で、後は、文章語的な前口上か説明の部分にある。

案のごとくだ(浮・七〇)

されば常言にいふごとく(浮・一一二)

以上、限られた用例の中で考えてみると、『浮世風呂』で「ようだ」と表現されていることの一部が、現代語では、「ふうだ」「みたいだ」に表現がわかれてきたようである。

次に、断定の助動詞「だ」について述べる。

2 だ・だった・のだ

きれいな声だ（お・五三）
当時、三歳だった弟の結婚式（お・六七）
篠山さんはすごく正直な人なんだな（五・二一三）

「だ」の用例をみていると、「声」や「三歳」などの名詞につくものが意外に少くて、形式名詞と言われる「わけ」や「こと」などに多くつき、さらに、長い叙述を、一気に「の」を仲立ちとして「だ」で断定して終るものが相当数あった。後でも述べるが、『浮世風呂』の「だ」の特徴は、「高鼾だ」のように体言に直接「だ」がついて終るものが多い。ところが、現代語では、一六例が体言に直接ついているが、その中で、「だ」のまま言い切りで終るのは、四例しかない。後は、

これまでイラストレーションだのアート・ディレクターだのって気軽に使いながら（五・一四三）
あなたが、実際にお坊さんの家の出だということとは（五・二〇九）

のように、「だ」で終らずに続いていく言い方になっている。さらに、「……だから」と、条件句をつくる表現を見ると、

ひのえ午（うま）だから　夫を食い殺したという（お・六四）
まだ現実には持ってないんだから（五・一五〇）

などとなっている。全般的に、現代語の例は長い。そして、「ダメな人なわけだから」「常識だったんだから」のように、断定の「だ」が続く。多分現代語の断定表現のひとつの大きな傾向であろうと思う。

『浮世風呂』の「だから」の用例六五例のうち、

こりやア、マア、おれが書くのだから能くはねへがの（二・下・一六七―一六八）

山の神の功を経たのだから(浮・一四三)

と、「のだから」は二例しかない。後は、

あれも授り者だから(浮・一二四)

しみつたれな裁屋だから(浮・一六七)

さういふもんだからの(浮・一二四)

のように体言に直接つくものがもっとも多く、「形容動詞」「それ」「もの」などについたものがある。「それだもんだから」という言い方もあるが、全体としては、簡潔である。それは、やはり、体言に「だから」がつくものが多いせいと思う。

自分自身にも、相手にも確かめ確かめ断定しながら、ことばを口に出していく。「だ」の断定の力が弱くなってくると、「だ」を重ねて、断定の判断を強めていく。「体言につづくだの断定」が、少くなってきたと、断言するには、会話の中の断定表現に、目を向けなくては言えないのであるが、全体の傾向として、そう言えるように思う。

それからまた、「だ」は条件句を形づくっている。「だけれども」「だけども」「だけど」「だから」「だが」など。

貸し家札がはってあったりしたんだそうだけれども(五・一五一)

あの、本当に恥ずかしいんだけど(五・一四九)

かあちゃんは　たつ年生まれだから強いんだよ(お・三四)

そんなもんだと思うんだがなあ(五・一四六)

そしてさらに、条件句を形成した「だ」は「だけど」「だから」「だが」「だって」「だったら」として、相手の断定、あるいは、自分の断定をそのまま受けて、接続詞の用法を持ちはじめる。

天に星、地に花、人に愛って色紙見るたびにコワくなるんだけど。だけど、あれもまた考えようによってはすご

味があったりしてね(五・二〇八)

ところがもうわれわれのほうで、イラストレーションっていう言葉にこだわらなくなっちゃった。だから、絵かきでもいいし、さし絵でもいいし、もうなんでもいいやと(五・一四五)

……五木さんは自分のことを何というんですか。五木もの書き。山下だったらぼくは絵かきでいい(五・一四〇)

だけど　かあさんがいったこと／素直じゃないわ／だって　疲れた肩を　だれがたたいてくれるの(お・四四)

また、日常の会話の中では、「ンだわよ」「ンだな」の言い方もされている。

兄弟で　それを笑ったら／ンだわよ　五人でかわるがわる吸うんだもん(お・五二)

なお、「だ」には、形容動詞の活用語尾としての用法もある。

かあさんは　きれいでおしゃれだ(お・四二)

それでは次に、『浮世風呂』では、「だ」がどんなあらわれ方をしているのか、見たい。

現代語との著しい差は、『浮世風呂』にたくさんある「だ」の用例のほとんどが、「体言」に「だ」が直接して、言い切りで終るものだという点である。もちろん、現代語の用例が、純粋に生きた会話とは言えないものなので、日頃、現代の人が無意識のうちにかわしている会話ばかりを集めてみたら、「体言＋だ」で言い切る形が多くなるかも知れない。『浮世風呂』の言い方に接近するかも知れない。ただ、わずか一一例しか「のだ」の用例がないのを見ると、『浮世風呂』の世界では、まだ、まっすぐに「体言＋だ」の表現が断定の判断をあらわし得たと言えよう。

是でも大体銭(てへくぜね)をかけて習ツたのだア(浮・一〇五)

人さまの噂なぞは是許(これんばかし)も仕たことのねへのだ(浮・一四六)

どうするのだ(浮・九一)

「体言＋だ」の形は、次のように、さまざまな表現となっている。

おのれふといやつだ(浮・九八)
目は人間の眼(まなこ)だ(浮・一〇〇)
それはほんに能(よく)〱の大病だネ(浮・一五六)
痛い腹も切らずにすむことだ(浮・一五三)
あぶねへもんだ(浮・五八)
最う一ぺんおしやらくをする気だものを(浮・一二二)
なんだ。此がきめヱ(浮・一四五)
湯はいくらだ(浮・八一)
ほんにさうだつけ(浮・六〇)

それから、形容動詞の活用語尾もある。

全体(ぜんてへ)気前(きめへ)が能(いゝ)から静(しづか)だ(浮・一四三)

また、「おーだ」や動詞、形容詞、助動詞に「だ」のついたものもある。

奇麗におなりだ(浮・一六五)
モツト酒買てこいだ(浮・一四二)
耳は遠い〱だ(浮・一六三)

また、条件句を形づくるものとしては、「だから」がもっとも多く、それに「だが」が続き、後は、「だけれど」「だけど」「だつけが」「だに」「だのに」「だつて」「だとて」がわずかあった。

嘘事(うそつこ)だから是でも能(よい)ねへ(浮・一四〇)
夫婦中がよくは夫婦喧嘩もねへ筈だが、親子喧嘩の合間こまには夫婦喧嘩さ(浮・一二六)

おらア女だけれど(浮・一二七)
去年まで五十九だつけが、取て六十だョ(浮・一二二)
皆子故だによ(浮・一五九)
とつざまが曲つた事の嫌な人だのに(浮・九四)
垢だつても毎日出る者でねへ(浮・一一六)

また、次の例などは、現代語とみても、ちっとも不思議ではない。

ア、、さうだよねへ、お夏さん(浮・一三六)
おいらじやねへよ、あの子だようョ(浮・八一)

なお、指定の「なり」は五七例、九例が会話の中で、後は、文章語的な口上と登場人物の説明の部分の中にあった。
九例のうち、五例が医者のことばで、特に、この医者のことばについて、

何なる者といふくちくせあり(浮・六五)

との説明がついていた。当時すでに特殊な、文語的表現、あるいは偏った表現となっていたようである。

伊勢十の主人、油八の太郎兵衛なる者(浮・六五)
いかなことでも(浮・一一八)
目は悪しの、足腰は不自由なりの(浮・一二二)

これらが会話の中の例であり、次の、

(イ) 長旅路の事なれば(浮・九五)
(ロ) 背後をながしあふたぐひ則信也(浮・四八)

(イ)が、仙台浄瑠璃の中に、(ロ)が、前口上の中にある。話しことばの中では、「なり」は当時すでにあまり使わ

れなくなっていたと考えられる。

また、この「なり」の系列で、仮定条件句を示す「なら」がある。

わたしにできることなら、きっとかなえてあげます(小・一五)

五木さんならどうします(五・二一三)

これから先、いつまでも、こんなふうにしていなければならないのなら、いっそ、鳥にでもなって、どこかへ飛んで行ってしまいたい(小・三六)

『浮世風呂』では、四八例あり、その内「そんなら」が一五例あった。

そんならお弁当にしてやるから、お菜好はならないよ(浮・一一八)

男なら云告て見ろ(浮・七八)

世が世なら嫁子を貰ツて、親をけつかうにすごす時分だア(浮・九三)

そして、現代語の「さようなら」がすでに使われていたと考えられる。

さやうならお静に　匚「ハイ、さやうならお宿へよろしくおつしやつて下さいまし(浮・一二一)

なお、「である」の約「であ」の転として、助動詞「じゃ」がある。次は、七十ばかりの隠居の言葉である。

どうじゃ番頭どの(浮・五九)

また、助詞「では」の転としての「じゃ」があるが、後に「ねへ」がくるのがほとんどだった。

ぞこねへ、じゃない。云損じゃ(浮・一三三)

以上で断定の助動詞「だ」を終る。次に、「だ」の丁寧体として、「です」に触れて、現代語の助動詞を終る。

3　です

「だ」の丁寧体として、「です」は存在する。語源について、古田東朔は、次のように述べている。

(1)「であります」説（大槻文彦・三矢重松・松下大三郎・松尾捨治郎＝でございます—でござんす—でごわんす—でごあんす—でがんす—でげんす—でげす〈でがす・でごす〉—でえす—〈でおす・であす〉—です〈だす・どす〉）、(2)「でござります」説（小林好日・安田喜代門）、(3)「で、す」説（山田孝雄）、(4)「でおはす」説（湯沢幸吉郎）などがあり、(5)説を妥当としながらも、なお方言の借入があったのではないかとした。最近においては、また「であります説」（前田勇）、「で候」説（鈴木勝忠）も唱えられ、それを批判し、京阪語がはいったとする「でござります」説（吉川泰雄）も示された。狂言記の「です」との間に文献的例証の断層の存することが、それと連なるか否かの意見の相違をきたしている理由である。

なお、「です」の現代語の用例数は、二五七例。「です」の「で」は古典語の「にて」であり、「に」は体言を承ける。したがって「です」は多く体言を承けそうであるが、体言に直接した「です」の用例は少い。二六例。

わかものは絵かきでした（小・三二）

ぼくの場合はサラリーマンですね（五・二〇三）

また、「わけです」「ことです」「ぐらいです」もある。

ところが、それがブームにまでなっちゃったわけですね（五・一四七）

まあ、そういうことですよね、外国へ行くってことは（五・二〇八）

また「のです」の形がもっとも多く、一一〇例を数える。これは動詞の下に「です」は直接つかないので、丁寧体で言い閉じるために、用言の下に「の」（または「ん」）を加えて、それを名詞句として、その下に「です」をつけて言うわけである。

まあ、「平凡パンチ」なんかがぼくの考えでは大変功績があると思うんですが(五・一四七)

皆、そこにいるのは、いわゆる当時の考え方でいうとクズばっかりなんですよ(五・一四四)

それからまた、「です」には相手に念を押し、問いかける終助詞のついたものが、六五例ある。

そのへんはどうですか(五・二〇九)

むずかしいですね(五・一三九)

ちっともむずかしくないですよ(五・一三九)

「です」の特徴として、『五木寛之対話集』の中の用例が相当数を占めた。ある事象に対して、事柄に対して、心の中のことに対して、自らことばとして表現した一切について、相手に問いかけ、同意を求める「です」「ます」は、相手なしには存在しない表現である。そして相手に対する丁寧語である「です」は、当然のこととして相手が眼前に存在することが、大事な条件である。『五木寛之対話集』の用例を考えてみると、公の場での対談という、一種、ひどく緊張した、火花のようなことばのやり取りが感じられる場合がある。相手が黙っては対談にはならない。そこから、とにかく、自身の問いを定め、断定し、そして、相手から、かならず返答を得ようとする質問者の意図から、「です」に終助詞のついた形が使われ、答える側からは、やはりことばを選んで断定し、そして、確認の意味で確かめの念を押す終助詞のついた形が使われたと考えられる。対談、童話、詩という三つの形態の違いの中で、「です」が対談に多くあらわれたという事実は、対人関係にふさわしいものを、本質的に「です」が持っていたからである。

さらに、接続助詞がついて条件句となり、そして、接続詞と転じていくのは、「だ」の場合と同じである。

仕事はあくまで独りの世界ですから(五・二〇五)

貧しかったのですが(小・二〇)

つまり、展覧会のために壁に並んでいるもの以外はすべてイラストレーションであると。ですからこういう店の

壁にこう油絵がかかってますね。これは完全にイラストレーションであると思う(五・一四三)

また、形容動詞の活用語尾が丁寧になった例もある。

おかあさんは/くろい　大きなかおをしてふとっちょです(お・六八)

なお、「です」が『浮世風呂』には、二例、私の集めた用例の中にある。

(イ)　傍あたりの鼻があぶねへでゑすは(浮・九六)

(ロ)　是すなはち物を食てすぐに吐くものです(浮・六六)

(イ)は、仙台浄瑠璃の中にあり、(ロ)は、医者のことばである。(ロ)について、中村通夫は、次のように述べている。

「です」は江戸において早くからみられるが、それは、特に武張った者の対話、医者・芸者の言葉に現われるだけで一般には広く行なわれていなかった。(「日本古典文学大系」『浮世風呂』六七頁頭注)

なお、「です」は体言を承けるのが本来であったから、動詞の終止形を直接承けて「私は行くです」のようには言わない。また「私は悲しいです」とも普通使えない。しかし「悲しいですね」「面白いですか」のように終助詞のついた形、つまり「ですよ」「ですか」の形ならば用いうる。これは、「か」「よ」などの終助詞が名詞につきうる語なので、「ですか」「ですよ」とすれば「悲しい」「面白い」が体言形と意識され、その下に「です」がつづきうるようになるわけであろう。

5　助詞（1）

西田直敏

はじめに

助詞は、日本語の膠着語的特色を示す重要な徴表である。原始日本語における助詞の存在とその様相については明らかではないが、古く中国で書かれた『魏志倭人伝』をはじめ、漢文で書かれた文章には、日本語の助詞は登場しない。五世紀ごろからの日本における金石文等に残された文章も漢文体であるために助詞はみられない。助詞が文章の記載形式の上に他の語と区別される形で示されるようになるのは、七世紀から八世紀にかけての頃かと思われる。

山常庭　村山有等　取与呂布　天乃香具山　騰立　国見乎為者　国原波　煙立竜　海原波　加万目立多都　怜[忄可]
国曾　蜻嶋　八間跡能国者（『万葉集』二　舒明天皇（六四一年崩）御製）

高天原尓事始而遠　天皇祖御世御世中今至麻氐尓天皇御子之阿礼坐牟彌継継尓大八島国将知次止天都神乃御子随
母天坐神之依之奉之随聞看来……（『続日本紀』宣命第一詔　文武天皇元年（六九七年））

漢文から日本語文への文章様式の移行の過程における表記上の苦心については、『古事記』序文に太安麻呂が書き残しているが、変体漢文である『古事記』では、漢文の助辞「者」「之」「於」「而」等に限られていて、積極的に助詞を表記するには至っていない。が、前掲の『万葉集』や宣命の記載形式では、助詞を明確に意識して表記していることが明らかである。さらに、『万葉集』における大伴家持（七八五年歿）の次の二首の歌になると、助詞の機能を意識した技巧的な遊びを試みている。

詠二霍公鳥一二首

霍公鳥　今来喧曾无　菖蒲　可都良久麻泥尓　加流々日安良米也　毛能波三箇辞闕之（四一七五）

我門従　喧過度　霍公鳥　伊夜奈都可之久　雖聞飽不足　毛能波氐尓乎六箇辞闕之（四一七六）

ここで「辞」といっているのは、漢文の「助辞」を意識しているもので、前述の『万葉集』や宣命の場合をも含めて、助詞意識や助詞の積極的表記が、漢文と日本語文との対比に由来することを示している。すなわち、漢文訓読がその源泉に想定される所以である。

なお、日本古典文学大系『万葉集四』の頭注によれば、赤間淳子の調査で、『万葉集』における助詞の使用度は、ノ　五一八五、ニ　二七三一、ヲ　一九七三、ハ　一八四三、テ　一五五九、モ　一四五一、バ　一四一八、ガ　九九七、ト　九三九、カモ　六八五、ソ　四二〇、ヤ　三六八、カ　三六四、コソ　三一九、ド　二九四、トモ　二三〇、ドモ　二〇九、であるという(三三三頁)。使用頻度の高い助詞をことさらに避けて詠んだところに家持の歌の技巧の生命があったことがよくわかる。

このように、古代においては、漢文訓読、すなわち、中国語を日本語に翻訳して読む場合に、外国語と自国語との対比から、漢文になく、補って読むべき重要な語としての助詞が、まず意識された。ついで、仮名の発明以前の、文字として漢字のみしかなかった時代に、日本語文を文章化して記載しようとして試みられたいくつかの方式——漢文体、変体漢文体、宣命体、万葉仮名体など——の中で、日本語をなるべくそのままの形で表記しようとして、漢字の意味(訓)と音を利用した宣命体や音訓交用の万葉仮名体において、特にその表記形式が工夫されることとなった。そうした助詞意識は、さらに和歌の表現における微妙な助詞のはたらき・表現効果への繊細な感覚へと展開していったのである。

その後、平安時代の漢文訓読における訓点に見られるテニヲハ、中世歌学や連歌論におけるてにをは論、江戸時代の語学におけるてにをはは研究を経て、明治時代に、助詞は、いわゆるてにをはの中から文法論的に特立され、一品詞として認定されるに至った。山田孝雄の『日本文法論』(一九〇八年刊)は、その意味においても劃期的なものであった。山田は、単語を「観念語」と「関係語」とに二分する。「関係語」がすなわち「助詞」である。「助詞」は「職能

上観念語を助ける語」である。そこに、「助詞の助詞たる所以」がある。山田は、「その職能即ち他の品詞に伴ひて用ゐらるる状態とその示す関係の如何との二点」を分類原理として、助詞を、格助詞・副助詞・係助詞・終助詞・間投助詞・接続助詞の六種に分類した。この六分類は、以後、助詞分類の基本として今日まで継承されている。

古代における日本語の助詞の具体的な様相を奈良・平安時代の文献を通して描き出そうとする本稿においても、助詞の分類は、基本的には、この六分類に従うことにしたが、古代語については、格助詞とは別に連体助詞を立てるのが有効だとする大野晋の見解[1]を採り、連体助詞を特立することにした。以下、連体助詞、格助詞、副助詞、係助詞、間投助詞、終助詞、接続助詞の順に所属する個々の語について、その用法とあらわす意味を中心に記述していく。ただし、助詞は形式語であって、それ自体が概念としての意味を持っているものではない。助詞の意味というのは構文における機能を文脈の上から説明したものである。用例の引用本文は、特殊なもの以外は、日本古典文学大系(岩波書店)によるが、表記は読みやすさを考えて、改めたところがある。書名は適宜に略称を用い、和歌の引用には国歌大観番号を示し、物語、日記などは巻名、章段を示した。なお、文中の人名には敬称を省略した。

一　連体助詞

連体助詞は、文中の体言と体言との間に位置して、上の体言と下の体言とを関係づける助詞である。「つ」「な」「の」「が」が連体助詞としてあげられる。古くは、「だ」もこの種の助詞であったらしい(「けだもの」「くだもの」—『和名抄』)。「つ」「な」は、奈良時代にはすでに古語化していたと見られる。

1 つ

「つ」は、体言(形容詞語幹を含む)をうけて、下の体言を修飾する。奈良時代以前の助詞で、奈良時代には、受ける語の範囲がかなり限定されていて、用法が固定し古語化している。平安時代にも用いられているが、助詞というより複合語の成分に近いものになっている。

(一) 用例の多くは、位置、存在の場所を示す語を受けるもので、対に用いられた例が目立つ。

天つ神　国つ神(『祝詞』六月晦大祓)　海(わた)つみ　山つみ(『日本書紀』神代上)　上つ瀬　中つ瀬　下つ瀬(『古事記』神代)　庭つ鳥　さ野つ鳥(『古事記』神代)　沖つ風(『万葉』三五九二)　天(あま)つ風(『古今』八七二)

(二) 時を示す語に用いられる場合もある。

をとつ日も昨日も今日も(『万葉』三九二四)　前年(をととし)のさきつ年より今年まで(『万葉』七八三)

昼つ方(『源氏』明石)　冬つ方(『源氏』行幸)

(三) また、性質を示す語にも用いられた。形容詞語幹に「つ」がつくのは、この場合のみで、用例は多くない。

高つ神　高つ鳥(『祝詞』六月晦大祓)　遠つ国(『万葉』一八〇四)　禍(まが)つ日(『祝詞』御門祭)

(四) このほか、「たなばたつめ」(『万葉』二〇二七・『伊勢物語』八二)のような用い方もあった。現代語の「目(ま)つ毛(げ)」は

醜(しこ)つ翁(おきな)(『万葉』四〇一一)　ゆつ岩群(いはむら)(『万葉』二二)

「つ」が化石的に残っている例である。

2 な

「な」は、助詞「の」の母音交替形で、直前にくる母音がア列、ウ列、イ列甲類の場合に用いられた。奈良時代以

前の助詞で、奈良時代には、すでに固定化し、古語となっていたと見られる。用例も少なく、平安時代以降は複合語の要素として見られるだけになる。「の」や「が」より意味的には狭く、上の体言の示す意味の範囲を下の体言で更に限定する場合に用いられている。

手な末(『日本書紀』神代上)　手なごころ(『和名抄』)　瓊な音(『古事記』神代)　まなかひ(『万葉』八〇二)
まなこ(『和名抄』)　みなと(『万葉』四〇〇六)

3　の

「の」は、体言の資格を持つ語を受けて、下の体言の資格を持つ語につづける。「の」は、同じ連体助詞の「が」や「つ」にくらべて、用法が広い。それは、上と下の体言を緊密に結びつける働きが弱く、ゆるく連ねるだけであるために、上と下の体言の意味的関係によって、さまざまな場合が生じる結果である。

「の」は、奈良時代には、連体助詞と主格助詞とに分かれているが、主格助詞は連体助詞から発達したものである。「の」は、本来、「……にある」という存在の位置を示すものであった。そこから、「……に属する」という所属や所有、「……という」意味の指定、資格、同格、性質などに用法が分化発展した。その主な用法を示すと、次のようになる。

(一)　体言をうけ、下の体言につづけて、連体修飾語とする。

(1)　存在の位置・場所・所在をあらわす。

石見の海(『万葉』一三二)　宇治の京の仮廬(『万葉』七)　おほぞらの月(『古今』三一六)

(2)　所属、所有をあらわす。

わが家の園(『万葉』八一六)　右大臣の女御の御腹(『源氏』桐壺)　大君の御寿(『万葉』一四七)　人の心(『古今』

仮名序）　　采女の袖（『万葉』五一）

(3) 作用の主、作者をあらわす。

天皇の御製歌（『万葉』二八）　をうなの歌（『古今』仮名序）

(4) 指定、指名をあらわす。

日の本の大和の国（『万葉』三一九）　それの年のしはすの二十日あまりひとひの日（『土左日記』十二月二十一日）

ふじの山（『竹取』）

(5) 資格をあらわす。

吾が兄の君（『古事記』仁徳）　帝王の上なき位（『源氏』桐壺）

(6) 同格をあらわす。

真玉手の玉手（『万葉』一五二〇）　風雑へ雨降る夜の雨雑へ雪降る夜（『万葉』八九二）　白き鳥の嘴と脚と赤き、鴫の大きさなる（『伊勢物語』九）　父の大納言（『源氏』桐壺）

(7) 材料を示す。

梓の弓（『万葉』三）　真木の板戸（『万葉』二六一六）

(8) 数詞を受けて下の体言を修飾限定する。

千万の軍（『万葉』九七二）

(9) 体言を受けて、下の「ごと」「ごとし」につづけて直喩（……のように）を作る。

道の後古波陀嬢子を雷の如聞えしかども相枕枕く（『古事記』応神）　木の葉のごとくに多かれど（『古今』仮名序）

(10) 右の「……のごと」「……のごとし」という形式の「ごと」「ごとし」（ごとく）を表現しない「……の」だけの形で比喩として表現する。

紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも(『万葉』二一)
春日野の雪間をわけて生ひいでくる草のはつかにみえし君はも(『古今』四七八)
次の例は、例示の場合で、下に「ごとく」のような形が省かれているものである。
中将、例の、うなづく(『源氏』帚木)
(11) 体言を受けて枕詞を構成し、下の体言を修飾する。これは、右の(10)の終りに示した「のごと」の「ごと」を表現しない形のものと同じ性格の「の」である。
ぬばたまの夜(『古事記』神代)　わかくさの妻(『古事記』神代)
発生的には(10)(11)の「の」の比喩的用法が先で、(9)の「…のごと」のような用法は、比喩であることを明示するために、後に生じたものであろう。
(12) 行動の目的となる場所を示す。「……への」を意味する。特殊な例である。
朱雀院の行幸は、神無月の十日あまりなり(『源氏』紅葉賀)
(二) 形容詞語幹を受け、下の体言につづけて連体修飾語とする。性質をあらわす。
遊士とわれは聞けるを屋戸貸さずわれを還せりおその風流士(『万葉』一二六)　あな、かひなのわざや(『竹取』)
(三) 動詞連用形の体言化したものについて、下の体言につづける。動作の進行状態をあらわす。
湊入の葦別小舟(『万葉』二七四五)　大船の行きのまにまに(『万葉』三六四四)
この用法は「が」にはないものである。
(四) 副詞を受けて、下の体言につづける。
わざとの声立てぬ念仏ぞする(『源氏』夕顔)　おしなべての上宮仕へし給ふべき際にはあらざりき(『源氏』桐壺)
かくのごと名に負はむと(『古事記』雄略)

(五) 助詞を受けて、下の体言につづける。

(1) 「と」を受ける。

皆人を寝よとの鐘は打つなれど君をし思へば寝ねかてぬかも（『万葉』六〇七）

(2) 「て」を受ける。

青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし（『万葉』八二一）

(3) 「から」を受ける。

今からの御もてなし（『源氏』松風）

(六) 助動詞「む」「ん」の連体形を受けて、下の体言につづける。

丹波道の大江の山の真玉葛絶えむの心わが思はなくに（『万葉』三〇七一）

君や来む我や行かんのいさよひに真木の板戸もささず寝にけり（『古今』六九〇）

一般に「の」は活用語連体形を受けないが、右の場合に限って「の」が用いられている。これは「の」が体言相当語としての「絶えむ」、「我や行かん」についたためである。

(七) 体言を受けて、下には形容詞語幹に接尾語「さ」のついたものをつづける。この場合の「の」は、下の主観的・情意的表現の対象を示しているとも見られる。

松浦川玉島の浦に若鮎釣る妹らを見らむ人の羨しさ（『万葉』八六三）

この頃の秋の朝明に霧隠り妻呼ぶ雄鹿の声のさやけさ（『万葉』二一四一）

この場合の表現構造は、「人の羨し―さ」、「声のさやけ―さ」となり、「さ」によって、「人の羨し」、「声のさやけ」全体が体言化される。山田文法では、この種の表現形式を喚体句という。(2) また、時枝文法では、この「の」を「独立格の文の主語格を表はす」とする。(3)

(八) 下にくるはずの体言が省略されていて、「の」が省略された体言を代表していると見られるものがある。

不聴と言へど強ふる志斐のが強語このころ聞かずて朕恋ひにけり(『万葉』二三六)

「志斐のが」は「志斐の嫗が」の意味。

さきのかみいまのも、もろともにおりて、いまのあるじもさきのも、てとりかはして(『土左日記』十二月二十六日)

「いまのも」は「今の守も」、「さきのも」は「先の主も」の意味。

橋本文法では、この種の「の」を準体助詞とする。(4) なお、時枝文法では、主格につく「の」および所有、所属の「の」以外の「の」は、指定の助動詞と説く。(5)

4 が

「が」は、体言の資格を持つ語を受けて、下の体言の資格を持つ語につづける。所有、所属を示す。

「が」は「の」にくらべて、受ける語の種類が狭い。「が」の上の体言は、下の体言を包摂する関係にある。山田孝雄が論じたように、「が」の場合は、「意義上の主点が上接語にあり、下接語はその所属である」が、「の」の場合は、「意義上の主点が下接語にある」。(6)

「が」は、奈良時代には、連体助詞と主格助詞とに分かれているが、主格助詞は連体助詞から発達したものである。平安時代末期(院政期)に、主格助詞の「が」から接続助詞の「が」が生じて、連体助詞、主格助詞、接続助詞が並び行われることとなった。

(一) 体言を受けて、下の体言が、その所有、所属であることを示し、連体修飾語とする。

わが背子(『万葉』一一)　君が家(『万葉』五〇四)　妹が心(『万葉』五〇二)　娘子らが珠裳の裾(『万葉』四〇)

磐代の浜松が枝(『万葉』一四一)

「が」が人代名詞や人をあらわす語につく場合に、右の「わが背子」「君が家」「妹が心」「嬬婦らが珠裳の裾」などのように、話者・作者にとって身近かなもの、親しいものに「が」が使われる傾向がある。が、中には、

仏造る真朱足らずは水たまる池田の朝臣が鼻の上を掘れ（『万葉』三八四一）

のような嘲笑、軽蔑の感情を示す場合や、

いとのきて　短き物を　端截ると　云へるが如く　楚取る　里長が声は　寝屋戸まで　来立ち呼ばひぬ（『万葉』八九二）

のような嫌悪、憎悪の感情を示す場合に用いられたものもある。これは、「の」には見られないものである。

(二) 体言または活用語の連体形を受けて、下に来る形容詞語幹に接尾語「さ」のついたものと結びつける。

塵泥の数にもあらぬわれ故に思ひわぶらむ妹が悲しさ（『万葉』三七二七）
夕月夜影立ち寄り合ひ天の河漕ぐ舟人を見るが羨しさ（『万葉』三六五八）

活用語の連体形につく用法は「の」にはないものである。

右の表現構造は、「妹が悲し―さ」、「見るが羨し―さ」と考えられる。「妹」「見る」は、「悲し」「羨し」という情意表現の形容詞の感情の起る機縁を示している。そして、「妹が悲し」「見るが羨し」全体が「さ」によって体言化される。山田文法では、この表現形式を喚体句という。(7)

(三) 体言または活用語の連体形を受けて、下の「ごと」「ごとし」につづけて直喩（……のように）を作る。

遠き代に　ありける事を　昨日しも　見けむが如も　思ほゆるかも（『万葉』一八〇七）
宇治山の僧きせんは、ことばかすかにして、はじめをはり、たしかならず。いはば、秋の月をみるに、あかつきの雲にあへるがごとし（『古今』仮名序）

この場合の「が」は主格助詞ともとれそうであるが、「ごとし」は、本来、同一という意味の体言「ごと」に形容

詞を作る接尾語「し」がついたものである。従って、「……がごと」に「し」がついたものと見る。

(四) 活用語の連体形を受けて、下の活用語の連体形につづける。

いとやむごとなき際(きは)にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり(『源氏』桐壺)

省略された語を補うと、「……あらぬ(人)が……時めき給ふ(人)ありけり」となり、「体言＋が＋体言」と解されるが、その体言が省略されているので、体言と体言とを連結する連体助詞の本来の性格からは遠くなっている。従って、この種の「が」は一般に主格助詞として扱われる。が、実質的な主格を示す体言がまったく現れない形式なので、所有格[8]あるいは指定格[9]と見るべきだとする意見も出されている。「……で、しかも……」と訳してぴったりする、この「が」は、院政時代に成立する接続助詞への動きを示すものである。

(五) 下にくるはずの体言が省略されていて、「が」が省略された体言を代表していると見られるものがある。

この歌はある人のいはく、大伴のくろぬしが也(『古今』八九九左注)

「大伴のくろぬしが也」は「くろぬしが歌也」の意味である。

橋本文法では、この種の「が」を準体助詞とする。[10]

5　「の」「が」の受ける語について

連体助詞「の」「が」は、すでにそれぞれの項で述べたように、その受ける語にかなり明確な分担がある。代名詞および神や人に関する名詞についてみると、ほぼ次のようになる。

(一) 代名詞を受ける場合。

(1) 人代名詞「あ」「わ」「汝(な)」「誰(た)」「己(おの)」には、「が」がつく。

あが愛(は)し妻(『古事記』仁徳)　吾(わ)が背子(『万葉』八一二)　汝(な)が心(『万葉』三四二五)　たが夫(つま)(『古事記』仁徳)

おのが世(『万葉』一一六)

(2) 指示代名詞「こ」「そ」「か」「なに」「いづれ」には、「の」がつく。

この夕(『万葉』四二九一)　その夜(『万葉』三二六九)　かの子ろ(『万葉』三五六五)　なにの伝言(『日本書紀』天智)

(二) 神、人に関する名詞を受ける場合。

(1) 神、天皇、皇族、高位高官に関する語は、「の」で受ける。

神の御坂(『万葉』一八〇〇)　天皇の遠の朝廷(『万葉』三六八八)　堀川のおほいまうちぎみの四十賀(『古今』三四九題詞)

(2) 肉親や近い、親しい関係のものは「が」で受ける。

母が目(『万葉』八八七)　思ふ子がため(『万葉』八四五)　わが背(『万葉』六八四)　妹が門見む(『万葉』一三一)

(3) 「君」は「が」で受け、「大君」は「の」で受ける。

君が往きけ長くなりぬ(『古事記』允恭)　大君の御命かしこみ(『万葉』七九)

例外として、『万葉集』の次の例に見える「君の」がある。

愛しきやし栄えし君の座しせば(四五四)

これについては、作者の資人余明軍が主人大伴旅人の死を嘆き、「犬馬の慕、心中の感緒に勝へずして」作った歌であるために、「大君」に準ずる気持で、「君の」と言ったものかと考えられる。

連体助詞「の」と「が」の待遇表現上の区別については、平安時代末期の藤原顕昭が『古今集註』巻四「ハギガ花」の注で「が」を「大旨ハケタムコトバナリ」とし、「清見が関」よりも「清見ノ関」という方がうるわしいし、「賤ガ」というのは「サグルコトバ」で、「オホヤケヲキミガトヨムハナメシトイフベケレド、ウヤマフコトバニヨミナラハシタリ」と述べている。また、鎌倉時代の『宇治拾遺物語』巻七の二(説話番号九三)の「播磨守為家侍さたの

事」には、「さたが衣」と女に言われた男が「さたのとこそいふべきに」「なぞ、わ女め、さたがといふべき事か」と激怒した話が載せられている。これらによって、平安末期ないし鎌倉時代には、「の」と「が」の敬卑の差が意識されていたことは明らかである。青木伶子、東郷吉男の調査によれば、奈良時代、平安時代において、「の」は敬意の対象、または心理的距離の大きい対象に用いられ、「が」は親愛、または心理的距離の小さい対象に、また、そこから転じて軽侮、嫌悪、憎悪などの対象にも用いられる。(11)

『古今集』の題詞、左注では、「ならのみかどの御歌(二二二左注)」「堀川のおほいまうちぎみの四十賀(三四九題詞)」「この歌はさきのおほいまうちぎみの也(八六六左注)」など、実名を敬避した言い方や「業平の朝臣の家(七〇五題詞)」のような言い方には「の」を用い、姓を示さない氏・名だけの人物には、「藤原三善が六十賀(三五五題詞)」「なかとみのあづま人が歌也(七二〇左注)」「この歌は……大伴のくろぬしが也(八九九左注)」のように「が」を用いている。これは、身分の高下を基準として、「の」と「が」を使いわけたものである。(12)

「の」と「が」の待遇的表現価値の差は、「の」と「が」の表現的性格の差に基づくものである。「が」は、その受ける体言に意義上の主点を置いて特示強調する性格を持つ。そのために、尊敬の対象を直接指示することを避けようとする日本語の表現習慣(敬避性)から、「が」は尊敬の対象に用いるにはふさわしくないものであった。その結果、上の体言を下の体言にゆるくつづける「の」が敬意の対象に用いられることになったものである。

二　格　助　詞

格助詞は、文中の体言について、それが下につづく用言とどのような関係に立つものであるかを表示する助詞である。文中の体言と用言との関係は、動作・作用・状態を表わす用言に対して、体言がその主体であるか、その目的物

であるか、その動作・作用の行われる場所・時間・手段・方法・材料などをあらわすものであるかの三種に大別される。

体言が用言のはたらきの主体となる場合に、その体言は用言に対して主格に立つ。体言が用言の目的物である場合に、その体言は用言の目的格となる。体言が用言の叙述内容に対して場所・時間・手段・方法・材料などを用言に先行して示す場合は、その用言を補助的に修飾しているのであって、その体言は用言の補格に立つ。格助詞は、文中の体言のこうした格をあらわす助詞で、主格助詞、目的格助詞、補格助詞に下位分類される。主格助詞には「が」「の」、目的格助詞には「を」、補格助詞には、「に」「へ」「と」「より」「ゆり」「ゆ」「よ」「から」「にて」「にして」「で」「して」「もて」(「と」「や」「か」)などが属する。最後にあげた「と」「や」「か」は、「並立助詞」と言われるもので、厳密には格助詞と性格を異にするところがあるが、便宜的にここで説くこととした。

格助詞は、用言にかかるという点では、副助詞、係助詞とともに、連用助詞とも言えるが、意味の構造と対応させると、右に述べたような性格を持つ助詞であると言える。補格助詞は、下にくる用言の補助的関係に立つもので、体言と用言を緊密に結合させるために常に助詞が顕示される。が、主格助詞と目的格助詞は、古くは存在しなかったと考えられている。日本語は、述語を主体として文表現をする言語なので、主語や目的語を常に表現する必要がなく、また、主語や目的語を表現の上に示す場合にも、文脈と語順によって主格や目的格が理解される。従って、特にそのための助詞がなくても表現・理解に大きな支障を生じることはない。現代の日常語においても、こうした日本語の特質は保たれている。古代における文章語の発達に伴って、文表現における論理的関係を明確に示そうとする表現意識が起るにつれて、主格や目的格を表示する助詞が次第に用いられるようになったものである。奈良時代には、すでに主格助詞の「の」「が」も目的格助詞の「を」もともに文献に見出される。補格を示す助詞は、本来、用言の叙述内容を補助する役割を持つものであるから、その表現が省略されると、意味が理解できなくなる性質のものである。した

がって、この種の助詞は早い時期から存在したものである。

1 が

「が」は連体助詞から変って、主格を示す助詞となった語である。日本語は本来主格を表示する助詞のない言語であった。文脈依存度の強い日本語は、格を特に明示する手段を持たなくても、前後の関係から文中の格関係が容易に理解できるシステムになっている。体言と体言を結ぶ連体助詞「が」は、本来、その受ける語を取り立てつつ下の体言と結ぶはたらきをするものであった。が、下の体言が、体言的性格を持つ形容詞語幹に名詞を作る接尾語「さ」のついた形、すなわち、

塵泥の数にもあらぬわれ故に思ひわぶらむ妹が悲しさ(『万葉』三七二七)

のような例になると「妹が悲し—さ」という構造になり、「妹」は「悲し」という感情の志向する対象を示すことになる。これを一種の主述関係と見ることもできる。また、上の体言が、体言相当の資格を持つ用言の連体形に置きかえられた形、たとえば、

言問はぬ木すら妹と兄ありとふをただ独子にあるが苦しさ(『万葉』一〇〇七)

さざれ波浮きて流るる泊瀬川寄るべき磯の無きがさぶしさ(『万葉』三二二六)

のような例になると、「独子にある(コト)が苦し—さ」「磯の無き(コト)がさぶし—さ」という構造になる。これらの「独子にある(コト)」「磯の無き(コト)」は「苦し」「さぶし」という情意の対象となっている状態・状況を示すがこれらも一種の主述関係と見てもよいものである。また、

紐解かず丸寝をすればわが着たる衣は穢れぬ(『万葉』一七八七)

来る道は石踏む山の無くもがなわが待つ君が馬躓くに(『万葉』二四二一)

などで、「わが」は、その連体助詞としての用法からは「わが衣」「わが君」とつづくところであるが、「衣」「君」の状態をくわしく説明するために「着たる」「待つ」が加えられている。つまり、「わが(着たる)衣」「わが(待つ)君」である。が、これを「わが着たる―衣」「わが待つ―君」と見ると「わ」は主格に立つことになる。

次の例の「が」になると、連体助詞というより主格助詞的な性格が濃厚になる。

在原の業平はその心あまりてことば足らず。しぼめる花の色なくて匂ひ残れるがごとし(『古今』仮名序)

緑児の乳乞ふがごとく天つ水仰ぎてそ待つ(『万葉』四一二二)

「緑児の乳乞ふ」と「ごとく」、「匂ひ残れる」と「ごとし」とは、それぞれ主述関係を構成しているように見える。本来、「ごとし」は、体言「ごと」に形容詞性接尾語「し」のついた語で、叙述性を持つ。したがって、この場合も「緑児の乳乞ふがごと―く」「匂ひ残れるがごと―し」と見れば、なお、連体助詞「が」の枠の中にあると解される。

しかし、

あらたまの年が来経れば、あらたまの月は来経往く(『古事記』景行)

島隠りわが漕ぎ来れば羨しかも倭へ上る真熊野の船(『万葉』九四四)

などの「が」は、もはや連体助詞とは解し難く、主格助詞とすべきものである。

奈良時代の主格助詞「が」は、連体助詞から発達してきたために、後代のように、単文の主格を示す用法はなく、従属句、条件句の主格か、連体形終止の文の主格に限られている。

(一) 従属句、条件句における主格を示す。

恋しくは形見にせよとわが背子が植ゑし秋萩花咲きにけり(『万葉』二一一九)

闇の夜は苦しきものを何時しかとわが待つ月も早も照らぬか(『万葉』一三七四)

吾妹子にわが恋ひ行けば羨しくも並び居るかも妹と背の山(『万葉』一二一〇)

平安時代の主格「が」も大部分はこの種のものである。

なほおはするものと思ふが、いとかひなければ、灰になり給はむを見たてまつりて（『源氏』桐壺）

幼くものし給ふが、かく齢(よはひ)すぎぬる中にとまり給ひて、なづさひ聞え給はぬ月日や隔り給はむ（『源氏』須磨）

㈡　連体形で終止する文の主格を示す。

山川に筌(うへ)をし伏せて守(も)りあへず年の八歳(やとせ)をわが竊(ぬす)まひし（『万葉』二八三二）

かくのみにありけるものを猪名川(ゐながは)の沖を深めてわが思(も)へりける（『万葉』三八〇四）

これらは、下にくるはずの体言を省略した形の表現で、「ものを」「ことよ」などの詠嘆をあらわす。いわゆる〝余情止め〟である。

平安時代には、この種の表現形式は、感情をこめた特殊な言い方から次第に日常語的なものとなっていく。次の例は、倒置表現とされているが、話しことばと見れば、「伏籠の中に……」は補充表現と言うべきものである。

雀の子を、犬君(いぬき)が逃がしつる、伏籠(ふせご)の中(うち)に籠(こ)めたりつるものを（『源氏』若紫）

なにごとぞ、生昌がいみじうおぢつる（『枕草子』八　大進生昌が家に）

やがて、こうした連体形終止が通常の終止形終止と並んで行われるようになっていく。係助詞の「ぞ」「なむ」「や」「か」を受ける、いわゆる係結びにおいて、文末が連体形となる現象もあって、院政時代以降、終止形終止と連体形終止との区別が混同するとともに、「が」が言い切り文の主格助詞として用いられるようになる。

年卅許(バカリ)ナル女ノ頭付(カシラツキ)ヨリ始(ハジメ)テ目・鼻・口、此(ココ)ハ弊(ツタナ)シト見ユル所无(ナ)ク端正ナルが髪極(イミジ)ク長シ、香馥(カウバ)シクテ艶(エモイヘ)ヌ衣共(ドモ)ヲ着タリ（『今昔』二四―八）

平安時代には、主格助詞「が」は、人をあらわす語または活用語の連体形を受けるが、それ以外の語にもかなり自由について主格用法に多く用いられている。しかし、主格に立つどんな語でも受けるという自由な用法はまだ持って

いない。現代語の「が」と同じ用法を持つようになるのは室町時代以後のことである。

2 の

「の」も「が」と同様に連体助詞から主格助詞になった語である。「が」が「体言＋が＋体言」という本来の形式から発達して単文の主格をあらわす用法や接続助詞の「が」を生じたのに対して、「の」は、本来の「体言＋の＋体言」という形式の枠を保ちつづけて今日に至っている。主格の「の」は、「の」をうける体言の位置に用言が用いられたことによって成立したものであるが、以下に述べるように、「体言＋の＋体言」に準ずる形式になっていて、なお、その範疇にとどまっている。

(一) 体言を受け、下の用言の主格であることを示す。従属句、条件句などの主格に限られる。

やすみしし　わご大君の　高知らす　吉野の宮は　畳づく　青垣隠り　川波の　清き河内そ(『万葉』九二三)

世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし(『古今』五三)

しばしばも　見放けむ山を　情なく　雲の　隠さふべしや(『万葉』一七)

右の例は「雲の隠さふ―べしや」という構造となる。

次の例は、言い切り文の主格を示すものである。例外的な用例なので問題はあるが、「の」の用法の発展した一つの形と見ることができる。

貴なる女の尼になりて世の中を思ひうんじて、京にもあらず、はるかなる山里に住みけり(『伊勢物語』一〇二)

なお、『古今和歌集』には、

ことならば言のはさへも消えななむ見れば涙のたぎまさりけり(八五四)

という例があるが、日本古典文学大系の頭注(佐伯梅友校注)では、「涙のたぎ」を「涙の滝」と解している。

(二) 連体形で終止する文の主格を示す。

多摩川に曝す手作さらさらに何そこの児のここだ愛しき(『万葉』三三七三)

みよしのの山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ(『古今』三二七)

・山ぎはすこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる(『枕草子』一　春はあけぼの)

いずれも感動・詠嘆表現で、いわゆる余情止めである。

(三) 好悪の感情や希望の対象を示す。時枝文法では対象格とする。[13]

相見ては面隠さるるものからに継ぎて見まくの欲しき君かも(『万葉』二五五四)

命長さのいとつらう思ひ給へ知らるるに(『源氏』桐壺)

連体助詞「の」で説いたように、

松浦川玉島の浦に若鮎釣る妹らを見らむ人の羨しさ(『万葉』八六三)

の形式も「人の羨し―さ」と解すれば、「の」は主格助詞で、この部類に属することになる。

(四) 述語となる他動詞の動作の対象や目標を示す。「を」に通ずる用法である。

石戸破る手力もがも手弱き女にしあれば術の知らなく(『万葉』四一九)

珍しきさまのしたれば、さすがにうち見やられ給ふ(『源氏』末摘花)

3　を

「を」は、感動詞「を」から生じた間投助詞「を」が強調確認を表わすことから、動作の対象について強調・確認する意味で用いられるようになり、目的格を示す助詞として固定していったものと考えられる。

日本語は、本来、論理的な格関係を表示する助詞を用いず、語序と文脈によって、表現理解を行なう言語である。

現代の日常語においてもこの傾向は保たれている。論理的な格関係を助詞によって表示しようとするのは、論理的関係の強調、明示とともに、文章語においては、意味的視覚的把握を容易にしようとする配慮が働くためであろう。この意味で、松尾拾が、和文脈の文章に目的の「を」が定着する上で、漢文訓読文における論理性の要求が及んだものと、その影響を想定しているのが注目される。(14)

「を」は、体言および体言の資格を持つ語を受け、下の用言に対して連用修飾語となる。

(一) 用言が表現する動作の対象を示す。

(1) 目的格を示す。

ささなみの故き京を見れば悲しき（『万葉』三二）

松山の浪をかけ、野中の水をくみ、秋萩の下葉をながめ、暁の鴫のはねがきを数へ（『古今』仮名序）

(2) 「別る」「離る」などの動作の対象を示す。

たらちねの母を別れてまことわれ旅の仮廬に安く寝むかも（『万葉』四三四八）

武庫の浦の入江の渚鳥羽ぐくもる君を離れて恋に死ぬべし（『万葉』三五七八）

逢坂にて人を別れける時によめる（『古今』三七四題詞）

(二)(1) 用言が表現する情意の対象を示す。

うるさきたはぶれ言、いひかかり給ふをわづらはしきになど言ひあへり（『源氏』玉鬘）

紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも（『万葉』二一）

この「妹を」の「を」は間投助詞の「を」と考えることもできる。間投助詞から格助詞へ発展する過渡の一つの姿とも見られる。

(2) 「……を……み」という形式で対象を示す。この種の「を」も間投助詞的な感動や情意を含むものと見られる。

春の野にすみれ採みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける(『万葉』一四二四)

㈢ 移動性の動作の経由する場所を示す。
新治筑波を過ぎて幾夜か寝つる(『古事記』景行)
天離る鄙の長道を恋ひ来れば明石の門より家のあたり見ゆ(『万葉』三六〇八)

㈣ 動作の持続する時間を示す。
今よりは秋風寒く吹きなむをいかにか独り長き夜を寝む(『万葉』四六二)
年ごろを住みし所の名に負へば来寄る波をもあはれとぞみる(『土左日記』一月二十九日)

㈤ 「寝を寝」「ねをなく」「香をにほふ」などの表現形式で、動詞の意味と同様の意味をあらわす体言をその対象として示す。
家おもふといをねず居れば鶴が鳴く芦辺も見えず春の霞に(『万葉』四四〇〇)
忘らるる時しなければあしたづの思ひ乱れてねをのみぞなく(『古今』五一四)
花の色は雪にまじりて見えずともかをだににほへ人の知るべく(『古今』三三五)

4　に

「に」は、動作、作用の生起するところを示す語で、奈良時代には既に多くの用法がある。日本語は本来、主格、目的格の助詞を持たなかったと考えられるが、「に」はかなり早い時期から助詞として機能していたらしく、省略されることが極めて少ない重要な助詞である。その主な用法は次のようなものである。

㈠ 動作、作用の行われ、成立する場所を指定する。
この岳に菜摘ます児(『万葉』一)

端つ方の御座に仮なるやうにて大殿籠れば（『源氏』帚木）

(二) 動作の行われる時を指定する。

それの年のしはすのはつかあまりひとひの日の戌のときに門出す（『土左日記』十二月二十一日）

さ夜中に友呼ぶ千鳥もの思ふとわびをる時に鳴きつつもとな（『万葉』六一八）

(三) 動作の帰着する場所・目標を示す。

粟島に漕ぎ渡らむと思へども明石の門波いまだ騒けり（『万葉』一二〇七）

行き行きて駿河の国にいたりぬ（『伊勢物語』九）

(四) 動作の目的を示す。

朝猟に今立たすらし暮猟に今立たすらし（『万葉』三）

雲林院親王のもとに花見に北山の辺にまかれる時によめる（『古今』九五題詞）

(五) 動作、作用の原因、理由を示す。

白雲の竜田の山の露霜に色づく時にうち越えて旅行く君は（『万葉』九七一）

わらは病にわづらひ給ひて（『源氏』若紫）

(六) 動作、作用の結果を示す。

なかなかに人とあらずは酒壺に成りにてしかも酒に染みなむ（『万葉』三四三）

灰になり給はむを見たてまつりて、今はなき人とひたぶるに思ひなりなむ（『源氏』桐壺）

(七) 動作、感情の向けられる対象を示す。

吾妹子にわが恋ひ行けば羨しくも並び居るかも妹と背の山（『万葉』一二一〇）

(八) 動作、作用を受ける場合の動作の主や使役の動作の対象を示す。

か行けば人に厭はえかく行けば人に憎まえ老男は斯くのみならし(『万葉』八〇四)
　唐にをるわうけいに金をとらす(『竹取』)

(九) 動作の作用の行われ方、存在する状態を示す。
花橘を玉に貫きかづらにせむと(『万葉』四一一)
白雲の八重に重なる遠方にても思はん人に心へだつな(『古今』三八〇)

(一〇) 比較の起点・基準を示す。
我に劣れる人を多み済さむために(仏足石歌)　昼の明さにも過ぎて光りわたたり(『竹取』)
この場合の「に」は比較の起点となるものを示すが、動作の起点を示す語に「より」があり、動作、作用を比較する場合の標準をも示したことから、後に、次第に比較の基準を示す用法は「より」の専用となり「に」のこの用法は廃れていった。

(一一) 同じ用言を重ねる形式の中間に置いて意味を強める。
相見ては幾日も経ぬをここだくも狂ひに狂ひ思ほゆるかも(『万葉』七五一)
せむ方もなくてただ泣きに泣きけり(『伊勢物語』四一)

(一二) 平安時代に、尊敬すべき対象となる人物を動作主として示す場合に、その人物を主格に立てて直接に指すことを避け、その居所や場所を「に」で示すことによって、間接的にその人物の動作であることを示す。敬度の高い尊敬表現の形式である。
いま御前に御覧ぜさせて後こそなどいふ程に(『枕草子』九九　五月の御精進のほど)
弘徽殿には久しう上の御局にも参う上りたまはず(『源氏』桐壺)

5　へ

「へ」は、名詞「辺」から転成した助詞で、名詞「辺」が中心から遠い端、末を意味するところから、現在いる地点から遠く離れた地点へ向かって進む場合に用いられた。

㈠　奈良時代から平安時代中期ごろまでは、「行く」「帰る」「まゐる」「まかる」「上る」「下る」「越ゆ」「渡る」「遣る」など現在の地点から離れて行く場合の移動性の動詞の目標を示した。従って、「ここ」「こなた」を受けず、「来」「来たる」にもかからない。(15)

北へゆくかりぞ鳴くなるつれて来し数は足らでぞ帰るべらなり（『古今』四一二）

この時期には「へ」と「に」との区別は明確であった。

㈡　平安時代中期には、心理作用のはたらく方向にも用いられた。

新羅へか家にか帰る壱岐の島行かむたどきも思ひかねつも（『万葉』三六九六）

但馬の国の湯へまかりける時に、ふたみのうらといふ所にとまりて（『古今』四一七題詞）

かしこく思ひ企てられけれど専ら本意なしとて外様へ思ひなり給ひぬべかなれば（『源氏』東屋）

㈢　院政時代以後、すべての移動性動作の目標を示すようになり、「ここ」「こなた」をうけ、「来」「来たる」にもかかるようになる。以後、「へ」と「に」の境界は次第にあいまいになっていった。

一年ニ三度必ズ我ガ許へ来レ（『今昔』一一二五）　　京へ筑紫に坂東さ（室町時代の諺。ロドリゲス『日本大文典』）

6　と

「と」は、「とかく」「とまれかくまれ」「とありとも」「かくありとも」などの指示する意味の副詞「と」から発達

した助詞らしい。

体言および体言の資格を持つ語、引用文などを受け、その内容を指示して下の用言につづける。

(一) 「見る」「思ふ」「言ふ」「聞く」「知る」「す」などの動作の内容を提示する。他人のことばや伝聞などを引用する場合もある。

帰りける人来れりと言ひしかばほとほと死にき君かと思ひて(『万葉』三七七二)

その煙いまだ雲の中へたち上るとぞ言ひ伝へたる(『竹取』)

春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすの鳴く(『古今』六)

こうした意識的な見立てに「と」を用いた例は『万葉集』にもすでにある。

うつそみの人にあるわれや明日よりは二上山を弟世とわが見む(一六五)

(二) 動作の意図・心理状態を示す。「と言って」「と思って」などの意味で用いる。

あしひきの山のしづくに妹待つとわれ立ち濡れぬ山のしづくに(『万葉』一〇七)

春の野に若菜摘まんと来しものを散りかふ花に道はまどひぬ(『古今』一一六)

平安時代には「と」に接続助詞「て」のついた「とて」も同じ意味で用いられた。

をとこもすなる日記といふものを、をむなもしてみんとてするなり(『土左日記』)

(三) 命名を示す。

酒の名を聖と負せし古の大き聖の言のよろしさ(『万葉』三三九)

その山をふじの山とは名づけける(『竹取』)

(四) 変化した結果、帰着する状態を示す。

やまとうたは人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける(『古今』仮名序)

わが君は千代に八千代にさざれいしのいはほとなりて苔のむすまで（『古今』三四三）

(五) 比喩を示す。

けふ来ずはあすは雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや（『古今』六三）

(六) 比較の基準を示す。

思ふこと言はでぞただに止みぬべき我とひとしき人しなければ（『伊勢物語』一二四）

かたちなどは、かの昔の夕顔と劣らじや（『源氏』玉鬘）

(七) 同じ動詞を重ねる形式の中間に置いて、その動作、作用の及ぶ全範囲であることを指示する。

生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける（『古今』仮名序）

(八) 動作をともにするものを示す。

香具山は畝火雄雄しと耳梨と相あらそひき（『万葉』一三）

むしぶすま柔やが下に臥せれども妹とし寝ねば肌し寒しも（『万葉』五二四）

なお、次のような「と」は、語と語を対等の関係で結ぶはたらきだけをするもので、いわゆる並立助詞である。

香具山と耳梨山とあひし時立ちて見に来し印南国原（『万葉』一四）

7　より・ゆり・ゆ・よ

奈良時代には、「より」と同じ意味、用法を持つ「ゆり」「ゆ」「よ」という一群の格助詞が並存した。「ゆり」は用例が少ない。平安時代になると「より」だけになり、「ゆり」「ゆ」「よ」は姿を消す。この四種の語の成立の先後については大体次のように考えられている。「より」は「ゆり」の母音交替によって生じた形であろう。「ゆり」は、「吾妹子が家の垣内の小百合花後とし云はば不欲とふに似む」（『万葉』一五〇三）などの「後」から転じ、「ゆ」「よ」は

「ゆり」「より」から生じたものかという。(16)
体言または体言の資格を持つ語について、次のように用いられる。
(一) 動作の行われる場所、特に経由点を示す。
古に恋ふる鳥かも弓絃葉の御井の上より鳴き渡り行く(『万葉』一一一)
田児の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける(『万葉』三一八)
下毛野安蘇の河原よ石踏まず空ゆと来ぬよ汝が心告れ(『万葉』三四二五)
(二) 動作の起点を示す。
(1) 空間的な起点・場所を示す。
香島より熊来を指して漕ぐ船の梶取る間なく都し思ほゆ(『万葉』四〇二七)
愛しけやし吾家の方よ雲居起ち来も(『古事記』景行)
そらみつ　大和の国　あをによし　平城の都ゆ　押し照る　難波に下り(『万葉』四二四五)
(2) 時間的な起点を示す。
春霞立ちにし日より今日までにわが恋止まず本の繁けば(『万葉』一九一〇)
畏きや命被り明日ゆりや草がむた寝む妹無しにして(『万葉』四三二一)
天地の　分れし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　ふじの高嶺を(『万葉』三一七)
大夫の　清きその名を　古よ　今の現に　流さへる　祖の子等そ(『万葉』四〇九四)
(3) 平安時代には、「より」が活用語の連体形についた場合に、その動作が起ると同時に他の事態が展開することを示す。「……するとすぐ」「……するやいなや」の意味。
命婦、かしこにまかで着きて、門ひき入るるよりけはひあはれなり(『源氏』桐壺)

(4) 事がらそのものの起点、出自を示す。

穿沓を　脱き棄る如く　踏み脱きて　行くちふ人は　石木より　成り出し人か（『万葉』八〇〇）

(三) 手段や方法を示す。

つぎねふ　山城道を　他夫の　馬より行くに　己夫し　歩より行けば　見るごとに　哭のみし泣かゆ（『万葉』三三一四）

小筑波の繁き木の間よ立つ鳥の目ゆか汝を見むさ寝ざらなくに（『万葉』三三九六）

鈴が音の早馬駅家の堤井の水をたまへな妹が直手よ（『万葉』三四三九）

(四) 比較の基準を示す。

我よりも　貧しき人の　父母は　飢ゑ寒ゆらむ（『万葉』八九二）

ゆふされば螢よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき（『古今』五六二）

衣手葦毛の馬の嘶え声情あれかも常ゆ異に鳴く（『万葉』三三二八）

雲に飛ぶ薬はむよは都見ばいやしき吾が身また変若ちぬべし（『万葉』八四八）

(五) 一定の範囲を限る意を示す。体言「ほか」につづいて、下に打消を伴うのが普通である。

いとどしくながめ給ふよりほかのことなし（『源氏』橋姫）

昼は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり火を近くともして、これを見るよりほかの事なければ（『更級日記』）

8　から

「から」は、体言「から」に由来する助詞である。山田孝雄は「理由」の意の体言からとしたが、[17] 大野晋は、「うから」「やから」などの「から」は自然の血のつながりを意味して、満洲語、蒙古語の kala, xala と同源の語であったとし、日本では古代氏族社会における素性、すじ、生まれつき、質の意味に用いられたとする。「国から」（『万葉』二二

○）、「山から、川から」（『万葉』三一五）などの「から」はその意味であるとする。[18]

奈良時代の「から」は、体言および活用語の連体形を受けるだけでなく、連体助詞「が」「の」につづく例もあるので、まだ、助詞ではなく、形式体言と見るべきだという説もある。[19] ここでは、助詞と見られるものだけをとりあげる。平安時代以降は完全に助詞として機能するようになるが、文献の上では、「より」の方が多く用いられている。「から」が多く見えるようになるのは、室町時代の口語資料からである。

㈠ 奈良時代に助詞と見られるのは、動作、作用の経由する場所を示す用法である。

月夜よみ妹に逢はむと直道から われは来れども夜そ更けにける（『万葉』二六一八）

霍公鳥鳴きて過ぎにし岡傍から秋風吹きぬ縁もあらなくに（『万葉』三九四六）

㈡ 時を示す語について、動作や作用の起点を示す。平安時代以降の用法である。

波の音のけさからことに聞ゆるは春のしらべやあらたまるらむ（『古今』四五六）

九日。心もとなさに明けぬから舟をひきつつ上れども（『土左日記』二月九日）

㈢ 動作の方法、手段を示す。

これかれ訪ふべき人、徒歩からあるまじきもあり（『蜻蛉日記』下）

「から」には「より」のような比較の基準を示す用法はない。

なお、助詞と認めなかった体言の「から」は、次のようなもので、「故」の意味を持つ。

高麗剣己が心から外のみに見つつや君を恋ひ渡りなむ（『万葉』二九八三）

手に取るがからに忘ると磯人のいひし恋忘貝言にしありけり（『万葉』一一九七）

平安時代になると「からに」は助詞として機能するようになり、上の事態から動作、作用がすぐつづく意を示す。「……するとすぐに」の意である。

吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ（『古今』二四九）

住の江の松を秋風吹くからに声うちそふる沖つ白波（『古今』三六〇）

この用言をうける「からに」は接続助詞と見られる。

9 にて・にして

「にて」は格助詞「に」と接続助詞「て」とが複合して一語の助詞になった語という。しかし、格助詞に接続助詞が直接つくのは異例である。奈良時代に多く用いられた〔格助詞「に」＋サ変連用形「し」＋接続助詞「て」〕という成り立ちの「にして」と用法がほぼ同じなので、この「にて」は「にして」の省略形かと思われる。「にして」は奈良時代の歌に用いられ、「にて」は歌には少なく平安時代の散文に多く用いられていることから見て、「にて」の方が新しい口語の形であった可能性が強い。

体言を受ける。活用語の連体形を受ける例は稀である。

(一) 場所を示す。奈良時代には、「にして」の方が多く、「にて」は少ない。

吉野なる夏実(なつみ)の河の川淀に鴨そ鳴くなる山陰(かげ)にして（『万葉』三七五）

還るべく時は成りけり京師(みやこ)にて誰(た)が手本(たもと)をかわが枕(まくら)かむ（『万葉』四三九）

京にて生まれたりし女児(をんなご)、国にてにはかに失せにしかば（『土左日記』十二月二十七日）

(二) 動作の方法、手段を示す。

たづね行くまぼろしもがな伝(つて)にても魂(たま)のありかをそことしるべく（『源氏』桐壺）　夜ひと夜舟にてかつがつ物など渡す（『更級日記』）　車ニシテ洛陽ニ行ク間、病ヲ受ケテ忽ニ死(シニ)ヌ（『今昔』九―一五）

(三) 原因や理由を示す。

我朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ、子となり給ふべき人なめり（『竹取』）

(四) 年齢、時期、期間を示す。

十二にて元服したまふ（『源氏』桐壺）　八十ニシテ入涅槃シ給ヒニキ（『今昔』六―一）

御子はらませ給ひて八月にて失せ給ひにき（『大鏡』為光）

10　で

「で」は、助詞「にて」が nite→nte→ⁿte→de と音が変化して成立した助詞である。平安時代中期以降に用例が見える。

右大臣宣命以二右手一此院では用レ左（『御堂関白記』寛仁元年正月七日）

院政時代の『今昔物語集』や『打聞集』にも用例が一、二見えるが、「にて」「にして」を凌いで多く用いられるのは、鎌倉時代になってからである。

今ノ后ハ継母デゾ有リケル（『今昔』四―四）

11　して

「して」は、サ変動詞「す」の連用形「し」に接続助詞「て」がついた「して」の「し」が形式語化し、全体が一語の助詞同様に機能するようになった語である。

体言および助詞「に」「を」「より」「から」などをうける。助詞の場合は「にして」「をして」などの複合助詞を形成する。

(一) 行為の手段、方法、材料を示す。

米して
かへりごとす、をとこどもひそかに言ふなり、飯粒してもつ釣るとや（『土左日記』二月八日）

㈡　動作を共にするもの、また、その人数の範囲を示す。

もとより友とする人ひとりふたりしてゆきけり（『伊勢物語』九）

㈢　使役の表現でその対象となる人物を示す。

かぢ取りして幣奉らするに（『土佐日記』一月二十六日）

漢文訓読文では使役表現に「……をして……しむ」の形式が用いられた。

諸ノ衆生ヲシテ三宝ヲ帰敬シテ皆願シテ菩薩ノ行ヲ修習セ令ムルナリ（西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点）

12　もて

「もて」は、四段活用動詞「持つ」の連用形「もち」に接続助詞「て」がついた「もちて」が促音便で「もって」となったものである。表記面では、促音を書きあらわさなかったので「もて」である。発音の面でも「もて」となり、助詞化した。漢文訓読文では「をもて」の形で使われることが多い。

体言について、動作の手段、方法、材料などを示す。

流れ来るもみぢ葉見ればからにしき滝の糸もて織れるなりけり（『拾遺集』二二一）

能ク至心ヲモテ称名シ念誦シ帰敬シ（『地蔵十輪経』平安初期点）

13　と・や・か

いわゆる並立助詞とされる「と」「や」「か」は、体言または活用語の連体形など体言の資格になる語を並列する場合に用いられる。格助詞は互いに重ねては用いないのが原則であるが、これらの助詞は、格助詞の上にも下にも位置

できることから格助詞とは別に「並立助詞」とされることがある。性格としては格助詞より副助詞に近いとも考えられるが、ここにまとめて述べることにした。

㈠ と

「と」は指示する意味をもって並列する。

(1) 「……と……と」の形式。

香具山と耳梨山とあひし時立ちて見に来し印南国原（『万葉』一四）

(2) 「……と……」の形式。下の「と」を略したもの。

言問はぬ木すら妹と兄ありとふをただ独子にあるが苦しさ（『万葉』一〇〇七）

(3) 「……、……と」の形式。上の「と」を略したもの。用例は稀である。

佐保川の清き河原に鳴く千鳥蝦と二つ忘れかねつも（『万葉』一一二三）

㈡ や

間投助詞から変った語。感動の意味はない。平安時代中期ごろからあらわれる。「と」がそれと指定する意を持つのに対して「や」は代表としてそれをとりあげているという意を示す。

(1) 「……や……や」の形式。

花や蝶やと書けばこそあらめ（『源氏』夕霧）

(2) 「……や……」の形式。

女ばらの賤しからぬやまた尼などの世をそむけるなどもたふれまろびつつ物見にいでたる（『源氏』葵）

(3) 「……、……や」の形式。

世の中の物見、何の法会やなどあるおりは（中略）かならず御覧ずめり（『大鏡』道長）

㈢ か

係助詞の副助詞化したものがさらに変ったもの。二者択一などの形で、不確かな意味で並列する。

あるかなきかに消え入り給ふ(『源氏』桐壺)

三　副助詞

副助詞は、文中の体言、活用語、副詞などを受けて、下の用言にかかる助詞である。

連体助詞が体言と体言とを結び、格助詞が体言と用言とを関係づけて文の筋を明らかにするのに対して、副助詞は、下にくる用言の動作・作用のしかた、状態のあり方などその表現的意味を細かく言い分け限定するはたらきをする。副助詞は、たとえば、

世になく清らなる玉の男御子さへ生まれ給ひぬ(『源氏』桐壺)

では、「さへ」が主格の位置にあるが、これを省いて「玉の男御子生まれ給ひぬ」と言った場合と比べてみると、伝えようとする事実を細かく表現し分けようとする語り手の感情が消えて、事実だけが述べられることになる。日本語は微妙な感情・情意の差を表現し分ける特質を持つが、それは副助詞と、後述する係助詞のはたらきに負うところが大きい。こうした機能を持つために、副助詞は格助詞の下、時に上に重ねて用いられる。

この御方の御いさめをのみぞ、なほわづらはしう心苦しう思ひ聞こえさせ給ひける(『源氏』桐壺)

子(ね)の時ばかりに、家のあたり昼の明(あか)さにも過ぎて光りわたれり(『竹取』)

また、副詞どうしを重ねて複雑なニュアンスを表現し分ける。

祈り来る風間(かざま)と思(も)ふをあやなくもかもめさへだに波と見ゆらむ(『土左日記』二月五日)

日本語の助詞の基本的なものは一音節語である。連体助詞の「つ」「な」「の」「が」、格助詞の「が」「の」「を」「に」「へ」「と」「ゆ」「よ」、間投助詞の「や」「よ」「を」、終助詞の「な」「そ」「ね」「に」「か」「は」「も」など、一音節のものに対して、二音節以上の語「より」「ゆり」「から」「にて」「して」「ばや」「なむ」「こそ」「かも」「かな」「ものか」などは、一音節の助詞の複合した語か、他の品詞の語からの転成によるものである。こうした観点から見ると、副助詞に属する「ばかり」「のみ」「など」「まで」「すら」「そら」「だに」「さへ」などは、本来は助詞ではなく、後に助詞になったものである。事実、副助詞の大部分は他の品詞から転成したもので、なお、もとの品詞における語義を保っているものが多い。

1　ばかり

「ばかり」は、動詞「計る」の連用形が名詞化した「はかり」が助詞に転成した語である。「計る」というのは、対象の長さ、重さ、量などを実際に物差しや升で計量することであるが、実測不可能な対象については、それまでの経験を物差しとして見当をつけるほかない。つまり、「おしはかる」のである。助詞の「ばかり」には、こうしたおおよその見当をつけるという意味が、その基底にある。

「ばかり」は、体言、副詞、活用語などにつく。

(一)　状態、数量、時間、長さなどをあらわす語について、その程度や範囲のだいたいの見当を示す。

斯くばかり術なきものか世間の道（『万葉』八九二）

わが恋は千引の石を七ばかり首に繋けむも神の諸伏（『万葉』七四三）

さ寝らくは玉の緒ばかり恋ふらくは富士の高嶺の鳴沢の如（『万葉』三三五八）

この「玉の緒」は「短い間」の比喩。

広瀬川袖つくばかり浅きをや心深めてわが思へるらむ(『万葉』一三八二)

「袖つく」は「浅き」の比喩。長さを示す。

わが命の長く欲しけく偽りを好くする人を執ふばかりを(『万葉』二九四三)

この動詞の終止形をうける「ばかり」は、「不確実な度合を推量する意を示す」という。[20]

㈡ 物事を他のものと区別してそれを一つに限る意を示す。「ただ……だけ」の意味である。この限定の用法は、奈良時代には見られず、平安時代以降である。

いそのかみ古き都のほととぎす声ばかりこそ昔なりけれ(『古今』一四四)

御文どもを見給ふこともなくて読みきこゆるばかりを聞きたまふ(『源氏』藤袴)

この限定を示す「ばかり」は「のみ」と似た用法であるが、「のみ」が、「それ以外の何ものでもない」として、専らそのことをとりたてるのに対して、「ばかり」は、他のものを考えた上で、それと区別して、一つに限ってとりあげるという点に相違がある。「ばかり」と「のみ」との間に意味の差があったからこそ、次の例のように「ばかり」と「のみ」を重ねて用いることもあった。

山の井の浅き心も思はぬを影ばかりのみ人の見ゆらむ(『古今』七六四)

しかし、「ばかり」と「のみ」の意味が近似していたために、平安時代以後、限定の意味は「ばかり」が受け持つようになり、「のみ」は専ら強調を表わすようになっていくのである。

2 のみ

「のみ」は、起源的に「の身」で、「それ自身」の意味であったろうという。[21]

文中の体言、体言の資格を持つ語などを受けて、それを唯一のものとして限り、それだけを取り立てて強調する。

「ただ……だけ」の意味である。

　檻褸(かがふ)のみ肩にうち懸け(『万葉』八九二)

　み雪降る冬は今日のみ鶯の鳴かむ春べは明日にしあるらし(『万葉』四四八八)

平安時代には、限定の意味は「ばかり」が受け持つようになり、「のみ」は専ら強調を表わすようになっていく。

　おきつなみ荒れのみまさる宮の内は(『古今』一〇〇六)

「荒れまさる」を強調したもの。「ひたすら荒れまさる」の意。

　言のみを後も逢はむとねもころにわれを頼めて逢はざらむかも(『万葉』七四〇)

　朝夕の宮づかへにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけむ(『源氏』桐壺)

奈良時代には、格助詞の位置に「のみ」が置かれるか、格助詞の上に「のみ」が置かれるのが普通であったが、平安時代には、右の例のように、格助詞の下に「のみ」がつくのが普通になった。

3　など

「など」は、平安時代に成立した語で、「なにと」が音の変化を起して、(nanito→nanto→$na^{n}do$→nado)となったものである。「なにと」は、『土左日記』に、

　守(かみ)のはらから、また他人(ことひと)、これかれ酒なにともて追ひ来て(十二月二十七日)

とある形である。「など」は、当時、撥音は表記しない習慣であったから、実際の発音としては、「ナンド」であったかも知れない。日常語であったらしく、学者語と言うべき訓点語や詩語であった和歌には用いられていない。

「など」は、体言、活用語、副詞、助詞など種々の語をうけて、実際にある多くのものの中から主なものだけをとり出して、「だいたいのところを言ってみれば……である」と例示する。「多くある中から一例をあげると」という意

味である。また、人のことばや事物をおおよそのこととして示す場合にも用いる。

くさぐさのうるはしき貝、石など多かり（『土左日記』二月四日）

その物語、かの物語、光る源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに（『更級日記』）

からうたに、日をのぞめば都とほしなどいふなることのさまを聞きて（『土左日記』一月二十七日）

なお、「など」は、現代語でもそうであるが、古代語においても例示する語であって複数を示す語ではない。複数は当時、「ら」「たち」「ども」で表わされた。「など」が「ども」をうけた例のあることによっても明らかであろう。

小魚どもなど、まだ見ざりつることなれば、いとをかしう見ゆ（『蜻蛉日記』中）

舞の師どもなど世になべてならぬをとりつつ（『源氏』紅葉賀）

また、「など」は、成立が「なにと」に由来し、もともと「と」を含んでいるので、平安時代には「なとど」という言い方はしなかった。

4 まで

「まで」は、体言または活用語の連体形をうける。動作が、あるところから始まって進行し、その行きつくぎりぎりのところ、極限に達したところを示す。また、程度に関して、その限度、限界の状態であることを示す。さらに、動作の及ぶぎりぎりの範囲を示す。奈良時代には、「まで」と並んで、ほぼ同じ意味の「までに」という形が行われた。『万葉集』では、「までに」の方が用例が多い。

㈠ 動作の行きつくく極限のところを示す。

(1) 時間的な極限を示す。

昼は日の暮るるまで夜は夜の明くる極み思ひつつ（『万葉』四八五）

「日の暮るるまで」と「夜の明くる極み」とが対比的に用いられていて、「まで」が「極み」と対応する意味であることがわかる。

わが君は千代に八千代にさざれ石の巌となりて苔のむすまで(『古今』三四三)

(2) 空間的な極限を示す。

天飛ぶや鳥にもがもや都まで送り申して飛び帰るもの(『万葉』八七六)

廿二日にいづみのくにまでとたひらかに願たつ(『土左日記』十二月二十二日)

(二) 動作の至り及ぶ限度、極限の状況における程度を示す。

御軍士を　あどもひたまひ　斉ふる　鼓の音は　雷の　声と聞くまで　吹き響せる　小角の音も　敵見たる　虎か吼ゆると　諸人の　おびゆるまでに……取り持たる　弓弭の騒　み雪降る　冬の林に　飄風かも　い巻き渡ると　思ふまで　聞きの恐く(『万葉』一九九)

この御子のおよずけもておはする御かたち、心ばへ、ありがたく珍しきまで見えたまふを、え嫉みあへ給はず(『源氏』桐壺)

この「珍しきまで」のように形容詞の連体形につく「まで」は、平安時代、特に『源氏物語』に極めて多く用いられている。「……と思われるほど」の意味である。

(三) 動作の至り及ぶぎりぎりの範囲・限界を示す。

楚取る里長が声は寝屋戸まで来立ち呼ばひぬ(『万葉』八九二)　ありとある上下、わらはまで酔ひしれて(『土左日記』十二月二十四日)　人の朝廷の例までひき出でてささめき嘆きけり(『源氏』桐壺)

(四) 「までも」の形で、打ち消しの語について、「……にしても」の意味を示す。平安時代以後の用法である。

折よくは見に来ぬまでもわが宿の桜咲きぬと告げましものを(『和泉式部日記』)

(五) なお、奈良時代に、「までに」がカ変動詞の終止形「来」を受けた例がある。『万葉集』の防人歌に限られているので、東国方言らしい。

父母え斎ひて待たね筑紫なる水漬く白玉取りて来までに（『万葉』四三四〇）

5 すら

「すら」は、体言または体言の資格を持つ語を受けて、その表現内容から当然予想される事態と異る事態が述語に述べられることを示す。「……でさえも」の意味である。奈良時代には「すらに」という形も用いられた。奈良時代の「すら」は男性が用いた例が多いが、平安時代になると、専ら漢文訓読文や物語の男性の詞に用いられ、女流文学のかな作品にはほとんど用いられていない。『源氏物語』や『枕草子』には「すら」の用例がない。

言問はぬ木すら妹と兄ありとふをただ独子にあるが苦しさ（『万葉』一〇〇七）

軽の池の汭廻行き廻る鴨すらに玉藻のうへに独り宿なくに（『万葉』三九〇）

外物ヲスラ尚捨ツルコト能ハズ況ヤ内法ヲハ（『成実論』天長点）

逆罪ヲ犯セル者スラ仏ヲ念ジ奉テ利益ヲ蒙ル事既ニ如レ此シ（『今昔』一―三八）

『今昔物語集』では、「すら」は少数例で、「そら」の形が多く用いられている。

釈種ハ皆兵ノ道ニ極タリト云ヘドモ戒ヲ持テル者ナレバ虫ヲソラ不害ズ、況ヤ人ヲ敛ス事ヲヤ（二―二八）

6 だに

「だに」は、体言および体言の資格を持つ語（連体形、連用形）、副詞などを受ける助詞である。奈良時代の用例では、「だに」の下にくる述語が、「言だに告げむ」（『万葉』二〇一一）、「ほととぎす汝だに来鳴け」（『万葉』一四九九）、「ひと目だに君とし見てば」（『万葉』三九七〇）、「玉桙の道だに知らず」（『万葉』二二〇）、「今夜だに乏むべしや」（『万葉』二〇

七九)、「夢にだに何しか人の言の繁けむ」(『万葉』二八四八)のように、志向、命令、仮定条件、否定、反語、疑問などの表現になっていて、通常の肯定判断の終止形の形のものがない。このことから、「だに」は、これらの特定の陳述と呼応すると見ることもできる。述語の特定の陳述と呼応する助詞は係助詞であるから、「だに」は、副助詞ではなくて、係助詞であるとする説も立てられている。[22] 奈良時代から、「だに」と「すら」とは意味が近似していたために、次第に「だに」が「すら」にとって代る動きがあったが、平安時代には、「すら」が女流文学で用いられなくなったので、それを「だに」が埋めるようになった。この種の「だに」は明らかに副助詞と見られる。したがって、ここでは、「だに」を一応、通説のように副助詞の項で説くことにする。なお、「だにも」の形も古くから用いられている。

㈠「だに」は、未定や仮定の事実について、「せめて……だけでも」と最小限度のことをとりたてて期待をこめて指示する。呼応する陳述が仮定条件の場合には、「(ゆずりにゆずって)せめて……だけでも……ならば」という気持を表わす。

恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言尽してよ長くと思はば(『万葉』六六一)

なき人になり給へらむ御さまかたちをだに今一たび見奉らむ(『源氏』椎本)

㈡「だに」が「せめて……だけでも」と対象をとりたてて指示するところから、「すら」と類似した意味に転じて、軽いものをあげて、言外にもっと重いもののあることを類推させるようになり、「……までも」と「さえ」と同様の意味を表わす。平安時代には、「だに」をうける述語の表現形式は、否定、反語、疑問などである場合が多いが、かなり自由になり、係助詞的な呼応が薄れて、ほぼ完全に副助詞になる。

朝井堤に来鳴く貌鳥汝だにも君に恋ふれや時終へず鳴く(『万葉』一八二三)　一文字をだに知らぬ者しが足は十文字にふみてぞ遊ぶ(『土左日記』十二月二十四日)　女御とだに言はせずなりぬるが、あかず口惜しうおぼさるれば(『源氏』桐壺)

7 さへ

「さへ」は動詞「添ふ」の連用形が名詞化した「そへ」が助詞になった語と考えられる。『万葉集』で、「さへ」に「共」「并」「兼」「副」などの漢字を宛てた表記のあることは、その原義を示すものである。『万葉集』には「さへに」という形も用いられている。

体言、副詞、活用語の連用形などを受ける。

㈠ 現在あるものの状態や作用の上に、さらに同類のことがらを添加・累加することによって、その程度が増したり、範囲が拡大したりして、事態が同じ方向へいっそう進むことを示す。「その上……まで」の意味である。

天雲の外に見しより吾妹子に心も身さへ(副)寄りにしものを(『万葉』五四七)

との曇り雨は降り来ぬ雨霧らひ風さへ吹きぬ(『万葉』三二六八)

能登川の水底さへに照るまでに三笠の山は咲きにけるかも(『万葉』一八六一)

㈡ 動作や対象をとりたてて、それが予想外の状態、極端な程度であることを示す。「……までも」という気持である。

望月の明さを十あはせたるばかりにて、ある人の毛の穴さへ見ゆるほどなり(『竹取』)

かの砧の音も耳につきて聞きにくかりしさへ恋しうおぼし出でらるるままに(『源氏』末摘花)

㈢ 「さへ」と「だに」とは、奈良時代には意味上の分担があったと考えられるが、『万葉集』には、次のように同じ歌で、「さへ」と「だに」と両方の伝えを持つものが載せられている。

明日香川あすだに一に云ふさへ見むと思へやも(『万葉』一九八)

直に逢はずあるは諾なり夢にだに何しか人の言の繁けむ

或る本の歌に曰はく、現にはうべも逢はなく夢にさへ(『万葉』二八四八)

これは意味上、「さへ」と「だに」とが近くなっていたことを示すものである。平安時代になると、「だに」と「すら」が衰えだして、室町時代には、「だに」と「すら」の表わした意味を「さへ」が代って受け持つようになる。が、その代り、「さへ」が本来持っていた添加の意味は「まで」が担うようになる。

8 し

「し」は、奈良時代から平安時代にかけて用いられた助詞であるが、平安時代には、次のように用法が固定した。

(一) 「……し……ば」のように、下に接続助詞「ば」による条件句を導く場合。

心ざし深くそめてしをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆらん(『古今』七)

(二) 「しぞ」「しこそ」「しか」「しは」など、係助詞が下接した形のもの。

ちはやぶる宇治の橋守汝(なれ)をしぞあはれとは思ふ年の経(へ)ぬれば(『古今』九〇四)

「し」のあらわす意味については、従来種々の語について、その意味を強めると説かれてきたが、大野晋によれば、「し」は、助詞「は」のような確信をもって他を排除するような強めではなく、「ぞ」のような人に教示する断乎たる強めでもなく、「こそ」のような感情に支配されていることを示す強めでもない。また、「なむ」のような対人関係を意識し、丁寧に相手に訴えるものでもなく、「も」のように、不安・不確実な気分の中で執着の念を表わすものでもなく、自分には自然にこう思われてくるのだがとか、自分には自然にこう感じられるのだがという、控え目な、遠慮がちな気持を表明するものであるという。[23] その論拠として、大野は、『万葉集』における「し」の用例の約五割は、「……し……ば」という条件句に用いられていることと、「し」の下にくる文節が、「む」「らむ」「まし」「けむ」「け

らし」「べし」「な」など推量、勧誘、希望などの助詞・助動詞と、自発の助動詞「ゆ」であるものが四割五分に達することをあげている。

今の世にし楽しくあらば来む生には虫にも鳥にもわれはなりなむ(『万葉』三四八)

賢しみとものいふよりは酒飲みて酔泣するしまさりたるらし(『万葉』三四一)

芦辺行く鴨の羽がいに霜降りて寒き夕べは大和し思ほゆ(『万葉』六四)

用例の大部分は、この種の表現で占められているが、それ以外の「し」の用例も、心情的な形容詞で終るものが多い。

そこし恨めし秋山われは(『万葉』一六)

玉くしげ覆ふを安み開けて行かば君が名はあれどわが名し惜しも(『万葉』九三)

9　しも

「しも」は、助詞「し」と係助詞「も」の複合した語で、その受ける語句をとりたてて示す。奈良時代には「し」と並んで行われたが、平安時代になると、「しも」の方が「し」を圧倒した。意味も次第に単純な強調を表わすようになった。

奈良時代には、体言、副詞(かく、しか)、活用語の連用形、助詞「を」についたが、平安時代には、活用語の連体形や助詞「は」「ば」「に」「と」など広い範囲の語につくようになった。

天の下に　国はしも　多にあれども(『万葉』三六)

わが屋前の秋萩の上に置く露のいちしろくしもわれ恋ひめやも(『万葉』二二五五)

憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつつ猶ぞ恋しき(『伊勢物語』二二)

「しも」は、「えしも」「かくしも」「さしも」「いとしも」「必ずしも」などの形で、下に打消、反語を伴って、強調の意味を示す。

今日しも端におはしましけるかな(『源氏』若紫)

「今日しも」は、「今日に限って」「よりによって今日は」の意味である。強調の意味は、時、所など「しも」の上の語を特に強くとりたてることから生じる。

10　づつ

「づつ」は、平安時代になって、かな文に見える語である。「一つ」「二つ」と数える場合の接尾語「つ」を重ねたものが助詞化したらしい。分量を示す語をうけて、等量に割って、動作や事態が進行することを示す。

式部が所にぞ気色あることはあらん。少しづつ語り申せ(『源氏』帚木)　夜いたくふけぬれば御前なる人々一人二人づつ失せて、御屏風・御几帳のうしろなどに、みなかくれ臥しぬれば(『枕草子』三一三　大納言殿まゐり給ひて)

四　係助詞

係助詞は、文中の語句と述語用言とを関係づける助詞である。文中の語句と述語用言とを関係づける助詞には、すでに述べた格助詞、副助詞があるが、格助詞が文を構成する各成分の地位関係を表示して文の骨格を示すのに対して、副助詞は、そのうける語をとりたてつつ、下の述語用言の表現する意味内容にかかって、それを限定するはたらきをするものであった。係助詞は、そのうける語句をとりたてつつ下の述語用言にかかっていく点で、副助詞と共通した性格を持つ。その点に着目すれば、副助詞と係助詞とを一括して「限定を表わす助詞」(時枝誠記『日本文法　文語篇』)の

ように扱うこともできる。また、副助詞も係助詞もともに格に関わらない助詞であるから、文中の主格、目的格、補格のどの位置にも置かれる点で共通した語性を持っている。が、係助詞は、山田孝雄が明らかにしたように[(24)]、他の助詞と重ねて用いる場合の重ね方に副助詞と次のような相違がある。

(一) 格助詞と重ねて用いる場合に、副助詞は格助詞の下にあるのが通例であるが、時として格助詞の上に行くこともある。しかし、係助詞は必ず格助詞の下にあり、決して上に行くことがない。

(二) 副助詞と係助詞を重ねる場合には、副助詞は係助詞の上にあって、決して係助詞の下に行くことはない。

(三) 係助詞は接続助詞「ば」の下についいて、その上の句とその下の句との陳述の関係を厳密に結合する用をなすことがある。この特性は格助詞、副助詞には決してない。

この差異は、係助詞と副助詞との語性の差を示すものである。副助詞と異なる係助詞の特質は何かと言えば、係助詞は、述語用言へのかかり方に副助詞と異なるところがある。それは、用言の意味に関わるのではなく、用言のはたらきかたに関わるのである。係助詞「ぞ」「なむ」「か」「や」と関係づけられる述語用言が連体形をとり、「こそ」と関係づけられる述語用言が已然形をとる、いわゆる係結びの形式は、それを顕示するものである。なお、「は」「も」は、終止形を要求する係助詞である。

言語表現が、時間の一本の線の上にくりのべられる性質(線条性)のものである以上、表現は、いくつかの部分・要素に分けて、一定の秩序に従って順次に述べられる。基本的な言語モデルを考えれば、日本語では、先行する部分は、後行する部分にかかり、後行する部分は、先行する部分を受けつつ、さらに後へかかっていく。こうした、後へ後へとかかっていく表現をすべて受けるものは、そこで表現をまとめあげ完結する述語である。「ぞ」「なむ」「か」「や」「こそ」の係助詞が上にある場合に、その述語用言が、「ぞ」「なむ」「か」「や」に対して連体形となり、「こそ」に対して已然形となる、いわゆる係結びは、そうした日本語の表現形式の特殊なケースである。では、係結びの現象は

いかにして成立したか。

係助詞「ぞ」(古くは「そ」と発音された)は、本来、文末に置かれて、文を終止する語であった。

うまし国そ　あきづ島　大和の国は（『万葉』二）

「うまし国そ」は、「よい国だ」の意味である。この文は、「あきづ島大和の国はうまし国そ」を倒置して、「うまし国」を強調したものである。倒置したことによって、この表現は「……そ……(体言)は」(……である、……(体言)は」という形式をとることになる。したがって、「……は」のところに活用語が置かれる場合は「……連体形(十もの)十は」または、「……連体形(十こと)十は」となる。「は」は常に置かれる語ではないから文末が連体形になるという形式が生じるとともに、文中に位置を占めた「そ」は、指定表現から、その直上の語をとりたて、強調するようになり、これらの固定化した「……そ……連体形」の形式が生じることになった。つまり、倒置表現から強調表現へと発達したものが、いわゆる係結びの現象である。

玉梓の君が使を待ちし夜のなごりそ今もいねぬ夜の多き（『万葉』二九四五）

右の例は、

今もいねぬ夜の多き(は)玉梓の君が使を待ちし夜のなごりそ

の倒置された姿をよくとどめているものである。「そ」を例としたが、連体形で結ぶ、「なむ」「や」「か」の係結びの成立事情も同様に倒置表現に由来するものである。

已然形で結ぶ係助詞「こそ」の成立について、大野晋は、已然形が、本来、単独で順接の条件句も逆接の条件句も示し得たことに着目して、

家離りいます吾妹をとどめかね山隠しつれ心どもなし（『万葉』四七一）

大船を荒海に漕ぎ出弥船たけわが見し児らが目見は著しも（『万葉』一二六六）

などの已然形の語法があるところに、その前提条件の語法であることをいっそう明瞭にするために、感情的に叙述を強調する「こそ」が投入されて、その「こそ」の強調と已然形との協同によって、逆接の既定条件句を成立させたのが、

大君の辺にこそ死なめ顧みはせじ(『万葉』四〇九四)

のような、「こそ」の係結びの古い用法であったと説いている。[25]

奈良時代から平安時代になると、係結びは、次第に単なる強調のレトリックと化していった。院政時代以降、用言の終止形が連体形に統合される現象が顕著になるにつれて、連体形に終る係結びの形式的特色を希薄にし、その表現価値を失わせる結果となった。こうした係結び現象の崩壊は、日常語に始まり、散文に及び、やがて擬古的文章における係結びの破格という現象をも生じるに至るが、和歌・連歌の世界では、てにをは研究に支えられて、その古典的表現法が規範として守られていった。なお、「こそ」の係結びの消滅は、古典語の已然形が仮定条件をあらわす仮定法にとって代られる近世になってからのことである。

1　ぞ(そ)

「ぞ」は、古くは清音で「そ」である。奈良時代には、清音「そ」(曾・所)が圧倒的に多いが、濁音「ぞ」(叙・序)も用いられている。『万葉集』では、清音「そ」が四〇〇例近いのに対して、濁音「ぞ」は三四例である。平安時代以後は、一般には濁音「ぞ」になっていった。

「そ」は、指示代名詞「そ」に由来する語で、文末に置かれて、指定を表わす終助詞であったのが、強調表現のために倒置されて、文中に位置するようになり、そのついた語句を指示点として強調するようになったものである。倒置されたために、文末は体言相当の連体形をとることになり、「……そ……連体形」という断定的強調表現形式が形

成されたのである。

み吉野の　耳我の嶺に　時なくそ(曾)　雪は降りける　間なくそ(曾)　雨は零りける　その雪の　時なきが如
その雨の　間なきが如　隈もおちず　思ひつつぞ(叙)来し　その山道を(『万葉』二五)

右は、一首の中に「そ」と「ぞ」とが用いられている例である。

やまとうたは人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける(『古今』仮名序)

なお、いわゆる係結びは、「ぞ」をうける活用語が文末にあって、そこで文が断止する場合のみの現象である。「ぞ」をうける活用語が、文の終止とならずに、中止法となったり、さらに下へつづく場合には、「……ぞ……連体形」の形式は見られない。これを係結びの解消・流れなどという。係結びの解消は、他の係助詞「なむ」「か」「や」「こそ」にも同じように見られるものである。また、係助詞をうける語が体言である場合には、当然のことながら、係結びの形式は見られない。

わびぬればさらにあやめも知られざりけりとぞいひやらまほしけれど、さるべき人しなければ心に思ひくらさる
(『蜻蛉日記』中)

あしひきの山行きしかば山人の朕に得しめし山つとそこれ(『万葉』四二九三)

なお、『万葉集』の東歌や防人歌に「そ」の東国方言と見られる「と」がある。

荒し男のい小箭手挟み向ひ立ちかなる間しづみ出でてと吾が来る(『万葉』四四三〇)

2　なむ(なん)・なも

「なむ」は、奈良時代には終助詞として用いられ、係助詞には「なも」が用いられた。平安時代になって、「なも」が衰退し、「なむ」が代って係助詞として用いられるようになった。この経路は、係助詞が終助詞から転じたことを

実証するものである。山田孝雄によれば、八七四(貞観一六)年八月二〇日の宣命(『三代実録』二六)中に「奈毛」と「奈牟」とが混在しているのが、係助詞「なむ」の最古の例である。[26]「なむ」は「なん」とも表記された。「なも」、「なむ」とも、それを受ける文末の語が活用語である場合は連体形となる。なお、文が後へ続く場合や、受ける語が体言の場合には、いわゆる係結びの形式にはならない(係結びの解消)。

(一) 奈良時代の係助詞「なも」は、宣命に多く用いられ、約一〇〇例を数えるが『万葉集』には一例を見るだけである。

此に依りて諸の人に聞かしめむとなも召しつる(『続日本紀』宣命第四五詔)

何時(いつ)はなも恋ひずありとはあらねどもうたてこのごろ恋し繁しも(『万葉』二八七七)

(二) 平安時代の係助詞「なむ」は、散文特にその会話文中に多く用いられている。日常語として用いられていたことの反映と解される。鎌倉時代以降、「なむ」は擬古的な文章に用いられるだけになる。

昔人は、かくいちはやきみやびをなんしける(『伊勢物語』一)

あやしき身一つをも頼もし人にする人なむ侍れど、いとまだいふかひなきほどにて(『源氏』若紫)

渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて(『伊勢物語』九)

「なも」「なむ」ともに、用例からも明らかなように、話手が聞手に強く働きかけ、念をおすように語りかける口調で述べられたことが想像される。

右に掲げた『伊勢物語』第一段の結びの文に見られるような「……なむ……ける」の形式は、古物語の地の文の叙述における強調形式であると言われているが、『竹取物語』や『大和物語』、『源氏物語』の桐壺の巻の結び(「光る君」といふ名は高麗人(こまうど)の愛(め)で聞えてつけ奉りけるとぞいひ伝へたるとなむ)などにも見られる。はるかに下って、院政時代の『今昔物語集』の各説話が「今昔(イマハムカシ)」で語り起こされ「……トナム語リ伝ヘタルトヤ」で語りおさめられる形式

を持っていることも、この語り口が生きつづけたことを示すものである。

3 か・かも・かは

「か」は、「ぞ」「なむ」と同じく、終助詞の「か」が強調表現のために倒置されて、文中に位置するようになったもので、文末に活用語がくる場合は連体形である。

文中の体言、活用語の連用形、助詞などを受けるが、奈良時代には、活用語の已然形を受けた例や形容詞語幹に「み」のついたものを受けた例などがある。

吾妹子がいかに思へかぬばたまの一夜もおちず夢にし見ゆる（『万葉』三六四七）

うち靡く春を近みかぬばたまの今宵の月夜霞みたるらむ（『万葉』四四八九）

(一)「か」は、疑問の気持を表わす。「か」の受ける語を疑問点として指示したり、問いかけたりする。

吹き響せる　小角の音も　敵見たる　虎かほゆると　諸人の　おびゆるまでに（『万葉』一九九）

いづれの山か天に近きと問はせ給ふに（『竹取』）

「か」は、奈良時代から疑問詞「幾」「いづれ」「いかで」「いつ」などの下に用いられることが多い。「や」が疑問詞の下に用いられないのと対照的である。平安時代になって、「か」が疑問詞の下に用いられるのがほとんど常態になると、「か」自体の疑問表示の機能が薄らぎ、疑問表示には「か」に代って「や」が用いられるようになるのである。

なお、疑問の「か」の下に助詞「も」がついて複合した「かも」は、「か」に主機能があって、疑問をあらわし、「か」と同様、文中の体言、活用語の連用形、形容詞語幹に「み」のついた形などを受ける。呼応する文末の述語用言は連体形となる。

妹が家に雪かも降ると見るまでにここだも乱ふ梅の花かも（『万葉』八四四）

たぎつせのはやき心を何しかも人目づつみのせきとどむらむ（『古今』六六〇）

(二) 疑問の気持が強調されると、反語になって、「……であろうか、いや、そうではない」の気持をあらわす。

生きとし生けるもののいづれか歌をよまざりける（『古今』仮名序）

なお、「か」に係助詞「は」がついて複合した「かは」は、「か」の機能をいっそう強化した語で、文中の体言、用言の連体形、助詞などについて、疑問、反語をあらわす。奈良時代には用例がなく、平安時代になって成立したものである。

(1) 疑問をあらわす。

はちす葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく（『古今』一六五）

何心ありて、いかなる人をかは、さてする給ひつらむ（『源氏』浮舟）

(2) 反語をあらわす。

咲く花は千種ながらにあだなれど誰かは春をうらみはてたる（『古今』一〇一）

(三) 「か」に応ずる結びが省略された場合がある。

いづれの御時にか。女御更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり（『源氏』桐壺）

「御時にか」をうける「ありけむ」のような述語用言が省略された表現である。

4 や・やも・やは

「や」は、もともと、掛け声である。「やぁ」「やっ」という掛け声が、表現の強調するところに插入されて、聞手

の注意をひく間投助詞となったものである。間投助詞の「や」は、文末に置かれて、活用語の終止形や已然形を受けて、反語や疑問を示した。

　三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなも隠さふべしや（『万葉』一八）

　家にある妹を忘れて思へや（『万葉』六八）

こうした「や」が「か」と同様、強調表現として倒置され、文中に位置を占めるようになって、係助詞「や」が成立し、文末の活用語は連体形をとることとなり、「……や……連体形」の係結び形式が発生した。

　古の人にわれあれやささなみの故き京を見れば悲しき（『万葉』三二）

すでに疑問・反語の係助詞として「か」があるところに、新たに、同様の意味を示す係助詞「や」が成立するについては、何らかの理由があったはずである。「か」の項で述べたように、「か」は疑問詞の下につく例が多く、「か」自身で疑問を表示する機能が、奈良時代にすでに衰弱しつつあったと見られる。そこに、「や」が進出できる余地があり、新しい表現としてその使用例が増えていったものと思われる。「や」が「か」よりもやや用法が広く、相手への問いかけ、叙述対象や主題への疑問、詠歎、反語などをあらわすことも、「か」を圧倒していく要因となったであろう。かくして、平安時代は「や」の全盛期となった。

(一)　問いかけ、疑問をあらわす。

　このころは千歳や往きも過ぎぬるとわれやしか思ふ見まく欲れかも（『万葉』六八六）

　年の内に春は来にけりひととせを去年とやいはむ今年とやいはむ（『古今』一）

　その姉君は、朝臣のおとうとや持たる（『源氏』帚木）

(二)　詠歎をあらわす。文末に推量の助動詞を伴うことが多い。

　まそ鏡見飽かぬ君に後れてや朝夕にさびつつ居らむ（『万葉』五七二）

荒磯やに生ふる玉藻のうち靡き独りや寝らむ吾を待ちかねて（『万葉』三五六二）

㈢　反語をあらわす。

大夫や片恋ひせむと嘆けども鬼の大夫なほ恋ひにけり（『万葉』一一七）
琴の音も月もえならぬ宿ながらつれなき人をひきやとめける（『源氏』帚木）

㈣　奈良時代には係助詞「や」に助詞「も」が複合した「やも」が用いられ、文中の体言について、疑問、反語をあらわしたが、平安時代になると、「や」に係助詞「は」のついた「やは」が、「やも」に代って用いられた。「やは」は体言、活用語の連用形、副詞、助詞などについて、反語・疑問をあらわしたが、実例の大部分は反語である。「やも」「やは」とも文末の述語用言は連体形となる。

〔やも〕　士やも空しかるべき万代に語り続ぐべき名は立てずして（『万葉』九七八）〈反語〉
ここにして家やも何処白雲のたなびく山を越えて来にけり（『万葉』二八七）〈疑問〉

〔やは〕　ほととぎす声も聞こえず山びこは外に鳴く音をこたへやはする（『古今』一六一）

この例の「やは」は、反語の形式で、「……してくれたらいいのに」の意の弱々しい願望を示す。

春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる（『古今』四一）〈反語〉

5　こそ

「こそ」は、体言、副詞、形容詞語幹＋「み」、など種々の語を受けて、それを強くとりたてて述語との結合を強めるようにはたらく係助詞である。「こそ」のかかっていく述語の活用語は已然形で終止するが、奈良時代には、形容詞型活用の場合には、連体形で結んでいる。

一日こそ人も待ちよき長き日をかくのみ待たばありかつましじ（『万葉』四八四）

「こそ……已然形」の係結びの成立事情については、すでに述べたことであるが、本来、已然形という活用形は既定条件を示して、後へつづける機能をその任務とするものであった。「こそ」は、「此其」を語源とするともいうように指示、強調の語である。已然形によって形成される前提条件句の内部に、この強調の「こそ」が挿入されると、その已然形による前提句全体が強調され、とりたてられることになる。「こそ」が挿入されて、「こそ……已然形」の形式になった前提句は、後にくる帰結句との間に、順接、逆接などの関係を構成していた。

石見の海　角の浦廻を　浦なしと　人こそ見らめ　潟なしと　人こそ見らめ……か青なる　玉藻沖つ藻　朝羽振る　風こそ寄せめ　夕羽振る　浪こそ来寄せ　浪の共　か寄りかく寄る　玉藻なす　寄り寝し妹を（『万葉』一三一）

「人こそ見らめ」は逆接で、「人は見るだろうが」の意味である。「風こそ寄せめ」、「浪こそ来寄せ」は順接で、「風が寄せてくるだろうから」、「浪が寄せてくるから」の意味である。

奈良時代の実例においては、「こそ……已然形」の形式の約三分の二は、逆接の意味に用いられている。

ところで、詩的表現において、表現効果を高めるために、「こそ」によってとりたてられた「こそ……已然形」の前提句につづくべき帰結句を省略すると、余情、余韻のこもった表現になる。この場合、前提句は特立されることになる。

極りてわれも逢はむと思へども人の言こそ繁き君にあれ（『万葉』三一一四）〈順接〉

わたつみの海に出でたる飾磨川絶えむ日にこそ吾が恋止まめ（『万葉』三六〇五）〈逆接〉

こうして、「こそ……已然形」の形式は、前提句・帰結句という本来の文構造から自立して、「……こそ……已然形」が一文としての構造と見なされるようになっていった。

「こそ……已然形」の新たな展開は、「かくしこそ」、「うべしこそ」などの副詞「かく」、「うべ」に強めの助詞「し」のついたものを「こそ」が受ける形で、単純な強調を示す用法が生じたことである。この用法は奈良時代末期

に起ったが、平安時代に「こそ……已然形」が専ら強調表現として用いられるさきがけとなったものである。

しなざかる越の君らとかくしこそ楊蘰き楽しく遊ばめ(『万葉』四〇七一)

夜くだちて鳴く川千鳥うべしこそ昔の人もしのひ来にけれ(『万葉』四一四七)

なお、奈良時代には、「こそ」が、条件句を受ける用法がある。確定条件の場合には、「こそ」が已然形を直接受けた。実例は、順接に限られている。そのために、平安時代には「已然形＋ば」の形を「こそ」が受けることになるが、平安時代の実例は少なく、あまり用いられなかったことを示している。

わが背子がかく恋ふれこそぬばたまの夢に見えつつ寝ねらえずけれ(『万葉』六三九)

竜田姫たむくる神のあればこそ秋のこのはの幣と散るらめ(『古今』二九八)

また、仮定条件の場合には、「未然形＋ば」の形を受ける。

天地の神なきものにあらばこそ吾が思ふ妹に逢はず死せめ(『万葉』三七四〇)

相坂のゆふつげどりにあらばこそきみがゆききをなくなくもみめ(『古今』七四〇)

平安時代になると、「こそ」は、動詞の連用形や、副詞、形容詞連用形などをも受けるようになる。ただし、早い時期には、動詞の連用形を受ける場合は、「鳴きこそ渡れ」のように動詞の複合語の中間に挿入された。こうした用法の拡大を背景に「こそ……已然形」の呼応形式は、次第に、単純な強調表現のための準則と化していくことになる。『古今集』では「こそ」の用例一一一例中単純強調終止が四二例を占めている。(27)

うきことを思ひつらねて雁がねの鳴きこそ渡れ秋の夜な夜な(『古今』二一三)

いそのかみ古きみやこの郭公声ばかりこそむかしなりけれ(『古今』一四四)

かくて、「こそ……已然形」は、強調表現の代表的形式として、平安時代以降の文章語に長く用いられ、特に中世の歌学、連歌論のてにをは研究によって、規範化されていった。院政時代以降、連体形による終止形統合によって、

「ぞ」「なむ」「か」「や」などがその係結びの表現価値を失っていった中で、「こそ……已然形」は近世まで、その表現価値を失わなかった。が、「こそ……已然形」で結ばない、破格の例も『竹取物語』や『源氏物語』にすでに見えている。

されば<ruby>こ</ruby>そ異物の皮なりけり(『竹取』)　内侍のかみあかばなにがしこそ望まむと思ふを(『源氏』行幸)

これらの例には、本文の書写年代の問題もあるが、破格の例は、院政時代頃から増加している。

6　は

「は」は、体言、活用語の連体形などを受け、その受けた語を話題として提起し、それについての説明を述語に要求する助詞である。述語のありかたを規制するので、係助詞に分類されるが、その本性は、提題の助詞といわれるように、話手と聞手との間に話題の場、課題の場を設定するところにある。

話題の場、課題の場の設定は、その話題、課題となる対象を「……は(何だ・どうだ)」という問いの形で持ちだすことである。

「やまとは?」「国原は?」「春は?」

そして、課題の場は、この問いに対する答え、解決を述語として展開することを要求するのである。

やまとは、国のまほろば(『古事記』景行)　国原は、煙立ち立つ(『万葉』二)　春は、あけぼの(『枕草子』一)

提題の「は」による文構成は、このように問いと答えとの問答形式によって成り立つものである。

現代語において「……は……である」が、論理的表現における命題の形式であることは、よく知られているが、「は」による提題形式はその述語、説明部に、肯定、否定の明確な表現を要求する。奈良、平安時代においても、「は」による提題構文(題説関係構文)は明確な判断を示すものである。

話題を提起する場合に、最初に話題を示すときには「が」を用い、その後は「は」を用いるということから、「が」は、未知の、新しい情報を示し、「は」は、既知の、古い情報を示すといわれている。[28]

「は」による提題についてみると、それがその文に表現されていない他の話題と対比的に区別され、とりたてられる場合、その話題は、話手と聞手との間にすでに知られたものとして、聞手に提示される。が、既知なのは、その提題の部分だけであって、その後に要求されている説明、述語の部分は、未知なるものとして、それが説き明かされることが期待されていると言ってよい。「は」は、既知なるものをうけて、未知なるものをひきだすはたらきをする助詞である。「は」は、種々の語を受けるが、すでに明らかに知られている語以外のものは、ほとんど受けない。次のように疑問詞(いつ、いづく、など)を受けるものは稀な例である。

　梅の花いつは折らじと厭はねど咲きの盛りは惜しきものなり(『万葉』三九〇四)

　みちのくはいづくはあれどしほがまの浦こぐ舟のつなでかなしも(『古今』一〇八八)

「は」は、主格、目的格、補格のどの位置にも置かれるが、格とは関係のない助詞であるから、格助詞「を」や「に」がある場合にはその下について、提示する。

　父母は　枕の方に　妻子どもは　足の方に　囲み居て　憂へ吟ひ(『万葉』八九二)〈主格〉

　国原は　煙立ち立つ　海原は　鷗立ち立つ(『万葉』二)〈補格〉

　秋山の　木の葉を見ては　黄葉をば　取りてそしのふ　青きをば　置きてそ歎く(『万葉』一六)〈目的格〉

「を」につく場合には、「は」は音変化を起して「ば」となる。

「は」が主格の位置に置かれる場合には、主格助詞「が」との間に次のような相違がある。

(1)「が」は、すでに述べたように、条件句や従属句の主格を示すが、「は」には条件句の主格を示す用法がない。また、従属句の主格も、対比的表現の場合を除けば、原則として示すことがない。

恋しくは形見にせよとわが背子が植ゑし秋萩花咲きにけり（『万葉』二一一九）
吾妹子にわが恋ひ行けば羨しくも並び居るかも妹と背の山（『万葉』一二一〇）
おとこ君はとくおき給ひて、女君はさらにおき給はぬあしたあり（『源氏』葵）

この例は対比的表現であるために「は」が従属句の主格を示している例外的な場合である。

(2) 「は」は、単文、主文の主格を示す。この場合、述語の活用語は終止形で断止する。ただし、文中に「ぞ」「なむ」「か」「や」「こそ」の係助詞がある場合は、文末の活用語は、その係結びの形式になる。「が」が単文、主文の主格を示す場合は、その述語の活用語は、終止形ではなく、いわゆる余情どめの連体形となる。

香具山は畝火雄々しと耳梨と相あらそひき（『万葉』一三）
やまとうたは人の心を種としてよろづのことのはとぞなれりける（『古今』仮名序）
大船の津守の占に告らむとはまさしに知りてわが二人寝し（『万葉』一〇九）

なお、「は」が活用語の連用形をうける場合には、下に逆接か打消の語がつづく構文に限られ、その「は」は複合動詞の中間に置かれることが多い。

鶯の鳴くくら谷に打ちはめて焼けは死ぬとも君をし待たむ（『万葉』三九四一）
経をたかうはきこえぬほどによみたるもたふとげなり（『枕草子』一二〇　正月に寺に）

また、「は」の中には、提題・とりたてなど述語に及ぼす力を持たず、単に語調を整えるか、語勢を強めるだけにとどまっているものがある。間投助詞に近い性格のものである。副詞、係助詞に接する「は」がこれに属する。

雪こそは春日消ゆらめ、心さへ消え失せたれや言も通はぬ（『万葉』一七八二）
末はいかにいかにとあるをいかにかはすべからん（『枕草子』八二　頭の中将の）

7 も

「も」は、感動の声が源泉で、間投助詞の「も」を経て、文中の体言などをうけて、その語をとりたてて述語と結ぶ係助詞へと発展した語である。「は」が対象を他と区別してとりあげ、確実、明確に述べようとするのに対して「も」はとりたてた対象を対比的、含蓄的に述語と結ぼうとする。「も」の対象の提示のしかたには、情意的なものが伴う。

山県に蒔ける菘菜も吉備人と共にし採めば楽しくもあるか（『古事記』仁徳）

「菘菜も」は「菘菜のようなものでも」の意。「楽しくもあるか」の「も」は間投助詞的で、感動、強調を示す。

信濃なる筑摩の川の細石も君し踏みてば玉と拾はむ（『万葉』三四〇〇）

「細石も」は「細石のようなものでも」の意。

これらの例に見られるように、特にとりたてていう程の価値のないものを提示する裏には、「もっと価値のあるものであれば、なおさらだ」という意味がこめられている。しかし、同時に、「この価値の低い、とるに足らぬこのものでさえ」と、それに執着し、肯定する話者の感情が「も」に托されるのである。こうした感情が強められると、最小限度の願い、「せめて……だけでもあれば」という、実現不可能なことがわかっている現実の事態の中で、なおもそのことを希望する「も」となる。

妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあらましを（『万葉』九一）

苦しくも降り来る雨か神が崎狭野の渡りに家もあらなくに（『万葉』二六五）

この「家も」は単に「家も何もない」という意味ではなく、「せめて家でもあったらと思うのに、その家も何もない」の意である。

「せめて……だけでも」という最小限度の対象を提示する心は、限度ぎりぎりを示すということから反転して「……でさえも」という最大限度の対象を提示する「も」となる。

　ちはやぶる神の斎垣も越えぬべし今はわが名の惜しけくも無し(『万葉』二六六二)

恋に燃える心は、越えてはならない神の斎垣さえも越えずにおかぬところまで来てしまったというのである。

　竜の馬も今も得てしかあをによし奈良の都に行きて来む為(『万葉』八〇六)

とても手に入れられない、あの竜馬でさえも、手に入れられるものなら、今すぐにも手に入れたいものだというのである。

こうして、最小限度のものの提示から最大限度のものの提示に至る幅の中で、「も」は、とりたて、提示する対象と並んで、表現されていない類例の存在することを暗示したり、ことばにあらわして、その類例を列挙したりするようになるのである。

　熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな(『万葉』八)

潮も、月もの意。

　銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも(『万葉』八〇三)

「も」の世界は、以上のように、展開したものであるが、このような「も」のかかっていく述語は、『万葉集』では、否定、推量、疑問、反語、願望、程度の推測、逆接条件など「不確実の陳述」が多く、「は」のかかっていく述語は、過去および完了、指定、命令、否定などの確実な確固たる承認を示すものが多い。[29]

五　間投助詞

文中にある助詞には、すでに述べたように、体言と体言とを結ぶ連体助詞、文中の体言と用言の関係のしかたの中で、用言に対して体言がどのような位格に立つかを示す格助詞、用言の意味を限定する副助詞、用言のはたらきかたに関わる係助詞などがあった。これらの文中に置かれる助詞は、いずれも文の構造に密接な関係を持ち、文の表現理解に重要な役割を担うものである。ところが、ここにとりあげる間投助詞は、文中に置かれる助詞であるが、文中の各成分と関係する機能を持たない。文中の各成分の間に自由に投入されて、そこに他の成分と独立に位置するだけのものである。したがって、間投助詞は、文の形成、文の意味構造などに積極的な役割を果すことがない。では、間投助詞の役割は何かと言えば、本質的には感動詞と同じもので、もともとは話手の感動・詠歎の声を文中に挿入したり、話手の聞手へのよびかけ、うながしの声を挿入したりしたものである。詩歌では、単に語調を整えるために挿入されることもある。なお、間投助詞をここでは文中に位置するものに限定し、一般に文末用法と言われる言い切りの文につくものは、終助詞として扱う。

1　や

「や」は、掛け声、はやしことばの声が起源であろう。

新しき年の始めに　や　斯くしこそ　はれ　斯くしこそ仕へまつらめ　や　万代までに　あはれ　そこよしや

万代までに（『催馬楽』新しき年）

「や」は、感動を表出したり、語調を整えたりする。

八千矛の神の命や吾が大国主(『古事記』上)

われはもや安見児得たり皆人の得難にすとふ安見児得たり(『万葉』九五)

こうした感動の「や」は、その添った語をとりたて指示するはたらきを伴う。

ここにして筑紫やいづく白雲のたなびく山の方にしあるらし(『万葉』五七四)

ほととぎす来鳴きとよもす橘の花散る庭を見む人や誰(『万葉』一九六八)

右のような疑問の指定強調と見られる表現を経て、係助詞の「や」が成立するようになる。

語調を整える「や」は、柿本人麿の新工夫とも言われている次の歌の枕詞などに見られる。

天飛ぶや軽の路は吾妹子が里にしあれば(『万葉』二〇七)

連体修飾語と被修飾語の体言の間に「や」が挿入されるのは、間投助詞としての「や」の特色を最もよく示すものである。

嬢子の寝すや板戸を押そぶらひ(『古事記』上)　天なるや弟棚機の項がせる玉の御統(『古事記』上)

平安時代の和歌にも、この手法が見える。

なにはづに咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花(『古今』仮名序)

あふみのやかがみの山をたてたればかねてぞ見ゆる君がちとせは(『古今』一〇八六)

強調表現として、同類の語を重ねる場合に、その間に間投助詞の「や」が用いられたものがある。語調を整えるための工夫の一つと見られる。

これやこの大和にしてはわが恋ふる紀路にありとふ名に負ふ背の山(『万葉』三五)

痩す痩すも生けらばあらむをはたやはた鰻を取ると川に流るな(『万葉』三八五四)

2 よ

「よ」は、聞手に対するはたらきかけの気持で表出される感動の声である。「よ」は、多く終助詞として文末に用いられる。

吾はもよ女にしあれば汝を除て男は無し（『古事記』上）

あらたまの年の経ぬれば今しはと勤よわが背子わが名告らすな（『万葉』五九〇）

さればよ、あらはなりつらむ（『源氏』野分）

3 を

「を」は、承諾・肯定をあらわす返事の声から出たものである。

否もを（諾）も欲しきまにまに赦すべき貌は見ゆやわれも依りなむ（『万葉』三七九六）

神主・祝部等、共にをを（唯）と称す（『祝詞』祈念祭）

次の二例の「を」は、相手への答えの中に用いられた間投助詞である。

夕星の夕になればいざ寝よと手を携はり父母も上は勿下り三枝の中にを寝むと愛しく其が語らへば（『万葉』九〇四）

難波潟潮干に出でて玉藻刈る海未通女ども汝が名告らさね

和ふる歌一首

漁する人とを見ませ草枕旅行く人にわが名は告らじ（『万葉』一七二六・一七二七）

相手を意識して訴えかけ、はたらきかける感情の表出が間投助詞「を」である。

生者つひにも死ぬるものにあれば今の世なる間は楽しくをあらな(『万葉』三四九)

感情の強い表出は、その対象となるものを強調して示す。次の例は、間投助詞か、格助詞か説の分れているものであるが、間投助詞から格助詞へ移りゆく過渡の段階にあるものと見られる。

紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも(『万葉』二一)

釆女の袖吹きかへす明日香風都を遠みいたづらに吹く(『万葉』五一)

4　い

「い」は、奈良時代の助詞で、平安時代には、一般には用いられなくなり、法相宗などの仏典の訓読文に見えるだけになる。朝鮮語の主格助詞[i]と何らかの関係があるかと考えられているが、なお確定的ではない。

「い」は、まず、「此を持ついは称を致し、捨つるいは謗を招きつ」(『続日本紀』宣命第五四詔)のような体言である。また、

二人、兄宇迦斯を召びて罵詈りて云ひけらく「い(伊)が作り仕へ奉れる大殿の内には意礼先づ入りて其の仕へ奉らむとする状を明し白せ」といひて(『古事記』神武)

のような相手を卑しめていう語である。ほぼ同じ内容の『日本書紀』では「い」は「爾」と書かれている。さらに、

みつみつし久米の子らがくぶつつい(頭椎)いしつつい(石椎)持ち今撃たば良らし(『古事記』神武)

の「い」は体言を構成する接尾語と見られる。

枚方ゆ笛吹き上る近江のや毛野の若子い笛吹き上る(『日本書紀』継体)

わが背子が跡ふみ求め追ひ行かば紀伊の関守い留めてむかも(『万葉』五四五)

従来、これらの「い」は、主格助詞として扱われてきたが、

言清くいたもな言ひそ一日だに君いし無くは痛きかも（『万葉』五三七）

否と言へど語れ語れと詔らせこそ志斐いは奏せ強語と詔る（『万葉』二三七）

などの「いし」「いは」の例から見ると「い」は主格助詞とは認めにくい。これらの「い」は、自分自身につけて卑下を示し、対称、他称の人をあらわす語につけて親愛を示すような体言ないしは接尾語であったのではあるまいか。

そのような「い」が助詞化したものが、次に示す、連体修飾語と被修飾語との間に置かれる「い」である。

わが黒髪のま白髪に成りなむ極み新世に共に在らむと玉の緒の絶えじい妹と結びてし言は果さず（『万葉』四八一）

向つ岡の若楓の木下枝取り花待つい間に嘆きつるかも（『万葉』一三五九）

青柳の糸の細しさ春風に乱れぬい間に見せむ子もがも（『万葉』一八五一）

これらの「い」は、すでに述べた間投助詞「や」の代表的な用法である連体修飾語と、被修飾語との間に置かれるものと同じ性格のものである。

嬢子の寝すや板戸を押そぶらひ（『古事記』上）

したがって、この種の「い」は間投助詞とするのが適当である。

六　終　助　詞

終助詞は、文の終末部に位置する助詞である。日本語の構文法では、述語が文の最後に位置する。文は、その始発から終末の述語へ向かって進む意味の流れであり、述語は、その意味の流れをうけとめ、まとめる役割を持つ。終助詞は、述語の終末部にあって、内容的・意味的なまとまりを形成した文の叙述や判断をうけて、それに対する話手の感動や詠歎を表出したり、疑問、希望、禁止などをつけ加えることによって聞手への働きかけの態度を表明したりし

て文を完結させる役割を担うものである。

1 な

「な」は、(一)動詞・助動詞の未然形を受けて希望を表わすものと、(二)動詞の終止形(ラ変は連体形)を受けて禁止を表わすものと、(三)文末の言い切りの形や体言について感動を表わすものの三種がある。語形は同じであるが、それぞれ異る語に由来するものと思われる。

(一) 希望の「な」。

奈良時代の用例だけで、平安時代には見られない。意味の近い助動詞「む」にとって代られたらしい。『万葉集』に、

沖辺より船人のぼる呼びよせていざ告げやらむ旅の宿を　一に云はく、旅のやどりをいざ告げやらな(三六四三)

とあるのは既に「な」と「む」の通うことを示している。

(1) 話手が自己の行動の実現を希望する気持や決意を表わす。

生ける者遂にも死ぬるものにあれば今の世なる間は楽しくをあらな(『万葉』三四九)

筑波嶺の裾廻の田井に秋田刈る妹がり遣らむ黄葉手折らな(『万葉』一七五八)

(2) 話手が、第二人称、第三人称の者の行動の実現を希望する気持や勧誘・慫慂を表わす。

梅の花今盛りなり思ふどち插頭にしてな今盛りなり(『万葉』八二〇)

道の中国つ御神は旅行きも為知らぬ君を恵みたまはな(『万葉』三九三〇)

(二) 禁止の「な」。

この相手に行動を求める「な」は、同じナ行の終助詞「ね」「に」と語源を同じくするものであろう。

形容詞「なし」の語幹に由来する禁止の副詞「な」と起源的には同じ語である。奈良時代、平安時代を通じて用いられた。同じ時代の禁止をあらわす形式「な……そ」と「な」の表現価値の違いについて、『源氏物語』では、前者が女性の用いるやさしい勧誘的禁止であるのに対して、「な」は男性の上位から下位に対しての強い禁止であるという。(30)

わが背子が帰り来まさむ時のため命残さむ忘れたまふな(『万葉』三七七四)

殊更に人来まじき隠れ家求めたるなり。更に、心よりほかに漏らすな(『源氏』夕顔)

(三) 感動の「な」。

文末につく。文の成立・完結に関係がないので、間投助詞が文末についたものと見る立場もあるが、ここでは、終助詞として扱う。

(1) 詠歎を表わす。奈良時代の用例の大部分は、推量表現について、詠歎を表わす。

衣手の別く今夜より妹もわれもいたく恋ひむな逢ふよしを無み(『万葉』五〇八)

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに(『古今』一一三)

(2) 問いや命令の文の文末について、相手に働きかけ、訴えかける気持や、念を押し、確認する気持を表わす。この意味の用例は、平安時代以降に見える。

伊予の介、かしづくや、君と思ふらんな(『源氏』帚木)　ここは、常陸の宮ぞかしな(『源氏』蓬生)

2　そ(な……そ)

奈良時代から室町時代末ごろまで盛んに用いられた禁止表現形式「な……そ」の「そ」である。「そ」は、サ変動詞「す」の命令形の古い形と推定されている。(31) 活用語の連用形を受ける。ただし、奈良時代の「な……そね」の「そ」

は、未然形接続の終助詞「ね」につづくので、サ変動詞「す」の未然形古形とされる。
秋山に落つる黄葉(もみちば)しましくはな散り乱(まが)ひそ妹があたり見む 一に云ふ、散りな乱ひそ(『万葉』一三七)
床敷きてわが待つ君を犬な吠えそね(『万葉』三二七八)

「な……そ」「な……そね」は、「……しないで下さい」の意のやさしい禁止の言い方である。院政時代以後は、「な」が省略されて、「そ」だけで禁止を表わすようになった。
此(カ)ク濫(ミダリ)ガハシクテ不御(オハ)シソ(『今昔』一九—三)

3 なも・なむ(なん)

活用語の未然形を受けて希望を表わす終助詞「な」の下に終助詞「も」がついたのが「なも」である。「なも」は、望んでも直ちに実現する可能性のない状態や他者の行動について、それを知りながら、なお、その実現を望み、訴えるせつない気持を表わす。「なも」の音が変化した語が「なむ・なん」である。奈良時代に「なも」はすでに衰勢にあり、「なむ」が多く用いられた。「なむ」は、平安時代の日常語にも和歌にも用いられたが、末期以降は、和歌以外には用いられなくなった。
三輪山をしかも隠すか雲だにも情(こころ)あらなも隠さふべしや(『万葉』一八)
足代(あて)過ぎて糸鹿(いとか)の山の桜花散らずあらなむ還り来るまで(『万葉』一二一二)
物の足音、ひしひしと踏み鳴らしつつ後より寄り来る心地す。「惟光とく参らなん」とおぼす(『源氏』夕顔)

4 ね

「ね」は、活用語の未然形を受けて、相手または呼びかける対象に対して、ある行動をしてくれるように希望し要

求する気持を表わす。奈良時代には用いられたが、平安時代には用いられなくなった。対人的な助詞で、尊敬・親愛の助動詞「す」の未然形「さ」を受けるものが多い。また、禁止の「な……そ」の下について、「な……そね」の形で、「……しないで下さい」の意味で用いられた。

この岳に菜摘ます児　家聞かな　告らさね（『万葉』一）

大殿のこの廻の雪な踏みそね　しばしばも降らざる雪そ　山のみに降りし雪そ　ゆめ寄るな人や　な踏みそね雪は（『万葉』四二二七）

5　に

「に」は、活用語の未然形について、呼びかける相手に、ある行動の実現を要請する気持を表わす。希望の終助詞「な」の母音交替による語と見られる。

ひさかたの天路は遠しなほなほに家に帰りて業をしまさに（『万葉』八〇一）

6　ばや

「ばや」は、動詞および動詞型活用の助動詞（実例は、す・さす・つ・ぬ、など）の未然形につく。話手が、自分のしたい動作、行動（多くは、見る、聞く）の実現を望んだり、自分の望む状態の実現を願ったりする気持を表わす。接続助詞「ば」に相手に問いかける助詞「や」が複合して一語となったものである。『万葉集』に見える、

衣しも多くあらなむ取り易へて着なばや君が面忘れてあらむ（二八二九）

のように、下へかかるとも、「ば」で言い放ったものに感動の「や」がついたともとれる中間的な段階を経て、平安時代に終助詞となった。

そこにこそ多く集へ給ふらめ、すこし見ばや(『源氏』帚木)
かくて、いましばしもあらばやと思へども明くれば、ののしりていだしたつ(『蜻蛉日記』上)

7 こそ

「こそ」は、動詞の連用形を受けて、相手や呼びかける対象に、動作の実現を望み求める気持を表わす。奈良時代の語で、平安時代には見えない。係助詞の「こそ」とは別語である。「来為」に由来する動詞「こす」の命令形とする説もある。(32)

現には逢ふよしも無しぬばたまの夜の夢にを継ぎて見えこそ(『万葉』八〇七)
斯くしつつ遊び飲みこそ草木すら春は生ひつつ秋は散りゆく(『万葉』九九五)

8 もが・もがも・もがもな・もがもや・もがもよ・もがな

「もが」は、主に体言をうけるほか、形容詞連用形、助詞「に・て」、副詞「か・かく」などを受けて、その状態の実現することを強く願う気持を表わす。奈良時代の語で平安時代にはほとんど用いられなくなる。「もが」は、下に「も」「もな」「もや」「もよ」「な」などがついて、「もがも」「もがもな」「もがもや」「もがもよ」「もがな」などの形になる。その中で、「もがも」は奈良時代に「もが」よりも多く用いられたが、平安時代に「かも」が「かな」に代ったのと並行して、「もがも」も「もがな」に代った。

〔もが〕　足の音せず行かむ駒もが葛飾の真間の継橋やまず通はむ(『万葉』三三八七)
心がへするものにもが片恋は苦しきものと人に知らせむ(『古今』五四〇)

〔もがも〕　春されば散らまく惜しき梅の花暫は咲かず含みてもがも(『万葉』一八七一)

〔もがもな〕河上のゆつ岩群に草むさず常にもがもな常処女にて（『万葉』二二）
〔もがもや〕天飛ぶや鳥にもがもや都まで送り申して飛び帰るもの（『万葉』八七六）
〔もがもよ〕妹が寝る床のあたりに石ぐくる水にもがもよ入りて寝まくも（『万葉』三五五四）
〔もがな〕世の中にさらぬ別れのなくもがな千世もと祈る人の子のため（『伊勢物語』一八四）
「聞ゆべきことなむ、あからさまに対面もがな」といひけれど（『源氏』須磨）

9　がな

平安時代に、終助詞「もがな」の語構成「もが・な」が誤って「も・がな」と意識されたらしく、「も」の位置に助詞「を」を置きかえた「をがな」の形が願望を表わすのに用いられた。そこからさらに、「がな」が一語の終助詞として意識され、単独で用いられるようになるのは鎌倉時代のことである。
ただ受領のよからむをがなとこそ思ひつるに（『落窪物語』四）

10　しか・てしか・てしかも・てしかな・にしか・にしかな

「しか」は、動詞の連用形、完了の助動詞「つ」の連用形「て」、完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」などを受けて、話手自身の動作についての願望を表わす。奈良時代には、実現の望みの薄いものや不可能なものを乞い願う場合に用いられたが、平安時代には、実現の可能性のあることへの願望で、「……したい」程度の意味で用いられた。
奈良時代の用例の多くは完了の「て」についた「てしか」の形であるが、後に一語化して、「てしか」が完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」にもつくようになった（酒壺になりにてしかも）。下に詠歎の終助詞「も」のついた「てしかも」の形は、平安時代には「てしかな」となった。「しか」の形も平安時代に『古今和歌集』などに用いられたが、

古体というべきものであったろう。なお、平安時代には、完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」に「しか」のついた「にしか」の形やそれに「な」のついた「にしかな」の形も見える。「にしか」は用例が少いが、「にしかな」は和歌、日常語として用いられた。

〔しか〕 真澄鏡見しかと思ふ妹も逢はぬかも玉の緒の絶えたる恋の繁きこのころ（『万葉』二三六六）

〔てしか〕 ひさかたの天飛ぶ雲にありてしか君を相見むおつる日無しに（『万葉』二六七六）

思ふどち春の山べにうちむれてそこともいはぬ旅寝してしか（『古今』一二六）

〔てしかも〕 なかなかに人とあらずは酒壺に成りにてしかも酒に染みなむ（『万葉』三四三）

〔てしかな〕 いかでこのかぐや姫を得てしかな、見てしかなと音に聞きめでまどふ（『竹取』）

〔にしか〕 伊勢の海に遊ぶ蜑とも成りにしか浪かきわけてみるめ潜かむ（『後撰』八九二）

〔にしかな〕 いかでこの人に「思ひ知りけり」とも見えにしかなとつねにこそおぼゆれ（『枕草子』二六九　よろづのことよりも）

なお、「しか」「てしか」は、従来「しが」「てしが」と言われたが、『万葉集』や宣命の万葉仮名では、「思香」「師可」「師香」「師加」「志可」「之賀」などと「か」はすべて清音で書かれている。平安時代も「てしかな」「にしかな」と清音であった可能性が強い。

11　か

「か」は、体言または活用語の連体形を受けて、自分自身に問いかけるような気持の疑問、詠歎を示す。

(一) 疑問。表現者が心に思っていることを自分自身に問いかける気持の、いわば自覚的な疑問である。推量の助動詞「む」「らむ」をうけたり、文中の「は」と呼応したりすることが多い。

嗚呼見の浦に船乗りすらむ𡢳嬬らが珠裳の裾に潮満つらむか(『万葉』四〇)
玉かつま逢はむといふは誰なるか逢へる時さへ面隠しする(『万葉』二九一六)

(二) 詠歎。眼前の事態について、動かし難いものとわかっていながら、自らに問いかけるように口に出して思いを述べる詠歎である。文中の「も」と呼応することが多い。下にさらに「も」がついて「かも」になる。

秋の野を朝行く鹿の跡もなく思ひし君に逢へる今夜か(『万葉』一六一三)
心無き雨にもあるか人目守り乏しき妹に今日だに逢はむを(『万葉』三一二二)

(三) 反語。疑問の気持が強くなり、対象が否定されるべきものになると反語になる。「…ものか」の形が多い。下にさらに助詞「は」がついて「かは」になる。

心なき鳥にそありける霍公鳥物思ふ時に鳴くべきものか(『万葉』三七八四)
あまのはら踏みとどろかし鳴る神も思ふ仲をばさくるものかは(『古今』七〇一)

(四) 願望。眼前の事態への内心の疑いから、それを否定する気持が強くなると、その逆の事態を希求する願望となる。打消の助動詞「ず」の未然形「ぬ」について、「ぬか」の形で、非現実的な望み、願っても実現するはずのないような願望を示す。

人も無き国もあらぬか吾妹子と携ひ行きて副ひてをらむ(『万葉』七二八)

12 かも

「かも」は、終助詞「か」の下に終助詞「も」が添って複合した助詞で、体言または活用語の連体形を受けて、詠歎、疑問、反語、などを表わす。「かも」は奈良時代に用いられたが、平安時代には「か」に終助詞「な」の添った「かな」にとって代られ、古語化した。

(一) 詠歎。
わが屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも（『万葉』四二九一）
天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも（『古今』四〇六）
(二) 疑問。係助詞「かも」が文末に置かれたもので、「か・も」と二語的なものと見られる。判断叙述の文で、体言、推量の助動詞を受ける場合が多い。
秋風の吹きただよはす白雲は織女の天つ領巾かも（『万葉』二〇四一）
山科の石田の社に布麻置かばけだし吾妹に直に逢はむかも（『万葉』一七三一）
(三) 反語。多く「ものかも」の形をとる。
渡守舟出し出でむ今夜のみ相見て後は逢はじものかも（『万葉』二〇八七）
(四) 願望。「ぬかも」、「てしかも」の形をとる。
吉野川逝く瀬の速みしましくも淀むことなくありこせぬかも（『万葉』一一九）
天飛ぶや雁を使に得てしかも奈良の都に言告げ遣らむ（『万葉』三六七六）

13　かな

「かな」は、『常陸風土記』の「能渟水哉、俗云よくたまれるみづかな」の例から、奈良時代に方言あるいは口語として存在したかと考えられるが、『常陸風土記』の本文の性格への疑いもあって、なお確定的ではない。一般には、「かも」に代って、平安時代から用いられ、体言または活用語の連体形について詠歎を表わした。「かも」の詠歎が表現者の内心へ向かう自問的なものであるのに対して、「かな」は表現者の外にあるものに対しての詠歎である。
「亡き後まで人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ弘徽殿などには、なほゆるしなうのたまひける

(『源氏』桐壺)

・君まさで煙たえにししほがまのうらさびしくも見え渡るかな(『古今』八五二)

14　ものか・ものかは

「ものか」は、形式名詞「もの」に終助詞「か」がついて複合した助詞で、活用語の連体形を受けて、強い感動、反語を表わす。「ものか」にさらに終助詞「は」を添えて強い感情をこめたものが「ものかは」である。

(一) 強い驚きの感情を表わす。「驚いたことには……ではないか」という気持。

朧月夜に似るものぞなきとうち誦じてこなたざまに来るものか(『源氏』朧月夜)

この矢あたれと仰せらるるに、同じものを中心(なから)にあたるものかは(『大鏡』道長)

(二) 強い反語。驚きあきれ、非難する気持をこめて反問する場合が多い。「……ことがあろうか(とんでもない)」。

人ばなれたる所に心とけて寝(いぬ)るものか(『源氏』夕顔)

君は君われは我ともへだてねば心々にあらむものかは(『和泉式部日記』)

15　ものかな

「ものかな」は、形式名詞「もの」に終助詞「かな」がついて複合した助詞で、活用語の連体形について、喜び、感嘆、驚き、あきれた時などの感情を表わす。平安時代以降用いられた。

うれしくものたまふものかな(『竹取』)　御手はいとをかしうのみなりまさるものかな(『源氏』賢木)

16　ものを

「ものを」は、形式名詞「もの」に終助詞「を」が添って複合した助詞で、活用語の連体形について、事態を確認しつつ強く詠歎する気持を表わす。

今更に何をか思はむうちなびき心は君によりにしものを（『万葉』五〇五）

かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死なましものを（『万葉』八六）

すずめの子を犬君が逃がしつる、伏籠のうちにこめたりつるものを（『源氏』若紫）

17 そ・ぞ

「そ」、「ぞ」は、係助詞「そ」と同じ由来の語である。奈良時代には、一般に清音「そ」であったが、すでに濁音の「ぞ」も現れている。平安時代には、一般に濁音化して「ぞ」となった。体言または活用語の連体形を受けて強い指示、指定を表わす。

ええしやごしや　此はいのごふそ　ああしやごしや　此は嘲咲ふそ（『古事記』神武）

磯城島の日本の国は言霊の幸はふ国ぞま幸くありこそ（『万葉』三二五四）

やがて泊りなんものぞとおぼして（『竹取』）　いづくにおはしますぞ（『源氏』帚木）

強い指定を示すこの「ぞ」は、講義口調として、後代まで漢文訓読に用いられた。

18 よ

「よ」は「や」の母音[a]が[o]と交替した語である。「よ」は、文末の体言や言い切りの形につく。「や」よりも積極的に相手に働きかける助詞で、相手によびかけて念を押し、自分の気持を押しつける場合や、自分の意志を相手に告げ知らせる場合に用いられる。上二段、下二段、サ変動詞の命令形に「よ」がついているのも、命令の意を押しつけ

る気持を示すものと解される。

今は吾は死なむよ吾妹逢はずして思ひ渡れば安けくもなし（『万葉』二八六九）

忍び給へるかくろへごとをさへ語り伝へけん人の物言ひさがなさよ（『源氏』帚木）

すは、稲荷より賜はるしるしの杉よ（『更級日記』）

19　や

「や」は、感動詞・掛け声の「や」が間投助詞となり、文末に置かれて終助詞となった語である。「や」は、本来、相手に働きかける性格の語である。相手への問いかけ、反語、相手への期待を表わす。

(一)　問いかけ・質問。活用語の終止形を受ける。

藤波の花は盛りになりにけり平城の京を思ほすや君（『万葉』三三〇）

名にし負はばいざ事とはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと（『伊勢物語』九）

(二)　反語。「べし」または活用語の已然形を受ける。

しばしばも見放けむ山を情なく雲の隠さふべしや（『万葉』一七）

妹が袖別れて久になりぬれど一日も妹を忘れて思へや（『万葉』三六〇四）

反語の場合、奈良時代には「やも」、平安時代には「やは」の形が多く用いられた。

(三)　期待。命令形を受ける。「よ」が命令の意を相手に押しつけ、念を押す感じを持つのに対して、「や」は、命令を実行してくれるよう相手に期待し依頼する気持である。

こゑ絶えず鳴けや鶯ひととせにふたたびとだに来べき春かは（『古今』一三一）

20　やも・やは

「やも」は、「や」に終助詞「も」の添った形で、活用語の已然形について、反語を表わす。奈良時代に用いられた。平安時代には、「やも」が衰亡し、稀に和歌に用いられるだけになり、代って、「やは」が現れて反語に用いられた。

ささなみの志賀の大わだ淀（よど）むとも昔の人にまたも逢はめやも（『万葉』三一）

里人の言（こと）はなつ野のしげくともかれゆく君にあはざらめやは（『古今』七〇四）

21　かし

「かし」は、奈良時代には用例がなく、平安時代に初めて現れる。日常語で、和歌や訓点語にはほとんど用いられなかった。文の言い切りの形について、相手に強く念を押す気持を表わす。

さやうならむ人をこそ同じうは見て明かし暮らさめ、限りあらむ命のほども今少しは必ず延びなむかし（『源氏』野分）

交野（かたの）の少将には笑はれ給ひけんかし（『源氏』帚木）

皮肉、ひやかしの気分を含む「かし」である。

ねたく、心とどめて問ひ聞けかしとあぢきなくおぼす（『源氏』帚木）

心中で、他人の行動に、こうしてくれればいいのに「……してくれよ」と念を押したい気持に用いている。

22　は

「は」は、係助詞「は」が文末に終助詞として用いられたもので、感動、詠歎を表わす。体言または活用語の連体

形をうける。奈良時代には、単独の例は『歌経標式』の一例だけであるが、下に終助詞「も」「や」のついた「はも」「はや」の形で用いられている。平安時代には、単独で終助詞に用いられるようになった。「はや」は平安時代にも用いられたが、「はも」は衰退した。

妹が紐とくと結びて立田山見渡す野辺の黄葉(もみち)けらくは(『歌経標式』)

されど、門のかぎりを高う作る人もありけるは(『枕草子』八　大進生昌が家に)

〔はも〕　さねさし相武(さがむ)の小野(をの)に燃ゆる火の火中(ほなか)に立ちて問ひし君はも(『古事記』景行)

〔はや〕　あづまはや(『古事記』景行)

いさりせむと思はざりしはや(『源氏』須磨)

23　も

「も」は、文の言い切りの形について詠歎を表わす。奈良時代には盛んに用いられたが、平安時代には終助詞「な」に圧倒されて古風な言い方になった。和歌に用いられる場合にも、助詞についた「はも」「ぞも」などの類を除けば、用法が固定して、作者の心情を表現する形容詞(かなし、さぶし、苦し、など)に直接つくものにほぼ限られている。

春霞井(ゐ)の上(へ)ゆ直(ただ)に道はあれど君に逢はむとたもとほり来(く)も(『万葉』一二五六)

秋の夜を長みにあらむ何(な)そここば眠(い)の寝(ぬ)らえぬも独り寝(ぬ)ればか(『万葉』三六八四)

みちのくはいづくはあれど塩釜の浦こぐ舟のつなでかなしも(『古今』一〇八八)

終助詞「も」は、他の終助詞の下に添って、「かも」「ぞも」「はも」「やも」「がも」などの複合した形をなす。

24　を

「を」は、感動詞に由来する間投助詞「を」が、文末に用いられ、終助詞となったもので、活用語の連体形または

体言について、文の内容に対する確認を表わし、詠歎の意を添える。

武蔵野の草は諸向きかもかくも君がまにまに吾は寄りにしを(『万葉』三三七七)

つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを(『伊勢物語』一二五)

あしひきの山より出づる月待つと人には言ひて妹待つわれを(『万葉』三〇〇二)

25 ゑ

「ゑ」は、奈良時代にだけわずかな用例があり、平安時代には完全に消滅する。文の言い切りの形について、話手が自分の発言内容を確認する気持を表わす。「ゑ」は間投助詞として扱われることが多いが、終助詞と見る。

み吉野の吉野の鮎　鮎こそは島辺も良き　え苦しゑ　水葱の本　芹の本　吾は苦しゑ(『日本書紀』天智十年)

山の端にあぢ群騒き行くなれどわれはさぶしゑ君にしあらねば(『万葉』四八六)

なお、「よしゑ」「よしゑやし」の「ゑ」も本来は形容詞の終止形「よし」についた終助詞である。

たらちねの母に知らえずわが持てる心はよしゑ君がまにまに(『万葉』二五三七)

よしゑやし　浦は無くとも　よしゑやし　潟は無くとも(『万葉』一三一)

七 接続助詞

接続助詞は、一つの文に相当する叙述・判断を受けて、そこで完結させずに、下にくる文につづける助詞である。本来二つの文として表現されるものをつづけて一つの文の形にする役割を持つと同時に、前の文と後の文とがどのような関係にあるのか、その関係を表わす役割をも持つ。

接続助詞の表わす関係は、基本的な行動や事態の展開においては、前件(前の文)と後件(後の文)とが、時間の順序に従って展開する継時的な関係にあるか、同時的共存的な関係にあるかのいずれかである。また、論理的な展開の上から、前件が条件になり、後件がその帰結となる関係がある。まず、その条件が仮定的なものか、既定的なものかで、仮定条件、確定条件に分けられる。さらに、意味の展開の上からは、前件に述べることから、順当に肯定的に後件が導き出されるか、前件とは断絶的否定的対立的に後件が展開されるかによって順接と逆接に分けられる。

日本語は、本来、活用形が接続機能を受け持つ言語であるから、原始日本語では、文と文との接続にも未然形、連用形、已然形などが用いられていて接続助詞は存在しなかったかと考えられる。したがって、後から発達してきた接続助詞は、他の語からの転成の跡が明らかであるものが多い。

1 ば

「ば」は、活用語の未然形または已然形を受けて、後件に対する条件であることを示す。

「ば」は、助詞「は」に由来すると考えられるが、発生的には、未然形を受ける「ば」が先に発達し、仮定条件を示したと推定される。それは奈良時代においても、已然形は、助詞「ば」を伴わずに確定条件を示すことができたので、古くは、已然形はそれ自身で確定条件の順接・逆接を示しうる形式であったからである。たとえば、

家離(さか)りいます吾妹(わぎも)をとどめかね山隠しつれ情神(こころど)もなし(『万葉』四七一)〈順接〉

したがって、已然形につく接続助詞「ば」は、「ど」、「ども」などとともに、条件法の文脈を明示する標識として後に発達したものである。

(一) 未然形を受ける「ば」。

動詞の未然形語尾と「は」との間に推量の助動詞に連なる〔m〕[33]または〔am〕[34]を想定すると、―amφa→―amba→―

$a^{m}ba \rightarrow aba$ という音変化として「ば」の成立が説明される。

(1) 仮定条件を示す。「もし……ならば」の意味である。

思ふ故に逢ふものならばしましくも妹が目離れて吾居らめやも(『万葉』三七三一)

つばくらめの巣くひたらば告げよ(『竹取』)

(2) 修辞的仮定。古代には、既定の事実が目の前に現在あるのに、それをあたかも仮定のことのように表現する修辞法があり、修辞的仮定という。(35) 下に必ず推量表現または反語表現を伴う。「仮に……としたならば」の意味である。

飛ぶ鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ(『万葉』七八)

世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし(『古今』五三)

なお、従来、形容詞の未然形および打消の助動詞の未然形に「ば」のついた形だとされてきた「――くば」(恋しくば)、「――ずば」(取らずば)は、奈良時代の万葉仮名書きに濁音を用いた確実な例がなく、平安時代、鎌倉時代の「このたびさへなうは」(『蜻蛉日記』上)、「疑ふ心なくわ」(『開目抄』)などの表記の例からみて、接続助詞「ば」ではなく、係助詞「は」である。(36)

(二) 已然形を受ける「ば」。

(1) 確定条件を示す。

(a) 前件と後件に因果関係がある場合に、原因・理由をあげて帰結を導く。

若の浦に潮満ち来れば潟を無み芦辺をさして鶴鳴き渡る(『万葉』九一九)

ふるさとは吉野の山し近ければ一日もみ雪降らぬ日はなし(『古今』三二一)

(b) 前件と後件の因果関係が恒常的である場合には、一般的原理、真理、道理を述べる形式になる。

父母を　見れば尊し　妻子見れば　めぐし愛し　世の中は　かくぞ道理(『万葉』八〇〇)

(c) なお、逆接と解される確定条件表現の例がある。

嘆きも　いまだ過ぎぬに　憶ひも　いまだ尽きねば　言さへく　百済の原ゆ　神葬り　葬りいまして（『万葉』一九九）

ひとりして物を思へば秋の田のいなばのそよといふ人のなき（『古今』五八四）

助詞は、それ自体、概念化された特定の意味を持つ語ではない。したがって、順接、逆接といっても、「ば」を間において展開する前後の文脈・文意の流れからそう解釈できる表現という意味である。

(2) 前件の行動や事態にひきつづいて後件の動作や事態が生起、展開することを示す。「……したところ」、「……した、その場合に」、「……したその時に」、「……すると」などの意味である。

東の野に陽炎の立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ（『万葉』四八）

ものにおそはるる心地しておどろき給へれば火も消えにけり（『源氏』夕顔）

2　とも

「とも」は、動詞型活用の終止形、形容詞型活用の連用形を受けて、仮定条件であることを示して後件に接続する助詞である。指示引用の「と」と係助詞「も」とが複合して、「……としても」の意味を表わした語に由来すると考えられる。『万葉集』に見える、

万代に携はり居て相見とも思ひ過ぐべき恋にあらなくに（二〇二四）

の「相見とも」は古態を示すもので、「見」は原始日本語の終止形または語幹である。

(一) 仮定条件で逆接であることを示す。まだ成立していない事実を前件に条件として想定し、それに関係なく、ある事実、事態が実現することを後件に示す。「たとえ……しても」「たとえ……であっても」の意味である。

あしひきの山沢恵具(やまさはゑぐ)を採(つ)みに行かむ日だにも逢はせ母は責むとも(『万葉』二七六〇)

たとひ時うつり事去り楽しび悲しびゆきかふとも この歌の文字あるをや(『古今』仮名序)

(二) 修辞的仮定。すでに成立している事実が眼前にあるにもかかわらず、それを仮定の事実であるかのように前件に想定し、それに関係なく、それに拘束されずにある事実・事態が後件に実現することを強調する。下に反語・推量表現を伴う。「たしかに……ではあるが、たとえ……していても」の意味である。

ささなみの志賀の大わだ淀(よど)むとも昔の人にまたも逢はめや(『万葉』三一)

3 と

「と」は、接続助詞「とも」の「も」のつかなかった形である。奈良時代には例がなく、平安時代以降の日常語であるが、歌語としては排された。平安時代の確実な用例は極めて少ない。動詞型の活用の終止形、形容詞型活用の連用形について、仮定条件の逆接、放任を示す。

嵐(あらし)のみ吹くめるやどに花すすき穂にいでたりとかひやなからん(『蜻蛉日記』上)

4 ど・ども

「ど」、「ども」とも、活用語の已然形について、逆接の確定条件を示して下の文につづける。「ど」も「ども」も奈良時代、平安時代を通じて多く用いられている。宣命や祝詞など『万葉集』より古い形式を伝える文章では「ども」が多く、『万葉集』では「ど」が多い。平安時代の女流かな文学の文章では「ど」が圧倒的に多く、古い言い方を残す漢文訓読文では「ども」が多い。恐らく、「ども」がまず成立し、やがて「も」なしで仮想表現の逆接を表わすようになり、「ど」が成立したと考えられる。

㈠　逆接の確定条件。すでに成立している行動や事態から当然導かれるはずの行動や事態が実現せず、それと逆の状態が起ることを示す。

わが背子は　待てど来まさず　天の原　ふりさけ見れば　ぬばたまの　夜もふけにけり(『万葉』三二八〇)

陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを(『万葉』三九六)

奈良時代には、形容詞に「ど」「ども」がつく場合、多くは古形の已然形「―け」(ク活用)、「―しけ」(シク活用)をうけていて、「―けれ」(ク活用)、「―しけれ」(シク活用)をうける例は少い。

㈡　一定の確定条件のもとでは、恒常的にそれと背反関係にある事態が起ることを示す。真理、道理、一般的傾向などの表現形式に用いる。

植ゑ木静かならむと思へども風やまず、子孝ぜむと思へども親待たず(『栄花』疑ひ)

㈢　現実に存在していないことを仮定して、そこから当然導かれる結果と違った事態が起ることを示す。一種の仮定条件法である。「仮に……だったとしても」「たとえ……でも」の意味である。

よからねどむげに書かぬこそわろけれ(『源氏』若紫)

5　を

「を」は、間投助詞から発展した格助詞「を」が、前件と後件との接続に用いられ接続助詞になったものである。活用語の連体形を受ける。順接にも逆接にも用いられたが、逆接の例が多い。

㈠　逆接。

門立てて戸も閉してあるを何処ゆか妹が入り来て夢に見えつる(『万葉』三一一七)

おのづから軽き方にも見えしを、この御子生まれ給ひて後は、いと心ことにおもほし掟てたれば(『源氏』桐壺)

(二) 順接。

君により言(こと)の繁きを古郷(ふるさと)の明日香(あすか)の川に潔身(みそぎ)しに行く(『万葉』六二六)

6 に

「に」は、格助詞「に」から接続助詞に転用された語である。活用語の連体形を受けて下につづける。「に」は、単に「その場合、時」ぐらいの意味で、前後の文脈から、順接、逆接、または添加・継起などの気持として理解されるに過ぎない。格助詞「に」との区別は、奈良時代には判別しにくい例が多いが、平安時代になると明確になる。

涙のこぼるるに、目も見えずものもいはれずといふ(『伊勢物語』六二)〈順接〉

よろこびて待つに、たびたび過ぎぬれば(『伊勢物語』二三)〈逆接〉

かくうたふを聞きつつ漕ぎ来るに、黒鳥といふ鳥島の上に集りをり(『土左日記』一月二十一日)〈継起〉

7 が

連体助詞「が」は、発展して主格助詞「が」を生じたが、院政時代には、接続助詞「が」を生じた。接続助詞「が」は、本来、活用語の連体形を受けて、単に下へつづける働きをするものである。逆接の関係で下へつづけるようになるのは鎌倉時代以後である。

接続助詞「が」は、平安時代中期における、

女御更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやんごとなききはにはあらぬがすぐれて時めき給ふありけり(『源氏』桐壺)

の例に見られるような用法から、

一言聞えさすべきが人聞くばかりののしらんはあやしきをいささかあけさせ給へ(『源氏』総角)

における、接続助詞ともとれそうな過渡的な用法を経て、院政時代に明らかに接続助詞と認められるものが現れるのである。(37)

其ノ時ニ三井寺ノ智証大師ハ若クシテ唐ニ渡テ此ノ阿闍梨ヲ師トシテ真言習テ御ケルが其レモ共ニ新羅ニ渡テ御ケレドモ(『今昔物語』一四―四五)

8 て

「て」は、完了の助動詞「つ」の連用形「て」から接続助詞に転化した語と見られる。活用語の連用形をうけるが、恐らくその出自のために、完了の助動詞「つ」「り」「たり」にはつづかない。

「て」は一つの動作・状態が終り、ひきつづいて次の動作・状態に移ることを示す。従って、その前後関係によって動作や状態の継起・継続・推移または並立・並存・あるいは順接・逆接などに理解される場合が生じる。

糟湯酒　うち啜ろひて　咳かひ　鼻びしびしに　しかとあらぬ　鬚かき撫でて　我を除きて　人はあらじと　誇ろへど(『万葉』八九二)〈動作の継起。「我を除きて」の「て」は仮定ともとれる〉

春過ぎて夏来るらし白栲の衣乾したり天の香具山(『万葉』二八)〈状態の推移〉

里は荒れて人は古りにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる(『古今』二四八)〈同時的存在・並存〉

八日、さはることありてなほ同じところなり(『土左日記』一月八日)〈順接〉

抱きおろされて泣きなどはし給はず(『源氏』薄雲)〈逆接〉

三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり(『竹取』)〈「……の状態で」の意〉

9 で

「で」は、活用語の未然形を受けて、打消しながら下へつづける。奈良時代には用例がなく、平安時代以降に見える。従来、「ずて」「ずして」の約音と説かれたが、音韻変化の説明に難点があるので、打消の意を持つ「に」に「て」がついた「にて」から「で」が成立したとする説が有力である。(38)

かぢとりもののあはれも知らでおのれし酒をくらひつれば(『土左日記』十二月二十七日)

10 して

「して」は、サ変動詞「す」の連用形「し」に接続助詞「て」のついたものである。「し」が形式語化して、「して」全体が一語の助詞化した。体言や動詞には接続しない。奈良時代には、形容詞の連用形と助動詞「ず」を受け、平安時代には助動詞「べし」「ごとし」も受けた。

士(をのこ)やも空(むな)しかるべき万代(よろづよ)に語り継ぐべき名は立てずして(『万葉』九七八)

辛(から)くしてあやしき歌ひねりいだせり(『土左日記』二月七日)

11 つつ

「つつ」の語源については確定的な説がない。動詞型活用語の連用形を受けるが、助動詞「つ」「ぬ」「たり」「り」「めり」にはつかない。奈良時代に多く用いられ、平安時代にも用いられたが、次第に「ながら」に取って代られた。

一つの動作の反覆・継続、または二つの動作・作用が同時に行われることを表わすのが本来の用法であるが、次のような用法に分けられる。

(一) 同じ動作の反覆、または継続を示す。

出でて行きし日を数へつつ今日今日と吾を待たすらむ父母らはも(『万葉』八九〇)

天ざかる鄙に五年住ひつつ都の風習忘らえにけり(『万葉』八八〇)

(二) 異なる二つの動作が同時に進行することを示す。「つつ」の下に来る動作が叙述の主眼となるのが普通である。

吾其の上を踏みて走りつつ読み渡らむ(『古事記』上)

(三) 同じ動作が二人以上の人によって同時に行われることを示す。

人ごとに折り插頭しつつ遊べどもいやめづらしき梅の花かも(『万葉』八二八)

(四) 文脈上、逆接として理解できるものがある。

わがここだ待てど来鳴かぬ霍公鳥独り聞きつつ告げぬ君かも(『万葉』四二〇八)

(五) 和歌の文末に用いられる。形式上、「つつ」の下にくる文が省略された形になり、余情・詠歎のこもった表現になる。

君がため春の野に出でて若菜つむわが衣手に雪は降りつつ(『古今』二一)

12 ながら

「ながら」は、連体助詞「な」と名詞「から」が複合した語である。したがって、本来は、体言の下について副詞句を作るもので、接尾語と見られる。「神ながら」「山ながら」のように、「その本質において」「その本性として」の意味である。この「ながら」を副助詞とする説もある。[39] 奈良時代の「ながら」の用例の大部分は、この用法に属するものである。この「ながら」の体言の位置に名詞形である動詞の連用形が置かれると、動詞・助動詞の連用形をうける接続助詞「ながら」が発生する。

「ながら」は、前件に述べた動作・状態が、後件に述べる動作まで持続することを示す。「……したままで」「……した、その状態で」の意味である。

針袋帯び続けながら里ごとにてらさひ歩けど人も咎めず(『万葉』四一三〇)

この前件の動作が後件の動作にまで及ばず、別々の動作になると、二つの異なる動作が同時に進行することを表わすことになる。

験者もとむるに……いと待ちどほに久しきに、からうじて待ちつけて、よろこびながら加持せさするに(『枕草子』二八　にくきもの)

これは「つつ」と同じ意味であるが、この意味の「ながら」は、平安時代以降、次第に多く使われるようになり、「つつ」にとって代っていった。

また、前件と後件との間に対立的な感じの動作が行われると、そこから逆接の意味にとられる表現が出てくる。

あはれなる事など人のいひ出で、うち泣きなどするに、げにいとあはれなりなど聞きながら涙のつと出で来ぬ(『枕草子』一二七　はしたなきもの)

13　ものゆゑ

「ものゆゑ」は、形式名詞「もの」に形式名詞「ゆゑ」がついて一語化し助詞になった語である。活用語の連体形を受けるが、平安時代の用例は、大部分が「……なき」「……ざらむ」「……ぬ」など否定の形をうけている。奈良時代には、『万葉集』に五例(「ものゆゑに」一例を含む)見えるだけである。平安時代には、「ものから」が主流となり、「ものゆゑ」は主として和歌に用いられたが、早く古語化して、鎌倉時代以降はあまり用いられなくなった。大部分の用例は、逆接の関係で下へつづけることを示すが、順接の関係を示すものも少数例ある。これは、「ゆゑ」が理由を

表わす場合に、順接にも逆接にも用いられる語であることから、「ものゆゑ」も、本来は順接にも逆接にも用いられたものであることによる。

秋ならで逢ふこと難きをみなへし天の川原に生ひぬものゆゑ(『古今』二三一)〈逆接〉

わが故に思ひな痩せそ秋風の吹かむその月逢はむものゆゑ(『万葉』三五八六)〈順接〉

14　ものから

「ものから」は、形式名詞「もの」に格助詞「から」がついて一語化し、助詞になった語である。活用語の連体形について、逆接の関係を示して下につづける。奈良時代の用例は少く、『万葉集』に六例(「ものからに」二例を含む)見られるだけである。平安時代には中期頃まで、和歌、散文、会話に盛んに用いられた。『源氏物語』には約一四〇例を数える。しかし、院政時代以後はほとんど用いられなくなった。

待つ人にあらぬものから初雁のけさ鳴く声のめづらしきかな(『古今』二〇六)

しなざかる　越にし住めば　大君の　敷きます国は　都をも　ここも同じと　心には　思ふものから　語り放け見放くる人眼　乏しみと　思し繁し(『万葉』四一五四)

月は有明にて光をさまれるものから影さやかに見えて、なかなかをかしき曙なり(『源氏』帚木)

平安時代には、「ものから」と古語化した「ものゆゑ」とが同じ意味に理解されていたことが次の二首によって証される。

ともにこそ花をも見めと待人のこぬものゆゑにをしき春かな(『後撰集』一三八)

ともにこそ花をも見めと待人のこぬものからにをしき春かな(『古今六帖』一)

15 ものを

「ものを」は、形式名詞「もの」に間投助詞「を」がついて終助詞化したものに由来する。本来は、文末に用いられた終助詞「ものを」が、強い余情、詠歎を表わすところから、次の文につづくように感じられて、前後の文を接続しているように見えるのである。奈良時代の「ものを」は、ほとんど終助詞とも見られるものであるが、平安時代になると、確かに接続助詞と考えられる例が現れる。活用語の連体形について、主として逆接を示すのに用いられるが、奈良時代には順接と解される例もある。

年ごろうれしくおもだたしきついでにて立ち寄り給ひしものをかかる御消息にて見たてまつる、かへすがへすつれなき命にも侍るかな(『源氏』桐壺)〈逆接〉

天地を照らす日月の極みなくあるべきものを何をか思はむ(『万葉』四四八六)〈順接〉

16 ものの

「ものの」は、形式名詞「もの」と格助詞「の」が複合した語である。奈良時代には用例がなく、平安時代以後用いられた語である。散文に主として用いられ、和歌に用いられた例は少い。連体形について、逆接の関係を示して下につづける。多くは形容詞の連体形、または、動詞の未然形に打消の助動詞「ぬ」のついたものを受ける。動詞の連体形を受けた例はないようである。

君来むと言ひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞ経る(『伊勢物語』二三)

冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそあやしう色なきものの身にしみて、この世の外のことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬ折なれ(『源氏』朝顔)

17　がてら・がてり

「がてり」が古形で、「がてら」は奈良時代の後半に見え、平安時代に多く用いられた。動詞の連用形、または連用形からの転成名詞を受けて、「……すると同時に……する」、「……かたがた……」という意味で下へつづける。多くは後件に叙述の主点がある。

山の辺の御井を見がてり神風の伊勢少女ども相見つるかも(『万葉』八一)

いとはるるわが身は春の駒なれや野飼ひがてらに放ちすてつる(『古今』一〇四五)

18　がね・がに

「がね」は奈良時代の助詞で、前の文に表明される話手の意志・命令の目的・理由を示すために後の文の文末に置かれるという、二文構成に用いられる語である。この種の構成は倒置とも見得るので、倒置と見れば接続助詞となる。活用語の連体形を受ける。

梅の花われは散らさじあをによし平城なる人の来つつ見るがね(『万葉』一九〇六)

この倒置の構造が表現の型として一般化すると、文末の「がね」が終助詞と受け取られて、次のような表現が成立する。

白玉を包みて遣らば菖蒲草花橘に合へも貫くがね(『万葉』四一〇二)

なお、『万葉集』の東歌の「がに」は「がね」の東国方言かと思われる。

おもしろき野をばな焼きそ古草に新草まじり生ひは生ふるがに(三四五二)

平安時代には「がね」の例はないが、「がに」が用いられている。

桜花散りかひくもれ老いらくの来むといふなる道紛ふがに(『古今』三四九)

(1) 大野晋「助詞の機能と解釈」(『国文学解釈と鑑賞』三五巻一三号、一九七〇年)一七頁。
(2) 山田孝雄『日本文法学概論』宝文館、一九三六年、九三六頁以下。
(3) 時枝誠記『日本文法 文語篇』岩波書店、一九五四年、二〇一頁。
(4) 橋本進吉『助詞・助動詞の研究(講義集三)』岩波書店、一九六九年、二一五頁。
(5) 時枝誠記、前掲書、一〇〇頁および二〇一頁。
(6) 山田孝雄『奈良朝文法史』宝文館、改版一九五四年、四〇九頁。
(7) 山田孝雄『日本文法学概論』(前掲)九三九頁以下。
(8) 時枝誠記、前掲書、二〇〇頁。
(9) 日本古典文学大系『源氏物語一』(山岸徳平校注)補注、岩波書店、一九五八年、四二二頁。
(10) 橋本進吉、前掲書、二一五頁。
(11) 青木伶子「奈良時代に於ける連体助詞「が」「ノ」の差異について」(『国語と国文学』二九巻七号、一九五二年)四九頁以下。
東郷吉男「平安時代の「の」「が」について――人物をうける場合――」(『国語学』七五集、一九六八年)二七頁以下。
(12) 勅撰集の詞書において人名を受ける「の」と「が」が身分の上下によって使い分けられていることは、安田喜代門「助詞ガの研究」(『国学院雑誌』五七巻七号、一九五六年、四九頁以下)にも指摘されている。
(13) 時枝誠記、前掲書、三一二頁。
(14) 松尾拾「客語表示の「を」について」(『国語学論集』岩波書店、一九四四年)六一七頁以下。
(15) 青木伶子「「へ」と「に」の消長」(『国語学』二四輯、一九五六年)一〇七頁以下。
(16) 山田孝雄『奈良朝文法史』(前掲)四六四頁。
(17) 同上、四七〇頁。
(18) 日本古典文学大系『万葉集 一』補注三六三―三六四頁。

(19) 石垣謙二『助詞の歴史的研究』岩波書店、一九五五年、八一頁以下。

(20) 日本古典文学大系『万葉集 三』頭注二七六頁。

(21) 大野晋「古典語の助動詞と助詞」(『時代別作品別解釈文法』)至文堂、一九五五年、四九頁。

(22) 日本古典文学大系『万葉集 一』補注三二九―三三〇頁。

(23) 日本古典文学大系『万葉集 四』補注五〇二―五〇四頁。

(24) 山田孝雄『日本文法学概論』四八三―四八四頁。

(25) 大野晋「日本古典文法 (一)―(九)」(『国文学解釈と鑑賞』一九五五年一二月、一九五六年二月、四月―六月、九月―一二月、一九五七年二月)。

(26) 山田孝雄『平安朝文法史』宝文館、改版一九五二年、四〇一頁。

(27) 大野晋「日本古典文法 (九)」(前掲)一三七頁。

(28) L・W・チェイフ、青木晴夫訳『意味と言語構造』大修館、一九七四年、二三八頁以下。大野晋「助詞ハとガの機能について――現代日本語の基本的構文の意味――」(『文学』四三巻九号、一九七五年)一頁以下。

(29) 工藤美紗子「「も」という助詞の意味」(『文学』三一巻一二号、一九六三年)九八頁以下。日本古典文学大系『万葉集 四』補注四九五―四九七頁。

(30) 大野晋「源氏物語のための文法」(『国文学解釈と鑑賞』二四巻一二号、一九五九年一〇月臨時増刊)二〇〇頁。

(31) 朝山信弥「希求の助詞「こそ」の攷」(『国語国文』七巻六号、一九三七年)七二頁以下。

(32) 同上。

(33) 林大「万葉集の助詞」(『万葉集大成 6 言語篇』平凡社、一九五五年)一五〇頁。

(34) 大野晋「万葉時代の音韻」(『万葉集大成 6 言語篇』)三二五頁。

(35) 佐伯梅友『奈良時代の国語』三省堂、一九五〇年、二〇一―二〇二頁。

(36) 橋本進吉「上代の国語における一種の「ずは」について」(『上代語の研究』橋本博士著作集第五冊)岩波書店、一九五一年。

(37) 石垣謙二、前掲書、一五頁以下。

(38) 吉田金彦「で―接続助詞(古典語)」(松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社、一九六九年)四五九―四六一頁。

(39) 岩井良雄『日本語法史・奈良平安時代編』笠間書院、一九七〇年、四七七頁。

○付記　奈良・平安時代の個々の助詞に関する研究は数多くあるが、この時代の助詞についての一般的な参考文献としては、注に示した単行本のほか、次のものがある。

此島正年『国語助詞の研究——助詞史の素描——』桜楓社、一九六六年。

鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座9　助詞』明治書院、一九七三年。

築島裕『平安時代語新論』東京大学出版会、一九六九年。

〔雑誌の助詞特集号〕

『国文学』　四巻九号(一九五九年)、一二巻二号(一九六七年)。

『国文学解釈と鑑賞』　二三巻四号(一九五八年)、三五巻一三号(一九七〇年)。

『月刊文法』　二巻五号(一九七〇年)、二巻一一号〈が・の〉(一九七〇年)、三巻五号〈係り結び〉(一九七一年)。

なお、個々の助詞については、次の辞典類の説明も基本的な文献として重要である。

松村明編『日本文法大辞典』明治書院、一九七一年。

『岩波古語辞典』〈基本助詞解説〉、岩波書店、一九七四年。

『時代別国語大辞典　上代編』三省堂、一九六七年。

『日本国語大辞典』　小学館、一九七二—一九七六年。

更に研究を進める場合には、『国語年鑑』(秀英出版、一九五四年以降毎年刊)所収の文献目録、『国語学論説資料』(論説資料保存会、一九六四年以降毎年刊)、『古事記』『万葉集』以下の古典作品の総索引などが手がかりとなる。

6 助詞 (2)

安田章

はじめに

本項において扱うのは、院政・鎌倉時代から江戸時代前期に至る間の助詞の変遷である。この時期の初め頃から言文乖離の傾向がようやく顕著になったと一般に言われており、室町時代末期には、ロドリゲス[1]が、

日本人もまた話す時の通俗な文体を用ゐて物を書くといふ事は決してしない。話しことばや日常の会話に於ける文体と文書や書物や書状の文体とは全く別であって、言ひ廻しなり、動詞の語尾なり、その中に用ゐられる助辞なりがたがひに甚だしく相違してゐる

と言う状態になっていた。この「相違し」たこと、すなわち話しことばを中心に、助詞の変移の事実の指摘が本項の主要課題であるが、それのために用いる資料に関わる根本問題をも、彼は剔出している。そして、話しことばがそれに比して「相違してゐる」と彼に認識させた書きことばの質も様々であり、互いに違っていることも別の個所で記している。これは、当代に限った現象では恐らくないはずである。このことを心得つつも、前後の文脈から切り離した「国文学書と国語学書がその主なる資料となる[2]」ということを金科玉条のごとく受け取って行う記述には当然限界があるであろう。「公けにされたところの文献にのこされてゐることばといふものは、みづからの無教養をうたがはれないやう、やかまし屋や気むつかし屋をこころしつつ、よそゆきなかたちで用ゐられたものだからである[3]」。しかも、その内部にあって、例えば鎌倉時代の『宇治拾遺物語』の伝本は「すべて近世の書写にかかるもの」であり、文献資料の純粋性に関わる問題が加わって、援用の或る場合に、大きな誤りをさえ冒しているかも知れない。

また「助詞」の分類も問題になるところであるが、本巻には総論が、別の巻で「品詞分類」が、用意されているので、それらに委ね、六分類という枠立てに従って、ただし「間投助詞」の項は特立せず、処理することにした。

（なお、本項で引用の文献は、『日本古典文学大系』『日本思想大系』を中心に、公刊されたものに基づいている。引用に際し、底本の表記に従うことを原則としたが、読み易さを慮って、濁点を施し間々漢字に替えたような個所もある。また、いわゆる外国資料は漢字仮名交り文にして示したが、すでに翻字された表記に従うことが多かった。）

一　格助詞

1　ガ・ノ

この二つは、連体格助詞・主格助詞としての機能を持つことで共通するものの、当然その用法領域を異にして、前代まではノの方がガよりも広かったのである。連体格助詞としてガの承ける体言に限っても、語彙的に固定化した「梅が香」「松が枝」などを別にすれば、代名詞・数詞、さらには「右近が局」のような人に関わる語程度であった。また、主格助詞として現われる際は従属句においてであるといった条件は両者ともにあったが、連体格同様に主格助詞ガの承ける体言は限られていた。単文での主格について、主格助詞を承ける述格の類型の種類はノの方が多く、したがって、何ら枠に捉われない、普通の終止に対して主格を表示し得たのもノの方が早かったのである。右のことを含めて、ガには、活用語連体形を承ける用法が、連体格助詞については奈良時代から、主格助詞については平安時代から、それぞれあったことなどは、別に述べられる所があろう。院政・鎌倉時代を経て、ガが主格助詞の、ノが連体格助詞の機能を分担する方向を採る。

主格ノについて、すでに前代に現われていたが、普通の終止の活用語に続いた例、「身ノ才広ク心ハ達レリ」（『今昔物語集』）、「天下ノオホキニ旱敊セリ」（『法華百座聞書抄』）に遅れて、ガが同様の位置を占めた「蘂筋一筋が柑子三つに

なりたりつ。柑子三つが布三疋になりたり」(『古本説話集』)のような例が現われ始める。もっとも、大坪併治[4]によれば「彼レが我ガ病ありと言フ」などが小川本『願経四分律』(平安初期点)に見えると言う。いわゆる訓点資料に限らず、室町時代末期でさえ「主格は話しことばでも書きことばでも助辞なしに使はれることが多い」(『大文典』)という状態であったので、ノ・ガいずれにしても右のような例はいまだ多くない。院政期にあって、普通の終止に対応する主格がは、「薄打ッ者ノ妻ノ女ノ、年卅余卅計也ケルガ、此ノ阿闍梨ノ房ニ来タリ」(『今昔物語集』)のような連体形を承けた形式が中心であり、この形式はすでに前代に現われていたのであった。

しかし、主格ガがノと同じように使われ出したこと、そしてガの承ける名詞も、『却癈忘記』に「皆文ガソンジテ」「焼香ガ殊勝之事ニテ侍也」とあるように拡がったことは、それだけ主格助詞の領域において、ガがノの位置を冒したことになり、特に前項は、山田孝雄[5]が「主格を特に力を込めていへる場合」としたケースであって、これを別の表現をもってすれば、広い用法のノに替って狭いガによる強調、さらには主格明示という論理性の付与ということになるであろう。新しい用法を獲得したガに比して、延慶本『平家物語』で、単文の主格に立つノのケースのバラエティはガとほぼ等しく、もはや前代と様相を異にしている。以後、「主格を特に力を込めていへる場合」を中心とした主格ガの領域拡大は、室町時代末期「本書のことばをたがへず書写し、抜書となしたる」、キリシタンの「世話に和らげたる平家の物語」、すなわち天草版『平家物語』を「本書」(原文)と対比すれば、両者の間に二〇〇年の隔りがあるだけに鮮明に把握し得る。ロドリゲスの説くとおり主格助詞なしの「香の煙　心細う立ち上った」も勿論あるが、原文[6]に主格助詞がなかったと思われる個所におおむねガを配した、「涙を流す人が多かった(涙ヲ流ス人多リケリ)」「大地が必ずうちかへらうずる(大地必打カヘルベシ)」のような例が多く、さらには進んで原文のノをガに置き換えた「はやこれらが内々たくんだ事が洩れたよ(あはれ、これらが内々はかりし事のもれにけるよ)」「既にはや武士が向ひまらする(既武士のむかひ候)」「早う日が暮れいかし(早々、トクシテ、日ノ暮ヨカシ)」「あはれこの者はなほ意趣がござ

るげな(哀レ此者ハ、尚ヲ、意趣ノ候ニコソ)」のような例も少くはない。対照して示したノの用法は前代の本来のものであろうが、ガに冒されたこと明らかである。

一方、従属句の主格を示す用法についても、延慶本ですでにノ・ガ相拮抗していた。室町時代末期、「主格のノは主として関係句に使はれる」とロドリゲスは述べるものの、示された例文は、終りに体言が脱落していると見るべき「そなたの物を仰せらるる」と尊敬のノ(後述)と関わる「親のなければ」「威勢のある人」を初めとして連体句の主格の用法を持つものばかりで、「関係句」における用法も局限されていたようである。もっとも、天草版『平家物語』で「義経は院の御所のおぼつかないに守護し奉らうずる」や「母御前の遺言のいとほしければとあって」など「関係句」の一、連用句の主格ノが見えるけれども、原文でもノが使われていたので、主格ノの存在をどれほど主張し得るであろうか。逆に「親が落せば、子も落す、主が落せば郎等も続く」「などか思ひおく事がなうてはござらうぞ」のように、原文ノをガに置き換えた例もある程なのである。しかし、「力の及ばいでか」(コリャード『懺悔録』)もあり、やはり「関係句」の一用法として辛うじて残っていたと思われる。しかも、連体句の主格表示さえ、「関白殿ほどの人がこのやうな目にあはせられたことは、聞きも及ばぬことぢゃ」「天下に乱が起る時」のようにガでもってすることも必ずしも珍しくないのである。とすれば、連体句を除いて主格はガで表わすということに大勢はなっていたと言ってよい。主格ノに焦点を絞れば、「関係句に使はれる」以外には、後述するとおり「尊敬せらるべき第二人称第三人称に使われる」(ロドリゲス『日本小文典』)、天草版『平家物語』の例で言えば「大臣殿の既に関東へお下りある(大臣殿、既、関東へ御下候)」のような、場合に限られるということである。したがって、この二つの場合以外の主格ノは、「寝うやれ、月のかたぶく」(『閑吟集』)のように、表現に感情の色彩を加えた、前代のいわゆる連体止めに等しい効果をもたらしたことであろうと思われる。そして、この種の例は、江戸時代になっても「はて、がてんのわるい」(『傾城弘誓の舟』)、「若い上臈のお優しい」(『冥途の飛脚』)などと見られるのである。

連体格ガの上接語は、延慶本でやはり局限されていた。これは、山田孝雄が「その上なる名詞も最大部分が人をさせる名詞なるはこれ実に、一の大なる現象として国語史上に於いて深く注目すべき事実なりとす」と説いたものである。逆に言えば、体言と体言とを結びつけるのにノが広く用いられていたということになる。ガが承ける語の一として数詞について、「廿日が命をのべてたべ」(『平家物語』)は百二十句本でノとなっている。これは、数詞に続く連体格助詞が必ずしも安定したものでなかったことを意味するが、なお天草版と原文とを対照すれば、連体格ガの上なる名詞が「人をさせる」それに局限される方向にあったことが知られる。もとより原文のままに「三年が間」「五騎が内」などとした例はあるけれども、他方「三千余騎の声」「三十人の力ある人」「三が年の間の塩風」のように、ガがノに替えられた例もある。数詞を承けるガは、江戸時代でも「一文が物」(『好色伝受』)、「四五日が間」(『鎌倉正月買』)のようにあり、現代も「百円がとこ」に残るが、右の置換例は、連体格ガの領域が狭まっただけノの方が広まったことを示唆するであろう。かくて、室町時代末期には、人に関係する場合を別にすれば、主格が、連体格ノ(連体句の主格ノも広く連体格助詞として処理し得なくはないであろう)という大枠がほぼ出来上っていたと思われる。

ところで、もっぱら人に関わって、ノ・ガに尊卑の別があるという記述が文献の形で現われるのも院政・鎌倉時代からである。顕昭『古今集註』に「キヨミガセキヲモ、ウルハシフイハヾ、キヨミノセキトコソイフベケレ」などとしたのが古く、その別を扱った説話も『今昔物語集』などに見えるが、その一例を示しておこう。

花こそといひたるは、それにはおなじさまなるに、いかなれば、四条大納言のはめでたく、兼久がはわろかるべきぞ(『宇治拾遺物語』)

また『あゆひ抄』でも「里に、かしづきては「人の」と言ひ、いやしみては「人が」と言ふも、歌には〔の〕とのみ言ふ」とし、『宇治拾遺物語』の「播磨守為家侍さたの事」を引いて「その世にも〔が〕はいやしめる言葉となりてありけるを思ふべし」と説いている。この別は漢文訓読の世界でもあったようで、

日本ノ儒者帝王ヲバ、ドレヲモ、某帝ノトヨムガ儒者ノ寃讐ヂヤホドニ、始皇ニ、カギリテ秦ノ始皇ガト何レノ書デモ読ゾ(『三体詩素隠鈔』)

という記述もある。先の例や「是は汝がもとゞりと思ふべからず。主のもとゞりと思ふべし」(『平家物語』)のように、ノ・ガと並べた時、そこに尊卑の別のあったことは事実であるが、特に連体格ノそれ自身の使用に尊の意識があったというわけではなかろう。連体格助詞として広く用いられたノは中性的であって、卑ないしは狎(こ)の背後にあるのは「親」である)のガとの対比において、すなわち、ノそれ自身によってでなくガとの相対関係によって、結果的にノに尊の色彩が付与されたのであろう。

この格辞としてはただ二つの助辞があるのみである。即ち、第二人称及び第三人称の尊敬すべきものに使ふノと、第一人称及び低い身分の第三人称に対して、又時には、主としてその人を軽蔑した場合に、第二人称に対して使ふガとがそれである(『大文典』)

という発言は尊卑二元を示唆するようであるが、『小文典』に到っては「ノはすべての人称に、ガは身分の低い者と第一人称に」と述べ、連体格助詞として局限されていたガに視点を置いているのである。一方、彼は、主格助詞ノ・ガについても対照的に述べることがあった。『大文典』では先の主格助辞なし論に続いて、「主格のノは普通に第二人称第三人称に使はれ、ガは第一人称及び身分の低い第三人称に使はれる」と説き、『小文典』では、「ガは身分の低い第三人称及び第一人称に、ノは尊敬せらるべき第二人称第三人称に使われる」とする。二つの文典の説くところ必ずしも一致しない。不一致はノの方にあり、「普通に」(『大文典』)と「尊敬せらるべき」(『小文典』)の差に基づく。彼は「普通に」と言うが、先の行に「この主格のノは主として関係句に使はれる」という項が続き、また別の個所(格辞の構成)で「関係句の中で第二人称及び第三人称に用ゐるのが普通であって、それ自身ある敬意を含み、或いは少くとも軽蔑する意のない助辞である」と説くとおり、ノは「関係句」で用いるのが「普通」であった。『大文典』でノ・ガ

を対照させた個所は主格助詞の緒論とも言うべく、したがって両者は平面的に、関係句における場合も区別せずに、要するに主格助詞の次元でまず把握しているのであって、詳細は各論で述べるのである。しかも、そこでも、先のように、また「主格の助辞としては極めて上品であって、特別な意味を持ってゐる」程度にしか、ノの尊について言っていない。『小文典』では各論内で用例・用法に関する説明がないので、先の緒論がすべてなのである。両文典の組織を眺めれば、『小文典』のノの説明は、ガと同一次元で捉えられたノであり、「関係句」などに制約されないものであったと思われる。彼のガについての説明、「この格辞は丁寧な言ひ方をする場合の主格に用ゐるものであって、それの接続する名詞が意味する者を卑下する。第一人称に用ゐ、又低い地位の第三人称に用ゐる」(『大文典』)を読むと、ガに卑を配するのが自然であろうが、天草版『平家物語』の中には、「松殿と申す公家がござったが」「小松殿のお子に宗実といふ人がござった」など、ガの説明に該当しない例が決して少くない。これらのガが、「それ自身ある敬意を含」むのは問題だとしても、「少くとも軽蔑する意のない助辞である」ことはまず確実であろう。したがってガ一般に卑を与えることに問題がある。現象的には主格助詞ノの用法の縮小は連体格助詞ガと相似ており、先の場合の逆として、ノを尊としてみよう。これが『小文典』のノの用法であり、「シャントの言はるるは……エソポが言ふは」(天草版『伊曾保物語』)と並んだ例や「しの丶たふまく(子曰)」「しこうがいわく(子貢曰)」(『仮名書論語』)もあり、ガそれ自身によってでなく、ノとの比較において、ガが卑の位置を占める結果になるわけであるが、連体格ノと異なって、主格ガを直ちに中性的とはなし得ない。先の「公家がござった」から「この一門を傾けうとする奴がなった様は！」まで、ガの承ける範囲は広いので、主格助詞に中性を求めるとすれば、主格助詞ゼロの場合であろう。すなわち「助辞なしに使はれること」が中性であって、

「『御文ガ』ト申モ聊爾ナリ。御文ヲ聴聞申テ、『御文有難』ト申テヨキ」由ニ候(『蓮如上人御一代聞書』)

の記述がそれを物語っている。主格ノの領域をガが冒したのと平行して、主格助詞ゼロの部分にガが進出した。この

ガは「少くとも軽蔑する意のない助辞」であるが、主格ガのレベルでは、従来のガ、すなわち「第一人称及び身分の低い第三人称に使はれる」ガと現象的には共存することになったのである。ガが中性的な位置を獲得していたならば、『小文典』の記述も、属格と対になる表現——ガはすべての人称に、ノは尊敬せらるべき第二人称第三人称に——とならざるを得なかったであろう。室町時代末期においてもなお、連体格助詞ノと並ぶ中性性を、主格ガが完全には持ち得なかったのは、それなしには表わされることのない連体格助詞の場合と異なり、主格は「助辞なしに使はれることが多い」状態だったからである。もとより人に関わる場合、主格助詞ゼロに対するガの位置、鎌倉時代以後の主格助詞ガの進出点など、なお検討を要するが、室町時代末期のノ・ガを直ちに尊卑とするのではなく、主格・連体格の領域での趨勢を表現の差に関連づけて、それぞれの領域で一方だけ、すなわち主格ノを尊、連体格ガを卑と設定してみるわけである。したがって、ノ・ガ、主格・連体格の組み合せにおいて、主格ノ・連体格ガが反撥し合う外は、いずれも成り立つはずなのである。

「尊卑」の別は、江戸時代に入っても、『あゆひ抄』の記述もあり、なお存したようである。「お姫様の持てござる」(『新小町栄花車』)、「少将様のござんした」(『和歌三神影向松』)のように稀に見られる(先の「若い上臈のお優しい」も尊かも知れない)。連体格ガがノと対照的に使われた、「太郎左衛門殿の出居」「太郎左衛門が出居の烏帽子」(『醒睡笑』)もあり、狂言でも「どん太郎が妻」「どん太郎殿のつま」(虎明本『鈍太郎』)のように見られる。特に狂言では、以後も感情価値を背負った一種の表現技巧として処理する必要があるが、連体格ガは現代でも方言によっては残存するようである。第一人称代名詞に対する連体格助詞はガであるが、新しいものほど、ノを採る方向に傾くのである。ワタクシは、天草版『伊曾保物語』に「私が如くに」「私が随身」とあるが、『捷解新語』で「私の草臥れ」「私の不調法」——前者は改訂版で「手前の草臥れ」となっている程である——のようにノを採り、同書の候文体の内部で「我等の儀」すら現われている。コチは、もはやガを要求しないようであり、『日葡辞書』はコチノを見出しに立てている。要す

るに、その上位語ワ(我)の単独用法が当代語になく、したがってノに置き換えることが出来ないワガを除いて、連体格助詞としてのガは、その用法をノに譲って行ったのである。

助詞の「尊卑」は、いわゆる対象語格についても時にあったようである。『蓮如上人御一代聞書』に、

「仏恩ガタフトク候」ナド、申ハ聞ニク、候。聊爾ナリ。「仏恩ヲ有難存ズ」ト申セバ莫大聞ョク候」由、仰ラレ候ト云云

とあるが、「仏法ノ方ヲバイカホドモ尊敬申ベキ事」という観点から「一般の用法となってゐる」(『大文典』)「対格」ガを言い替えたものの、ノとはしていない。ここで、院政・鎌倉時代以後の対象語格助詞について触れておこう。助動詞マホシに続くのは前代以来ノであるが、「ものゝ食ひたくて」(『閑居友』)に遅れて、「それがうけ給たく候て」(『古今著聞集』)のようにガが出るのも主格助詞と軌を一にする。一方、「そのあとのせいばいおかぶりたきよし」(源頼朝書状案)のように、ヲを採る例も見え、延慶本『平家物語』ではヲだけであり、対象語をタシにではなく動詞に対応させた結果を呈している。室町時代末期前後では、「平家の由来が聞きたいほどに」を引いて対格ガを説く『大文典』に「何某を呼びたい」、「水を飲みたい」を中心にタイを説明するコリャードの文典に「ものが申したい」「御異見を申したい」、さらには狂言の同一曲(『入間川』)の内部で「わたりぜが知りたひな」「渡瀬を問ひたう御ざる」「物が問いたう御ざる」(虎明本)とあるように、両者の共存する文献が多いが、全体としてヲが優勢である。『捷解新語』でもヲだけだが、改訂版で「私の不調法の顕れぬ様に」と改められた元の表現「我等初心を現われん様に頼みたうこそ御座れ」[7]も、ガ〜タイよりもヲ〜タイの傾向を反映した誤りと解し得る。しかし、ヲの優位も、松村明によれば、元禄頃には崩れるようであるが、ガに覆い尽されるわけではないのである。

「忘れじの行末までは」(『新古今和歌集』)のようなノの上の句を体言相当と見なし、それを承けて下に続ける用法は別として、ガと異なって、ノは活用語連体形を承けないが、ただ「和歌・管絃・往生要集ごときの抄物を入れたり」(『方丈記』)のゴトキノのみ、院政・鎌倉時代から現われた。ゴトシは別に述べられるように形容詞的活用の語であるが、音便形・已然形をも持たず、未成熟のまま固定化した語形ゴトキ・ゴトクによって、終止・連用法も、ナリ・ニと共になされることが多かった。連体格助詞ノが連体法に立つはずの連体形を承けることはあり得ないが、「如此クノ罪罸」(『今昔物語集』)のゴトクノと並んで「如此キノ霊験」(同)のゴトキノも、連体形をノが補強する形で成立したのであろう。室町時代に到って、岐陽方秀・桂庵玄樹の提唱した新しい漢文訓読法では直訳風に、したがって従来の不読字をも訓むようになった結果、

建仁龍雲有リ二論語集註一。其ノ巻末ニ有リ下書スルノ二岐陽和尚講筵ノ之説一ヲ之本上(『桂菴和尚家法倭点』)

「岐陽和尚講筵ノ説ヲ書スルノ本有リ」という連体形を承けるノが生れた。この形式の成立の背景に、ゴトキノがあったのであろう。これが、ロドリゲスの「動詞に直接する属格」であり、「すべきの由」「書くべきの間」「参るの条」などを例に掲げて、

主として書きことばに於いて、例へば、ヨシ(由)、アイダ(間)、ヂョウ(条)、ユエ(故)、トコロ(処)、トモガラ(輩)等の如き一種の実名詞が動詞に続く場合には、動詞の直後に格辞のノを添へる

と説いた。そして、これは、「文法上許容スベキ事項」の一、「てにをはノ「ノ」ハ動詞、助動詞ノ連体言ヲ受ケテ名詞ニ連続スルモ妨ナシ」になったのである。

体言と同じ職能を持つものを作り、それ自体他との関係を示す機能を持たない故に、橋本進吉が格助詞と別に設けた「準体助詞」に属するノの内で、名詞に続く例が、先の「四条大納言のは」であるが、「兼久がは」のガと並んで、

すでに前代にあったのである。このノ・ガは、連体格助詞ノ・ガの続く語が、前後の文脈から当然了解されるはずのものとして省略された形式に基づくのであろう。ノは現代でも、ガは江戸時代でも「そのぬし〳〵の足をば取違へ、我がを人に、人のを我がに、つぎかへたり」(『醒睡笑』)や「おれがのが見事じや」(『入鹿大臣』)のような形で見られる。

活用語につく準体助詞ノが出るのは、江戸時代初期である。「古今の前書に歌奉れと仰せられける時とあるのは、歌の手本に奉れとあるのなり」(『耳底記』)のように連体形に続くが、言うまでもなく連体形それ自身に体言の資格で機能する用法があり、『耳底記』でも、「ふるといふはちがひはせいで、題の心にあはぬをいふなり」のような例が当然のことながら散見する。そして、「賤などの、さびしきといふ事をよまぬなり」に対する「貴人ならぬ人の、数ならぬなどよまぬ物なり」から、モノさらにはコトにノが相当するはずである。コトを「分詞助詞」とする立場があるように、モノ・ノを含めて、これらは連体形で終わる句を纏め上げる機能を持つ。体言の資格を与えることでは同じ準体助詞と言うものの、活用語に付く方は、句を統括し、したがって論理的な展開に寄与し得る力をも潜在させているので、属格の後に置かれた助辞によって「言ひ表されてゐない実名詞が推定される」(『大文典』)という、名詞に付くノと、むしろ相反する方向を指すとも言える。『耳底記』には「春もまだあさ沢といふのつゞきはたしかにおぼえたり」ともあり、ノの発生には、モノと並んで、先の「動詞に直接する属格」が関与したことと思われる。虎明本狂言にも「せんどそちへ渡ひたのは何としたぞ」(『雁盗人』)と見えるので、室町時代末期には生れていたのであろう。このノから、接続助詞ノデ・ノニ、さらには断定の形式―ノダが生み出され、主格助詞ガの顕示と共に、近代語の表現に論理性を与えてゆく起因となった。

「並立助詞」のノの発生も室町時代であった。橋本進吉は格助詞とは別にこの助詞を設けるが、連体格助詞に由来する説もあるのである。抄物を別にすれば「出来申の、能料理にて候のとほめ候ても」(『利休客之次第』)が古く、キリ

シタン関係でも、「五日六日は日が悪いは何のかのと言うて」(『平家物語』)、「学問をするには、明日の明年のなどと延ぶるな」(『金句集』)のように見られ、後者を例にロドリゲスもこの用法に触れている。語のみならず文相当句を承け、いずれも、いわゆる引用のトに続き、さらに、言ウかそれに類した動詞が続く(『金句集』の例は、……ナドト(言ッテ)延バスナと解し得る)ので、並立のノを、連体格助詞とか準体助詞からとするよりも、素朴に終助詞ノに由来すると考えてみたい。虎清本狂言で、終助詞ノの、名詞を承けた例「いかい人おとの」(『猿座頭』)と共に、活用語に続いた例「(頼ふだ人に会ふて、先度は紙を引き割いて、)文をかいておこしやつたの、などゝおまうしやつたらば」(『文荷』)がある。後者では、並立こそしてはいないが、提示した以外のものを推測させるナドを用いているので、『金句集』の例にはなはだ近いわけである。先の『平家物語』の例で、原文にノに該当する要素はないけれども、下のハ(悪いは)は終助詞であって(もっともバレトは、これを係助詞としナンノカに続けたのか、ナニカと訳すが誤訳と言わざるを得ない)、終助詞ハ・ノで結ばれた文が対等の関係で並んでいることになる。すでにナンノカノは成句となっていたであろうが(『日葡辞書』(補遺)では、ナンノ、カノを見出しに立て、「よりよくは、ナニノ、カノ。謝絶、弁明に際して色々なことを言う様」と訳す)、それでも事情は変らない。

並立表現として、天草版『平家物語』に、「夜々になれば、重景ぢゃは、石童丸などといふ者などを傍に召し」や「奥州の嗣信ぢゃは、忠信ぢゃは、弁慶ぢゃはなどといふ者ども片手矢をはげて」という、主として人名に関わる形式が見える。原文では、「―・―ナンド、云(申)者ドモ」、つまりナンドで括られているものの、並立を示す要素はないので、「ぢゃは」が、「年ニシタガヒテ太郎ゾ二郎ゾワカキヲ五郎トサダメテ」(『法華百座聞書抄』)のゾと等しく、並立する語一つ一つを明示するために置かれたことは言うまでもない。恐らくはナドとの呼応によって、並立助詞トよりも幅のある表現が要求されて、直截さを回避する言い方として終助詞ノ・ワ(名詞に続けるためにヂャを介して)が選ばれ、並立であることを表わしたのであろう。江戸時代になって、「打殺せの叩けのと色々いひふくむる」(『きのふはけ

ふの物語』)のように、はっきりと完結した文を承ける例が出るが、並立の型としてようやく定まったのであろう。さらに「いかな下人下郎でも踏むの蹴るのはせぬこと」(『女殺油地獄』)に到って、トとの関係も切れてしまう例が見え始める。ノの並立性が進めば「不義ぢゃのなんの庚申」(『大経師昔暦』)のように、ヂャを介するようになるのも自然の勢いであるが、本来ノにヂャの要素があったのである。後期では、「何」にすらダが付いた形「貧乏人だの何だのと」(『浮世風呂』)も出て、現代語に及ぶ。

並立助詞として一括し得るにしても、ノとトとは並立表現の態度を異にするのである。すなわち、ノによる並立は、仮にナドがなかったとしても、表現されたもの以外をも含んだ奥行きを本来持っていたと思われる。

2　へ

へは院政・鎌倉時代に入って用法を拡大発展させた。ニとの関連で、へを把握する青木伶子[8]によれば、前代、移動動作の目標を示すことを含めてニの用法は広いのに対して、へも同じく移動動作の目標を示すが、ニと相違する特性は「言語主体の現在地点から遠く離れてゐる地点へ向って進んでゆく」という意を担う点にあった。この特性はへの承接する語に反映して、言語主体に最も近い関係を示すココ・コナタ、および接近・到着の意を持つ動詞が用いられ難いのである。この例外は前代に多少認められるが、院政期に入って、「此へ来レ」(『今昔物語集』)に類する例が散見するようになり、さらに「こなたへよべ」(『古本説話集』)のような、直接に移動動作に関係しない動詞をも従えるに到って(『今昔物語集』の同源説話では「此方ニ呼べ」)、かの特性を喪失する。そして、「くにへくだりつきて」(『古本説話集』。『今昔物語集』の同話は「国ニ行着テ後」)のような到着点を示す例も出る。もっともこのツクは移動動作の動詞(クダル)との複合動詞であるが、「事ゆへなく彼岸へつけてけり」(『古今著聞集』)のような例も珍しくなくなり、兼好すら「一つなりともまさらん方へこそつくべきを」(『徒然草』)と使っているくらいなのである。右に示した例は、前代の

用法と異なるものの、いずれも動作の目標もしくは方向を示す点で一貫していたけれども、この流れから逸脱した、場所を示す用法が、室町時代に見え始めるのである。原口裕[9]は、「道運清水へ御参候、次瑞竹へ滞留也」（『親俊日記』）や「夜天野三郎兵衛所へ火事出来候」（『家忠日記』）を示したが、記録文書では実用的性格が濃厚であるから変化の動向を敏感に反映させる面が確かにある。

ロドリゲスは、

〇ある場所に居ること、留まること、住むこと、又は、ある事柄をする事等に就いて言ふ場合には、その在る場所とか、その動作の行はれる場所とかを示す名詞に助辞のニ、ニテ、デ、ニオイテ、ニイタッテの中のどれかを添へて用ゐる

〇ある場所へ向っての移動に就いて話す場合には、向って行く方向とか行き着く場所とかを示す語が助辞へを伴ふ対格に置かれる

と一往区別して説き、なおへの附則の一として「助辞ニは書きことばに於いて往々への代りに用ゐられる」と「動詞ツクはニ、又は、へをとる」とを掲げている。しかし、ツクは別としても、口語文献で両者が使い分けられるはずがなく、一文内での共存「海へ沈ませられたに……海に沈ませられたれども」（『平家物語』）や合冊された本の序文で、『平家物語』の「読誦の人に対して書す」に対する『伊曾保物語』の「読誦の人へ対して書す」といった例すら見られるのである。このような現実の下、『小文典』で、先の附則の内、話しことばにおけるへの優位を示す前者は九州方言のニ（後述）の説明文に組み入れられるに過ぎなくなり、後者の例文の一「都へツイタ」もへの項目に移されて、ツクはむしろへをとる方が正格と彼は見たようなのである。ただし、『平家物語』のツクに関して、原文と切り離して言えば、ニをとる数の方が、へをとる数に比して倍することだけは事実である。『捷解新語』のツクはニをとらない。同書では、「各々へも心得て下され」のほか、候文体の巻で「東萊の御蔵へ先づ一束も是無く候由」が見出される。これら

が著者の日本語未熟ゆえの誤りだとしても、誤りを惹起した背景には、口語におけるへの傾向があるわけである。そして、改訂版でも「東萊の蔵へ」と少くともへに限って手が加えられていないので、江戸時代に入っても、への優位は、口語は勿論だが、候文、要するに俗文にまで及んでいたことが察せられるであろう。

かくて、へは、移動動作の目標は勿論、到着点や場所まで示し、ニの領域を大きく冒して、その過程で、「それへの殿人どもは」(恵信尼消息)という、ニにない用法を獲得した。へに関わる附則の三に「向って行く場所とか行き着く場所とかを示す名詞にマデ、へ向ケテ、又は、向イテ、又時には向ウテを添へる」とあるのは、へ本来の「向って行く」ことを表わすために「向ク」を重ねた言い方をせざるを得なかったのであろうか。また、『平家物語』で「源氏は既に比叡の山まで攻め上って」「大物の浦までつかせらるるに」のようにマデで到着点を示す例があり、前者は原文にニとあった個所である(後者は原文に該当する行を欠く)。つまり、ニは、右に見た限りでも、へ・マデ・デ、書きことばでニテ・ニオイテ・ニイタッテに、「全品詞中で最も広」い用法(『大文典』)の内の場所に関わるものを譲ってゆくわけである。この内で、ニオイテ(ニオキテ)はすでに前代見えているが、ハを伴えば或る場面を特立設定することになるわけであり、連体形を承けた「サ様ノ者ヲ猶モ近ク召仕セ給ワムニヲイテハ自今以後モ僻事出クベシ」(延慶本『平家物語』)のように、条件法を示す「接続助詞」としても用いられた。

ニテのデになった形が出るようになるのも院政期以後のことである。すでに前代デは成立していたであろう。それを推測させるように『御堂関白記』の古写本に「右大臣宣命以右手、此院ては用左」と見える。『今昔物語集』では、「今ノ后ハ継母デゾ有リケル」「己レガ父ハ百廾ニテナム死ニシ、祖父ハ百卅ニテナム死ニシ、亦、其レガ父ヤ祖父ナドハ二百余デナム死ニケリ」などあり、『打聞集』にも「一人テカ、バ書モヤ」「賢左臂テ、右候マシカバ」など見える。『打聞集』の後の例は、『宇治拾遺物語』の同源説話で「賢く左にて侍、右手折り侍らましかば」とある個所なのである。デの出現は近代語の一特徴をなすものであるが、その出始めの時期では、『今昔物語集』の後の例のように、

ニテが優勢であって、デは稀にしか現われないのも当然である。しかし、室町時代末期では、原文に干渉される『平家物語』でニテがデに置き換わらない例もあるけれども、『伊曾保物語』ではまずデであって、一般には、ニテについて「これは書きことばで用ゐる。それが話しことばではデとなる」(『大文典』)と意識されていたと思われる。

　へに関わって、室町時代には、ロドリゲスも「京へ、筑紫に、関東、又は、坂東さ」と記したように、京都・九州・関東の方言的対立があった。『大文典』では三個所に見えるが、への附則の二で、彼は言う。

　日本の諸他方で色々な助辞を使ふ事は注意しなければならない。「都」では助辞へを用ゐるが、これが正しいのであって、すべての言ひ方のうちで勝ってゐる。「下」では大部分の地方でニを用ゐ、「関東」では助辞サを用ゐる。……直ぐ次に示すやうに、諸地方に色々な助辞があるけれども、常に「都」に於けると同じくへを用ゐるがよい。それが正しく且上品だからである

そして、「都」ではへの外にノ方(カタ・ハウ)へ、「下」すなわち九州ではニの外に、ノヤウニ・ノ如ク・サマ・サナなどを示す。ロドリゲスは「京」を最初に置いており、同時期の『蠡測集』も同じであるが、時期を溯った抄物では、西から示すようで、『四河入海』『人天眼目抄』のほか、『蕉窓夜話』にも「筑紫ニ京ヱ坂東サノ類デ、越ニハ辞ノ末ニ於ノ字ヲ云ゾ」とある。右に「類」とあるように、広く知られていたのである。『あゆひ抄』でも、

　京の人は「何ニ」と言ふべきをも「何へ」とのみ言ふ。田舎人は「何へ」と言ふべきをも「何ニ」と言ふこと多し。いづれもかたぶきてかなひがたきうちに、京のはもとよりいはれなし。田舎人の言ふは、里に古く言へる事にや。儒書の訓点にも「何へ」とは読まずして「東に流る」「西に行く」などのみ読ませたり

と説く。右に見たように、への領域拡大、つまりニの領域縮小という史的必然性以外の「いはれ」はないが、結果として「文にも歌にも〔何に〕〔何へ〕を、かくうるはしく別かつべきを、後世には〔何へ〕といふ言葉、あさはかなるやう

なりとてにや、をさをさ詠まず」(『ぁゆひ抄』)といった状態になった。ただし「儒書の訓点」は事実であって、別に述べられるであろう。なお、室町時代末期前後の、ノ如ク・ノヤウニを含めた九州方言のニについては、原口裕に先の報告がある。

3　ト

語句を並べあげる際に用いるトについて、「文法上許容スベキ事項」の一に、「誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ」と掲げられた現象の源も、やはり院政・鎌倉時代にある。前代でも、上の語にのみ、または下の語にのみ付いた例はあったけれども、特に前者は稀であり、「各語の下に附属するを通例」[10]としていた。ロドリゲスも、「トを繰返したものは非常に上品である。即ち、初の名詞に加へると共に、それに結合する後の名詞にも加へるのであって、後の名詞が或格辞をとらなくてはならない場合には、その名詞につくトの後に格辞を置く」として、「石と、土とを運ばせられい」(『伊曾保物語』)などを例示する。右の「後の名詞が……トの後に格辞を置く」という点に着目すれば、「初の名詞に加へる」、言わば上のトはもとより、「後の名詞にも加へる」下のトも、格助詞の範疇からはずれると考えなければならない。橋本進吉は「並立助詞」を別に立てるが、訓点資料の一、根津美術館蔵『大乗掌珍論』(承和・嘉祥加点)において、二種のトを、星点と縦線とで、しかもそれぞれ位置を異にして示し分けている態度は[11]、この処置と平行している。並立助詞とした時、上のトと下のトとは、トの「繰返」として果して同一の機能を有しているのであろうか。「その(後の)名詞につくトの後に格辞を置く」ということを格辞の方から見れば、下のトによって纏め上げられた複数の名詞を承けていることになる。「デウスは天・月・日・星・土・水・風・火を御作なされた」などを例文に、ロドリゲスが「句中に同一の動詞の支配を受ける名詞が数多くあり、而も同一の格に立つべき場合には、初の名詞は格助辞をとらないで最後のもののみがとる」と述べることを対比すれば、下のトは纏め

のトであることは明らかであり、これに対する上のトは並立または接合、繋ぎのトと言ってよい。両者（上のト・下のト）を併用することによって、並立の表現は十全たり得るわけであるが、いずれか一方でもあれば、それでよしとすべきであろう。右の天・月……火には、繋ぎのトも纏めのトもないからである。『今昔物語集』における三つの場合、「天竺ト震旦トノ間」「宿業ノ命ト、大ナル過ヲ致サム事ニ於テハ力可不及シ」「法文・聖教ヲ持テ来レリ」について、前代の「通例」からすれば、繋ぎのトのみある場合はマイナスに当然位置づけられるわけであるが、接続語を全く欠いたケースから見ればプラスに位することは勿論である。繋ぎのトのみによる並立表現を正負いずれに評価するか、にわかに決し難いけれども、前代の表現を基準にすれば、マイナスの方向に進んでいることは改めて言うまでもない。『今昔物語集』の第一例は、『打聞集』の類話で「天竺ト唐ノ間」と纏めのトを落した形で現われている。トによる表現について、『平家物語』もすでに傾向を同じくするわけであるが、原文の併用例「武蔵ト下野トノ境ニ」を、天草版は「武蔵と、下野の境に」とした例もある。天草版『伊曾保物語』における章の題目は、特に二語を並べることが多く、しかも「格辞をとらなくてはならない場合」でもないから、「蝉と、蟻との事」のような併用例は稀で一割にも達しないのである。「文法上許容スベキ事項」の説明書たる『現行普通文法改定案調査報告之一』は言う、

徳川時代ヲ経テ今日ニ至リ、最後ノとヲ省クヲ以テ殆ド通例ノ事トナリタレド、実際ニ害アルコト極メテ稀ナリトス。故ニ、本項ノ如ク制限ヲ加ヘテ之ヲ用キバ、対偶ノモノヲ列挙スル場合ナド、却テ益スルコト多カルベシ

もとより「並立」助詞という命名から判断を下すべきではないにしても、纏めのトの用いられること少く、並立助詞に相応しく繋ぎのトによる表現が通例になったわけである。

4　ヨリ・カラ

時間的・空間的基点を示すカラは、同じ用法を持つヨリに圧倒されて、平安時代から鎌倉時代まで文献の上ではあ

まり見えないが、もっぱら俗語の世界に命脈を保っていたのであろう。しかし、室町時代以後は逆にヨリを凌駕しようとするが、この現象について、石垣謙二[12]の説く、「当時の社会情勢たる下剋上の影響」とし、「我が国語の中心が上層より庶民階級に移行しようとする傾向」の反映とすることも可能であろう。「おのづから」「みづから」などを別にすれば、『方丈記』や『徒然草』では一例のカラも見えていないが、鎌倉時代の説話集に目を移す時、カラがそこにわずかながらあるということだけでなく、そのカラに、次代以後ヨリとの交替の兆候が認められる点が注意されるのである。すなわち、『古本説話集』で「やをら山から下り来て」「上の層から、御顔は見え給へば」などと、『宇治拾遺物語』では「左京の大夫の主の許から、荒巻とりにおこせたらば」「「……その遣戸から顔をさし出給へ……」……遣戸から顔をさし出でたりければ」などとあるが、これらに該当する『今昔物語集』の説話においては、例えば「牛漸ク山ヨリ下来テ」「「……其遣戸ヨリ顔ヲ差出給へ……」……遣戸ヨリ顔ヲ差出タレバ」のように、いずれもヨリになっているのであった。恐らくは南北朝の頃を境として、この交替が顕著になったのであろう。室町時代末期では、カラは「話しことばに使はれる。ヨリは話しことばと共に書きことばにも使はれる」(『大文典』)と説く状態になっていた。しかし、ヨリは書きことばに限定されたわけではないから、ヨリの勢力下にある『平家物語』を和げるに際して「梶原は遙かの下より打ち上ぐる……向ひの岸から仁科、高梨などさしとり、ひきつめ、さんざんに射るに……馬ば川の中より流いて、弓杖ついて下り立つに」に見られるヨリの残存(原文はすべてヨリ)も何ら異とするものではないが、もとより「これこそ京から流された俊寛よ」「なう熊谷殿か？　いつからぞと問へば、熊谷は宵からと答へた」のような、ヨリのカラによる置換が著しい。それだけでなく、原文「夜明テ後、……頸ヲ切懸テ、木曾宣ケルハ」を「夜明けてから、また三十人余りの首を切りかけてから、木曾殿が言はれたは」とするように、「―テ後」を「―テカラ」とした、要するに、原文にヨリのない個所にもカラの使われることが少くないのである。勿論「―テヨリ」という形式は前代よりあり、『古本説話集』にも「これを見てより後」とあるから、この形式内での置換に過ぎないけれ

ども、かれこれカラの勢いを知ることが出来るであろう。
カラの優位を見る時、「書きことばにも使はれる」ヨリは、話しことばで独自の存在を主張する性質を具備するようになってゆくわけである。すなわち、カラ・ヨリだけのことでなく、「忠度はどこから引き返されたか」「敵四方を囲みまらしたれば、いづくよりもれさせられうか」のように、上の語も、カラ・ヨリに支配されて、両者の差を助長させるのである。したがって、天草版での、ヨリ・カラ交替を強調するあまり、ヨリの残存を単に偶然的、消極的なものとして処理するのは問題であって、ヨリに積極的な背景の存在も当然考えておかねばならないであろう。話しことば・書きことばという一往の文体上の差を利用して、ヨリに、「荘重」とでも言うべき表現効果を期待したことも考えられるのである。もっとも、右に引いたように、また、「宰相京より人を下いて」「京からお使が立って」など、差異が感じられない場合もあるが、一方では、

義経出会うて見参あって、いかに一昨日から上られたと聞くに、今までかうと申されぬぞ？ また頼朝からお文などはないかと尋ねられたれば、昌尊そのお事でござる。頼朝よりはさしたる事もござらねば、御状は進ぜられぬ。……道からいたはる事がござって、とかうして参りついてはござれども、まだ快気つかまつらぬによって、やがても参らなんだと、申せば

において、両者が使い分けられていると覚しき例もある。義経には「頼朝から」と言わせ、昌尊のことばでは、「道ヨリ」をカラに替える一方「頼朝より」とする。もっとも「上一人から下万民に至るまで」「鳥羽の院から下された小枝といふ笛」があり、上の語に必ずしも規制されないようである。この間の事情は、主格的用法、ロドリゲスの、「ある動詞は助辞ヨリ、又は、カラのつく主格を支配する。その助辞は動作者への尊敬又は動作者との関係を示す」と言った場合でも同様であり、あらかじめ客観的条件を括り出すことが出来ないけれども、場面によって、または人に関わって、ヨリは微妙に機能したようである。このようなヨリの表現性は『捷解新語』の改訂の過程でも窺われる。

「私島から来る時に」を「私の島より参る時に」と、「こちから内々お礼を申そうと思うところに」を「此の方よりお礼お喜びを申ませうと存じ居ますするところに」とするように、カラがヨリに置き替えられることが多く、ヨリは文体整備の一要素として関与したのである。すなわち、話しことばにおけるヨリは、カラに凌駕された時点以後、表現価値を示すものとして用いられることが多くなったのであろう。これは現代語においてもまず見られる用法と言ってよい。逆に言えば、ヨリは、カラに冒されることのない独自の用法、「名詞か動詞かの後に置かれて、以外にはといふ意を表し、その後に否定動詞が続くのが普通である」(『大文典』)、「唯泣くより外の事はなかった」(天草版『平家物語』)という場合や、比較の標準・基準を示す「我より下の者に崇敬せられうよりも、上たる人に諫めらるることを喜うで交りをなせ」(天草版『伊曾保物語』)のような場合を除いて、話しことばではカラにその席を譲り、「比較の助辞」(『日葡辞書』補遺)に局限されているのである。

二 接続助詞

1 ガ

接続助詞ガは主格助詞ガから派生発達したものであり、その確立は院政期の頃である。この発展過程を追った石垣謙二[13]によれば、述格を中核として構成される表現形式において、平安時代「程なく罷りぬべきなめりと思ふが、悲しく侍る也」(『竹取物語』)のように主格助詞ガが活用語連体形を承け得るようになった時点にガの接続助詞たるべき運命が約束されたのであった。この、石垣のいわゆる主格形式第一類は、「女のまだ世経ずとおぼえたるが、人の御もとに忍びてもの聞えて」(『伊勢物語』)のような、ガの承ける名詞句の内部において用言(おぼゆ)は主体(女)を装定する主

格形式第二類に展開するが、第一類の名詞句全体が一体として下に懸って行くのに対して、倒置された修飾関係とも見得る第二類の名詞句では直接下に懸って行くのは主体だけであり、名詞句の主体と全体の主体とは、第一類・第二類とも同一であるものの、ガの上下の結合する緊密度は弛緩したと言える。さらに主格形式第三類の例「同じ中納言、かの殿の寝殿の前にすこし遠くたてりける桜を、ちかくほり植へたまひけるが、枯れざまにみえければ」(『大和物語』)で、「ちかくほり植へたまひける」が体言(桜)を装定する関係にあることは、第二類と同じであるが、名詞句の内部で、その体言は客体であって、主体は別に「同じ中納言」とあり、さらに、名詞句の主体と全体の主体(桜)とは、第二類と異なって全体から見れば統一を欠いているので、ガの上下の緊密度が一層弱化したわけである。このように、連体形を承けた主格助詞ガの上下、つまり主部の名詞句と述部とが互いに独立しようとする気運にあるものの、接続助詞として認めなければならない確実な例は、平安時代にはいまだ見られない。

院政期になって、「落入ケル時、巳ノ時許ナリケルガ、日モ漸ク暮ヌ」(『今昔物語集』)のように、ガの下の部分、すなわち後件にも主体を示す語(日)が配せられて、後件は形式上一文として独立し、ガを接続助詞と考えざるを得ない例が出始める。しかし、この例で、後件は多分に述部的であり、後件の主体も述部の一部分を提示した、いわば提示語とも見られて、主格形式に最も近い右の形式を、石垣は接続形式第一類と呼んだ。さらに、「男子二人有ケルガ、其ノ父失ニケレバ、其ノ二人ノ子共恋ヒ悲ブ事、年ヲ経レドモ忘ル事无カリケリ」や「数ノ狗ノ中ニ殊ニ勝レテ賢カリケル狗ヲ年来飼付テ有ケルガ、夜打深更ル程ニ、異狗共ハ皆臥タルニ、此ノ狗一ツ俄ニ起走テ、此ノ主ノ木ノ空ニ寄臥シテ有ル方ニ向テ、愕タ、シク吠ケレバ」(『今昔物語集』)を示し、先の主格形式に対応した接続形式、前者の例のような、前件の主体と後件の主体とが同一のものを接続形式第二類、後者のような、前件の客体と後件の主体とが同一のものを接続形式第三類とした。『今昔物語集』ではこの三類に止まるけれども、鎌倉時代に入って接続助詞ガはさらに発展し、前件の主体と後件の客体とが同一である接続形式第四類、前後件の間に何等形式上の連関がなく、両件

は互いに対等で、後件は前件に対して極めて唐突に現われる第五類、前後件の間に逆戻的な意味が見られる第六類、に纏められる、今日見られるガの用法が出揃ったのである。石垣は、第四類の例として「其後又頼家ガ子ノ、葉上上人ガモトニ法師ニ成テ有ケル、十四ニナリケルガ、義盛ガ方ニ打モラサレタル者ノアツマリテ、一心ニテ此禅師ヲ取テ打出ントシケル」、第五類の例として「信頼ハ中納言右衛門督マデナサレテアリケルガ、コノ信西ハマタ我子ドモ俊憲大弁宰相・貞憲右中弁・成憲近衛司ナドニナシテアリケリ」を、それぞれ『愚管抄』から示した。第六類の例としては、『法華百座聞書抄』の左のガが早いものであろう。

其後二人イデキタリテ、我ガ身ヨリ光ヲ放チテ、互ヒニ照シテ、楽ヲウル事、天ニ同ジク、命チ長キ事、无量歳ナリキ。サ候シガ、ヤウ〳〵命チツヾマリテ、或ハ八万才ニナリ、或ハ四万才ナムドニナリシ時、モノナムド食フコトヲシハジメシニ、身ノ光ノ皆失セテ、暗キヤミニ衆生ノ惑ヒ候ケム

接続助詞ガの成立・展開から察知し得るとおり、その機能は非条件的接続であって、前後件間に形式上の連関があった初期の段階ではもとより、異なった事実の共存たる第五類でも、その列叙という本質には変化がない。そして、第六類の「逆戻」、ロドリゲスも「話しことばに於いても書きことばに於いても……助詞ガ、及び、ヲが、ドモの代りに盛んに使はれてゐる」と述べるように、見方によっては、ガに逆態接続を認めることが可能な場合もあるけれども、所詮共存の極に過ぎないのである。

ガの非条件的(列叙)接続性を端的に示す例として、原典において独立していた二文が、天草版『平家物語』で、ガによって続けられた事例を挙げてよいであろう。

夜討ちにようござらうと存ずるが、土肥殿は何と(夜討ニヨカラントコソ覚候へ。是イカニ、土肥殿)

弓矢取りの討死することは世の常ぢゃが、重衡は今度生け捕りにせられていかばかりのことを思ふらう(弓矢取ノ、討死スル事ハ尋常也。重衡ハ、今度、虜ニセラレテ、イカバカリノ事思ラン)

二文の接合は、ガによってのみなされるわけでなく、ヲ・ニ・バ・ニヨッテ・トコロデ・ドモなど接続助詞であれば、仮定条件を表わすものを除き一往参与し得るわけであろうし、事実例があるが、ガが目立つのである。すでに鎌倉時代に第五類の出現を見ている以上、原典において「是ハ、薩摩守忠度ト申者ニテ候ガ、今一度、見参ニ入、申ベキ事候フテ、道ヨリ帰上テ候也」のような、後件に対して単に前提を形成するに止まる例が散見するのは当然であって、それが、天草版で、傍点を付した、

その所に一来法師という十七になる法師があったが、浄妙に力をつけうとて、続いて戦うたが、橋の行桁はせばし、通らうやうはなし、浄妙が甲の手先きに手をおいて、悪しう候浄妙の坊と言うて、肩をゆらりっと越えて戦うたが、一来法師はやがてそこで死んだ

のように、現象的に増幅したのである。この種のガに共通するのは、言語表現における断絶性の忌避と言うべき意識であり、論理性に逆行するものと言ってよい。そして「ドモの代りに盛んに使はれてゐる」ガが逆態接続を表わすことは事実であろうが、逆接条件のドモほどの論理性はガになく、ドモを直ちに「尊敬すべき人の前で単純動詞を活用させて使ふことは傲慢であり無礼」(『大文典』)のような位置に据えないまでも、ドモに対してガによる、朧化された、言わば情意的ないし婉曲表現が好まれたのであろう。したがって、一方の極を「逆態接続」とするガの可動範囲は広く、『捷解新語』の、

正官を珍しう見まるせうかと思うたが、気相気で出でんと申す程に、殊の外残り多う御座る

正官は……何時頃渡って、御雑談仕ると思いまるしたが、好いことは多魔と申すが、真にこれで御座る

も、対訳朝鮮語によれば、逆態接続として把握されていないのである。

接続助詞ガが主格助詞ガを起点として発展したわけであるが、連体形を承ける主格助詞ガが主格形式第一類においてのみ残ったことは言うまでもない。右の「好いことは多魔と申すが」は対訳朝鮮語でも主格助詞として処理されて

いる。主格形式第二類・第三類から接続形式へ、接続助詞ガの成立展開と共に、連体形を承ける主格助詞ガが動作作用の表現に続く場合は接続助詞に傾いて行き、主格助詞ガは「あの丹波少将が事を、宰相のあながちに歎申候が不便候」(『平家物語』)、「友を見てその人を知るがよいぞ」(天草版『金句集』)のように、―ガ～デアルといった狭い範囲での判断形式内にとどまって、主格助詞・接続助詞は分離してゆくことになる。そして、江戸時代になると、連体形に準体助詞ノを添えた「此はれが引たのがいやじや」(『傾城花筏』)の形式が行われれば、両者は完全に別れることになるはずだが、一方ではなお「承引せぬがにくい」(『入鹿大臣』)、「日が暮れたが目に見えぬか」(『鑓の権三重帷子』)や「盃でもお出しなさるがよう御座りませう」(『改修捷解新語』)がある。しかし、これらは、恐らく古めかしい、型にはまった表現形式として、その座標を維持していたのであろう。

2　バ

前代において、バが、動詞および動詞型活用助動詞の未然形に接続して順接の仮定条件を表わし、また活用語の已然形に接続して順接の確(既)定条件を表わしたことは改めて言うまでもない。しかし、近代語における仮定条件表現は、右の確(既)定条件表現の形式をもってしており、バに関わる表現についても、院政・鎌倉時代から江戸時代前期にかけては、過渡期にあたるのである。この過程を追ったのが、阪倉篤義[14]である。もとより表現法、したがって発想法を広く問題にしなければならないけれども、本項では、助詞バを中心に眺めるに止めたい。

順接の条件表現、すなわち、仮定条件または確定条件の表現として一括された形式の内部を、いくつかの種類に分けることが行われたが、阪倉は、バによって結合された二つの事態の間の、話し手(書き手)による因果性認定の強弱に基づいて、弱から強へ、偶然確(仮)定・必然確(仮)定・恒常確(仮)定の三つに分類した。「恒常」を名に負う場合、二つの事態の間に普遍的な因果性の存在を認めたものである。恒常仮定表現が成り立つためには、当然すでに存在し

た事態の累積によって得られた、一般的な因果性に対する認識が前提となっていなければならないが、この点において、恒常仮定・恒常確定の表現は相重なるべき必然性を孕んでいたのである。「若シ天ニ有ラバ、願クハ翼ヲ並タル鳥ト成ラム」(『今昔物語集』)のように、本来仮定条件表現と呼応する副詞モシが既定条件形式に関わった現象、

諸ノ国ノ比丘有テ、此ノ国ノ境ニ入ル者、若シ小乗ヲ学スレバ即チ令去メテ、更ニ国ニ不留メズ

若シ道ニ迷フ事有レバ、不知ヌ童自然ラ出来テ道ヲ教フ。若シ水无キ所有レバ、不知ヌ女自然ラ出来テ水ヲ与フ

(いずれも『今昔物語集』)

は、恒常仮定表現と恒常確定表現との交錯にほかならない。つまり本来恒常確定条件として表現されるべきものが、モシによって仮定条件の形で設定されたのである。モシは和文・訓読文ともに見られる副詞であるが、訓読文における用法は陳述副詞のそれが多く、恐らくはその定式化したモシの支えによって、仮定条件成立のための前提、恒常確定の表現形式がそのまま、仮定条件に用いられたと言ってもよかろう。已然形を承けたバが仮定条件を表わすためには、モシのような要素が不可欠であったにしても、近代語の仮定条件表現形式の萌芽を早くも見出すことが出来るのである。

モシ〜已然形+バは、『今昔物語集』で恒常仮定表現の段階にとどまっており、「若、せばき地に居れば、近く炎上ある時、その災を逃るゝ事なし。若、辺地にあれば、往反わづらひ多く、盗賊の難はなはだし」「若、うらゝかなれば、峰によぢのぼりて、はるかにふるさとの空をのぞみ……羽束師を見る」(『方丈記』)、「もしこれを見終りぬれば、欲の心すべて止み」(『閑居友』)、「外相もし背かざれば、内証必ず熟す」(『徒然草』)など、鎌倉時代でも多くはその枠を出ないようであるが、一方では、やや一般性に欠ける表現にも、モシの呼応する場合が見られる。

若、余興あれば、しば〳〵松のひゞきに秋風楽をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる(『方丈記』)

をのづから平家の事あしざまに申者あれば、一人聞き出さぬほどこそありけれ、余党に触廻して其家に乱入し、

資財雑具を追捕し、其奴を搦とつて、六波羅へゐてまいる（『平家物語』）

室町時代でも趨勢として同様なのであるが、『平家物語』の「頼政・光基など申源氏どもにあざむかれて候はんは、誠に一門の恥辱でも候べし」という仮定表現を、「もし頼政ぢゃは、光基などと申す源氏どもにあざむかれたればこそまことに一門の恥辱でもござらうずれ」と訳したことは、モシ〜已然形十バが『今昔物語集』以来の例と同じながら、原文になかったであろうコソが配せられて、むしろ「已然形十バ」の方に力点が移り、モシの支えなしに「已然形十バ」だけで仮定条件表現を担い得る方向に傾いたと見られる意味でも注意されてよい。これを別の面から見れば、陳述副詞を欠く、已然形による仮定条件表現の文献に現われる例が乏しいということであり、陳述副詞の見られない場合は、「其れを厭とこそ思し召せば、戻いて改めて入れさしらるか」（『捷解新語』）のように、何らかの限定が必要であったと思われる。ロドリゲスが「句の中で助辞サヘ、ダニ、ダニモ、ダモ、スラがその後に動詞をとったものは、葡語の条件法の言ひ方に相当する」と述べたのも——なお、この「条件法」は「条件的接続法」のことであり、仮定の順接の謂である——、限定の一種であろう。そして、原文の「六波羅殿の禿と言ひてしかば、道を過ぐる馬・車もよぎてぞ通りける」のような確定表現も、「清盛の召し使はるる禿とさへ言へば」のようにサヘを伴って、仮定表現に近付いて行った。

江戸時代になれば、「それが腹が立てば死なしやれ」（『一心二河白道』）、「わし一人死ぬれば済む」（『生玉心中』）のように、「已然形十バ」の形で仮定条件を表わす例がようやく増すものの、室町時代末期の仮定条件表現は、ア（上）グルについて言えば、アゲバ・アグルナラバ・アグルニオイテハやアゲタラバなどが中心であった（アルバレス『ラテン文典』、ロドリゲス『大文典』『小文典』）。この内、アゲバ・アゲタラバの型はすでに前代にあった。延慶本『平家物語』に見えていた（三〇七頁）ニオイテハは恐らく訓読文の格助詞に由来するものであろうが、室町時代末期では「もしまた飲み損ずるにおいては、一家の財宝をことごとく賄賂に進ぜうず」（天草版『伊曾保物語』）のように見られるものの、話しこと

ばでいかなる位置を占めていたのであろうか。ニオイテハは、「未然形＋バ」と共に口語・文語にわたって用いられたようであり、「御出成さるるにおいては、辱かるべく候」(『改修捷解新語』)のように用途が限られてゆくことから逆視すれば、その使用に、文語的な荘重性が付与されていたのであろう。原文の「勅撰ノ事ハ」を「もし撰集の事がござるにおいては」と仕立てた事例(『平家物語』)もあったのである。また、アグルナラバは、「我を忘れぬものならば」「捨つとならば」(『閑居友』)のようにモノ・トなどで纏められた連体形をナリが直接承けた形「助からむと思ひしたうならば」(日蓮消息『髙橋入道殿御返事』)に由来する。ニオイテハ・ナラバとも、阪倉の述べるように「用言によって叙述される事態を、……ただ一つの事がらとしてとりまとめて、その存在を設定するものであって、まさに恒常仮定表現にふさわしいものであった」。とすれば、「未然形＋バ」の形は依然として使われていたが、むしろナラバ・タラバが室町時代末期の仮定条件表現の双璧であるのも当然であり、それは、原文の「馬ノ頭沈マバ」「下リ候ハヾ」を「沈むならば」「下りまらしたらば」と置き替えた事実によっても推測されよう。そして、ナラバ・タラバが一つの助詞のように使われて、バが落ちた「さそふならさヽひ」(虎明本狂言『節分』)、「いとおしいといふたら、叶はふず事か」(『閑吟集』)もあり、江戸時代に入れば、もはやナラ・タラの形は珍しくない。

ところで、確定条件表現に、前代以来の「已然形＋バ」以外に多くの形式が生まれていた。そこで特徴的なことは、ホド・アイダ、トコロ・サカイなどの名詞を中核とした「接続助詞」の存在であり、ロドリゲスも確定の順接に該当する「接続法」の項において「直接法に接続してしばしば接続法の代りをなす助辞が多数ある」と記している。これらは本来「実名詞」であり、時間的・空間的な限界を設けて、場面を作った点で共通する。したがって、その当初の段階ではおおむね中性的な列叙接続を旨とする。前代からのタメ・ユエを一方の極として、この種の名詞を軸として二つの事態を結ぶ傾向は顕著である。ニヨリ(ニヨッテ)をも含めて、すべてが訓読文に由来するとは直ちに言えないけれども、これらの、新しい、少くとも当代に発達した「接続助詞」は、もっぱらバが果していた機能をそれぞれ分

担してゆくことになり、これを表現の分析化ないし論理化という面から把握出来るであろう。

前代からのホドニは、鎌倉時代でもなお「明くる年は立ち直るべきかと思ふほどに、あまりさへ疫癘うちそひて、まさゝまに、あとかたなし」(『方丈記』)のように、すべてがすべて順態接続の関係を示さないが、室町時代末期には、「動詞の後に置かれたホドニは理由を示し、ニヨッテと同意である」(『大文典』)という状態になっており、江戸時代に入っても「年寄りましたさかいに、また参りますも大儀ぢやほどに、頼みます」(『鹿の巻筆』)のように使われている。

アイダは、峯岸明[15]によれば、前代、純漢文ならぬ変体漢文において成立した、副詞句を構成する形式体言的用法に由来するが、『今昔物語集』では、接続詞「然ル間」「而ル間」と共に「相如、年来、文君ニ心ヲ係タル間、カク会ヌレバ、喜ブ心无限クシテ」のような理由を示す例が見られる。鎌倉時代になれば、「今夜闇打にせられ給べき由承候あひだ、其ならむ様を見むとて、かくて候」「祇王がなにと思ふやらん、余に申すゝむる間、加様に見参しつ」(『平家物語』)、「敵おほく法勝寺に籠よし聞えける間、をし囲みて探り求るに」(『保元物語』)など多く用いられたけれども、室町時代に入ると、書きことば(三〇二頁)、それも「マコトニ本意ニアラザルアヒダ、暫時トオモヒテ藤嶋辺ヘマヅ上洛セシムルトコロニ、多屋ノ面々帰住スベキヨシ、シキリニマウサル、アヒダ、帰坊セシメヲハリヌ」(蓮如『御文』)、「斯様の事わ、武士の態にて候あいだ、珍しからず候」(『伊路波』)のような書簡文に局限されて来たようであり、『平家物語』の、先の行も、天草版で「伝へ聞いてござるほどに」「申しすすむるによって」とするのであった。

トコロの成立もアイダと事情を同じくする。『今昔物語集』に「碁ヲ打ツヲ役ニテ年月ヲ送リ給フト聞ク所ニ、善ク所行ヲ見奉レバ、証果ノ人ニコソ坐メル」と見えるが、ほぼ同文の『宇治拾遺物語』の話では「囲碁の外、他事なしと承るに」とあって、初期の段階を示すと言ってよい。アイダと交替するかのように、トコロは室町時代に発達し、アイダと同じく単独ででも用いられ、ニ・デなどを伴った形は「接続法として盛に用ゐられ、甚だ上品である」(『大文典』)とされた。ロドリゲスは「トコロデはホドニと同じく理由を示す。……往々文又は句の初にトコロデだけ用ゐら

れたものは、かくして、これこれなのでといふ意を示す」と述べるが、必ずしも一概には言えない。すなわち、「引き上げてみれば、魚は稀で、石どもであったところで、「さても無益の辛労かな」と皆悲しむところに」(天草版『伊曾保物語』)や虎明本狂言「身共もむつかしひ事じゃ所で、そらには覚ぬ」(『庖丁聟』)は理由を示すと言ってよいが、天草版『平家物語』では、原典の二文、例えば「……由ヲ申ス。大臣殿……」を「……と、申したところで、宗盛……」のように接合した部分にほとんど使われ、『伊曾保物語』でも「……と答へたところで、女房このことを聞いて……」のように用いられることが多いからである。そして、そのことは、トコロ(ニ)に関わる書簡文の例「是より申べく候ところに、御使真に真に悦び入り候」(『伊路波』)、「夜前天気悪しう御座候間、気遣申し候ところ、思いの外、今朝の晴天、大慶に存じ候」(『捷解新語』)で、より顕著である。なお、江戸時代後期になれば、もっぱらタを承け、しかもガをも付けて、タ—トコロ(ガ・デ)の形式が中心になる。

トコロに比べるとサカイの条件接続性は高い。恐らくはホド・トコロの、そして、独立用法およびニ・デをも付けた形式が平行している点からすれば、後者の類義語として代替されたのがサカイであったと思われる。ロドリゲスは、アゲタ・アゲウズルに続くものとしてジセツ(時節)・ジブン(時分)などと共にサカイニ、またアゲマイニと同様の表現としてアゲマイサカイニを掲げる(『大文典』)が、イエズス会関係の口語文献にサカイの用例は見えない。「其次ニ中有一峰ト我名ヲ出トスルサカイニ、破庵ノハタト打レタホドニ」(『蕉窓夜話』)が古く、コリャード『懺悔録』に「さし延ぶることも得いで仕ったさかいにあまり気に懸りまらせぬ」などと出る。しかし、江戸時代前期には、ホドニと並ぶ例(三二一頁)もあり、広く使われた跡は、亀井孝に[16]よって示されている。サカイにおけるニ・デ二形では、トコロの場合と同じく前者が古く、後者はより俗的な感じを持っていたのであろう、「そのことを、さうしたさかいにと云べきを、さかいでといふは如何」(『片言』)と安原貞室も言及した。サカイ(ニ)は現在でも近畿方言に見られ、その状態は「畿内近国の助語に○さかひと云詞有。関東にて○からといふ詞にあたる也」(『物類称呼』)と指摘されるように中期に

はもはや顕著であった。だから、『浮世風呂』に、サカイ・カラの対立を題材にした一齣もあったのだが、初期の東国系の文献にも「二儀ト分ル、サカイ陰陽借タレドモ」(『人天眼目抄』)、「数鑓はおのがまゝに鎗をふりくり廻すさかひで歴々の御侍衆と替事はないもんだ程に」(『雑兵物語』)などと見られるとおり、「畿内近国」に限った助語ではなく、広い範囲で使われていたのである。

雅馴な、前代の言い方を継ぐバ・ホドニに対して、「我レ、毛ノ色ヲ恐ル、ニ依テ、年来深キ山ニ隠レタリ」(『今昔物語集』)、「コノ経クヤウシタマフニヨリ、兜卒天ニナムムマレヌル」(『法華百座聞書抄』)に見られるような、ニヨリ・ニヨッテに依る直截的な表現が多用されて来ていて、条件表現形式の一角を占めるに至ったと見られる。後述する助詞を含めて、各種の形式が出て来ると、「已然形＋バ」の領域の縮小することは明らかである。しかし、室町時代の末期のバは、原典の二文「今日ハ日晩レヌ。勝負ハ決セジ」を「その日ははや暮れ方になれば、勝負は決すまじい」と接合する例もあり、「接続法」に関与していたことは言うまでもない。それは、原文のバによる表現のほとんどが天草版に踏襲されている事実によっても言えることであるが、一方、「さても千本まで作りたりける卒都婆なれば」「行歩ニ叶ガタク候ヘバ」を「……卒都婆ぢゃほどに」「……かなひがたうござるによって」としたような例も原文バの一割程度はある。またアイダが置き換えられる時(三二一頁)に、大半はニヨッテ・ホドニによってなされ、バはほとんど関わらないのを見ても、バはもはや消極的な生活力しか有していなかったと思われる。逆に、置換に見られるニヨッテはホドニを大きく凌駕していたのである。

ところで「已然形＋バ」の中では、確定(既定)条件である以上タリと結びついたタレバが多いのも自然であって、「見ずはたゞよからう、見たりやこそ物を思へたゞ」(『閑吟集』)、さらには「大事ト思フタラ、明宗参ラヌ」(『本福寺跡書』)のような転訛形を生み出し、タラは現代語に伝わる。タレバ以外の場合を『捷解新語』について見ると、一は、「聞きまるすれば」「顔を見れば」「つくづく思えば」といった前提条件を形成する場合であり、他は、「然うなれば」

「公儀の事なれば」「代官の役なれば」のようなナレバの形で必然確定条件を示す場合であって、前者のケースを除けば、バは動作作用を表わす語を承けていないのである。すなわち「已然形十バ」は江戸時代初期に局限された領域でしか生きていなかったことになる。これを逆に言えば、動詞已然形を承ける場合、無条件か否かは問題だ(三一九頁)が、仮定条件を表わす方向に傾いていることである。そして、ナレバも、『捷解新語』の場合、改訂版で、「然うなればば」を「然らば」、逆に「出船するならば」を「出船致すものなれば」としたように、また「町人は爰が心易い。侍なれば其のまゝ切腹するであろの」(『心中天の網島』)のように、仮定条件を表わし得る性格を孕んでいたのである。ここにおいて、文体的な問題はあるけれども、確定条件を表わしたバは、バで結ばれた二つの事態の間の因果性の最も弱い場合――その一つが「鏑は海へ入ければ、扇は空へぞあがりける」(『平家物語』)に見られる並列・対照という新しい用法であるが――を除いて、仮定条件を表わす段階に、江戸時代前期において到達していたと思われる。

このような趨勢の下、初めに述べた「動詞および動詞型活用助動詞」以外の活用語、すなわち、形容詞および形容詞型活用の助動詞、否定の助動詞ズについても、バを伴って仮定条件を表わす言い方が現われて来た。浜田敦[17]の説くとおり、それらの仮定条件表現は連用(副詞)形(―ク・ズ)に係助詞ハの接続した形式でもってなされていたが、これは、本来超時間的な意味を持つ、形容詞およびズを含めた形容詞的助動詞は、時間の観念を前提とした「未然」形を持たず、したがって、仮定・条件といった概念を配し得ないところに由来する。そして、江戸時代に入ってようやく―クバ・ズバが現われるまで一貫してバがこのような環境に立つことはない。すなわち、前代中期以降語頭以外にハ行音が存しなくなって以後―クワ・ズワであった。これは、日蓮の「いわずわ今生は事なくとも、後生は必無間地獄に堕べし」(『開目抄』)、世阿弥自筆能本の「高野エマイリタクワ」(『タヽツノサエモン』)や、ズワの融合形「人だにふらざ、なをよかるらう」(『閑吟集』)、虎明本狂言「錆びたらばとがざなるまひが」(『連歌毘沙門』)の存在によって明らかである。室町時代末期、ロドリゲスの示した、形容詞およびズの「条件的接続法(現在)」は、話しことば・書きこと

ば共通の—クワ・—クンバ、ズワ・ズンバの外に、話しことばだけの、—イ、ヌを承けるナラバ・ニオイテハだったので、……ワ以外に……ンバという形があったわけであり、事実コリャード『懺悔録』にズワ(zuva)と共に、「一度の為事をせずんば(xezumba)」「我と同心せずんば(xezunba)」と見える。『捷解新語』では、ズワよりも、ハングル〜m-pa の振られた「実にも堪えられずば」の形と zu-pa の「細かに申し含めずばならんから」の形との方が多く、後者はハングルどおりズバと読んでよかろうが、前者はズンバと読み得る蓋然性が高い。すなわち、ここでは、ズンバからズバとなっていたのである。

ところで、浜田によれば、……ンバはトキンバに類推して生じた形であった。トキニハの音便形トキンバは、名詞を中核とした接続助詞(三二〇頁)の一としてよいものであり、ロドリゲスも、アグルに、トキ(時)・トキハなどと共にトキンバを配していた。その形は、古いところでは『文鏡秘府論』の「行春令則和風生」に付されたオコナフトキムハ(保延四年点)であり、鎌倉・室町時代では「則」字の訓として常套的であったこと、『桂菴和尚家法倭点』の説くところである。そして、これに類推して撥音の入った—クンバ・ズンバもすでに鎌倉時代に見えているが、この背景に、接続助詞バの存在はもとより、「則」字による確定条件表現の、仮定条件表現に対しての影響が考えられるであろう。「漢籍訓」……ンバが話しことばにも現われて、……ワ・……ンバが文語・口語に並ぶが、口語にのみ見られる条件的接続法がある以上、特に「かの鶏さへないならば」(天草版『伊曾保物語』)の……ナラバは、動詞「未然形十バ」の形式に代わる一般的な仮定条件の表現形式であったので、……ンバは勿論、……ワにしても、古めかしい言い方になっていたと推察し得る。『あゆひ抄』のハの項で、形容詞連用形を承ける時「里には濁りて言ふ。歌には清みて詠むべし」と言い、承けたハは「ナラ・ナラバなど言ふ」と説くのは、やや後のことに属するものの、この間の様相を伝えていると思われるが、仮定表現におけるバに類推して、……ワ・……ンバが……バに収斂したのである。この段階で初めて、形容詞・否定のズは、仮定条件表現のバに関し動詞と対等の位置を占め、「未然」形を獲得したと言ってよい。

したがって、江戸時代以後に限って、連用形と同形の「未然形」をバが承け、仮定条件を表わすのである。『捷解新語』のズバはその初期の例であるが、国内文献で濁点を打った形が現われるのは寛文ごろからであり、「歌には清みて詠むべし」という一項を必要とするまでになった。その途上でも、……ワが残っていたことは「見舞に行かざなまい」(『軽口御前男』)、「さなかまちつと酒でも飲んで待たんせ」(『生玉心中』)から分るが、型にはまった表現になっていたのであろう。——クバ・ズバは、動詞「未然形十バ」による仮定条件表現と共に、一層文語的な色彩で使われて行った。……ナラ(バ)のほかに、「早速極めんえば、飛船の筈に合わん程に、肝入らしられ」(『捷解新語』)のような「已然形十バ」の形式が、動詞の場合と同様、仮定表現と等価値になろうとしていたからである。

3 テ

前代に比して、テを連用形に添える言い方が一般的になって、事態の確認、したがって論理的関係を明示する方向に進んで行く。この現象は、主格助詞ガの顕在化と対比すべき近代語の特徴と言ってよいであろう。この意味において、テそれ自身としてより、テを中軸とする表現に史的展開を認めねばならない。『平家物語』はすでに近代語の領域に踏み込んでいるが、それでも室町時代末期の天草版でテの添加が多いのである。

我こそ道が狭うなって、遁れがたい身なれば、今はかうなるとも、汝らは都の方へ上って、いかなる人にも宮仕ひし、身を助け、妻子をはごくみ、また身が後世をも弔ひなどせいかし

のテは原文になく、連用形のままの言い方も、テがいまだ分離性が高かったこと——ロドリゲスが書イテクタビレタ・書クニクタビレタの差を示すことでも想像出来る——からすれば、並列したままテを添えない言い方が、ナドとの関連で当を得た処置であったと思われる。このテの付いた言い方は、「極めて普通であって盛に用ゐられ、甚だ力強い」とし、他方、連用形のままに置かれた時は「甚だ上品」(『大文典』)とした。しかし、それも「一般的」ではあった。近

代語では、複合動詞を除けば、動詞連用形の動詞に直接することは稀であるが、当代は、それへの過渡期であったのである。

テは句を順次展開し、非条件的な接続を表わすが、ただハ・モを伴って仮定条件をなす(テハは順態、テモは逆態)。テハは前代に見られたが、室町時代「人を使ふに及んでは、器のままにす」(天草版『金句集』)のような普遍性を持ったのを除けば、テ(デ)ハで「条件法となる」『大文典』と言っても、「申してはようあるまい」「書かいでは何とせう」(『大文典』)、さらには「国が亡びいではかなはぬ」(『金句集』)のように、いずれも否定表現と関わり、現代語の―テハナラナイ(イケナイ)型の源流をなす。

テモが口語の領域で成立していても、トモに遮られて容易には文献に現われない。そして「是ほどうしろめたう思はれまいらせては、世にあても何にかはし候べき」(『平家物語』)とあっても、テ・モ(添加)と紛らわしいことも多い。しかし、トモが「縦入道非拠ヲ申行ムトモ」(延慶本『平家物語』)と助動詞ムを採るようになるのも、テモの影響があったのであろう。室町時代末期では、トモに対して、「七日七夜聞いてもあかぬぞよ」のテモはいまだ俗として受け取られていたと思われる。テモしか見えないコリャード『懺悔録』は極端だが、テモが徐々にトモを冒した。『捷解新語』でテモの方が多いが、トモを、文体的整備を施したはずの改訂版でテモに替えることが、トモの継承よりも多く、江戸時代になれば、テモの優位は動かない。そして、原文に対応しない新出の「思わしやれうとも」に、―ウトモの形でしか使われなくなる趨勢を見ることが出来る。トモの構成要素としてのトは前代からあるが、当代でも例に乏しく、室町時代ではトママの形で、「アゲウトママ、アゲマイトママイロワヌ」(『大文典』)といった慣用句的に使われ、江戸時代には「此御恩は死したりと忘れますまい」「どうあらうと読うで下され」(『丹波与作手綱帯』)と見えるが、後者のウと結びついた言い方が残り、―ウトモはこれに合流した形になる。

なお、テに否定の意味を加えた機能を持つデは、室町時代になるとイデという形で現われる。イは、デ、濁音音節

に前接していた鼻音的要素を表記したものであって、純粋なイではなく撥音と通ずる性格を持っていたのである。「月ノ出ヤライデ」(『塵芥』所引『河海抄』)、「寝もせひで、ねむかるらふ」(『閑吟集』)その他、おおむねイデと書かれるところを、『捷解新語』で「成りまるせいんで」「伸ばしまるせんで」の形で出るのは、鼻音的要素の捉え方の差であろう。このインデ・ンデは改訂版でイデになっているが、江戸時代以後鼻音的要素の衰滅した後も、イデの形のまま今日に伝わる。イデの成立後、デ・イデは文語・口語の差で用いられたことは容易に想像し得るが、これらと同様の表現は、文語でズ(シテ)、口語でズ(ニ)・ヌニなどによってもなされ、デが口語的な文体に用いられる際は「これらならではさらになかった」(天草版『平家物語』)のような、――ナラデハの慣用句としてしか出ない。

4 ドモ・ケレドモ

前代漢文訓読の世界で使用されたドモは、『今昔物語集』において、後半の、和文調の勝った巻でも、前代和文にもっぱら用いられたドを圧倒し、鎌倉時代、『古本説話集』ではいまだドの方が多いが『宇治拾遺物語』では逆転しており、いわゆる和漢混淆文以後もドモの優位は動かない。当代の和文系統の最たる女流文学でも、森野宗明によれば、初期の『建礼門院右京大夫集』などは前代の傾向を継承するものの、後の『弁内侍日記』『とはずがたり』あたりになるとドモの使用が勝り、時期的にやや遅れるが、ド・ドモ消長の現象を同じくする。ドは、「歌とか韻文調の成語を用ゐた書物とかでは、ドモの代りに、ドの使はれることが極めて多い」(『大文典』)と観察されたように、文語といってもいわゆる擬古文にその使用領域を局限されることになった。しかし、「擬古文」の一、『徒然草』でさえ、ド・ドモは相拮抗している実状なのである。さらにドモを要素としたケレドモが生れるが、その成立は室町時代末期以後のことに属す。

ロドリゲスは、仮定・確定の逆接のことを言った「日本語及び葡萄牙語に固有な別の接続法」(『大文典』)の未来の項

で、「アゲウケレドモ、又は、トモ、又は、トママ。これら三つの助辞の中一つを未来の第一の形に添へて作る」とし、さらにドモ・トイエドモと共にケレドモを並べ、マウスマイケレドモを示すので、あたかもケレドモを抽出し得るかのように見えるが、ケレドモはすべての活用語を承けたわけではなかった。ケレドモのケレについてにわかに決し難いが、形容詞を別にすれば、抄物でも、特定の、右に示した助動詞ウ・マイ(ジ)に限られており、「参るまじけれども」(『大文典』)「犬は捨てまじいけれども」(天草版『伊曾保物語』)、「家恩を申したけれども」(『大文典』所引『モルテ物語』)「斟酌申したいけれども」(『捷解新語』)を見合せて、形容詞活用型助動詞の已然形としておくのが穏当な線であろうか。江戸時代になると、上接語に関わる制約もなくなり、「思ふけれども」「思ひましたけれども」(『好色伝受』)のように、さらに「申し兼ねましたけれど」(『傾城金竜橋』)、「言ははんすけど」(『忠臣金短冊』)と崩れた形も、見える。以後、ケレドモはドモの領域を冒し、結局はとって替ることになる。『捷解新語』のガ・ヲの一部をも改訂版でケレドモとしているが、そのガの対訳朝鮮語はすべて逆態接続であり、初期のケレドモは、はっきりとした条件接続性を持っていたのである。

5　モ

「此ノ経ヲ読誦シ奉リニシモ……忘レテ書ク事无カリキ」(『今昔物語集』)のような逆態接続助詞モが定着するのも、院政・鎌倉時代であった。右は確定の例だが、仮定の「たとひ諸仏行道の境界と見現成あるも、あながちの愛処にあらず」(『正法眼蔵』)もあり、この現象の集積が「天爾乎波ノもヲ連体形ニ附ケ、反接ノどどもともノ場合ニ用キルヲ正格ト定ムベシ」(『現行普通文法改定案調査報告之一』)となった。仮定・確定の決定は、モが承け、また後行の助動詞が関与することは言うまでもないが、文脈に委ねられることも多い。ただ仮定の場合は、陳述副詞の先行が比較的多く、「分明ニ之ヲ区別スルコトヲ得」るのである。なお「助動詞ノべしまじ及形容詞ハ、連用形ニ附クモノハ将然ノ意ニ、

連体形に附クモノハ已然ノ意ニ用キルモノトス」の背景に「うきも猶昔のゆゑとおもはずは」(『新古今和歌集』)と「人ハイミジクタケクモ力ヲヨバヌ事ナリケリ」(『愚管抄』)などがある。形容詞について、仮定・確定の別が活用形の別に応ずるのは、形容詞の仮定条件表現は、連用形―クに接続したハ・モによって順態・逆態に分かたれるはずのものだったからであろう。

モの源流は未詳だが、接続助詞ヲ・強調モを考えてみたい。鎌倉時代にも「価も限らず買はんと申つるをも放ち給はざりつるほどに」(『古本説話集』)とある(『宇治拾遺物語』の同話も)。接続助詞ヲを逆接条件法に対応する情意表現とする立場があるが、訓読体に前代見られなかったことと考え合わせると首肯し得よう。ヲの強調形ヲモがドモに通ずること、右の行が『今昔物語集』の同源説話で「云ツレドモ」であることで推察できる。ところで、築島裕[18]は言う、

訓点で「も」を他の助詞の下に附して好み用ゐるのは、文中に於てその上の助詞(ど・だに・より)によつて表はされる所の格を特に明確に呈示することが、目的であつたのではなからうか

と。しかし、ヲモを訓読体に適応させる時、接続助詞ヲを用いない以上、ひとりモによって、その機能を代替させたのではあるまいか。とすれば、モの機能は確定逆態接続が本来的であり、仮定逆態は副次的であったと思われる。ドモ・モ、トモ・モの間にどれほどの差があったか、先の『正法眼蔵』の例はタトヒ〜トモを持つ文で挟まれているので、明らかには認め難い。

6 カラ

前代のカラニは、鎌倉時代「げに血なりけりとおもひて、「さらんからにけしうはあらじ……」」(『古今著聞集』)、「末代ならむがらに、いかんが当山に瑕をばつくべき」(『平家物語』)のように逆態接続を表わすまでに発展する一方、「この御百首に多分古風のみえ侍から、かやうに申せば又御退屈や候はんずらめなれども、しばしはかまへてあそばすまじ

きにて候」(『毎月抄』)、「掘らせられ候けるから、こぞ下され候し松共枯れて」(『看聞日記』紙背文書)などニを落した形が見え、さらにハの付いた「和歌ハヨクヨマムナムドスルカラハ、無下ニマサナキ也」(『却癈忘記』)、「物心ぼそきからは、すゞろに御なみだこぼるべし」(『有明の別』)などもある。これらのカラの当代的意味は「惜しむから恋しき物を」(『古今和歌集』)に対する「からハゆヘニ也」(『古今私秘聞』)によって知ることが出来る。接続助詞カラは、格助詞カラ同様、俗語の世界に命脈を保っていたのであろう。それが室町時代にふたたび登場するのだが、格助詞カラの動向と無関係でない。格助詞カラが連体形を承けた時、それを起点として後件があるから、連用修飾語を示す用法から連用修飾語へ、すなわち格助詞が接続助詞に転ずるのは自然であろう。「項処ガ病モ蹴鞠カラ起タト云タラバ、ヨサウナゾ。蹴鞠ト逐イフミアルイタカラ起ト云バ、ベシテモナイゾ」(『史記桃源抄』)は、その接点に立つ例と言ってよい。したがって、当代のカラには、カラニの後裔と当代格助詞から転じたのと、二つのカラが共存したと思われる。ただし、ロドリゲスは「御存じないからさやうに仰せらるる」「かやうに色を見するからは隠すこと要らぬ」を例示するものの、テカラの外、カラの「接続法」の用法について述べない。江戸時代に入って以後の、カラの伸長は言うまでもないが、その過程は一『捷解新語』で看取出来よう。すなわち同本はもとより接続助詞カラを持つが、改訂に際して、ホドニの一部をカラに置き換えて、カラが従前のいかなる接続助詞から冒して行ったか、推察し得るのである。

7　ノデ・ノニ

ノデの前段階に「物を申すでくたびれた」(『大文典』)がある。このデは、ロドリゲスによればニ・ヨリなどと共に「奪格の助辞」であったが、この、連体形に直接していたデが、準体助詞ノを介して接続助詞に発展したのである。ノデは「是も少雲くさいのでこまつた」(『軽口御前男』)のように元禄頃になって現われる。しかし、江戸時代前期ではいまだ格助詞の段階に止っていたのであろう、ノデの出現以後もデ・ノデの共存することも少くない。『古今集遠鏡』

でも「道ガアルデ春ハカヘルデアラウ」とする一方、「うすくや人のならむと思へば」を「思フノデ」と対訳し、ようやく中期以後接続助詞化への胎動が感ぜられる。後期でも用例は多くなく、その発達は明治時代以後のことに属すると思われるが、この背景には、カラ、さらにはサカイ・トコロなどの干渉があったのかも知れない。

ノニの方は、連体形を承けた接続助詞ニの上に準体助詞ノが入ったのであるが、「俺が是程いふのに、心にしたがふてたもらん」(『好色伝受』)などノデとほぼ同時期に現われるものの、前期には用例が乏しい。ニが順接・逆接を問わず、言わば中性的な接続機能を持つのに対して、ノニが逆態接続関係を表現するのは明らかであるが、倒置法と共に、後件が現われない形で文の終止に立つ時に特に顕著であるように、ノニは情意性が強い。このためにか、ノデよりも早くノニが、後期から多用されるが、その段階でもニ・ノニは共存していたのである。

8　ト

接続助詞トも、「暮るゝとひとしく参り給ひて」(『讃岐典侍日記』)、「寄ト均ク切岸ノ下ナル鹿垣一重引破テ」(『太平記』)における格助詞から発達したものと思われる。トの接続助詞としての例は「導師磬をうちきると、本覚ひとり法蔵坊といひけり」(『醒睡笑』)が早いけれども、この段階以前では、「何とやら来ると否や又気相気で」(『捷解新語』)、「でるとそのまゝ、くる〳〵と引まはされて」(虎明本狂言『飛越』)のように、「ひとしく」に類した副詞句が随伴していた。また、早い時期の接続助詞トの単独用法を見ても、二つの動作の継起という時間性を示すことが多い。すなわち、格助詞トの接続助詞化には同時性を示す要素が不可欠であったと思われる。室町時代の接続助詞トの例は、湯沢幸吉郎[19]が保留しつつも示した文明七年本『論語鈔』の「クルシムコトアルトコレヲクキカク(学)ヲスル」以外に報告されていないようである。それには、副詞形「ひとしく」と交替し、したがって結果的に接続助詞化を推進し得る表現の未成熟によるものであろう。「―とひとしく」と同じ表現は「昇ヤ遅キト虚空陰り塞ガリテ」(『今昔物語集』)であろうが、ヤはも

とより係助詞である。ヤの承ける動作に期待する属性とヤの下の形容詞とは対になるはずであり、それを否ヤで表わした「胎内をおるゝや否やに池の水際に立ち寄りて」(お伽草子『橋弁慶』)がある。ヤ否ヤは「書きことばに於ける荘重な質問」に「甚だ多く用ゐられる」(『大文典』)形式であった。―ヤ否ヤをニが承け副詞句を作る時、「否ヤニ」はもはや二者の内の否定形への問いを表わすものでなく、肯定形との等同性・同時性を示す、いわば情態副詞であり、「居直るや否やに座付を吹也」から「礼をするやいなや頭を上ぬれば」(『承応神事能評判』)へ、次に語尾ニを落した形式で、副詞形「ひとしく」と交替したのが―ト否ヤであろう。慣用句としての形式から副詞句「否ヤ」が離脱すると、接助詞ト・ヤが完全に独立することになる。恐らくは、ヤ否ヤという文語的形式があるためにトの独立に遅れて、ヤも「見るに有り、聞くに有り、作者感ずるや句と成る所は、則ち俳諧の誠也」(『三冊子』)と見える。ヤが、明治以後の文語文でも、本来の時間性の表現を主として維持しているのに対して、トは列叙から条件接続へと展開し、「此子は火を見ると寝たがる」(『傾城浅間嶽』)のような恒常確定表現や、さらには「声を立るとさしころす」(『娘親の敵討』)のように仮定表現にも用いられて、広い領域を覆うが、その伸長の時期は江戸時代も中期以後のことに属する。

9　シ

「子共では有まいし……何をそむき給ふぞ」(『新小町栄花車』)、「さぞ見たからうし、見せたし」(『夕霧阿波鳴渡』)のシも、江戸時代になって現われた。現代語では上接語の制約はないが、前期では「物作りのことなれば……田を植ゑては草を取る。穂が出れば刈りまする……なんぢゃし只居る間とてなく御無沙汰」(『五十年忌歌念仏』)のヂャはあるが、「そこ一軒では有るまいし遅いこともなうては」(『冥途の飛脚』)のように、おおむねマイ・ウを承けた。列叙接続が中心であるが、条件接続を示しもする。シは恐らく形容詞の終止形語尾に由来したものと思われる。形容詞終止形は室町時代に―(シ)イになっていたが、その後も元の終止形―シはしばしば使われ、終止法に立たない時は、「今日は日和も

好し、互にゆるりとして、此方も嬉しう御座る」(『捷解新語』)のように後行句に対する一種の条件を表わした。「御身達は大身人手は多し飼はよし、すはといふ時肝強く歩勝つはお身の馬」(『鑓の権三重帷子』)もその例だが、このような形容詞の用法に牽かれて、その原形が形容詞的活用を持つマイが、まずシと結び付いたのではないかと思われる。

10　ツツ

院政・鎌倉時代以後、ツツは文語化した。ロドリゲスは書きことばの助辞の一として ツツを取り上げ、「ツツが動詞状名詞の意を有する時には、少し宛行はれて行く動作の過程を意味する。随って次のやうに説明される。ミ(見)ツツはミテ、又は、ミナガラ、又は、ミテイテ、ミルニと同意である」(『大文典』)と説く。すなわち、ツツは口語のテ・ナガラなどに置き換えられる類の書きことばとなっていたのである。ツツは列叙の接続助詞であり、反覆・継続・並行などに分類し得る用法を持つ。ロドリゲスの説くのは、右の用法の内で、後二者に該当すると思われるが、反覆についで触れる所がない。反覆を表わす例として、「臥しては起き〳〵しつゝ」(『古本説話集』)があるが、動作の反覆を、動詞の重複によっても表わし得る以上、ツツの併用に、反覆の用法の衰退が窺われよう。またその用法の理解し難くなって行ったことは、「毎日ニ、此ノ扇ヲ取出テ見ツヽ、涙ヲ流シテ恋ヒ悲テ」のような『今昔物語集』のツツが流布本でテやツに誤られた事実が物語る。そして『手爾波大概抄』でもツツに程経之心(継続)・二事相并(並行)の二用法が示されているだけなのであり、しかも意味の解説は、それだけ古語化していたことにもなるであろう。『平家物語』のツツは「庭ノ青草露重ク、籬ニ倒レ懸リツツ、外方ノ小田ニ水越テ」のような、金田一春彦の言う「感傷的な美文調」の行に多く用いられた、テに置き換えられる「文章語的語法」に属するものであったから、天草版では「倒れ懸り」のように連用形や—テで訳するのである。ただツツの衰退は時代の推移の結果とばかりは言えない。前代の訓読文体にほとんど使用されなかったからである。

ここで、ツツに置き換えられるナガラについて便宜上述べておこう。ナガラが動作の並行を表わし得るようになって、列叙の接続助詞性を獲得するのも院政・鎌倉時代である。前代「喜びながら奉れる」(『源氏物語』)などツツと同じに見えるが、石垣謙二の指摘どおり、ナガラの承ける動詞は心理作用に関係するものであって、後行の動作の情態を述べる点でツツとの差は明らかであろう(すなわち「用言又は句に対してその意義を一層精密に示す為に之に冠して制限的の観念をあらはす」[20]から、ナガラは副助詞である)。しかし、「咲ヒ乍ラ手ヲ摺ケレバ」(『今昔物語集』)のような例が現われて来る。これはナガラの上下の動作が並行していること、『宇治拾遺物語』の同源説話の「笑ふ〳〵手をすりければ」に照しても推察でき、テと並んでナガラがツツの領域を冒してゆくことになる。ただし、もとよりナガラの承ける動詞が直ちに接続助詞性を規定するわけではない。ロドリゲスがナガラ(モ・ニ)について説く中心は「本来反戻の接続詞」という、前代以来の用法であり、「それに当る葡語の言ひ方」に──ナガラ・──テに比すべき表現も示されているものの、それらはナガラの主要な位置を占めていなかったのかも知れない。しかし「有王涙にむせびながら、うつぶいて」の原文が「むせびうつぶして」であるから、対等の関係を明示する機能を得ていたことは事実なのである。ナガラが、副助詞の機能と比肩し得る接続助詞のそれを示すのは、むしろ江戸時代も後期以降になってからではないかと思われる。

三　副助詞

1　ダニ・スラ・サへ

ダニ・スラは一事実を提示して他の類似的事実を類推させる機能を持つ点で共通するが、未定(ダニ)・既定(スラ)

と言う対象規定の差が存していた。前代を経て、院政・鎌倉時代以後ダニが既定事実を対象とすることが普通になった。また、前代一般に、ダニが和文体に、スラが訓読体にもっぱら用いられたことは、『宇治拾遺物語』にスラはなく、同一題材を処理しながら「我等ガ若キソラ冷マムガ為ニ来ルソラ猶苦シキニ」(『今昔物語集』)をダニとすることからも窺われる。前代末期からのソラは『今昔物語集』や延慶本『平家物語』でスラよりも優勢であり、スラに比して活きた俗語的な存在であったのであろうが、『今昔物語集』では(何)況ヤで始まる後文の前提に用いられる形が多く、また延慶本では主格しか承けない用法に限られており、それぞれに機能の弱化が認められよう。『今昔物語集』の訓読調の強い巻にも「我レ母ニダニ速ク行テ告ム」などダニがあり、これは本来的な用法と言ってよいが、同じ説話内に「虫ヲソラ不害ズ、況ヤ、人ヲ殺ス事ヲヤ」「一ノ虫ヲダニ不殺ズ、何況ヤ、人ヲヤ」が共存し、両者の近似性が知られる。和文調の勝った巻に到れば「神ヲダニ此ス」のような例が多くなり、ダニがスラを冒した跡は顕著である。そして、「清浄ノ身ニ在マス仏ソラ父子ノ間ハ他ノ御弟子等ニハ異也」は『打聞集』の同源説話でダニに替えられ、院政期ごろに両者の交替がほぼ完了したのであろう。ただしスラは以後も「かたわなるもある物をすら思になるべかりけるにや」(日蓮消息『上野殿母尼御前御返事』)のように、訓読調の文体では稀に見出される。なお「四方のけだものすらだにも」(『金槐和歌集』)はダニの強調形と言ってよい。

既存の事実に、他の事実を添加する意味を表わすサヘは、既存の事実が表現されていない時、それを暗示類推させる点で、ダニとの共通項があり、『金葉和歌集』の「音にだに袂をぬらす時雨かな」で始まる歌が『千載和歌集』ではサヘに替えてあることに、両者の近似性が現われている。さらに『今昔物語集』には「異銀サヘヲ加ヘテ」という、格助詞の続く用法がなお存したが、これが鎌倉時代になくなったことも、ダニとの混同を容易にしたであろう。サヘがダニを冒した「まさしき兄弟さへ、似たるはすくなし。まして、従兄弟に似たる物はなし」(『曾我物語』)のような例が増して来るが、それ以前に、まずダニの用法にも「今生でこそあらめ、後生でだに悪道へおもむかんずる事のかな

しさよ」(『平家物語』)と変化が起っていたのである。『日葡辞書』はダニに対しサエをあて、天草版『平家物語』で原文のダニをサエと替えることが多いけれども、「出さるるだにあるに、座敷をさへ下げらるることの恨しさよ」と原文どおりのこともあり、また「女房侍多かったれども、ものをさへとりしたためず、門をだにも押しもたてず」と一つだけを置き替えた事例もある。ロドリゲスは副詞としてサエ・スラ・ダニ・ダニモ・ダモなどについて述べるが、スラ以下は書きことばとして一括し、前代に始ったダニ・スラの張り合いは、室町時代末期サへによって治められたのである。それは、もとより口語の場合であり、書きことばの世界では「仏法ダニモアラバ、上下ヲ言ハズ問フベシ」(『蓮如上人御一代聞書』)など、必らずしも珍しくはない。

ダニの機能をサへが受け持てば、サヘ本来の「添加」が影響を蒙らざるを得ないのも当然であろう。すなわち「月さへにほふゆふぐれ」(『閑吟集』)のような例が稀になって来る。サへに対してマデガ・マデモと口語訳した『あゆひ抄』の先蹤を、原文の「我ヲコソ捨メ、又、様ヲサへ、替ヘケン事ノムザンサヨ」に対する「また様をまで変へたことの無慚さよ」に見出すことが出来る。先の原文どおりの「座敷をさへ」に対して、バレトはマデモと書き入れていたのである。

なお、右の語が一様に仮定条件表現に関与するのも類推という作用機能のゆえであろう。

2　バシ

古例に「釜はしも引きぬかれなば、いかにすべきぞ」(『更級日記』)が引かれることもあるが、ハ十シモと解し得よう。原由は係助詞ハの濁音化したバに強調のシであろう。すなわち、「これはしもと難つくまじきは」(『源氏物語』)などのハシモからモを分離したハシが、シの用法が固定し、鎌倉時代以降口語を基調とする文献から姿を消すに従って、一語化し、新形ハシの不安定さがハの濁音化を促したと解したい。バシの確例は、小林芳規[21]の報告による、一二五九(正元

元)年写、高山寺蔵『光言句義釈聴集記』の「此ノ脇足ハ(上声濁)シ(上声)ノヤウニテ」であり、差声の意味から成立過程も推察し得よう。「二三時ノヲコナヒバシヲムネトシテ、サテソノヒマ〳〵ニシツベクハ、学問ハスベキ也」「カマヘテアサイバシセデ、精進ノ行ハゲマセ給ベシ」(『却癈忘記』)など初期の例はほとんど名詞に直接しているが、「籠をばし出させ給候はば、とくとくきたり給へ」(日蓮消息『土籠御書』)、「もしこの理なんどにばし、ひきかけられ候ふやらん」(『歎異抄』)と用法も拡り、延慶本『平家物語』では、格助詞ニを上(「餓鬼道ニバシ」)下(「眷属バシニ」)いずれにも持つ例がある。バシが卓立強調であるから、文の次元で特定の制約があるはずもないが、疑問・禁止・命令などを表わす文に用いられる傾向があるのも自然ではある。以後、室町時代を通じて「殿バシ御クダリアルカ」(世阿弥自筆能本『柏崎』)、「聞カセントバシ思フベカラズ」(『本福寺跡書』)、「人バシ、アヤマチ、セリヤト問テ」(文明本『論語鈔』)のように広く用いられた。コリャードは「疑問の助詞」と限定するが、ロドリゲスは「或動詞の前に置かれ、時には疑問語を伴ひ時には伴はない。又ある場合には多分といふ意を表し、他の場合には単に品位を加へるだけである」と見、バシにある種の色彩が加わったことが知られる。『捷解新語』の「然うばし思わしらるな」「さては然うでばし御座るか」などに配せられた対訳朝鮮語も、梁柱東『麗謡箋注』によれば「副詞(又は動詞連用形としての副詞)末に添用されて、声調を流麗にし、意味を多少強調する」助詞であり、当代の微妙な陰影が窺えよう。江戸時代になっても、なお「けがばしし給ふか」(『鹿の巻筆』)など例は拾えるが、表現効果をもたらすものとして用いられ、一般の口語の世界ではもとより「武家社会」でも使われなくなったと思われる。

3　バカリ

ノミナラズなどの言い回しを別として、バカリがノミの領域を冒したのは前代のことであったが、程度の意は鎌倉時代以降「殿ホドノ大事ノ人ヲ」(『沙石集』)のホド(程)が受け持ち、バカリは「ただそれだけといふ意」(『大文典』)、限

定をもっぱら示すようになった。したがって「いかばかり」(『平家物語』)を「いかほど」に替えるのだが、数詞を承け新しく程度を表わす時はバカリの方がむしろ多いようである。『捷解新語』で両者は使い分けられているが、程度の表現に「かしらを結へば、十くらいも二十くらいも、美しう見ゆる」(虎清本狂言『鏡男』)のクライ(位)が、一方の限定の方に「大炊河ぎり」(『三河物語』)のキリ(切)、「我ガ力ノ及ブタケ、朝ハ、トク起キ」(文明本『論語鈔』)「不調法が有ても親だけで済ども」(『ひらかな盛衰記』)のタケ(丈)が、さらに「お前の名ほか出ませぬ」(『心中宵庚申』)の、否定と呼応するホカ(外)が、加わった。副助詞は意味性が強いだけに、消長が激しいのであろう。なおバカリから「髪の結ひやうばっかりで」(『鑓の権三重帷子』)のバッカリ、この転訛形のバッカシ・バカシが出た。また「これのみばかりあんじ申候」(太閤書簡)はバカリの強調形であろう。

四　係　助　詞

1　ナム・ゾ

室町時代末期に完成した、連体形の終止形同化は、近代語を特徴づける現象であったが、係助詞の動向ももとよりこれと無関係であり得なかった。ゾ・ナム・ヤ・カおよび疑問詞に呼応する係り結びは、文法の領域での、前代まで最も特徴的な事象の一つであったが、その呼応関係なしの、連体形による文の終止、いわゆる連体止めもすでに前代までに存していた。これは多くは会話文に見られたが、院政期になると、地の文にも頻繁に現われるようになる。『今昔物語集』で、地の文における連体止めに関与した語は、会話文のタリ・ツ・ケリを初め「守モ此ク崇ムル」「穴難堪キ」などの多様さに比して、「平致頼ト云兵有リケル」「御硯ノ筥極テ微妙カリケル」などケリがほとんどで

あって、他にごく稀れに「守屋ヲ罸ムト為ル」「心モ不得思ユル」のような「ニを省略した語法」とも解し得るものが見られる程度である。延慶本『平家物語』に到れば、ケリのほかに幾つかの動詞が見え、さらに室町時代末期、少くとも動詞または動詞型活用助動詞については、「直接法の現在の形は特定の助辞を伴って違った時にも代用されるので、色々な用法がある。……ニ又は、トコロニを添へて接続法に使ひ、……コト、又は、トを添へて不定法に使ふ」(『大文典』)という記述のように、「直接法の現在の形」とトコロ・コトに続く形、すなわち連体形とは一致していたのである。語形として終止・連体形が同一である四段活用・一段活用もアクセントを異にし、したがって両活用形は区別されていたようであるが、すべての文の終止を連体形をもってするようになれば、連体形と呼応する方の係り結びの独特の意味は失われるのである。その場合、強調表現に関わるゾ・ナム特にナムが、終止・連体形合一の波を正面から受けることになった。

前代では、ナムが係り結びに用いられた場合、ケリと結びついたナム〜ケルの形式が多く、『大和物語』『源氏物語』では九割を越え、当代の『今昔物語集』でも地の文では約九五%を占めて、語りの型として固定化していると言ってよい。一方、地の文の連体止めはケリがもっぱらであったから、特別の終止として連体形を要求し、独特の表現価値を与えるナムの存在は稀薄にならざるを得なかったわけである。とすれば、ナムは「「糸悪キ態ヲモ被為ケルカナ」トゾナム咲ヒ給ヒケル」のように間投助詞化して、会話文ではもとより、地の文でも、「皆人、此ノ事ヲ聞テ、僧ヲナム讃メ貴ビケリ」「三人ノ人ナム徒ニ成ニケリ」のような破格が散見し、ナム〜ケレ(已然形)すら現われる。延慶本『平家物語』で、文体差を無視してもなおナムは見えるが、連体形と呼応した明確な例はなく、「文の装飾、即ちテニハに過ぎない」(『大文典』)状態であり、文学的技巧に属する現象と化していたと思われる。

ゾは院政期にはいまだ生命力があったのであろう、『今昔物語集』の語りの定型、……トナム語リ伝ヘタルトヤのナムをゾに置き換えた例もあり、また「名ヲバ長秀トナム云ケル」「名ヲバ助トゾ云ケル」のように両者は明確な意

識をもっては区別されておらず、むしろ地の文で、ゾはナムを凌駕する傾向を示している。しかし、「訓ニゾ読誦シケリ」「音モ不惜ズシテゾ、泣々ク返ニケリ」のような破格が見えるのはナムと同様であり、「……とぞ申あへり」(『保元物語』)など時代と共に漸増する。一方会話文での、文中のゾは疑問詞と結合した「何ゾノ石ニカ候ハム」の系列を別にすればなくなって行くが、その途上で「それぞ孝養にてあらんずる」「是ぞ我まことの孫にてまし〳〵ける」など『平家物語』に見える明確な係り結びの発言者の多くは高位の者に限られているようであり、表現効果を意図した技巧を荷うのであろう。ゾは、語る強調表現ナムに対して写す強調表現と言われるだけに、またゾ〜ケルが多かったものの、ナム〜ケルほどではなかったために、一挙に衰退には至らないと言えるが、書きことばで「ただ文の飾りに過ぎなくて、何らの意味をも持たない」(『大文典』)ようになったのは、ナムと同じい。なお天草版『平家物語』の「唯今ぞ死ぬる」は原文の継承だが、会話文のゾ〜ケルを「これこそまことの孫なれ」とするように、コソを使った別種の表現によらなければ、原文の味を維持し得なくなったのであろう。

　文末のゾは、前代の「指定すると疑問の辞の下に接して念を押す[22]」を継承する。前者の内、体言に直接するゾは、「これはあまり重い荷ぞ」(天草版『伊曾保物語』)、「これは院方の者ぞ」(同『平家物語』)などあるが、抄物に多用されるのを除けば、室町時代では必ずしも多くない。これには、指定の助動詞として、文語にナリ、口語にヂャがあったからである。すなわち、ゾの座標は、その間、むしろヂャ寄りであったことは抄物の文体から推察し得るが、前代からの註釈用語として、抄物を特徴づける講述文体の一を形成することを別にすれば、口語としてのゾは微弱な生活力しか持っていなかったのであろう。原文の、体言直接のゾヵシ・ゾヤを「このやうな時のためぢゃ」「長兵衛の尉といふ者ぢゃぞ」とヂャを配する方向も見え、当代を最後に、口語の世界でのこの種のゾは消えて行く。

　文末ゾの用法の後者は、一般に説明要求の疑問の型を作った。したがって「イカナル労リヤラン」も「何たる煩ひぞ」となるのである。体言に直接してもゾは「疑問名詞が先行する場合、それは単なる疑問の標しに過ぎない」し、

「爰はどこ」(『閑吟集』)と「疑問名詞が先行して何ら疑問の標しがなくて何を終る事も亦ある」(『大文典』)ので、先のゾと異にして、「是は何をさつしやるぞ」(『金岡筆』)と次代にも残り、すべてが指定助動詞を要しない。『あゆひ抄』でも「疑ふぞ」が「疑の插頭を受」けると「里言同じ」とするのである。ゾは、文末で、活用語を承ける場合と、疑問詞と呼応した場合とに限られるようになったが、文末のゾについて「優越感を有する言ひ方である事に注意せよ」(『大文典』)という、ロドリゲスの発言は、ゾの以後の用法の背景を洞察していると言えよう。

文中のゾは、不定の意を表わす準体助詞化した「何ゾ物ヲ読メ」(『蓮如上人御一代聞書』)「何ぞ御用も有らば」(『捷解新語』)、「いか様心も、たそに解けた」(『閑吟集』)「誰ぞ合力に雇はう」(天草版『伊曾保物語』)、「ドコゾニアリゾスルラウ」(『蒙求抄』)「どこぞか又きつい人じやほどに」(虎清本狂言『文荷』)、「何とぞしてこれらが中を一味させたい」(天草版『伊曾保物語』)「何とぞ急いで出すようにさしられ」(『捷解新語』)、「だうぞして離いて下されい」(虎清本狂言『蟹山伏』)「だうぞ扱うてたもれ」(同『禁野』)などのような場合の外、サゾ(カシ)のような構成要素をなすこと以外にはなくなった。

2 コソ

コソに呼応する文の終止は已然形であったため、終止・連体形合一の影響を受けず、院政・鎌倉時代以後、破格は漸増するものの、室町時代末期までコソの呼応は一往保たれていた。『今昔物語集』では「巳時許コソ津ニ渡リ着タリケル」「明日御出家候ヘハムコソ吉カラム」「前世ノ宿報ノ強カリケルニコソ有ケム」「此レコソ我ガ夫ノ験シニ下シタル物ナメリ」など断定性の弱い助動詞に破格例が集る傾向が窺われ、コソと呼応する助動詞との緊張関係の強弱を示唆するであろう。しかし、この傾向も鎌倉時代以後には薄れ、「腰のもとに黒子と物のあとこそ候し」(『古本説話集』)、「ワレコソ知マヒラセタリ」(延慶本『平家物語』)や「後生コソ一大事ナリ」(蓮如『御文』)と破格の範囲も拡る。そして、原文でコソ〜給への可能性もあるが、「前からこそ下りさせられい」という命令形と対応する状態にはなって来た。

ロドリゲスは、しばしばモケリ・ゾケル・コソケレを引くが、『姉小路家手似葉伝』の「大事の口伝」には「ぞるこそれ思ひきやとははりやらんこれぞ五つのとまりなるける」があり、ゾ〜ル・コソ〜レなど五つの終止が示されている。歌の形で基本則を提示しなければならなかったのが実状であり、他方「西こそ秋と鹿も鳴くなれ」(『新後撰和歌集』)という一見コソ〜レに合うのが早くあったから、室町時代の話しことばでのコソに対する結びの乱れは想像に余りある。それにしては、天草版『平家物語』で、「御恩こそ生々世々にも報じつくし難う存ずる」「月日を送られたにこそ、せめて志の深いほども現れた」「我が父はこの沖にこそ沈ミ玉ヒヌ」など破格はあるが、確かに整っている。破格は、ゾをコソに置き換えたためや、原文も「此ノ奥ニコソ沈ミ玉ヒヌ」であったことにも依るであろう。しかし、原文が正格の結びをしているのに、踏襲しなかったこと、また継承してよいと判断した意識の裏にあるものは何であろうか。場面の緊張度・発言者、種々の要因が考えられようが、正格・破格、それぞれを、「仏ヲバ手ヅカミニコソセラレタリ」「今コソ身ニハシラレタリ」(蓮如『御文』)が出る当代の状況から、検討する必要があるわけである。「今こそ門まで参ってこそ御座れ」など煩瑣なまでの、したがって弱化を物語る、しかし多くは格に合う『捷解新語』のコソも、改訂版でほとんど削除されたので、恐らく室町時代を最後として、コソの係助詞としての機能は失われたのであろう。

「これらこそ、あるべきことよ」(『大鏡』)、「助尼ガ候コソハ破子候ヨ」(『今昔物語集』)のコソ〜ヨは前代末期から現れた用法であり、室町時代末期まで「ワレコソ老ヨ」(『本福寺跡書』)と行なわれた。コソ〜已然形の強調形と言ってよい。原文の「かたみこそ中々今はあだなれ」に対する「形見こそなかなか今はあだなることよ」があり、型にはまった形式を破ったわけだが、ここにコソの行方が暗示されており、事実江戸時代になれば、これも消えて行く。

「金商人ガ所従ゴサンナレ」「九郎ト同心ゴサンナレ」のゴサンナレは「契ヲ変ズルニコソアンナレ」、ニコソアルナレの転訛形であり、鎌倉時代語と言ってよい。右を含めて原文のゴサンナレは天草版『平家物語』に残らない。その置換例は、土井忠生『近古の国語』に「かたきぞ」「申されてござる」と見えるが、先の例について「所従ぢゃな」

「同心な」「変ずるか」で、一様に「?」を付し疑問文に仕立てている。また、「是は斎藤別当であるごさんめれ」(『平家物語』)もあった。

「今は世の世にてもあらばこそ」(『平家物語』)、「片小鬢剃られて、今さらなをらばこそ」(『きのふはけふの物語』)の終助詞化した―バコソは、条件句を承ける主文が省略された結果であるが、前提条件を強調するため、対比して想定されるはずの主文の否定を招く、屈折した表現と言ってよい。同類の表現として、「コレヲ聞テハ、コラヘラレテコソ」(『中華若木詩抄』)の―テコソ(『大文典』)、さらに「忘るゝ事も有るにこそ」(『重井筒』)の―ニコソがあった。

3 ヤ・カ

奈良時代において疑問詞をとらず文中にカを単独で用いる形式が、平安時代になってヤに冒される傾向は、以後も顕著であり、「恋路ニマヨフ人ダニモ我身ニマサル物カアル」(延慶本『平家物語』)のように、カが係助詞として用いられることは極めて稀になった。ただ室町時代で、「舟ニ乗テカコウズ」(『周易抄』)、「証人にか引かれう」(天草版『平家物語』)など散見するが、阪倉篤義[23]の述べるように、これらは疑問表現というよりは、推量の助動詞と呼応した、不定または例示の表現と称してよいものである。このことは、上に疑問詞を持つ文中のカの様相を見合わせる時、明らかであろう。原文の「イカナル御消息ニカ、見ナシマイラセンズラン」と同じ内容は「いかなるお有様にか見なしまいらせうぞ」とゾを添えなければ伝え得なくなったこと、また「薩摩守忠度ハ、何クヨリカ引返サレタリケン」も「忠度はどこから引返されたか」であり、文末にカを移していることである。「中古文ニ於テハ、疑問ノヤヲ、疑ノ詞ノ下ニ用キルコト無シト雖モ、現行普通文ニ於テハ、之ヲ以テ正格ト定ムベシ」(『現行普通文法改定案調査報告之一』)の背景をなす「なじかは挟まぬやうやあるべき」(『宇治拾遺物語』)、「何のとがや候べき」(『平家物語』)などが鎌倉時代に見え出すのも、文中のカの動向と無縁ではない。「中古文」の用法は、室町時代に「誰にてか言はすべき」(『義経記』)などある

が、「ドコカラデカアルラウ、使ガキテ」(『史記桃源抄』)とやはり不定の表現に向い、疑問を表わすには、文末にゾ・カを要すること、前に見たとおりである。とすれば「仮リノ宿リヲイツカワカレウ」(『極楽願往生歌』)と「いつか此田を刈り入て、思ふ人と寝うずらう」(『閑吟集』)とのイツカは似て非なるものがある。この萌芽は「何ノ故在カ召スゾ」(『今昔物語集』)に早く見えていた。天草版『平家物語』で、原文の干渉による「中古文」の用法、「先帝の御面影いつの世にか忘れさせられう」などの例があるが、その外、アルに関わる表現だけはやや趣を異にする。接近した行で、同様の表現「何ノ(御)憚リカ候ベキ」を「何のお憚りかござらう」「何のお憚りがござらうぞ」と二様に表わし、「何事かある」もある。「ナニトカアル」(『本福寺跡書』)、「誰かある」(天草版『伊曾保物語』)から、アルだけに「中古文」の用法が残っていたと思われるが、江戸時代になれば「何か恨みの候べし」(『きのふはけふの物語』)となり、「なんぼうか嬉しいもの」(『冥途の飛脚』)など疑問詞と対する文中のカは不定表現としてしか存在しなくなった。そして、文中の単独のカも、「肉カナンゾヲ煮タ汁カナゾヲカケタゾ」(『蒙求抄』)と、ナ(ン)ゾと結びつき、例示・不定性を鮮明にしていた。原文の「二歳トカヤニテ候ヒシ」を「二歳とやら」と替えたのも、カの推移を把握したためであろう。

一方、文中のヤが、鎌倉時代「をのづから歎きや晴るゝ」(『古本説話集』)など係助詞として機能していたことは事実である。ヤの機能は、文中・文末を問わず、その文の叙述を全体的に強調するのだが、文末のヤはより明晰であり、文中のヤはこれに比し間接的な婉曲表現に類したと思われる。文の終止を連体形をもってすることが広まれば、文中のヤの表現効果の失われてゆくのも当然であろう。他方、前代からのニヤアラムから「我子ニテオワシマセバニヤラム人ニ勝レテイミジクミヘ給フ」「此者ハ帰リヌルヤラム」(延慶本『平家物語』)を経て「東坡ト誰トヤラントノ聯句ゾ」「イツノ代ニヤラニ、禁中ヘ拝セントテ」(『蕉窓夜話』)に見られるヤラが生れる。すなわち新しい助詞の成立した室町時代以後、文中のヤは用いられなくなる。また、文末のヤにも変化が起った。すなわち、「中古文ニ於テハ、問ノや|ハ、必ズ終止形ニ附キテ、連体形ニ附カザルヲ例トスレドモ、現行普通文ニ於テハ、連体形ニ附クヲ以テ正格ト定ム

ベシ」(『現代普通文法改定案調査報告之一』)とする、「たれの人ありて、あたをなすべきや」(『歎異抄』)の現象であり、この逆がカにも「一劫ニ可住シカ」(『今昔物語集』)と起った。ここにおいて、連体形を承けるカに用法上接近するが、力点指示機能はカが勝っていたから、室町時代には文末のヤも用いられなくなった。したがって、原文の「此辺ニ僧ヤアル」「弓矢トル法ニ能シト云候ナンヤ」は「僧があるか」「申さうずるか」と替えられる。もっとも「……ものやある」を「身にそへぬことがあるか」「我方様の者やある」と近接した個所で二様に表わすが、『伊曾保物語』で、慣用句を別にすれば、文中のヤは並列のヤしかなく、「ヤは話しことばよりも書きことばに多く用ゐる」(『大文典』)に照して、原文継承の「いとど哀れやまさりつらう」「人やある」などのヤはカと異なる表現効果を意図したのであろう。

なお、ヤラは「波の立つやら、風の吹くやらも知らいで」(天草版『平家物語』)、「御対面の日一度に好かろうやら、此方其の塩合いを躊躇うて、勝手の好い様に」(『捷解新語』)から、「嬉しいやら悲しいやら、一倍いとしさ増すものを」(『丹波与作待夜の小室節』)へ、並立助詞となって行く。

「句の中に或疑問名詞がある場合には、常にその疑問を表すために助辞ゾを終に置く」(『大文典』)に従って、これを説明要求の疑問の型とした。コリャードも「カよりもゾの方がよい」(『日本文典』)と言う。しかし、『懺悔録』に例外が散見し、イエズス会の口語文献でも少数ながらカが「ゾの代りに置かれる」(『大文典』)例があり、それらは「前の世に何たる契りがござるか」「なぜにそれはお連れあらなんだか」(『平家物語』)、「明日は何とならせられうか」(『伊曾保物語』)など、敬語法と関わるのが目立つが、「何たる宿業か」「何故に赦免なうてあらうずるか」(『平家物語』)もある。すなわち、ゾは「優越感を有」し、コリャードも「ゾは上の者が云う」(稿本)と述べる。とすれば、中性的な「純然たる疑問の標し」(『大文典』)のカを配した方が、近代の敬語構造に照して適当であったろう。そして、同時に、それは疑問詞が先行する場合でも、それと呼応して疑問文であることの明示に通ずるのであった。キリシタンの記述から「いづくへござあるぞ」「誰にまみえまらせうぞ」などゾ・カの使い分けがあるのかも知れない。それと対照的に、『捷解新語』

では似而非疑問の「何程御苦労に御座るぞ」を除き、「正官は誰で御座るか」「何故に残しまるせうか」などすべてカで結ぶ。文末助詞が当代以後多彩になる背景を、疑問文の文末に見出せよう。かくて、疑問に関わるカ・ヤは、文末のカの形でしか残らなくなった。

五、終助詞

1 ナ・ソ

ナ〜ソが呼応して使われている内に、本来の禁止要素ナなしに、ソだけで禁止を表わす用法が生じていた。院政期から「此ク濫ガハシクテ不御シソ」(『今昔物語集』)、「いとゞつらゝを結びかためそ」(『とりかへばや物語』)など見え出し、室町時代では「さのみ泣き給ひそ」(お伽草子『三人法師』)、「少しも御気遣あられそ」(天草版『伊曾保物語』)のほか、抄物にもあり、相当広い範囲で例を拾える。話し手の態度がおおむね文末によって決定されるところに起因するわけだが、真名本の『伊勢物語』ではナ〜ソに「勿〜莫」と禁止字を重用するのもソの捉え方を反映していよう。ロドリゲスは、ナ〜ソの異型たるソの単独用法について述べないが、「野卑な語」「非常に下品で、殆ど使はれない形」としてア(上)ゲトなどを示す。トはソの転訛であろうが、異形を生ずるまで話しことばで使われたこと、虎明本狂言で「お気遣なされそ」のほか、「さのみに御うち候ひそ」(『瓜盗人』)など散見するので、察せられる。なお、宣長は「なを略きて下にそとのみいへる。いみじきひがこと也」とし、「近き世にも此誤をり〳〵見ゆ」(『詞の玉緒』)と述べた。江戸時代でも「御取合は被申そ」(『三河物語』)もあり、上田秋成が多用するが、―ナによる言い方に統合されて行ったのであろう。

一方、ナ〜ソは、室町時代末期までは命令法で―ナと共にナ〜

ソを示し、原文の「思召レ候マジ」を改めた「な思はせられそ」(『平家物語』)や、「他をばな卑しめそ」(『伊曾保物語』)「汝さのみな悲しうぞ」(『金句集』)がある。「油断不沙汰ナセソ」(『蓮如上人御一代聞書』)もあり、抄物から拾うことも困難ではない。しかし、池田併治[24]によれば、ナ〜ソは、鎌倉時代以後ーナに圧倒されて、江戸時代になると、実際の会話にはまず用いられなかったようである。これから逆視する時、右のキリシタンの例で『平家物語』は別(老僧の語)として、他は「(下)心」に見え、文語的口語としての色彩を帯びていたのであろう。なお、ナ〜ソの間に、サ変・カ変動詞の未然形(他は連用形)が入っていたが、室町時代になれば、原文のセを替えた「音なしそ」(『平家物語』)や「我ニ随テナキソ」(『襟帯集』)が見える。結果として一般的な接続に類推したわけだが、表現形式の退潮と見合せると、やはり文語的な線は否めない。前代からの、ナ〜ソの強調形ナナ〜ソも、「卯の花襲ななめさいそよ」(『閑吟集』)、「莫レ背トハコレヲウシロニナイテナナカケソト也」(『六物図抄』)などにあったが、室町時代以後はーナがもっぱら用いられるようになった。アルバレス『ラテン文典』でも、口語形はスルナしか見えない。

ナは本来終止形接続(ラ変のみ連体形)だが、当代では「知音すな」「友とするな」(『伊曾保物語』)のように対照的に用いられた事例もあり、終止形と新終止形(旧連体形)接続が共存した。前者は文語的であろう。この現象は過渡期にあって当然だが、これと次元を異にして、四段活用以外には未然形接続の例が現われた。否定ヌが未然形でなされるための類推であろう。ロドリゲスは「甚だ下品」だとし「活用表に掲げてない」のだが、一・二段活用「改めな」(天草版『平家物語』)、「立ち居な」(同『金句集』)から、江戸時代にはサ変・カ変「さうせな」(コリャード『日本文典』)、「此の邸へこなとの言分ぢやな」(『傾城富士見る里』)に及んで、サ変動詞に限れば三種の活用形を承けることになる。なお、後期『浪花聞書』の「きゝな」に対する説明「きくな也。江戸にてきゝなといへばきけなり」から四段活用連用形をもナが承けたことが知られるが、先のーソがーナに冒された結果であろう。

2 バヤ

室町時代末期でも「かの狼この羊をくらはばやと思ひ」(天草版『伊會保物語』)などの例はあるが、『あゆひ抄』の「いたりて難き事を願ふにはあらで、事に当たりて心にせまほしく・あらまほしきを、さもえせず・えあらぬに思ひ言ふ言葉なり」と見合せると、平安時代のとの差は明らかであろう。成章はさらに「をとつ世より始めて今の世には、ただ「とせむ」「かくあらむ」などいふ言葉を「とせばや」「かくあらばや」とよむは、例の本の心を失へるなり」と言う。「をとつ世」、鎌倉時代から、希望の表現にタシが表面に出て来たから、話しことばでのバヤの位置低下も想像し得る。ロドリゲスは、直接法未来の項で、ウ・ウズ・ウズルを示し「未来にはバヤに終る別の形がある。……話しことばでは余り使はれない。普通には不定法の助辞トか、トテかをそれに添へる」としているので、成章の説くところに近い。天草版『平家物語』でもバヤがあることは事実だが、原文の踏襲であって、原文のバヤがウ・ウズルに替えられた例があり、「木ノ下ヲ見候ラハバヤ」を「見まらしたい」のようにタイをもってするほか、「今一度見ばや」を「見せい」と誂えた例すらある。ウに関わる文語的な情意表現、それもト・トテを介した間接的な用法にのみ残っていたバヤは、『小文典』ではもはや文語の項でしか扱われないのも当然であった。

コソが関わる「否定表現」に比すべき現象がバヤにもあった。「酒ハノマセタシ、銭ハアラバヤ、詩ヲ作テ酒ニカヘテ」(『中華若木詩抄』)が知られ、時期を限って抄物に出るが、山内洋一郎[25]は、「むめ水とてもすくもあらばや」(『菟玖波集』)が最も古い例に属すると言う。バヤの成立は別に説かれるであろうが、右の場合は、「さもえせず・えあらぬ」に力点が置かれたものと言ってよい。山内の指摘した例が「をとつ世」のものであり、バヤが話しことばと遊離し、「本の心」を失い始めたからこそ、屈折した誹諧性に富んだ表現として成り立ち得たのであろう。また、『歌林山かつら』(伝宗祇)の「ばやと云こと葉」で、「ねがひたるばや」「推量したるばや」を示しつつ、「思ひあれば袖に螢をつ

ゝみもていはゞや物をとふ人もなし」(『新古今和歌集』)は「つゝみても……とふ人はなし」)を「いはぬ心なり」とするのも、同じ頃の把握の態度を示す。このバヤはどの範囲に流布したのであろうか、室町時代末期では「言へば世に経る……言はねば憂人の、それと知らばや」(『隆達小歌集』)などの歌謡に残る程度であり、キリシタンも注意していない。ともあれ、これは、「本の心」を継承する表現として、バヤの末期を彩るものであった。

3 ガナ

前代の複合助詞モガーナ・ヲガーナにおけるガナが、特に後者の形式で願望の対象はヲで示されるわけだから、「よからうかたきがな。最後のいくさして見せ奉らん」(『平家物語』)のように単独で名詞に直接し、さらには「橋へ廻れば人が知る、湊の川の潮が引けがな」(『閑吟集』)など命令法の形式、さらには「惣別あれとがなと望めども」(『懺悔録』)の句まで承ける用法が生じた。モガナも「よひ連れもがな」(虎明本狂言『宗論』)などガナと並んで行なわれ、この種のガナは「願ひがな」と呼ばれた。話しことばで「盛んに使はれる」(『大文典』)状態であったらしいが、一方「アレガ欲シウヲリヤヤル」(『本福寺跡書』)に見られるホシイを中核とする表現があったから、文語的な言いまわしになって行く。少くとも命令法に添えられたガナは、ロドリゲスが並記するように、カシと同じ用法であり、「死ね かし、打死逢はれがな」(『懺悔録』)のとおりだが、カシ・カナ(カーナ)と影響し合って、「たゞはおきやるまいがな」(虎清本狂言『文荷』)、「あわれ然うも御座れかな」(『捷解新語』)に見られる、カナの濁音形やガナの清音形を生み出した。

文末のガナから、「何ヲガナ形見ニ嫗ニ取セム」(『今昔物語集』)、「なにがな取らせんと思へども」(『宇治拾遺物語』)などの疑問詞を含む句に付いて不定の意を表わす文中の用法が生じ、さらに室町時代には疑問詞以外の語句をも承けた「飢テハアハレ何ガナクワウ、渇シテハ酒ガナ飲ト思フテ」(『四河入海』)に見られる、不定または例示の表現に拡大した。しかし、いずれも願望、広くは意志を表わす文という制限があり、原義を失っていないのである。江戸時代にな

れば、不定・例示に力点を置いた「実に左様でがなござりませう」(『傾城壬生大念仏』)、「鳥がなうたへ」(『傾城二河白道』)など、推量や命令を表わす文にも用いられるに到って、バシとはなはだ近くなる。

4　カシ

鎌倉時代以後、命令形を承ける用法に局限されて、それ以外は、『平家物語』に「旧都はあはれめでたかりつる都ぞかし」「帝運のきはまる程の御事はあらじかし」、擬古文の『徒然草』でさえ、ゾカシと「さもあらんかし」「有難き志なりけんかし」などのム・ケムだけであったから、ロドリゲスは「書きことばでは希求法でない事がある」と書かなければならなかったのである。彼は、ゾカシを「ただ文の飾りに過ぎなくて、何らの意味をも持たない」とした。事実、天草版『平家物語』では、「九郎大夫判官殿ゾカシ」「命ニ替テ取タゾカシ」など原文のカシは削除している。ゾカシは文章語として、江戸時代にも使われること、西鶴の文章について見ても明らかである。一方、「命令形＋カシ」は、「主として依頼し、又は、命令するのに遠慮する気持を示す時に用ゐるのであって……この言ひ方では多くの場合、カシは希求法の意味を持たないのである」(『大文典』)。天草版『伊曾保物語』の「御分別あれかし」「助けられいかし」のように多く敬語の要素があったとしても、命令形による命令表現が、カシで包まれながらも衰退するのは自然であろう。すなわち、「ただよかれかしと思うてぞ」(天草版『金句集』)以後、「大勢友達の中で、是見よがしに膝枕しながら」(『傾城禁短気』)などの慣用句に残るだけである。カシもガナの干渉を受け、「これへかし、こよ」(天正狂言本『今参』)のようにも使われ、またガシともなったわけである。

その他の終助詞を眺めておこう。ロドリゲスは「文末に置かれる感動詞」として、カナ・カナヤ・アイ・ナ・ヤ・ヤナウ・ヨ・ヨナ・タリ・ワ・ゾを掲げる。この内、タリは「書きも書いたり」であり、平安時代に見られなかった

形はアイ・ナウ程度である。アイは「主人が召使と話し、身分の高い者が低い者と話す時、注意を促す意味を持ってゐる」とした「誰そゐるかあい」で、狂言で「あるかやい」(虎清本『文荷』)などヤイと写された語である。ナウはナの強調形であろうか、さらにナウはノとなった。共に「さてもあはれな事であったなう」「退屈もなうお語りあったの」など天草版『平家物語』に見える。彼は、他にモノヲ、マデヨ・マデヂャ、「有ったとも」などのトモについても同様の発言をしている。また『日葡辞書』が「語末のテニハ」とする「出来たやう」もヤの強調形であろうか。例えば狂言にこれらを多用した表現が豊富に見られるわけである。もっとも「女のつらがあるいやれ」「みゆるいやい」(虎清本)は虎明本で「みゆるやひ」「みゆるは」とあって同一曲(『鏡男』)内でも一致しないこともあり、表情語として振幅の範囲は広い。

右のイは終助詞としてよいであろう。これは二段活用動詞アグルの命令法でアゲウ・アゲサイ・アゲヨと並ぶアゲイ(『大文典』)の語尾と共通し、やはり強調の要素に由来すると見られる。特に下二段活用の命令形が「許さしられ」「御渡海めでたうなされまるせ」(『捷解新語』)のようにイ・ヨをとらないことは、江戸時代で珍しくない。それは、命令形における強調的引きのばしを表わさなかったのであろう。すなわち「ツ、シメヨ」(『蓮如上人御一代聞書』)、「静に漕げよ」(『閑吟集』)と並ぶ終助詞として、イ・ヨを処理することが可能である。そして、他の終助詞に接したワイ・ゾイ・カイ、これらが重用されワイヤイ、ノを続けたイノを中心にワイノ・ゾイノ・カイノ・ヤイノ、さらにイは柔かなエを生みカエ・ゾエ、イーナに関わるワイナ・カイナ・ゾイナ等々、江戸時代になると多彩な文末が展開される。先のアグルに関わる命令法について、ロドリゲスは、「尊敬し、又は軽蔑する上で程度の相違がある」として、アゲイ・アゲヨからオアゲナサレウまで一〇段階に並べた。右の終助詞も、山崎久之[26]によれば、表現主体の人間関係と関連するのである。また「お歴々にも負けることはおりないさ」(『鑓の権三重帷子』)のサはもっぱら武士が用い、先のエは女性、そして、イナは遊女という風に、位相にも関係していた。

右の内で、ナは「忍ぶ軒端に瓢箪は植へてな、置いてな、這はせてならすな」(『閑吟集』)のように間投助詞としても使われた。

六　助詞の変遷

個々の助詞に焦点を合わせて述べて来た変移は、個別的な動きを示すかに見えるかも知れないけれども、重ね合わせる時、助詞がどのような方向を指して推移したか、その変遷の動態が浮び上って来るであろう。すなわち、個々の現象に遅速はあるにしても、一は他に関連し、したがって個々は独立事象であり得なかったと思われるが、これはむしろ当然のことと言うべきであろう。以下、まとめの意味で助詞の変遷について眺めてみたい。

格助詞、ガ・ノ、カラ・ヨリにおける機能の分化に伴う格関係の明晰化への動きは顕著である。そして、それに背馳するかのように見えるヘやトの現象も、それはそれでまた同じ動きであったとも言えよう。ヘは、「その用法は全品詞中で最も広くて、我々の言葉の四つの格に使はれる。又は、四つの格に相当するとも言へる」(『大文典』)というニとの関連、すなわち、「或場所へ向っての運動を示す対格」をへは冒したのであり、他の主格・奪格の領域で、前者に、ニハ・ニオイテハおよびガが、後者に、ノ故ニ・ニヨッテ・トシテ・デなどが、用いられて来て、ニが「この助辞としての一番本来の用法である」与格に限定されて行く方向で把握されなければならない。右のような複数の要素、いわば複合助詞の形式をもってすることを分析的ないし説明的と言うなら、ヘ自身も、本来の用法をノ方ヘで分析的に表現することになる。ただし、ガは室町時代末期でも必ず置かれるとは限らず、また『日葡辞書』によればシタシ(親)ムは、ト・ニ・ヲの三つを承けるようであり、さらに「ニのつく与格かヲのつく対格かを要求する中性動詞」(『大文典』)の項で、ハナルル・ソムク・オソルルなど多くの例が示されていることも事実であった。トについて、繋

ぎのことばのない方から見ると「誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ」贅疣を取り去った機能的な用法が多くなったと評価すべきではないであろうか。副助詞のバカリが、その形で限定で、一方の程度をホド(さらにほぼ時を同じうしてダケ・キリ、クライに)と分化するのも機能化の同じ動きであった。類推機能においてダニ・サヘ間の微妙な語感を含めたそれぞれの独自性を、時代はもはや必要としなくなりつつあったのであろう、本来類推と関わりのないサヘがこの領域を襲うのは、サヘによる、機能の補強かも知れないが、結果において小異を犠牲にしても大同を優先させたことになるであろう。この間の事情は、尊卑のノ・ガ、係結び末期のコソやバシでも同様であったと思われる。

接続助詞バと未然形・已然形の区別とによってもっぱら表わされた表現に多くの複合助詞が加わり分析的に表現しする複合助詞やト・シが条件的接続に移行するのは、論理的に二件を把握する態度の反映に他ならないと思われる。分けるようになる。その成立時に、列叙という論理的に未分化の関係しか示さなかったアイダ・トコロなどを中核とする複合助詞やト・シが条件的接続に移行するのは、論理的に二件を把握する態度の反映に他ならないと思われる。ここに、前代の接続助詞ヲ・ニが衰え、後者が依然として情意性の強いノニの形でしか残り得なかった背景があった。ドモからケレドモが生れた、その初期にマイ(ジ)とウに限られた現象を、右に絡めて見直すと、前者に意志(または推量)・打消という、二重の判断が課せられており、已然形を持たないはずの肯定形ウ、希望のタイへと上接語の範囲を拡げ、恐らくは「思ウ」を初めとして動詞を承けることになるのも、最初マジに見合う論理性の補強という観点から捕捉し得る。ドモ・イヘドモの関係に似て、ケレドモはドモの強調形であろうが、初期に制約があったのも当然であった。ケレドモの成立、ト・ナラの発達によるバの衰退は、未然形・已然形と助詞との関係を弱めた。これは、活用形自体の機能分化にも関連したのである。

ドモを初め接続助詞における訓読文体の影響の強い中に、和文調に由来するガが発達したのは流れに逆行するようであるが、二文の断絶性の忌避という面で把握される性質をも持つ。これを一文内に移せば、係助詞の衰退に結びつく。文の内部に断裂をもたらすカ・ナム・ゾの内、カは早く前代にヤに替わられ、ケリに始まる、連体形による終止

の現象が広まれば、これら係助詞は機能し得なくなる。文の終止を連体形ですることは、阪倉篤義[27]の説くとおり、「表現内容を、纏った一体の事がらとして明確に提示する」ことなのであった。そして、文の内部でも連体形を承ける準体助詞が生れて来た。かくて文末の比重が漸増する。敬語法の転換期、江戸時代初期以降、そこに多彩な終助詞が展開するのも当然であった。

この間、新形・旧形は話しことば・書きことばの対立として、また同一文体内で旧形は一種の表現価値ないし効果に関わるものとして、捉えられ、または捉えられそうであるが、旧形に対する当代の人々の認識も察知できようかと思われる。

「はじめに」に引いた行で示唆されているように、変移の相が文献に反映するまでには相当の伏流の期間があったであろう。それはまた文献の種類によっても出方に差があったことも想像に難くない。擬古文でさえ所詮時代の波をまぬかれ得なかったとすれば、資料に関わる問題を結局言及しないままに述べた本項に免罪符を与えるものではないけれども、個々の差を超えた傾向を大雑把に捉える必要がまずあるであろう。助詞に絞るならば、機能化・論理化への方向であり、その源は訓読調の文体に求められることが多かったにしても、へ・ニテ(デ)も関与するとおり、要するに和文調・訓読文調一体となる方向をとらせたのは、この期間における人々の、関係づけの明晰さを求める精神に外ならないのであった。デに早く露呈していたものの、ほとんどは院政・鎌倉時代に伏流し、それも蛇行していたものが、南北朝の頃を境として室町時代末期にはもはや滔々たる流れになった様が助詞にははっきり反映していると言えるのではないか。その変遷の指す方向を言い定めるならば、情意から条理へともなるであろう。前者の黄昏から後者の曙という意味で、本項で扱った時期は過渡期であった。ただ、それを明らめる個々の記述とそれの集束と、いずれも不徹底に終ったことを恥じるのみである。

〔追記〕 流れの把握のために分流の調査はもとより不可欠である。そのために予定の紙数をはなはだしく超越したので、用例を削除して、さらに先学の研究も一々は記載せず、圧縮に努めた。当然触れるべき問題の看過も多く、記述に繁簡よろしきを得なかったところも少くないであろうが、寛恕を請いたい。

(1) ロドリゲス著、土井忠生訳『日本大文典』三省堂、一九五五年。
(2) 橋本進吉「国語学研究法」(『国語学概論』岩波書店、一九四六年)。
(3) 亀井孝「「ォ段の(長音)の開合」の混乱をめぐる一報告」(『国語国文』三一巻六号、一九六二年)。
(4) 大坪併治「小川本願経四分律古点」(『訓点語と訓点資料』別刊一、一九五八年)。
(5) 山田孝雄『平家物語の語法』宝文館、一九五四年。
(6) 天草版の、巻二の第一までは覚一本(日本古典文学大系本)、同第二以降は百二十句本(京都府立総合資料館本と慶応義塾大学附属研究所斯道文庫本、ただし引用表記は後者による)。
(7) 松村明「「水を飲みたい」という言い方について」(『江戸語東京語の研究』東京堂、一九五七年)。
(8) 青木伶子「「へ」と「に」の消長」(『国語学』二四輯、一九五六年)。
(9) 原口裕「「に」と「へ」の混用」(『福田良輔教授退官記念論文集』一九六九年)。
(10) 山田孝雄『平安朝文法史』宝文館、一九五二年。
(11) 中田祝夫『古点本の国語学的研究』総論篇、講談社、一九五四年。
(12) 石垣謙二「助詞「から」の通時的考察」(『助詞の歴史的研究』岩波書店、一九五五年)。
(13) 石垣謙二「主格「が」助詞より接続「が」助詞へ」(同上)。
(14) 阪倉篤義「条件表現の変遷」(『文章と表現』角川書店、一九七五年)。
(15) 峯岸明「今昔物語集に於ける変体漢文の影響について」(『国語学』三六輯、一九五九年)。
(16) 亀井孝「理由を表はす接続助詞「さかいに」」(『方言』六巻九号、一九三六年)。
(17) 浜田敦「形容詞の仮定法」(『人文研究』三巻六号、一九五二年)。

(18) 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会、一九六三年。
(19) 湯沢幸吉郎『室町時代言語の研究』風間書房、一九五五年。
(20) 山田孝雄『日本口語法講義』宝文館、一九二二年。
(21) 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」(『広島大学文学部紀要』特輯号三、一九七一年)。
(22) 山田孝雄『平安朝文法史』(前掲)。
(23) 阪倉篤義「文法史について」(前掲『文章と表現』)。
(24) 池田併治「禁止表現法史」(『国語・国文』五巻一〇号、一九三五年)。
(25) 山内洋一郎「否定の助詞「ばや」について」(『連歌とその周辺』広島中世文芸研究会、一九六七年)。
(26) 山崎久之「終助詞の待遇表現」(『群馬大学教育学部紀要』一九・二〇巻、一九七〇・一九七一年)。
(27) 阪倉篤義「「開いた表現」から「閉じた表現」へ」(前掲『文章と表現』)。

7 助詞 (3)

田中章夫

一　現代語における助詞の機能

個々の助詞の機能は別として、助詞の全般的な文法的機能は、古語も現代語も、そう変わりはない。しかし、現代語の場合には、その文法的な機能ばかりでなく、発音上、あるいは音調上の特性が、完全に把握しうるところに、古語との大きな違いがある、それゆえ、従来から、現代語の助詞については、終助詞をめぐるイントネーション(intonation)の問題や、間投助詞におけるインテンシティー(intensity)の存在、あるいは、係助詞とプロミネンス(prominence)の関係などが指摘されてきた。[1] 最近においても、久野暲は、ストレス(stress)を文法手段の一つとして認める考え方を提出し、それによって、格助詞「ガ」の解釈を試みている。[2]
また、現代語の助詞については、たとえば、「ハ」と「ガ」の問題、「ノデ」と「カラ」の違いといった、微妙な使い分けが、しばしばとりあげられるが、それが、単なる文法上の対立・対応の問題にとどまらず、語感やニュアンスの異同にまで発展せざるを得ないところにも、現代語の助詞論の、一つの特色があるといえよう。この問題は、近年、外国人に対する日本語教育の進展に伴って、きわめて重視されるようになってきた。

このようなことを考えに入れると、現代語の助詞については、単に、文法的な性格や機能ばかりではなく、まず、どのような場面でどんなスタイル・文体において用いられるかといった、広い意味での用法を、一つ一つの助詞について、はっきりさせておく必要がある。いうまでもなく、話しことばと書きことばでは、助詞の様相は、かなり異なる。同じ、話しことばでも、日常のうちとけた対話と、改まった会話や講義・講演の類とでは、違いが見られる。なかには、話し手の性別・年齢などによって、使い分けのあるものまである。

一方、書きことばにおいても、法令文や論文など固い文章と、日常の普通の文章では、助詞の様相に違いがみられる。同じ、現代口語文であっても、敬体か常体かで、用法上の差違のみられる助詞もある。言うまでもなく、文語的な古風な言いまわしには、文語の助詞が現われることも珍しくない。

そのほか、敬語と共存しうるか否かというような待遇表現の面からの考察や、標準語か東京方言か、あるいは関西系の言い方かといった方言的な面からの考察なども、時には必要である。

こうした観点からみていくと、現代語の助詞についての、従来の記述は、その文法的機能にかたよりすぎているきらいがある。ここでは、実際の用法に即して、できるだけ多角的に、現代語の助詞の様相を明らかにしていきたいと思う。

そこで、助詞の機能と用法を、どのようにとらえていくかであるが、ここでは、あまり、文法的な細かい機能にこだわらずに、ごく常識的に、「格助詞」「係助詞」「副助詞」「並立助詞」「接続助詞」「終助詞」「間投助詞」の七分類に基づいて記述していくことにする。ただし、従来とられてきたような、文語助詞との関連に基づく分類法はとらず、現代語における用法を中心に考えたため、おのおのに所属する助詞の種類は、やや異なる場合がある。たとえば、「副助詞」の機能として、副詞的なフレーズを構成する機能を重視したため、従来、副助詞とされてきたもののいくつかが、他の所属となったこと、あるいは、「係助詞」の機能を、語句をとりたてる、提題の機能のみにしぼったために、係助詞として扱うべき助詞の種類が、従来よりも、やや多くなってきたことなどである。

二　格助詞の機能と用法

格助詞は、それの導いてくる語句と、それを受ける語句との間に、いわゆる格関係を確定する助詞である。格関係

そのものは、必ずしも格助詞に依存しなくても、
　あたし、来年、アメリカ行くのよ。／マッチないから、生米かじって、みんな、がんばってたんだ。

のように、格助詞なしで関係づけていくことが可能である。また、右の場合、「マッチモないから、生米ダケかじっていた」など、格助詞以外の助詞も、はいりうるが、それによって格関係が変化するわけではない。

したがって、格助詞は、別に、格関係を成立させるものではなく、格関係をはっきりさせるところに、その機能の本質があるとみるべきであろう。

格関係には、主格・属格・与格・対格……など、さまざまなものがありうるが、ここでは、格助詞によって示される格関係を、つぎの三種に整理し、それぞれを担当する格助詞を「主格助詞」「連用格助詞」「連体格助詞」と呼ぶことにする。

　主格助詞……判断や動作・状態などの主体を示す。
　連用格助詞……動作・作用の、場・対象・目的・手段などを示す。
　連体格助詞……体言性の語句を限定する。

なお、いわゆる準体助詞の用法については、便宜上、連体格助詞の項で記述する。

1　主格助詞

主語を導き、主述関係を確定する格助詞として、まず、「ガ」をとり上げ、その用法と性格を調べてみることにする。

「ガ」の最も代表的な用法は、判断の主位概念を、主格として導くことである。
　東京ガ、日本の首都である。／体の弱いことガ、彼の欠点だ。／どちらガお兄さんですか？／ここまでガ、僕の限界だ。

などが、その例であるが、右のように、「名詞十ダ(デス・デアルなど)」の句(文節)にかかりうることは、格助詞「ガ」の、一つの特徴とされている。[3]

「ガ」は、また動作・状態の主体を、主格として導く、つぎのような用法をもっている。

船ガ、港を出る。/どなたガ、いらっしゃいますか?/桜の花ガ、きれいに咲いている。/年末ガ近いので忙しい。/温泉ガある。/若者の多くガ戦死した。

この場合、述語に、主体の心情を表わす表現や、可能・不可能を表わす表現がくると、「ガ」は、それらの表現の対象を導くことになる。

食べ物ガ欲しい。/母ガ恋しい。/故郷ガ懐しい。/肉よりも魚ガ好きだ。/冬、スキーガできる。/数ガ数えられない。/水ガ飲みたい。

などが、その例であり、時枝誠記は、これを、対象語と名づけ、主語と区別した。[4] 右のような「ガ」は、「食べ物ヲ欲しい」「スキーヲできる」「数ヲ数えられない」「水ヲ飲みたい」のように「ヲ」に置きかえられることがある。[5] この傾向は、特に、

子どもガ水ガ(ヲ)欲しいって言うんですガ。/スキーガ(ヲ)できる人ガ一人もいないの。/母親ガ肉ガ(ヲ)きらいだと、子供もきらいになりやすい。/たばこガ(ヲ)吸いたいが、火ガないんだ。

のように、ガ格が重なって現われる場合に著しい。

また、「ガ」は、つぎのように、連体修飾語の中で、主述関係を構成するとき、「ノ」に置きかえられる。

私ガ小学生だったころ/雨ガ降る夜/天気ガいい日/映画ガ見たい人/急行ガ止まらない駅

しかし、純粋の名詞ではない体言や、形式的な名詞、あるいは、不定詞の類を導くときには、「ノ」に置きかえにくい。

大部分ガくさっているリンゴ箱／元来ガ虚弱な体質／不安ガ解消しない間／学生の多くガ食事する店／だれかガ忍びこんだ形跡

副助詞など、他の助詞を伴う句を、主格として導く場合も、「ノ」に置きかえにくい。

十人ばかりガ集まる会／彼だけガ反対した案／老人までガかり出された戦争／バスをおりてからガ遠い村

などは、その例である。また、述語部分に、待遇表現や受身・使役のような複雑な言いまわしが来たりして、述語が長くなってくると、「ノ」に置きかえにくくなる。

父ガ捺印させられた書類／先生ガお骨折くださった学会／子どもたちガ勢いよくかけ登った石段／生きていたら、母ガ喜んだであろう知らせ

特に、述語部分が、目的語や補語を含む場合や、中止法あるいは接続助詞による構成をもつ場合は、「ノ」に置きかえがむずかしい。

道ガ県庁にぶつかる手前／ダンプカーガ自転車をひっかけた交差点／ぼくガ弟とけんかした日／インクガきれて書けない万年筆／娘ガふり返りながら遠ざかる後姿／警官ガ泳ぎつき助けあげた女性

一方、こうした、主述関係を含む連体格を受ける体言句の方を見てみると、ここに形式的な名詞が来たときには、「ノ」に置きかえにくい。

生活ガすさんだのは、失恋のせいだ。／彼ガ払う分には心配はいらない。／ときどきトラックガ通過するほかは、何も通らない。／母ガ注意したせいかもしれない。

などが、その例である。また、こうした体言句が、全体として副詞句になる場合も、「ノ」に置きかえにくい。たとえば、つぎのような場合である。

通信ガ杜絶した以上／会社ガ破産しない限り／市長ガ代わった途端／景気ガ停滞した結果

以上、述べてきたもののほか、「ガ」には、一種の名詞句的なまとまりを構成する、左のような用法がある。

君ガ行くしかない。／道ガ広いだけみっけものだ。／雨ガ降るよりは、雪のほうがいい。／機械ガなおるまで待ってくれ。

これも、元来は、これまで述べて来た「機械ガなおる時まで」といった形と、同じ性格のものであるが、この場合も、「ノ」に置きかえにくい。

したがって、連体修飾格の中における主述関係の構成では、「ガ」も「ノ」も使われてはいるが、「ノ」が使いうる領域は、「ガ」の場合よりも、かなり狭いということになる。(6)

「ガ」は、言うまでもなく、主格に立つ名詞を導き、述語としては、用言句あるいは、「名詞十ダ(デス)」の句をとる形が、最も一般的であるが、慣用的な言い方や、文語的な文章においては、つぎのように、活用語に直接つく用法や、述語が名詞形のまま終る形も見られる。

ゆっくり休むガよい。／勝手にしたがいい。／負けるガ勝ち。／言わぬガ花。／花も嵐も踏み越えて行くガ男の生きる道。／戸を開けるガ早いか庭に飛び出す。／つかまえたガ最後、もう逃さん。

また、やや古風な、文語的な文章には、

生きんガために食う。／愛するガゆえに去る。

のような、連体格の「ガ」も残っている。しかし、現代では、「わガ国」「君ガ代」「梅ガ香」「君ガ御手」といった、慣用的なものや古典調の表現は別として、純粋の名詞にかかる、本格的な連体格助詞の用法はない。

2 連用格助詞

動詞の目的語を導く格助詞には「ヲ」「ニ」「ヘ」の三つがある。この中で、「ヲ」は、他動詞の目的語を導く点に、

特色をもつ。

「ヲ」は、まず、つぎのように、行為や動作の目標・対象を示す。

手に花束ヲ持つ。／ヨーロッパへ石油ヲ送る。／積み木で城ヲつくる。／社長と対策ヲ協議する。／恋ヲする。／優勝ヲ目標とする。／人ヲ待たす。／先生ヲ中心に集まる。

これらは、直接目的とか客語とか呼ばれ、他動性の表現を構成する要素であるが、自動性の動作・作用においても、使役が向けられると、その動作主体が、使役表現の対象として、「ヲ」で導かれてくる。

赤ん坊が泣く。↓赤ん坊ヲ泣かせる。　花が咲く。↓花ヲ咲かせる。

子どもが寝る。↓子どもヲ寝させる。　目が覚める。↓目ヲ覚めさせる。

なお、この場合、文語調の、古風な言いまわしとして、時に「ヲシテ」が現われる。

部下ヲシテ交渉に赴かす。／私ヲシテ言わしめれば……

などが、その用例であるが、もちろん、現代の普通の文章や会話には見られない。

こうした「ヲ」をめぐる慣用的な言い方には、「ヲモッテ」もある。

賞品の発送ヲモッテ当選通知にかえます。／紛争は、法律ヲモッテ禁じる。／正午ヲモッテ閉店いたします。

これは、右のように、対象・手段・期限などを示し、それぞれ、「ヲ」「デ」「ニ」に当るものであり、現在では、文語的な、やや改まった場合にのみ用いられる。

つぎに、本来は、主格の「ガ」によって導かれるとされる、可能表現の対象や、願望などの表現の対象が、「ヲ」で示されることがある。

字ヲ(ガ)書ける。／目ヲ(ガ)あけられない。／満足にプレーヲ(ガ)できる選手がいない。／冷たいビールヲ(ガ)欲しい。／紅茶よりもコーヒーヲ(ガ)好きな人が多い。／水ヲ(ガ)飲みたい。

などは、その例である。これらについては、たとえば、「目ガ↓あけられない」「水ガ↓飲みたい」というように、述語部分は、本来は、一体となって「ガ格」を受けていたが、近年次第に、動作的な部分と、可能・願望などの表現とが分離したため、動作の対象を「ヲ格」で受けとめるようになったと説明されている。(7) すなわち「(目ヲ＋あける)↓られる」「(水ヲ＋飲む)↓たい」というように、まず、対象と動作が結びついてしまう結果、成立してくるわけである。この意識が、「ヲ書ける」「ヲできる」「ヲ欲しい」「ヲ好きだ」の類にも及んできたものであろう。

受身の場合も、現代では、「金が盗まれる」「クレームがつけられる」よりは、むしろ「金ヲ……」「クレームヲ……」の方が普通である。しかし、この場合は、「父が金ヲ盗まれた」とか「相手にクレームヲつけられる」といった純粋に受身の目的を表わす「ヲ」からの影響を無視できない。

以上のほか、「ヲ」は、移動性ないしは経過性の動作・作用について、その起点・場面・期間などを示す。

船が港ヲ出る。／若者の心が政治ヲ離れる。／とんびが空ヲ舞う。／一瞬シラけた気分が議場ヲ走る。／夏休みヲ遊び暮らす。／不況時代ヲ生き残った会社

右のうち、動作の起点は、「カラ」でも、また、行為の場面は「デ」でも示しうる。しかし、これらは、「ヲ」による表現と比べてみると、

船が岸壁カラ離れる。
船が岸壁ヲ離れる。

粉雪が空デ舞う。
粉雪が空ヲ舞う。

いずれも「ヲ」の場合の方が、動きが感じられる。こうした点からみて、「カラ」「デ」は、それぞれ純粋に「起点」なり「場面」なりを示すものであり、それに対して、「ヲ」の場合は、動作との結びつきの強い、動作中心の表現だと考えられる。

この、「ヲ」の動作性の説明には、よく、「米洗ふ前ヲ(ニ・ヘ)螢が二つ三つ」の句が用いられる。すなわち、「ニ」

や「へ」の場合に比べて、「ヲ」の場合が、最も、ホタルの動きが生き生きと表現されるというわけである。これは、一つには、格助詞「ニ」「へ」が、単に、動作の帰着点や、方向を示すのに対して、「ヲ」は、さきに述べたように、行為の行われる場面を示す機能をもっているためと見られよう。

なお、文語調の文章には、活用語に直接つく、つぎのような形も、稀に現われる。

言ふヲやめよ。／等しからざるヲ憂う。

つぎに、格助詞「ニ」の機能の検討に移ると、「ニ」の特性は、事物・作用・状態について、その存在の場を示す点にある。

岬ニ燈台がある。／牧場ニ牛がいる。／月が中空ニかかる。／心ニわだかまりが残る。／町ニ緑を見ない。／上ニ会長をいただく。

そして、ここから、行為や動作の発動に伴って、その場に関係するもろもろの事象を示す機能を持つにいたる。たとえば、動作の向けられる対象、行為の目ざす目的、あるいは作用の出所といったものが、それであり、こうしたものを導いて来て、「ニ」は、行為・動作の表現を支える。

子どもニ留守番を頼む。／汽車ニ乗る。／隣の娘ニ思いをかける。／妹ニ看病をさせる。／応援ニ来た。／芝居を見ニ出かける。／兄ニ宿題を教わる。／警察ニつかまる。／人ニだまされる。

などが、その例である。

これは、また、移動性ないしは経過性の動作・作用の場合も同じであり、そうした動作・作用の場を構成する諸要素、すなわち、起点・帰着点あるいは、時期・期間・機会・成りゆき・結果などを示す。

源をアルプスニ発する清流／無人島ニたどりつく。／新学期は四月ニ始まる。／知らないうちニ出航していた。／決勝ニ勝ち進む。／液体から気体ニ変わる。

このように見てくると、「ニ」は、結局、行為・動作・作用の、いわば道具立てを整えるものであり、この種の機能をもつ句は、一般に、間接目的あるいは補語などとも呼ばれる。

「ニ」のこうした機能は、抽象的ないしは論理的な関係を表わす場合も発揮され、原因・理由・動機・由来・論拠あるいは、比較や評価・割合等の基準を示すのに用いられる。

戦乱ニ傷ついた町／喜びニ我を忘れる。／調査ニ基づいた研究／南蛮貿易ニ栄えた港／年齢ニ比例する。／透明ニ近いブルー。／解決ニは程遠い。／子どもニ不似合な服／年ニ一度の祭／半数ニ満たない。

すなわち、立論の道具立てを提供するわけである。

また、作用の働き方や状態のあり方を示すのにも「ニ」が用いられる。

横ニ倒す。／風ニなびく。／一線ニ並ぶ。／環境ニ恵まれる。／変化ニ富む。／魅力ニ乏しい。／現状ニ不満な人。

これも、さきの場合と同じく、動作・状態についての表現の補強に他ならない。そして、さきに述べた、比較の基準を示す場合や、右に挙げた、状態のあり方を示す用法では、「ニ」は、形容詞・形容動詞にもかかりうる。この点は、ここにとり上げた、一群の格助詞「ヲ」「ニ」「ヘ」の中で、「ニ」だけがもつ、一つの特徴である。

「ニ」のまわりには、「ニよって」「ニ関して」「ニおいて」「ニ際して」「ニ当って」「ニ及んで」「ニ対して」「ニ反して」「ニして」など、論理関係や情況などを示す語句が、さまざまに構成されている。さらに、副詞の語尾として、様子・状態・程度を示す用法も持っている。「すぐニ」「常ニ」「互いニ」「ことニ」「特ニ」「だんだんニ」「たちまちニ」「めちゃくちゃニ」「一般ニ」などは、その例である。いわゆる形容動詞の連用形の一種とされる「正直ニ」「静かニ」の「ニ」も、元来は、右の副詞語尾の「ニ」と同じ性格のものである。

なお、文語調の固い言い方では、活用語に直接つく、つぎのような形が見られる。

この調査の目的は因果関係を明らかにするニあります。／悲惨な事故を生み出すニ至った。／このたび、社長の任につくニ当りまして／外国の援助なしニ生産することは不可能である。

以上、格助詞「ニ」の、一般的な用法について検討してきたが、特殊な用法としては、「ニハ」などの形で、動作の主体を示す、尊敬の表現がある。

陛下ニは、本日、午前十時靖国神社に行幸あらせられ／畏きあたりニおかせられましては、皇祖皇宗の御霊に、国家安泰を御祈願遊ばされ

これらは、皇室敬語特有な言いまわしとして用いられてきたものであり、動作の主を、主格として直接示さず、その存在の場を「ニ」格で示すことによって、主体を間接的に暗示する表現である。

また、「ニテ」の形で、場所や時・手段などを示す用法もあるが、これは、書簡や、文語調の文章にみられるもので、普通の会話には使われない。

五日、ワシントンニて。／これニて、失礼いたします。／十八歳ニて、上京。／特急・富士ニて帰京。

などがその例である。

このほか、「おせんニキャラメル」「御飯ニ味噌汁ニお新香」「大人二枚ニ、子ども一枚」といった、累加、ないしは添加を示す用法もある。本来は、「それニ」「その上ニ」などの格助詞「ニ」と同類の用法であるが、現代語では、並立助詞として扱うべきものであろう。

なお、慣用的なものとしては、「降りニ降る」「負けニ負ける」「泣きニ泣く」など、強調する気持をこめた、特殊な用法も認められるが。しかし、これは、文学的な言い方であり、会話に用いられることはない。

格助詞の「ヘ」も、今まで述べてきた「ニ」と同じように、間接的な目的語を導くものであるが、「ヘ」の用法は、移動的な動作ないしは、継続的な作用の場合に、ほぼ限られている。これは、「ニ」の方は、本来、存在の場や帰着点、

あるいは、比較の基準などを、静的に定位するものであるのに対して、「へ」は、基本的な性格として、動的な指向性や経過性をもっているからである。

「へ」は、まず、動作の向けられる方向・作用の及んでいく対象・行為の働きかける目標などを示す。

顔を東へ向ける。／遠くへ目をやる。／未来へ希望を托す。／下の方へにらみをきかせる。／各方面へ影響する。／政府筋へ働きかける。／兄へ話を通す。

つぎに、移動性ないしは経過性の動作・作用について、その成りゆき・到達点・目標・結果などを示す。

台風が本土へ近づく。／決勝へ勝ち進む。／無人島へたどりつく。／密林へ分け入る。／噂が近所へ広まる。／採決へもちこむ。／信号が青から赤へ変わる。

また、動作の存在する場所を示す、つぎのような用法もある。

ここへサインをして下さい。／荷物は、玄関へ置いときます。／そのソファへかけてください。／傷口へ薬をつける。

以上挙げた「へ」の用法は、すべて「ニ」に、おきかえることができる。しかし、最初の用法の「顔を東へ向ける」「遠くへ目をやる」の「へ」を「ニ」に変えると、指向性が失われ、「東ニ」「遠くニ」は、動作の、単なる目標を示すに止まってしまう。二番目の用法の「決勝へ勝ち進む」には、一戦一戦勝ち抜いていくプロセスが感じられるが、これを「決勝ニ」とやってしまうと、プロセスは、全く消え去り、単なる到達点の表示に終わってしまう。「無人島へたどりつく」も同様に、「へ」には、「長い漂流の末」といったニュアンスが強く出てくるが、「無人島ニ」では、そのニュアンスが弱まり、単調に結末を述べた感じになる。したがって、これらの用法の場合は、たとえ、おきかえが可能ではあっても、両者の間には、やはり、相違があるとみるべきである。

しかし、「へ」の、最後の用法すなわち、「ここへサインをして下さい」の類は、むしろ「ニ」の方が落ちつく。実

際の会話などでは、しばしば見られる用法には相違ないが、「荷物を玄関へ置く」「いすへ腰をかける」は、なんとなく不安定な感じがする。これは、「ヘ」に、指向性・経過性といった動的な性格があるためであり、「行為の場」を示す用法では、やはり、静的な「ニ」を用いて「玄関ニ置く」「いすニかける」と言った方が安定する。

「ニ」になくて、「ヘ」のみにある、重要な用法は、

未来ヘノ希望／独立ヘノ歩み／ヨーロッパヘノ憧れ

右のような「ヘノ」の形である。

もう一つは、つぎのような呼びかけの用法が挙げられる。

音楽愛好家の皆さまへ！／白アリでお困りの方々へ！／御宿泊のお客様へ

「ニ」の場合は、「栄子様御許ニ」「兵ニ告ぐ！」などの表現はありうるが、これらは、呼びかけというよりは、やはり対象を示すものであり、いずれも、文語調のやや古めかしい言い方である。

いずれにしても、右の「未来ヘノ希望」「音楽愛好家の皆さまへ！」のような用法は、「ヘ」のもつ、指向性・経過性を端的に物語るものといえよう。

この逆に、「ヘ」にはなく、「ニ」のみに見られる用法としては、まず、存在を示す「テーブルニ花がある」「部屋ニ人がいる」の用法や、行為の目的・作用の出所を示す「娘ニ買物を頼む」「父の看病ニ泊りこむ」「人ニだまされる」などの用法が挙げられる。また、原因・理由・論拠あるいは比較の基準などを示す「戦争ニ傷ついた体」「調査ニ基く研究」「透明ニ近いブルー」といった用法も、状態のあり方を示す「変化ニ富む」「魅力ニ乏しい」「現状ニ不満な人」のような用法も「ヘ」にはない。したがって、形容詞や形容動詞にかかるような形も、「ヘ」には生じない。

結局、こうして検討していくと、「ニ」の広範な用法の中で、「ヘ」と重なる部分は、動作の目標・対象あるいは到達点などを示すような、動きのある動作・作用の場合に、ほぼ限られてくる。[8] そして、その例外は、さきの「いすへ

腰をかける」といった、動作の存在する場所を示す用法であるが、これを別とすれば、たとえ重なった部分においても、なお、「ニ」は静的に対象を示し、「ヘ」は動的にそれを示すといった微妙な相違を秘めている。したがって、前に、「ヲ」の説明のさいに挙げた、「米洗ふ前ヲ(ニ・ヘ)螢が二つ三つ」について、「ニ」の場合と「ヘ」の場合とを比べれば、「ヘ」の方には、ホタルの動きが感じられるが、「ニ」の場合は、動きが感じられない(ホタルは死んでいる)ということになるわけである。

格助詞「デ」「カラ」「ヨリ」「マデ」も、動作・作用の道具立て、背景を整え、その表現を支える助詞群である。このうち「デ」は、その使用が、日常の会話や、それに近い、柔かい文章に、ほぼ限られ、演説・講演のような、改まった話や、法令文・学術論文などの固い文章には、あまり用いられない。この点に、「デ」の大きな特色がある。

たとえば「デ」は、動作・作用の場や、時・期間・期限などを示すが、

式は、体育館デ行います。／委員会デ検討する。／政府デ対策を決める。／現在デは、みんな知っている事実だ。／三年デ卒業する。／きょうの正午デ締め切らせていただきます。

これらの、それぞれには、「式典は体育館ニオイテ挙行する」とか「本日、正午ヲモッテ締め切る」といった、固い言い方が対応していることが多い。また、右の例のうち、「委員会デ検討する」「政府デ対策を決める」は、「委員会ニオイテ」「政府ニオイテ」ととれば、動作の場を示す用法であるが、「(理事会でなく)委員会ガ検討する」あるいは「政府トシテ対策を決める」の意味の場合もある。この場合の「デ」は、動作主体の立場を示すものといわれるが、元来は、動作の場を示す「デ」から派生した用法である。

同じく、動作の場を示す「デ」につながるものとして、

こんな状態デ勉強なんかできない。／そのままデ十分ほど冷やしなさい。／二人だけデ話し合おう。／普通の速さデ歩いて五分ほどだ。／暗い気分デ帰って来た。

など、動作の行なわれるさいの状態・雰囲気・態度などを示す用法がある。
「デ」には、また、手段・道具・材料など行為を成り立たせる要素を示す用法もある。

右手デなぐる。／新車デドライブに行く。／カメラデ写す。／大声デ叫ぶ。／水デ溶かす。／折り紙デ鶴を折る。／酒は米デつくられる。／6を2デ割る。

この用法からは、原因・理由・動機・論拠あるいは、基準などを示す用法が出て来る。

殺人罪デつかまる。／かぜデ休む。／憲法デ保証された権利／この発明デ巨万の富を築いた。／最低点デ合格した。

この種の用法の場合は、つぎのように、形容詞・形容動詞にもかかりうる。

夜空が火の粉デ赤い。／停電デ町が暗い。／ホールが人デ一ぱいだ。／豊作続きデ豊かな村。

などが、その例である。
以上、格助詞「デ」の用法を一通り眺めてみたが、「デ」は、さきの「政府デ(ニオイテ／トシテ)対策を決める」の例でもわかるように、全般に、関係の限定性が、かなりアイマイなところがある。たとえば「( )デ暴動が起った」「塩は( )デ作られる」の( )内には、つぎのように、さまざまなものが入りうる。そしてそれらには、

中東デ(ニオイテ)
圧政デ(ニヨッテ)　｝暴動が起った。
凶作デ(カラ)

　　　工場デ(ニオイテ)
塩は｛電気デ(ニヨッテ)｝作られる。
　　　海水デ(カラ)

のように、「デ」よりも、関係の明確な、限定された言い方が対応しうる。これは、一面からみれば、「デ」は、表現内容の豊かな助詞だとも見られようが、表現の明確さという観点からみれば、決してプラスにはならない。こうしたアイマイさも、論理関係の明確さが重んじられる場合、たとえば、講演とか論文などで、「デ」が避けられる一因となっていると考えられる。

しかし、このアイマイさも使い道がないわけではない。ひところ、「おかあさん、横断歩道デ渡ろうよ」という交通安全週間の標語があった。これを、もし「横断歩道ヲ渡ろうよ」と、単なる目的語の「ヲ」でやってしまっては、論理関係ははっきりするかもしれないが、標語として、ちっともおもしろくない。ここに「デ」を用いたことによって、動作の場を示す「(渓流を)吊り橋デ渡る」といった用法ばかりでなく、手段を示す「(激流を)小舟デ渡る」などの言い方にもつながりが生じ、あたかも、「(車の奔流の中を)横断歩道にたよって渡りきる」姿が描き出されてくる。これは、「デ」のアイマイさ、別の面からみれば、その表現性の豊かさを上手に使った例といえよう。

なお、「デ」には、接続詞に転じた、つぎのような用法がある。

デ、あんたは、なんて答えたの?/デ、私に用って、どんなことですか。

これらは、接続詞「ところデ」「それデ」「そこデ」などを構成する用法から生じたものであるが、いずれも、うちとけた仲間うちの会話で、なんとなく話のつぎ穂を示したり、話題の転換をはかったりするときに用いられる。また、一般には、助動詞「ダ」や形容動詞の連用形とされる「デ」も、古代語の「にて」に由来する点で、「デ」と無縁ではない。(9)

英和辞典デ手ごろなのがほしい。/まっすぐデ細い竹/平静デはありえない。

などが、その例である。

このほか、標準的な言い方とは認められないかもしれないが、「みんなデ遊ぶ」「二人デ帰る」などには、「みんなシ

テ……」「二人シテ……」という形もある。

格助詞「カラ」「ヨリ」は「マデ」とセットになって、起点・終点、発端・結末、基準・限度などを表わす。これらのうち、「カラ」と「マデ」は、会話にも、文章にも広く用いられるが、比較の基準を示す以外の「ヨリ」は、演説・訓示のような固い話や、文語的な文章にかぎられ、日常の会話などには、あまり使われない。

東京カラ香港マデ飛ぶ。／病いを得てヨリ死に至るマデ詩作に専念し／手近かなところカラかたづける。／宮中ヨリお招きがあった。／英独仏はもとより、ロシア語・中国語にマデ手を広げた。／一カラ十マデ承知している。／一グラムカラ下は測れない。／最初カラ最後マデ

このような、起点・終点、発端・結末、あるいは、順序・経路・範囲などを示す用法から、動作・作用の基点や出所を示す用法が生じてくる。

窓カラテープを投げる／この観点ヨリ考えるに／先祖ヨリ子孫に伝わる家風／父カラ店をうけつぐ。／経済成長ヨリ生じた諸問題／学界カラ重視される研究／裁判所ヨリ提出させられた書類／経験カラ身についた技術

これらの用法は、また、原料・材料など、ある結果や状態を作り出す諸要素を示す用法にも関連をもつ。

澱粉は、いもカラ作る。／水は、酸素と水素カラなる。／資本家・経営者・地主ヨリ構成される階層／一万人カラの群衆

さらに、このような「カラ」「ヨリ」が論理的な事象の表現に用いられると、それは、論理の帰結や結論を導く、理由・根拠・動機・原因などを示すことになる。

かぜカラ肺炎になる。／話の行き違いカラ誤解が生じる。／以上の調査ヨリ推定いたしますと／公害カラ工業化への反省が起こる。

などは、その例である。

しかし、「カラ」「ヨリ」には、たとえば、「デ」の「木デ舟を作る」とか「かぜデ休む」といった用法にみられるような、ストレートに材料や理由を導く能力はない。これは、「カラ」「ヨリ」の、材料や理由などを示す用法は、本来、ある状態や結果がもたらされるに至った経緯のもととして、たまたま、材料や理由に当るものが導かれた場合に過ぎないからである。したがって、「海水カラ塩を作る」のように、変化のプロセスのある場合や、「労働者と農民ヨリなる組合」のように、客観的な存在として述べる場合は、「カラ」「ヨリ」でも、材料や構成要素を示しうるが、「木デ舟を作る」「労働者と農民デ組合を組織する」のように、変化の経路を経ない場合や、主体的な行為が働く場合には、「カラ」「ヨリ」で表わすことができない。まったく同様に、因果関係の場合も、「カラ」「ヨリ」で表現しうるものは、「かぜカラ肺炎になる」「実験結果ヨリ推定する」といった、経路や経緯を経て成立する因果関係に限られ、「地震デ倒れる」「殺人罪デつかまる」のように、直接の原因や根拠を表わすようなものは、表現できない。これは、結局、「デ」による、この種の表現の根底には、「手デ作る」「殺人罪デつかまえる」などの、手段・方法を示す用法があるのに対して、「カラ」「ヨリ」の方は、起点・発端を示す用法に由来するからに他ならない。

つぎに、「ヨリ」特有の用法には、比較の基準を示す用法があり、これは、しばしば「ヨリモ」の形でも現われる。

兄ヨリ弟の方が背が高い。／勉強ヨリモ運動が得意だ。／肉ヨリ野菜を好む。／動くヨリ話す方が疲れる。／安全に対してヨリモ利潤に目が向く。

会話には、ときに「ヨリカモ」「ヨリカ」などの形も現われるが、標準的な言い方とは認められない。

飛行ヨリカモ早い汽車／映画に行くヨリカテレビを見てた方がいい。

この、比較の「ヨリ」の特殊なものとしては、「ヨリ速く、ヨリ高く、ヨリ強く」「ヨリ豊かな未来を作る」のように、副詞的な用法がある。これは、翻訳調の言い方から、次第に定着してきたものであるが、助詞が語頭に位置する点で、日本語の造語法としては、きわめて珍しいものの一つである。

「ヨリ」による、比較の言い方は、たとえば「北部ヨリ南部が発展してきた」「空気汚染は、都心部ヨリ周辺部ニ広まりつつある」などの場合、範囲を示す表現とまぎらわしい。そのため、「Aノ方ガBヨリモ」「AヨリハBノ方ガ」のように、比較をはっきり表わす表現形式をとる方が望ましいとされている。

比較の「ヨリ」は、否定の表現と呼応すると、強い限定を表わす。この場合、「ヨリ他に」の形で出てくることが多い。

ここヨリ静かな所はない。／ただヨリ高いものはない。／あなたに頼むヨリほかに方法がない。／バスが不通なら、歩くヨリない。

このほか、比較の「ヨリ」をめぐるものとしては、境い目や限界を示す用法がある。

鎌倉時代ヨリむかし／リーダーヨリ前に出るな。／そこヨリモ、先に置いてくれ。／それヨリ以前にあったことがある。

などが、その例である。

「マデ」の用法に移ると、「マデ」には、初めに述べた、「カラ」「ヨリ」とセットになって、終点・結末・限度などを示す用法以外に、極端な場合を例示する用法や、程度を例示する用法をもつ。前者は、副助詞「サエ」に似た意味を表わし、「ニマデ」の形で使われることが多い。

息子マデそむく。／家出マデするとは思わなかった。／乞食ニマデ落ちぶれた。／法律マデ無視する思いあがり

後者は、副助詞「ほど」に似た意味を表わし、「マデニ」の形で用いられることが多い。

なんとか合格するところマデいっている／ひとに認められるマデニなる。／完膚なきマデニ打ちのめす。

この種の「マデ」が、否定の表現と呼応すると、「〜するに及ばない」「〜する必要がない」という意味を表わすよ

うになる。

いまさら言うマデもない。／そこマデ親切にすることはない。／苦労してマデ育てる気はない。／新しく買うマデのことはない。

右に挙げたような「マデ」の用法は、いずれも、副助詞的なものであり、これらは、また、「あくマデも」「どこマデも」「いつマデも」といった慣用的な語句を構成する。

以上、格助詞「カラ」「ヨリ」「マデ」の用法を検討してきたが、形の上では、

花が咲いてカラ実がなる。／上を見るヨリ下を見ろ。／あなたが来るマデ待ちます。

のような接続助詞的な用法や、つぎのように、特殊な断定を表わす用法もある。

万事は、金がはいってカラだ。／この現象は、工業化が開始されてヨリであります。／高ければ、買わないマデだ。

格助詞「ト」の機能は、大きく二つに分かれる。その一つは、動作・作用の内容を導く機能であり、他の一つは、動作・作用の相手や対象を示す機能である。

前者は、語句ばかりでなく、文的な単位をも導く点に、大きな特色をもっている。

わたしは佐藤ト申します。／あなたの娘さんトばかり思っていました。／この調査は信用できないト考える。／歩いても三十分トかからない。／いつも成功するトはかぎらない。

この場合、会話では、「トイッテ」のくずれた「ッテ」の形も用いられる。

ぼくは鈴木ッテいいます。／あとで金を渡すッテだましやがった。

この種の「ト」「ッテ」からは、

えっ、彼が死んだト？／お母さんがいらっしゃいッテさ。／えっ、合格だッテ？

のような、終助詞的な用法も生じてくる。また、「トイウ」「ッテ」の形で、同格を示す用法も見られる。
世の切手狂トイウ人種／その会社の、会長トイウ人／お前ッテ男は、ひどいやつだ。／十年ッテ年月がかかる。
あるいは、つぎのように係助詞的な用法もみられる。
雲ッテうごくんだな。／北海道ッテ広いのね。
このほかにも、動作・作用の内容や、引用を示す「ト」からは、伝聞を示す「トノ」、例示に使われる「トイッタ」、資格や立場を示す「トシテ」、あるいは条件を導く「トスルト」「トシテモ」「トアレバ」「トシタッテ」など、さまざまな慣用句が生じている。
あす到着トノことだ。／食うに困らないトイッタ暮しだ。／代表トシテ参加する。／入院したトシテモよくなるまい。／必要トアレバ援助は惜しまない。／相談するトシタッテ相手がいない。
一方、動作・作用の相手・対象を示す用法には、つぎのようなものがある。
恋人ト散歩する。／経営者ト交渉する。／敵ト戦う。／好景気も国民生活の向上トは結びつかなかった。／野球熱は名選手の輩出ト相まって国中をわかせた。
この用法からは、「トノ」「トトモニ」などの形が生じてくる。
自分トノ戦い／技術的才能トトモニ経営の手腕を発揮する。／観光収入は、工芸品の収入トトモニ大きな財源だ。
また、対象を示す用法の中には、つぎのように、比較の対象を示す用法もある。
以前ト違って寄付が集めにくい。／先生トよく似た人／みんなト同じようにやる。／日本ト人口が等しい国。
このほか、変化の結果や帰着を示す用法も見られる。
天候が一変して暴風雨トなる。／交通事故で廃人ト化す。／今後、掲示は許可制トする。／一夜にして焼野原ト一変する。

以上、格助詞「ト」の用法を挙げてきたが、相手や対象、あるいは帰着を示す用法においては、
経営者ト(ニ)交渉する。／先生ト(ニ)よく似た人／暴風雨ト(ニ)なる。
のように、「ニ」に置きかえうることが多い。両者を比べてみると、まず、行為の相手を示す場合、たとえば、「経営者ト交渉する」は、対等の立場でやり合う意味合いをもち、「経営者ニ交渉する」は、相手に一方的にもちかけるニュアンスになる。したがって、対等の立場でしか成り立たない行為、すなわち、「弟トけんかする」などでは、「ニ」に置きかえられないし、逆に、一方的にもちかける行為、たとえば「兄ニケンカをふっかける」の「ニ」は「ト」に置きかえられない。

同様に、比較の対象を示すときも、「先生ト似ている人」は、ニュアンスとしては、「互いに似ている」といった意味合いであり「先生ニ」の方は、風貌が先生に近づいているといった意味合いになる。すなわち、「AはBト等しい」は、「互いに等しい」という事であり、「AはBニ等しい」は、AはBに次第に近くなって遂に等しいという結果になったといったニュアンスをもつとみられる。

最後の帰着を示すものも、「暴風雨ニなる」の場合は、次第に暴風雨という結果に至った、あるいは、自然にそうなったという意味合いであり、一方、「暴風雨トなる」には、「一転して暴風雨が吹き荒れる」といった気持が、根底にある。すなわち、「ニ」は、徐々に、自然に変化した結果を示すのに対して、「ト」は、転化を示すといいうる。したがって「災い転じて福トなす」の「ト」は「ニ」に置きかえられないし、「大人ニなる」の「ニ」は「ト」に置きかえられない。

なお、「ト」には、「しっかりト」「ざあざあト」「ねばねばト」のように、副詞を構成する機能もある。一方、「ッテ」特有な用法としては、「春ッテうごくんだな」「日本ッテせまいんだな」といった係助詞的な用法がある。

3 連体格助詞（付、準体助詞）

助詞「ノ」の機能のうち、「天気ノいい時」「雨ノ降る日」などの用法については、主格助詞の項で記述したが、「ノ」本来の用法である、連体格の場合、「ノ」は、つぎのように、さまざまな体言性の語句を導いてくる。

私ノ本／家ノ前ノ道／卒業生ノ大半／去年ノ流行／黄色ノ葉／必死ノ思い／平均五倍ノ競争率／二分ノ一／七時ノニュース／指と指とノ間

そして、被修飾語となる語について、その所属・位置・範囲・順序・状態・性質・数量・基準などを表わす。右のうち、状態・性質などを示す「ノ」は、いわゆる形容動詞の連体形語尾と似た性質をもち、「特別ノ（ナ）扱い」「突然ノ（ナ）事故」「わずかノ（ナ）礼金」のように、両様の形をもつものもある。特殊な例としては、「静かノ海」「豊かノ海」などの用法もみられる。

「ノ」の導く修飾格の多くは、右に述べたように、被修飾語となる体言の、何らかの属性を示すものであるが、中には、つぎのように、同格を示す用法もある。

主役ノ俳優／首席ノ生徒／会長ノ中村氏／赤ちゃんノライオン／お車代ノ名目でお礼を渡す。／のるかそるかノ勝負／「放送局」の異名をもつ奥さん／ビールノ冷たい奴をくれ。／雨降って地固まるノ巻

この用法の「ノ」からは、「彼の主張するトコロノ解決策」「経営者が目的とするトコロノ収益増」や「タバコは有害だトノ説」のような、関係代名詞的な言いまわしが生じる。

また、動作性の体言が、被修飾格に立つと、助詞「ノ」は、その動作の主体や対象を示す。

夫ノ帰りを待つ。／子どもノ成長が楽しみだ。／頭ノよさを発揮する。／焼け跡ノ整理をする。／事件ノ捜査に当る。／テレビノ見すぎだ。

これと同類のものとして、「九州へノ出張」「欧州でノ思い出」「弟とノけんか」「去年からノ値上がり」など、格助詞をともなう名詞句を、動作性の体言に導く用法もあげられよう。

なお、やや特殊なものとしては、

氷ノような手／右ノような事例／神ノごとき心／かくノごとき不祥事

など、「ようだ」「ごとし」につづく言い方もある。もちろん後者は、文語的なものに限られる。

以上のほか、「ノ」には、いわゆる準体助詞としての用法がある。

赤いノが私ノです。／手ごろなノを一つ選んでくれ。／最近ノから二首ばかり披露しよう。／雨で、出るノがおっくうだ。／まさに快挙というノニふさわしい。

これらの「ノ」は、形式名詞として扱われることもあり、「雨の(が)降るノはいやだ」「天気の(が)いいノはありがたい」のように、主述関係を構成する句を受ける用法も持っている。この場合は、準体助詞「ノ」によって形成される体言句は、右の「雨の↓降るノ」「天気が↓いいノ」の例でわかる通り、格助詞「ノ」「ガ」の両方を受けることができる。

しかし、これらと同系の、

ビールの冷たいノをくれ。／コーヒーの熱いノがほしい。／茶わんの、かけたノなんか捨てろ。／厚手のコートの、おやじの着てたノを出してくれ。

などの言い方においては、準体助詞「ノ」によって形成される、「冷たいノ」「かけたノ」などの体言句は、常に、格助詞「ノ」に導かれる句をうけて「ビールノ↓冷たいノ」「茶わんノ↓かけたノ」の形になり、格助詞「ガ」を受けることはない。これは、本来、「冷たいビール」「かけた茶わん」の体言が、準体助詞「ノ」に置きかえられて「冷たい

ノ」「かけたノ」となり、この体言句が、連体格助詞「ノ」に導かれる「ビールノ」「茶わんノ」を受けて成立するものだからである。そして、この場合の連体格助詞「ノ」は、「ビールノ冷たい奴」「茶わんノかけたもの」の場合と同じく、同格を示すものの一種である。

また、こうした用法の連体格助詞「ノ」は「デ」に置きかえることが可能であり、「茶わんノ、ひびのあるノは捨てろ」は、「茶わんデ、ひびのあるノ」ということができる。[10] さらに、このパターンの表現は、たとえば、「厚手のコートノ、おやじの着てたノを出してくれ」は、「厚手のコートデ、おやじの着ていたトコロノハコートを出してくれ」と、関係代名詞的な機能を内蔵していることも、注目すべきである。[11]

なお、準体助詞「ノ」の特殊な用法としては、「ノだ」「ノです」「ノである」「ノか」などの形で、左のように、理由や根拠の説明・問いかけを表わすものがある。

証拠があるから調べたノだ。／だから、我々は黙ってはいられないノです。／それですむと思っているノか？

この系統の「ノ」は、

おばあさんが、病気なノ。／いつまでに申しこむノ？／すぐあやまるノよ。

といった、終助詞としての用法につながる。

このほか、準体助詞「ノ」から生じた、つぎのような並立助詞的な用法もある。

ぶったノたたいたノいつも二人でさわいでる。／行くノ行かないノ、まだぐずぐずしている。

三　係助詞と副助詞

現代語の係助詞は、語句を、文のテーマ・題目として、どんな意味合いでとりたてるかというような、いわゆる提

題のしかたによって性格づけられる。もちろん、現代語の係助詞にも、あとに条件法を伴うとか、否定の表現と呼応するとかいうように、一定の叙述を求める性格は認められる。しかし、古語の係り結びに見られるような、係りと受けの間の明確な呼応現象は認められない。その結果、特に、現代語の場合には、係助詞と副助詞との区別は、あいまいになりやすい。

以下の記述においては、係助詞の性格を、もっぱら、語句をとりたてる提題の機能に求め、一定の叙述を誘導する呼応現象には重きをおかなかった。そのため、提題の機能において、類似性の認められるもの、たとえば「サエ」「スラ」「シカ」「ノミ」「ダケ」「キリ」の類は、係助詞と副助詞に分けずに、一括して扱った。これは、現代語において、微妙な類似性と対応性をもつ一群の助詞は、なるべく分けずに一括して記述し、その間の使い分けや、ニュアンスの相違を考察する便宜のためである。この結果、従来、副助詞として扱われていた、いくつかの助詞が、係助詞として扱われることになった。

また、係助詞の提題の機能を、題目提示のしかたから、つぎの四種に分け、それぞれを「特立提示」「限定提示」「非限定提示」「不定提示」と名づけた。

特立提示……語句を特にとりたてるもの。(ハ・コソ・ッテ・テバ・ッタラの類)

限定提示……語句を限定的にとりたてるもの。(サエ・スラ・シカ・ノミ・ダケ・キリの類)

非限定提示……語句を非限定的にとりたてるもの。(モ・デモ・シモ・ナンテ・ダッテの類)

不定提示……不定の語句をとりたてるもの。(カ・ヤラの類)

一方、副助詞については、その範囲を、ほぼ、程度副詞・情態副詞に当る意味合いの副詞句を構成するものに限定した。その理由は、副助詞の機能を、一般に行われている「語句に意味をそえる」とか「意味を限定する」というよ

うな観点から定義したのでは、古語から系統づけられる助詞のみを分類していく場合はともかく、現代語における副助詞の定義としては、その範囲が、あまりに漠然としていてとらえどころがない。このような見方でいけば、「今年あたり」の「アタリ」、「一人三冊あて」の「アテ」とか「今日かぎり」の「カギリ」とか、「三人分」の「ブン」、「東京・大阪等」の「等」など、さまざまな接尾的な要素のはいりこむ可能性があるばかりでなく、「詞的な語句に意味をそえる」という見方だけでは、副助詞の辞的性格も疑われてくる。

そこで、以下の記述では、副助詞の機能として、先に述べたように、副詞句を作る点を重視したわけであるが、「だ」「です」など、いわゆる断定の助動詞とともに、判断について限定や特殊な意味づけをする「〜するホドだ」「〜したバカリです」といった機能を無視するわけではない。しかし、この機能は、格助詞の一部にも、係助詞にも、かなり広く認められる機能であり、この機能の有無で副助詞か否かを決めるわけにはいかないので、これは、副助詞的用法として扱った。

また、格助詞や係助詞が、本来の用法、すなわち格表示や提題などの用法からはなれて、単に意味的な限定を表わす場合も、副助詞的な用法として扱うことにした。

1　語句を特にとりたてる係助詞（特立提示）

文の中の、特定の語句を、特にとりたてる係助詞として、代表的なものは、「ハ」と「コソ」である。「ハ」は、話しことば、書きことばを通じて広く使われるが、「コソ」は、主として、文語調の文章や、講演・演説のような、やや固い話に用いられ、慣用的なものは別として、日常会話や普通の文章には、あまり現われない。

わが党コソ国政を担当しうる唯一の政党であります。／外国にコソ大いに進出すべきである。／親なればコソそこまで心配してくれるんだぞ。／感謝コソすれ、だれもうらみはしない。

「コソ」には、また、文中における、特定の語句の提示というよりは、単に、ある語句を強調するだけの、間投助詞的な用法があり、これは、会話にも、しばしば現われる。

なによ、兄さんコソ、いじわるねえ。／いいえ、こちらコソ、どうも失礼いたしました。／よし、今度コソ、いいか見てろよ。

つぎに、係助詞「ハ」であるが、これは、

鯨ハ哺乳類である。／雪ハ白い。／悪い事ハするな。／これにハまいった。／住民の多くハ失業中だ。／あまり旅に出たくハない。／嘘ハ、いつかハばれる。

など、単に、特定の語句を、とりたてて示す機能のほか、つぎのように、対比的ないしは対照的に示す機能をもつ。

赤ハ止まれ、青ハ進めの信号だ。／ぼくハ行くが、君ハ待ってろ。／左からハトラック、右からハタクシーが来た。／娘ハ家出して、息子ハぐれてしまった。

この点が、「コソ」など、この類の他の係助詞とは異る、「ハ」の一つの特色である。

「ハ」には、また、左に示すように、独特な論理を構成する機能がある。

ぼくハうどんだ。／十月といったら、山ハ冬です。／朝ハ五時起き、夜ハ内職の毎日だった。／東京ハ神田の生まれだ。／国の交戦権ハ、これを認めない。

いずれも、格関係に置きかえて説明しきれない独特な構文であり、これらを含めて、「ハ」は、文の題目、テーマを提示し、あとに、それについての説明を従えるところに、その基本的な性格がある。

右のほか、「トハ」の形で、命題や定義の主題をとりあげる用法、「テハ」の形で、条件を示す用法もある。

忘却トハ忘れ去ることなり。／人生トハすばらしいものだ。／すべてが順調にいくトハかぎらない。

などは、前者の例であり、

万一、見落しがあっテハたいへんだ。／町に出テハ買物をする。／この部屋にはいっテハいけない。は、後者の例である。

なお、うちとけた会話や、乱暴な言い方では、「ハ」は、しばしば「ア」と発音され、右の「トハ」は「タア」、「テハ」は「チャア」となることがある。

昔アにぎやかな町だった。／くるまタア便利なもんだ。／こう言っチャア悪いが、君を信用できないんだ。

以上、「コソ」と「ハ」の用法を述べてきたが、この両者の重なった「コソハ」の形は、特定の語句を、特に強調的にとり立てるさいに用いられる。稀に「コソガ」の形もある。

この発明コソハ、まさに革命的な発明であった。／来年コソハ合格するぞ。／完成することコソガ恩に報いる道だ。

また、主として、会話だけに現われる、この類の係助詞には、「ッテ」「テバ」「ッタラ」がある。いずれも、「とって」「といえば」「といったら」などから生じて来たものであり、これらは、

算数ッテ大きらいさ。／佐藤さんテバまた入選よ。／主人の会社ッタラ、サラリーとても安いのよ。

のように、主語に当る語句を、文の主題として、とりたてる用法に、ほぼ限られる。しかし、これらの係助詞の特徴は、むしろ、

彼女が結婚したッテほんとかい？／人気があるッテバ、やっぱり野球の方が上だろう。／あの映画、くだらないッタラありりゃあしない。

など、文的な単位を導きうる点にある。

以上、語句を、特にとりたてる機能をもつ係助詞について述べてきたが、これらの係助詞で、主語に当る句が、文

の使い分けについては、多くの研究がみられる。[12] その主要な論点は、ほぼ、つぎのように整理しうる。

の主題としてとりたてられる場合、主格助詞との異同や、使い分けが、しばしば問題になる。中でも、「ハ」と「ガ」

a 「ハ」は既知の情報を提示し、「ガ」は未知の情報を提示する。

この区別の説明のために、よく引用されるのは、「おじいさんとおばあさんガありました。おじいさんハ山へ柴刈りに、おばあさんハ川へ洗濯に行きました」という例文である。すなわち、未知の話題の提出では、「おじいさんとおばあさんガありました」と「ガ」が用いられ、既知の場では、「おじいさんハ」「おばあさんハ」と、「ハ」が使われるというわけである。

社長ハどなたですか。(既知＋未知)↓社長ハ田中です。(既知＋未知)

どちらガ社長さんですか。(未知＋既知)↓わたしガ社長です。(未知＋既知)

英語ハどうですか。(既知＋未知)↓英語ハできます。(既知＋未知)

何語ガできますか。(未知＋既知)↓ロシア語ガできます。(未知＋既知)

だれガ、どうした。(未知＋未知)↓幸子ガおぼれた。(未知＋未知)

といった、質問・応答における「既知＋ハ」「未知＋ガ」の組合わせパターンから、「ハ」と「ガ」の性格をとらえる考え方も、この系統に属するものである。また、不定詞や疑問詞の類が、「ガ」の場合は先行し、「ハ」の場合は先行しないという説なども、同系のものといえよう。結局、この立場に立てば、「ハ」と「ガ」の違いは、聞き手の観念の中に、主体(主語)があるか、ないかの違いだということになる。

b 「ハ」は、文の主題・題目を提示し、それについての説明をあとに従えるのに対して、「ガ」は、単なる叙述の主体(主格)を示す。

この考え方から、現象をありのままに写す「桜ガ咲いている」の類は、現象文とか無題的叙述と呼ばれ、「桜ハ植物

だ」の類は、判断文とか題示的叙述などと名づけられる。さらに、「桜ハ咲いている」も、「桜ハ?」というテーマについて、その説明・判断を求めるものであり、その結果「咲いている」を選んだ判断文の一とする。こうした点で、「ハ」による題目の提示については、その排他的・強調的な性格が指摘され、「ガ」による主語の提示は、選択が自由で、平説(松下文法の用語)であるとされる。

なお、「太郎ハ学生です」など「ハ」によってとりたてられる主題のほかに、「太郎ガ学生です(この中で太郎ダケガ学生です)」のような「ガ」によるとりたてを認め、これを総記と呼んで、「太郎ガ来ました」といった叙述と区別する考え方もある。

c　眼前の事実の描写のように、現場的な叙述には「ガ」が用いられ、固定した観念の叙述など、非現場的なものを述べるときには「ハ」を用いる。

これは、「私の家ハ傾いている」は、必ずしも、眼前に見ていなくても、どこでも言いうるが、眼前に見ている「あっ、私の家ガ傾いている」は、「ガ」でしか表現できないという事実を指摘するものである。たとえば、多数の人の写った、写真で探していって「あっ、これガおじいさんだ。隣ハおばあさんよ、きっと」というようなときの、「ガ」と「ハ」の説明にも使われる見方である。すなわち、観念として固定化しないうちは、「これガおじいさんだ」と「ガ」が用いられ、固定化すると、「隣ハおばあさんよ」となるというわけである。

この考え方は、さらに、眼前のものでも、それについての性質や感想などを述べる段になると、観念として一応固定化してくるため、「ああ、このバラハみごとですね」のように、「ハ」で表現しうるという論に発展する。

d　接続関係などの場合を除き、一般に、「ガ」は従属節の中に収まりうるが、「ハ」は、従属節の中に収まらず、文の終わりまでかかって一定の言いおさめ(陳述)を要求することが多い。

たとえば、漱石の「坊つちやん」の「母ガ病気で死ぬ二三日前台所で宙返りをしてへつつい の角で肋骨を撲つて」

の「ガ」を「ハ」に入れかえてみると、構文が、がらりと変わって、「宙返りをし」たのも、「肋骨を搏つ」たのも、「母」ということになってしまう。このように「ハ」の影響力は、文末まで及びうるばかりでなく、

雨ガ降っていますよ。——雨ハ降っていませんよ。

子どもガ夜ふかしする——子どもハ夜ふかしするな。

のように、文末に、一定の表現を要求する力がある。

一方、「ガ」は、さきの「母ガ死ぬ二三日前」の例でもわかる通り、手近かな用言と結びついて、従属節の中に収まりやすい。特に、連体修飾の従属節では、この傾向が著しい。これは、主格助詞「ガ」は、もともと連体格助詞から発達してきた、という「ガ」本来の性格によるとされている。

2 語句を限定的にとりたてる係助詞(限定提示)

主として、程度を限定してとりたてるものに「スラ」「サエ」があり、範囲を限定するものに「シカ」「ダケ」「キリ」「ノミ」がある。

「スラ」は限度を示し、「サエ」は添加を示すのを本義とし、前者は打消と呼応し、後者は、条件法と呼応することが多い。

一桁の掛け算スラできない。/能力はあるのだから、勉強サエすれば成績はよくなる。

などが、その典型的な用例である。両方とも、極端な場合を例としてとり上げる用法をもっているが、「スラ」は、極端な例を強調してとりたてるニュアンスが強く、「サエ」は極端な例から、他を暗示し、類推させるニュアンスをもつ。

世話してやったのに、礼状スラよこさない。/貯金どころか、仕入れの金にサエ、ことかくくらいだ。

そして、どちらかというと、「スラ」の方が、やや固い言い方であり、「サエ」は、話しことば的な言い方である。

つぎに、「シカ」「ダケ」「キリ」「ノミ」であるが、これらのうち、「シカ」は、特にきびしい限定を表わし、打消の表現と呼応して、とりあげたもの以外をすべて否定するニュアンスをもつ。

君シカ信用できない。／家族の事シカ考えられない。／あと、一週間シカない。

「ダケ」は、範囲や程度を限るものであり、右の「シカ」と重なった「ダケシカ」の形で、強調的な限定を示すこともある。

役員ダケ交替する。／一週間ダケ待ってくれ。／借金の一割ダケシカ返していない。

「キリ」は、語句を限定してとりあげ、それ以外を無視するニュアンスをもち、常に、打消の表現と呼応する。話しことばでは、「ッキリ」と発音されることが多い。

われわれ三人キリ、この話は知らない。／薄いシャツッキリ、着ていない。／試験まで、一カ月キリない。

「のみ」は、さきの「ダケ」と同じように、範囲・限定をかぎるものである。

水と食糧ノミ補給する。／老人ノミあとに残されている。

以上、述べたもののうち、「シカ」「ダケ」「キリ」は、いずれも、話しことば的な、くだけた言い方であり、正式の文書や論文などには用いられない。それに対して、「ノミ」は、文語的な、やや古風な言い方で、日常の会話などには、現われない。なお、「ノミ」は、「ノミナラズ」の形で、「ひとり我が校ノミナラズ……」のように、慣用的に用いられることがある。

「ダケ」「キリ」「ノミ」には、また、つぎのような、副助詞的な用法もみられる。

読むダケでなく自分でも小説を書いている。／できるダケやってみるが、自信はない。／二、三年前、一度あったキリです。／十年前、別れたキリになっている。／もはや、国交断絶あるノミだ。

3　語句を非限定的にとりたてる係助詞(非限定提示)

特に、意味的な限定や特定をせず、むしろ例示的ないしは暗示的に、語句をとりたてる、一群の係助詞がある。「モ」「デモ」「シモ」、「ナンテ」「ナド」「ナンカ」「ダッテ」「トテ」「ナリト」などが、それである。

これらのうち、まず「モ」「デモ」は、同類を暗示しつつとりたてるもので、

弟モ野球が好きです。／ついでに南米モまわって来た。／ちょっと雑誌デモ見ていてくれ。／旅行にデモ出かけたのかな。

などが、その例である。「モ」は、添加・累加あるいは共存といったニュアンスで語句をとりたてるもので、

老人モ子どもモ働いている。／本モノートモ忘れて来た。／金モないし、食物モない。／だれモかれモ大喜びだった。／死ぬモ生きるモ一しょだ。

のように、同類の語句を、対句的に並べ立てて提示する用法をもつ。

しかし、「モ」の、最も重要な性格は、総括的ないしは添加的なニュアンスで、文の題目を提示する点にあり、これは、「ハ」の、対比的・対照的あるいは特立的な提題に対応するものである。

これでアジアモ当分の間、平和だろう。(これでアジアハ当分の間、平和だろう。)

弟の方モ結婚して一人前にやっている。(弟の方ハ結婚して一人前にやっている。)

遊ぶのモいいが、仕事を忘れるな。(遊ぶのハいいが、仕事を忘れるな。)

花モきれいだし、実モうまい。(花ハきれいだが、実ハまずい)

一方、「デモ」は、例示の意味合いで、語句をとりたてるものであり、つぎのように、例示や選択の対象を並べてとりたてる用法、

矢デモ鉄砲デモ飛んで来い。／テニスデモバレーデモ好きなスポーツをしていい。／パンデモ御飯デモ結構です。

あるいは、条件を例示する用法ももっている。

たとえ悪条件デモ弱音をはくな。／わざは未熟デモ闘志のあるやつは手ごわい。／好きなたばこデモ当分はがまんしろ。

しかし、「デモ」の一番の特色は、気軽に手近かなものを例としてとりあげるニュアンスをもち、時に、やや投げやりな口吻が感じられることである。

菓子折デモ持ってちょっと頭を下げてこい。／カゼをひいたら、玉子酒デモ飲んで寝てしまうがいい。／地元の商業学校デモ出て親の店をつぐのが常道だった。

こうしたニュアンスがあるため、「デモ」は、どちらかというと話しことば的なくだけた言い方であり、固い文章や、改まった談話には、あまり用いられない。

また、「モ」「デモ」には、極端な例や特殊な場合を、ひき合いに出して、他を推しはからせる用法がある。

死に至ることモありうる。／子どもデモわかる理屈だ。／五メートル先モ見えない濃霧。／入院中デモ執筆を続けた。

この用法からは、不定詞と響き合って、全面的な否定や、強い肯定を表わす、つぎのような用法が生じてくる。

何のとりえモない絵だ。／どこにデモ売っている。／いつモおしゃれをしている。／だれデモあきれかえるような話だ。／何人モ否定しえない。

「シモ」も、ほぼ、「デモ」と同じような性格をもつ助詞であるが、現代語には、「だれシモ」「今シモ」「折シモ」「必ずシモ」「まだシモ」など、慣用的な形が認められるのみで、

だれシモ故郷はなつかしいものだ。／今シモ太陽が西の山の端に没しようとする時／キャンプ場よりは、まだシ

モ東京の方が何でも安かった。

など、やや古風な固い言い方として残っている。文語文的な言いまわしとしては、稀に、

それをシモ人々は目のかたきにした。／時期尚早の感なきにシモあらずだった。

といった例も見られる。

つぎに、「ナンテ」「ナド」「ナンカ」「ダッテ」「トテ」「ナリト」の類であるが、これらは、いずれも、本来は、引用を示すものであり、それから転じて、文の題目をとりたてる用法をもつにいたったものである。これらのうち「ナド」「トテ」「ナリト」は、文章や改まった会話にも見られるが、その他は、全般的に、きわめてうちとけた言い方であり、正式の文書や、改まった固い談話には、ほとんど現われない。

彼ダッテ課長になれば一通りのことはできるさ。／旅行の時ナド便利なかばんだ。／あいつにだまされたナンテお前もあまいな。／警察側トテ無警戒ではなかったが、虚をつかれた形だ。／せめて電話ナリしてくれればよかったのに。

などが、その例である。「ナド」には、やや古風な形として「ナゾ」「ナンゾ」の形もある。また、「ナリト」は、現代では、右のように、「ナリ」の形で用いられることが多い。いずれも、例示の意味合いで、語句をとりたてるもので、他に同類・同種のものごとがあることを、言外に暗示する性格をもち、例示の対象や選択の対象を並べたててとりあげたり、それらを総括する用法もある。

電車ダッテバスダッテ一時間はかかる。／和室ナリ洋室ナリ好きなへやを使ってくれ。／桜・梅・桃ナド、さまざまな木が植えてある。

右のような用法の「ナリ」は並立助詞として扱われることが多いが、「ダッテ」は、いわゆる同位格として扱うべきものであろう。

また、さきの「デモ」と同じように、特殊な例や極端な場合をあげて、他を推しはからせる、つぎのような用法もみられる。

小学生にダッテできる問題だ。／一言も相談しないナンテ人をばかにしている。／今さら田舎の支店ナンゾに行けるかい。／ちょっと目を通すナリ、ミスを防ぐ努力をすべきだった。

このほか、「ダッテ」「ナリト」「トテ」には、不定詞と結びついて、全面的な否定や、強い肯定を表わす用法がある。

何ナリト希望があれば言ってくれ。／いかに税関トテそこまでは目が届かない。／いくらダッテ協力するよ。／だれダッテことわると思う。

以上述べた、「ナンテ」「ナド」「ナンカ」「ダッテ」「トテ」「ナリト」に共通する、係助詞としての基本的な機能は、大ざっぱに概括的に、語句を文の題目としてとりたてる点にあり、時に、やや軽視した口吻や、軽蔑したニュアンスを伴う特色が見られる。

父の財産ナンカあてにしていません。／大学ナド、無理して行くことはない。／弁護士ダッテ金持ちの味方さ。／大病院トテ名医が揃っているとはかぎらない。／ゴルフナリ、なんナリ、暇つぶしにやったらどうですか。

こうしたニュアンスを伴うため、この種の助詞を用いた言いまわしには、話や文章の品位を低める働きがある。

4　不定の語句をとりたてる係助詞（不定提示）

「誰カ助けてくれ」「何ヤラ動いているぞ」のように、不定の語句をとりたてるものに、「カ」と「ヤラ」がある。これらは、

いつの事件カよく知らない。／何人いるカ数えてください。／何のことヤラさっぱりわからない。／どこへ行く

のヤラ大きな荷物をもっていた。

など、不定詞とともに用いられるほか、つぎのように、不定詞のない用法ももっている。

雨あがりのせいかたくさん芽が出た。／急いだからかめがねを忘れて来た。／劇の練習とヤラ言っていた。

このほか、選択の対象を示す、並立助詞的な用法、

イエスカノーカはっきりしろ。／生きるカ死ぬカそれが問題だ。／暮していけるのヤラどうヤラ心配なことです。

あるいは、つぎのように終助詞的な用法もある。

借金するあてがあるのかと思った。／あの娘もどこでどうしているのヤラ。

また、特殊な形としては、「行くカもしれない」の「カモシレナイ」、「なんだカこわくなってきた」の「ナンダカ」、あるいは「ナニカナシ」などがある。「ヤラ」にも、「どうヤラ落ちついた」の「ドウヤラ」や、「その子の後見人トヤラがやってきた」の「トヤラ」などの慣用的な用法がみられる。

いずれにしても、「カ」に比べると、「ヤラ」は、全般に古風な言い方であり、現代では、しだいに、慣用的な用法に限られてくる傾向がみられる。

5　副助詞とその用法

副助詞の用法上の特徴は、一つは、副詞句を構成することであり、他の一つは、「だ」「です」の類を伴って、限定的な判断を示す点にある。

びっくりするホドよく食う。／百万円グライかかる。／立っていられないクライ疲れている。／泣かんバカリ感激していた。

などは、前者の用法であり、文法上は、程度副詞・情態副詞に当る副詞句を構成する用法である。また、後者の用例

としては、つぎのようなものがある。

子どもの体位の向上はおどろくホドだ／。工事期間は二年グライでしょう。／一時間前に行っても座れないクライだ。／感激して手をとらんバカリだった。

いずれも、動作や状態の程度を表わしたり、大よその数量を示したりするものである。

「ホド」には、このほかに、

銀座ホドにぎやかではない。／広さは、日本の九州ホドです。／去年ホド忙しい年はなかった。

など、比較の基準を示す用法、あるいは、

もうかるホド税金で苦しめられる。／かわいがるホドなついてくる。／勉強すればするホド実力がつく。

のように、一方の程度の高まりに伴って他方も高まるという状態を表わす用法がみられる。

「クライ(グライ)」にも、つぎのように、比較の基準を示す用法が見られる。

先月クライ売れれば二三カ月で黒字になる。／あいつクライ無駄使いをする奴はいない。／大きさは、大体ねずみグライだ。

「クライ」には、このほかに、ものごとを例示して程度を示す用法がある。

新聞とあとは週刊誌クライしか読まない。／礼状グライよこせばいいのに。／家にいるのは正月グライだ。／そんなもの買うグライなら旅行にでも行くよ。

などは、その例である。

つぎに、「バカリ」であるが、これには、対象・範囲・状況などを、極度に限定する、つぎのような用法がみられる。

文句バカリ言うやつだ。／遊んでバカリいる。／金持ちバカリ相手にする。／困るのは貧乏人バカリだ。

こうした用法からは、「バカリダ」などの形で、一途に進行する成り行きを表わす言い方、

病気は重くなるバカリだ。／あの役者の人気は落ちるバカリです。／先進国と途上国の差は開くバカリである。

さらには、「バカリニ」の形で、事態が悪化した主な原因を示す言い方が生じてくる。

遅刻したバカリニ外回りをさせられた。／賛成したバカリニ世話人にされてしまった。

などは、その例である。

また、動作や状態の直前あるいは直後を示す、つぎのような用法をもつことも、「バカリ」の一つの特徴といえよう。

いつでも出発するバカリになっている。／今にも飛び立たんバカリの姿勢だ。／検査したバカリで結果はまだ出ない。／先月、就任したバカリである。

以上のほか、さきに、「東京カラ大阪マデ」といった起点・終点を示す用法を重視して、格助詞として扱った「マデ」や、提題の機能に着目して、係助詞に含めた「ダケ」「キリ」「ノミ」「ナド」「ナンカ」あるいは「カ」「ヤラ」などには、つぎのように副助詞としての用法もある。

鴨居に背がとどくマデに成長した。／もはや死を待つマデだ。／試験は、あと一課目ダケを残すノミだ。／試合は、あと二回キリだ。／出かけたキリ帰って来ない。／紙ナドで作った人形ナンカを並べている。／だれヤラと相談するっていっていた。／ストがいつ終るカに関心が集まっているが、問題はどう解決するカである。

また、「ズツ」「ドコロ」なども副助詞として扱われることがある。「ズツ」は、つぎのように、同一の数量での割当て、あるいは、同一のペースでの繰返しなどを表わす。

いすには三人ズツ腰掛けてください。／視力は少しズツ回復している。／毎日十ページズツ訳していく。

一方「ドコロ」の方は、

中堅ドコロの会社／あの学校は、まあ三流ドコロだ。

のように、大まかな程度を表わす用法や、つぎのように、否定的な例示を表わす用法をもつ。

忙しくてマージャンドコロじゃない。／一カ月ドコロか、もう半年も音沙汰がない。

しかし、こうして、副詞句を作る辞的な単位を、つぎつぎに副助詞に繰り入れていくと、副助詞は、際限なくふくらんでしまう可能性がある。と同時に、現在、副助詞として扱われているものの中にも、詞(自立語)の意味的な面のみに関与し、その辞的性格の疑われるものが少くない。そうしたあいまい性と包容力の豊かさが、副助詞の一つの特色ということができる。

四　並立助詞と接続助詞

1　接続の機能

一般に、接続の機能は、形の上から「語句の接続」と「文の接続」とに分けられる。接続助詞・並立助詞が、分担するのは、この中の「語句の接続」の方のみであり、ここに接続詞の機能との間に、大きな違いがあるとされている。したがって、本来、接続助詞とされるものであっても、それが、文の接続を担当して文頭に位置する場合、たとえば、

放火の疑いがある。が、目下調査中だ。／「熱はないわ」「けど、まだ頭痛がする」

の「が」「けど」などの用法は、接続詞としての用法と扱われる。これは、結局、助詞は文頭に立たないとする文法論の理論上の帰結であって、接続助詞に属する個々の語の機能を考える場合には、当然、こうした用法も含めて検討する必要がある。

つぎに、文中において、接続によって生ずる句(文節)と句の間の関係は、構文論のうえで、「対等の関係」と「従属の関係」に分けられる。

対等の関係での接続は、「同等の接続」とも呼ばれ、この関係で結びついた語句は、構文上、常に一体となって働き、主語・述語・修飾語といった、いわゆる文の成分を構成する。

今日来るか明日来るかが、わからない。／彼女は、上品で美しい人だ。／東京および横浜に滞在する予定です。

また、前件と後件との独立性が強く、入れ替えが可能なことも、その特徴とされる。

一方、従属の関係での接続は、「条件の接続」とも呼ばれ、先行句は後続句に従属し、両者の間には、修飾関係などと同じような、かかり受けが認められる。

雨が降るので、中止します。／大火災が起り、町が灰になった。／汽車に乗り、そしてバスに乗りかえる。

また、この場合は、前件と後件との間に、一定の限定関係があるため、対等の関係の場合のような形での入れかえはできない。

さきに述べた、対等の関係での接続(同等の接続)は、体言・用言をはじめ、さまざまな語句について成り立つが、従属の関係での接続(条件の接続)は、用言性の語句の場合に限られる。この点に注目して、橋本進吉は、対等の接続を担当する助詞を「並立助詞(対等助詞)」とし、並立助詞と接続助詞の別を立てた。それ以前は、例えば、山田文法では、右の並立助詞に属するものは、格助詞・副助詞・間投助詞として扱われていた。

なお、「接続助詞」の名称は、山田孝雄が、はじめて用いたものであるが、松下大三郎は、格助辞に含め、安田喜代門は、法助詞の名を与えた。時枝誠記は、「同時的に存在する動作および行為、あるいは時的に継起する事柄と事柄との関係の認定を表わす助詞」のみを接続助詞とした。

ここでは、現代語の接続表現における、この種の助詞の機能を、表現に即して、なるべく、幅広く考察する立場から、並立助詞・接続助詞の別を認めたうえで、一応、つぎのような定義を与えておくことにする。
○対等の関係での接続を担当する助詞——並立助詞（句を列挙する機能をもつ）
○従属の関係での接続を担当する助詞——接続助詞（後続句を帰結として先行句を導く機能をもつ）

2　並立助詞の用法

(1)　語句を、単純に列挙する並立助詞

語句を、単純に並べ立てる並立助詞として、もっとも代表的なものは、「ト」であり、これは、主に体言的語句の列挙に用いられる。

中学生ト高校生ト大学生を対象とする。／字を書くのト計算するのは、大嫌いだ。／右からト左からト車がはいって来た。／3ト6トをたして2で割れ。

「ト」による並立は、接続詞の「および」「並びに」に当るが、これらの接続詞は、主に硬い文章や演説・講義などに現われるのに対して、「ト」は、日常会話にも、普通に用いられる。また、正統的な用法では「中学生ト高校生ト大学生トを……」のように、並立の最終語句のあとにも「ト」をつけるべきだとされているが、現代の、特に、話しことばでは、最後の「ト」は、一般に省略されることが多い。

右のほか、「ト」には、対比や例示の対象を挙げる用法もある。対比の「ト」は、

梅ト桜ト、どっちが好きですか。／見るト聞くトは大違い。／行こうト行くまいト、君の勝手だ。

のように使われるが、最後の例文の「ト」には、格助詞「と」の性格が感じられる。

また、例示の「ト」は、「トカ」の形で、

梅トカ桃トカ桜トカ、色々な花があった。

のように、主に話しことばに使われるが、法令文・学術論文のような硬い文章には、あまり出て来ない。

(2) 例示の対象を列挙する並立助詞

さきの「トカ」のように、例示の対象を並べ立てるものとしては「ヤ」「ヤラ」「ダノ」「タリ」がある。このうち「ヤ」は、もっぱら体言ないしは体言相当句の列挙に使われ、「タリ」は用言性の語句の並列に用いられる。また、「ヤラ」「ダノ」は、体言・用言のどちらも並べ立てる。

これら、例示の対象を列挙する並立助詞は、いずれも、話しことば的な、柔かい語感をもち、法令文・学術論文など、硬い文章には、あまり用いられない。一般に、書きことばでは、接続詞「または」「あるいは」「ないしは」に置きかえられたり、「A・B・C等」などの形になったりすることが多い。

まず、「ヤ」による並立であるが、これは、

学校ヤ病院ヤ市役所が建っています。／朝顔には赤いのヤ青いのヤ白いのがある。

常に、列挙する語句と語句との間のみに用いられ、「ト」による並立に見られる「学校ト病院トが……」あるいは「学校ト病院トを……」のような用法をもたない。そして、「学校ヤ病院など……」と「など」で受けることが多い。「ヤラ」は、「ヤ」よりも、ややくだけた言い方であり、「AヤラBヤラCヤラを……」のように、並立する語句の終りも「ヤラ」で受ける。

本ヤラ雑誌ヤラを両手にかかえて来た。／泣くヤラさわぐヤラ大さわぎだった。

「ダノ」も、右の「ヤラ」と全く同じような形で使われるが、これは、「ヤ」「ヤラ」などに比べると、やや品の悪

い言い方である。

手ダノ足ダノを、虫にさされた。／朝が辛いダノ休みが少いダノ不満ばかり言ってる。

一方、「タリ」は、用言性の語句を並立し、

テレビを見タリ新聞を読んダリして暮す。

のように「〜タリ〜タリする」の形で出てくることが多いが、つぎのような形でも使われる。

道に迷ったりタリ雨にあっタリで疲れ果てた。／浅かっタリ深かっタリ水深が一定しない。

(3) 選択の対象を列挙する並立助詞

選択の対象を並べ立てる、代表的な並立助詞は、「カ」であり、

数学カ英語カ国語を教えてほしい。／手を上げるカ返事をしてください。

のように用いられるほか、「〜カ〜カ」の形で出てくることもある。

数学カ英語カ国語カを教えてほしい。／手を上げるカ返事をするカしてください。

「カ」は、接続詞「または」「あるいは」に当たるが、どちらかというと、「カ」の方が話しことば的な柔かい語感をもち、「または」「あるいは」は書きことば向きの言い方である。また、法令文・学術論文など、ごく硬い文章には、「もしくは」「ないしは」なども使われる。「カ」は、ときに、これらの接続詞と一しょに、つぎのように用いられることがある。

図書館カまたは公園を建設する。／法律カもしくは条令で規制すべきだ。

「カ」はまだ、さきに述べたように、「トカ」の形で選択の対象を示すこともあるが、日常会話には、しばしば、つぎのような「ナリ」も現われる。

すしナリそばナリ好きなものを注文しろ。／勧めるナリ進学するナリ早く決めたい。

この、「ナリ」は、ややくだけた言い方に用いられ、文章や改まった会話には、あまり出てこない。

並立助詞「カ」や接続詞「または」「もしくは」などによる場合には、選択の対象が、かなり具体的にしぼられ、二者択一的な意味合いが強いのに対して、「トカ」や「ナリ」の場合は、選択の対象・範囲は、それほどきびしくしぼられてこない。この点で、「トカ」や「ナリ」は、選択の対象を例示する意味合いが強いといえる。すなわち、「カ」の場合は「すし、または、そばのいずれか一つ」という意味合いが強いが、「ナリ」や「トカ」による並立は「たとえば、すし、または、そばなど」というニュアンスになる。

(4) 対比の対象を列挙する並立助詞

さきに(1)の「ト」のところで述べた「行こうト行くまいト君の勝手だ」と同じように、対比の対象を並べる、つぎのような言い方がある。

行こうガ行くまいガ勝手にしろ。

この「ガ」は、「お前が行こうが解決しない」といった仮定を表わす「ガ」に通じるもので、純粋な並立助詞とは言えない。

いずれにしても、「ト」や「ガ」による右のような言い方は、あまり上品なものとはいえない。男の仲間うちの会話などには見られるが、改まった場面の会話や文章の中には、ほとんど現れない。

また、さきの選択の「カ」と、はっきり区別することは、むずかしいが、「カ」にも、「生きるカ死ぬカ、それが問題だ」のように、対比的に列挙する言い方がある。これは、一般の会話にも文章にも広く使われる。

以上のほか、

行くノ行かないノさわいでいた。

のように、「〜ノ〜ナイノ」の形で使われる「ノ」も、対比の並立助詞とみられる。もちろん、この言い方は、かなりくだけたものであり、フォーマルな場面や正式な文章には、まず出て来ない。

(5)　事物の累加を示す並立助詞

並立助詞の中には、単に列挙するだけでなく、積み重ねるというか、ある事物に、つぎつぎに累加していくニュアンスを表わすものがある。まず、

御飯ニ味噌汁ニお新香だけの朝食だった。

などの「ニ」が、これに当り、「おせんニキャラメル」とか「お茶ニ弁当」といった物売りことばとして愛用されている。これは、話しことば、書きことばを通じて広く使われ、そうした面での制約は、ほとんどない。

この「ニ」は、本来、格助詞「ニ」から生じたものであり、「それに」「その上に」あるいは「に加うるに」などの言い方と通じるものをもっている。

「ニ」には、また、「ト」と同様に、「3に6をたして……」といった用法もある。しかしこの場合の「ニ」は、本来の格助詞の用法とみるべきであろう。

以上のほか、「ウエニ」の形で、つぎのように、用言性の語句を累加する用法があり、これは、会話にも文章にも広く用いられる。

美しいウエニ上品な人だ。／よく寝るウエニよく食べる。

この「ウエニ」は、「美しいウエ上品な人」のように、「ニ」を省いた形で出て来ることもある。本来は、もちろん名詞だが、形式化が進んでいるので、助詞として扱うこともできよう。

つぎに、並立助詞「シ」「テ」も、用言性の語句の累加に用いられる。いずれも、接続詞「そして、また、かつ」などに当るもので、意味的には、活用語の中止法で置きかえることも可能であるが、これらの接続詞や中止法による表現よりは、柔かい語感をもつ。特に、「シ」は、ややくだけた言い方で、仲間うちの会話などに多く使われ、フォーマルな談話や硬い文章には、ほとんど現われない。それに対して「テ」の方は、法令文・論文など特に硬い文章は別として、話しことば・書きことばを通じて広く用いられる。

まず、「シ」の用法であるが、これは、左のように使われ、相手に強調する語感をもつ。

あいつは、よく食うシよく動く男だ。／気候はいいシ、食物は豊富だ。

また、「〜シ〜シ」の形で出てくる場合もあり、この形は、主として、理由や根拠の列挙に用いられる特徴がある。

腹はへるシ金はないシ、困っちゃった。

なお、これに似てはいるが、単に原因・理由を表わす「体が大きいシ勝つのが当然だ」のような用法は、やはり、条件の接続とみるべきであろう。したがって、この種の「シ」は接続助詞ということになる。

一方、「テ」の方は、

その部屋は、広くテきれいだった。／笑っテ手を振る少年が見えた。

のように使われるが、動詞の並列の場合は、列挙というよりは、「顔を洗っテ食事をしテ出かけた」など、時間的な経過を示す場合が多い。これは接続助詞とすべきであろう。

「テ」には、また、「〜テ〜テ」の形で、同一語句を繰り返したり、類義的な語句を重ねたりする、左のような用法がある。

待っテ待っテ、待ちくたびれたわ。／淋しくテ心細くテ、帰国が待遠しかった。

これにも、接続助詞的な性格が感じられるが、むしろ「〜テ〜テ」全体で副詞句を作る用法と見た方がよいかもし

れない。

以上、並立助詞の用法を、一わたり見わたしてきたが、並立助詞による対等の関係と、よく似たものに、つぎのような構文がある。

英語も日本語も中国語も話せる。／田が畑が道が、つぎつぎに水で覆われた。

この「〜も〜も」や「〜が〜が」は、構文論上、同位格と呼ばれ、並立助詞や接続詞などによる対等の関係での接続とは、区別して扱われている。すなわち、「田が—覆われる、畑が—覆われる……」というように、本来、別々に成立している係り受けが、たまたま一文に収まったものと解釈されるわけである。

しかし、これも、

死ぬモ生きるモ、みんな一しょだ。／うれしくモはずかしくモ思う。／行こうガ行くまいガ俺の勝手だ。

などになると、並列・列挙にかなり近づく。

文法論上の解釈はともかくとして、実際の表現においては、いわゆる同位格は、ときに、対等の接続と、区別できないほど似てくることを指摘しておく。

3　接続助詞の用法

(1)　時間的な関係を表わす接続助詞

同時的に並行する事象の接続には「ナガラ」「ツツ」が用いられる。

テレビを見ナガラ勉強するな。／カメラを移動しツツ式典を撮影した。

「ナガラ」の方が、話しことば的な柔かい語感をもち、「ツツ」の方は、やや硬い言い方で、主として文章に現われる。

右の例のように、動作性の事象の接続では、同時進行を表わすが、これらの助詞によって、状態性の事象が導かれると、時に、逆説的なニュアンスとなる。

　金持ちでありナガラ、けちな奴だ。／悪いと知りツツ、つい金をごまかした。

場合によっては、動作性の動詞の場合にも

　羽田上空まで来ナガラ引返していった。／生徒に注意しツツ自分が溺れた。

のような逆説的なものがある。しかし、これも、純粋に動作性の表現ではなく、「羽田上空まで来ていナガラ……」あるいは「生徒に注意しておきツツ……」といった状態的なアスペクトをもつものである。このいい例は、

　金襴緞子の帯しめナガラ花嫁御寮はなぜ泣くのだろ。

の「しめナガラ」である。すなわち、動作としての「しめる」であったら、同時進行であるが、この歌の場合は、「しめていナガラ……」と状態性に解釈して、「しめているのに」と逆説的な表現とみるわけである。

なお、「ナガラ」「ツツ」は、係助詞「も」を伴うと、完全な逆説の接続助詞に転化する。

　痛みをこらえナガラモ優勝した。／貧乏にあえぎツツモ精進を怠らなかった。

つぎに、時間的に継起する事象を接続する接続助詞に移ると、これには、「テ」「ト」「タラ」があり、接続詞「すると」「そして」「そうして」「それで」「それから」「そしたら」などに当る表現をになっている。また、時間的継起などは、その例である。

は、中止法で表現されることもあるが、これらのうち、中止法による表現は、主に硬い文章にみられ、接続詞「すると」も、どちらかというと書きことば的な言い方である。

接続助詞「テ」「ト」「タラ」は、つぎのように用いられる。

舟をおりテ、バスに乗るんだ。／爆発音が起こるト、燃え始めた。／頂上についタラ、昼食になった。

このうち、「テ」は、同時進行に最も近く、

テレビを見テ勉強するな。

のような言い方も可能であり、時には、並立とみられる用法も生ずる。

右手に本を持っテ、左腕に傘をかけテ出かけた。

「テ」の接続には、このように、同時的ないしは並行的な性格があるので、状態性の事象を接続した場合には、前件と後件との間に、不可分な、必然的な論理関係を構成する。

下腹が痛くテ一日寝ていた。

「ト」は、前の事象に引き続いて起こる事象を結びつけるもので、

名前を呼ぶト、彼はさっと振り向いた。

のように、「と同時に」「とすぐに」の意味合いで用いられることが多い。このように、「ト」は、きわめて密接に結びついた事象を接続する性質があるため、状態的な事柄の接続においては、決まりきった恒常的な論理関係を形成する。

老化が進むト、運動能力が落ちてくる。

一方、「タラ」は、主に、偶発的に継起した事象を結びつけるものである。

電車を降りタラ、雨が降り始めた。

したがって、非動作性の事象の接続においても、

年が明けタラ情勢が変わるかもしれない。

のように、前件と後件との、未確定ないしは偶然的な結びつきを表わす。

なお、右の「テ」「ト」には、副助詞「モ」を伴って「テモ」「トモ」の形で、逆説的な仮定条件を表わす用法がある。

雨が少くテモ、飲料水は大丈夫だ。／援助がなくトモ、成功させてみせる。

などは、その例である。

以上のほか、「トコロガ」も、時間的継起の接続に用いられるが、これは、常に助動詞「た」とともに「たトコロガ」の形で現われる。また、しばしば「が」を省略した形でも使われる。

角を曲ったトコロガ、自転車がぶつかって来た。／ドアを開けたトコロ、犬が飛びこんで来た。

しかし、この言い方は、ややくだけた言い方であり、改まった会話や正式の文章には、用いられない。

(2)　因果関係を表わす接続助詞

原因・理由を導く接続助詞として、代表的なものは、「ノデ」と「カラ」である。

雨が降ったノデ苔がたいへんきれいです。／時間がないカラ急げ。

「ノデ」と「カラ」の違いについては、「ノデ」のあとには、どちらかというと、客観的な描写など平叙文的なものが来やすく、「カラ」のあとには、命令・禁止・質問など、相手への働きかけの強い主観的な表現が来やすいといわれている。[13] そうした点も含めて、「ノデ」の方が、柔かい語感をもち、「カラ」の方が、原因・理由を強く主張する響きをもっている。したがって、同じことを述べても、

a　ほかの約束がありますノデ失礼します。

b　ほかの約束がありますカラ失礼します。

では、aの方が、ものやわらかに丁寧に聞え、bの方の言い方からは、うむを言わさぬ口吻が感じられる。これは、aは、「ほかの約束がある」という事実を挙げて「失礼せざるをえない」という結果が生ずることを説明する行き方なのに対して、「カラ」の場合は、「失礼する」という結果にならざるをえない理由を、正面から主張する言い方だからである。したがって、同じように、原因・理由を導いてくるものではあるが、「ノデ」の場合は、どちらかというと主文に重みがかかるのに対して、「カラ」の方は、導いてきた原因・理由の方にウエイトがかかるということである。

結局、「ノデ」は、主文で述べる事実について、それの生じた理由を説明するものであり、この説明的な性格の強い、つぎのような「ノデ」は、「カラ」に置きかえることができない。[14]

あしたは遠足というノデ弟はてるてる坊主を作っている。

また、「ノデ」は、事実についての説明に用いられるので、未定の事柄を理由として挙げる用法を持たないが、単に、原因・理由のみを表わす「カラ」には、

もう来るまいカラ閉会しよう。

のように、推量につく用法がある。

「カラ」には、また、原因・理由を、あとから補う、つぎのような用法もある。

カゼをひいたのは、寝冷えしたカラだ。

倒置の場合は別として、「ノデ」には、こうした用法はない。

なお、「カラ」の系統には「ですから」「だから」、また「ノデ」の系列には「ですので」などの接続詞があるが、いずれも、「カラ」や「ノデ」と同じように、話しことば・書きことばを通じて、一般に広く用いられる。

因果関係の接続助詞として、立論の根拠を表わす「モノデ」「タメニ」「ユエニ」なども挙げられる。このうち、「モノデ」は、

昨夜遅かったモノデつい寝坊しました。

のように、主に話しことばに現われ、時に「モンデ」の形でも使われる。

「タメニ」は、会話にも文章にも、

水がないタメニ田が作れない。

のように用いられる。また「ニ」を省いて「タメ」の形で出てくることも多い。

「ユエニ」も、

文章が難解なユエニ読者層は薄い。

のように用いられるほか、「ユエ」の形でも現われる。「ユエニ」「ユエ」は、いずれも、論文など硬い文章に、主として使われ、現在では、やや古風な言い方ともいえよう。むしろ、接続詞としての「ゆえに」の方が、現代の文章では、よく使われるようである。

このほか、「前件をきっかけとして後件の結果が生ずる」といった関係の接続に用いられるものとして「トコロガ」がある。

発売したトコロガ大好評を博した。

これは、本来、継起する事象を表わすものであるが、たまたま因果関係で結びつく事象が、つながれた場合、前件がきっかけを表わすことになるわけである。「トコロガ」は、ややくだけた言い方であり、フォーマルな場面や正式な文章には、用いられない。

やや特殊なものであるが、本来「体は大きいシ、力は強いシ、勝つのが当り前だ」のように、理由や根拠を列挙するのに用いられる並立助詞の「シ」から転じて、つぎのように、理由や根拠を提示する「シ」がある。

体が大きいシ、勝つのが当り前だ。

これには、やはり複数の理由・根拠の中の一つを例示して結果に結びつけるといったニュアンスがあり、並立助詞としての用法の名残りが感じられる。

同じく、特殊なものとして、

暑すぎるセイカ葉がしおれてきた。

などの「セイカ」も、挙げることができる。これは、不確実な理由を示す。

右の「シ」「セイカ」は、いずれも、ややくだけた言い方であり、フォーマルな会話や正式の文章には出て来ない。

以上のほか、中止法も、時に、因果関係に似た接続を示すことがある。

風波が強く、救助作業は中止した。

この言い方は、書きことば的な、硬い言い方で、会話には、あまり使われない。

なお、右の中止法による接続は、「風波が強くテ救助作業を中止した」にも対応するものなので、必然的な確定関係を表わすとみることもできる。

(3)　定常的関係を表わす接続助詞

論理的な飛躍や背反がなく、前件が成立することによって、後件が、その帰結として、自然ななりゆきで出てくる関係は、「確定の接続」ともよばれるが、これは、必然的な場合と、恒常的な場合とに、分けることができる。

必然的な論理関係を表わす接続助詞としては、「テ」があり、接続詞「それで」「そうして」などに当る表現を担当している。いずれも、会話・文章を通じて広く用いられる。中止法も、現われることがあるが、これは、やはり、講義・演説といった特殊な談話や、やや硬い文章に限られる。

この場合の「テ」は、

お名前を失念しテ失礼しました。／水が飲みたくテがまんできない。

のように、きわめて自然な、当然な結びつきを示すものである。当然な結合だから、「テいる・テくる・テおく・テしまう……」のような慣用句として固定してしまうものもでてくる。そして「見テ＝いる・呼んデ＝くる・言っテ＝おく……」などの関係は、「補助の関係」または「付属の関係」と名づけられている。これらはまた、「見テル・言っトク・混んドル（混んでおる）」の「テル」「トク」「ドル」のような、助動詞相当の融合形を形成する。

つぎに、必然的関係を表わす「テ」は、「その結果、当然そうなる」という意味合いだから、当然、因果関係に、きわめて近い用法が見られる。

腹が痛くテ一日寝ていた。／旅人は暑くテ、服を脱ぎ始めました。

などは、その例である。しかし、これらの「テ」には、積極的に、理由を説明したり原因を主張したりするような姿勢はない。この点が、因果関係プロパーの「ノデ」や「カラ」とは、やはり異質である。「テ」の場合は、前件の原因・理由よりも、むしろ、帰結として出てくる後件の方に主眼がおかれる。すなわち、「腹が痛いカラ（ノデ）、一日寝ていた」は、前件の理由の方に中心がある言い方であり、「腹が痛くテ一日寝ていた」は、どちらかというと、「寝ていた」という事実を伝えることに重点をおいた表現といえよう。

また、前件と後件との間に、背反的なズレが生じた場合には、「テ」でも、逆説的な論理を表わしうる。

気はやさしくテ、力もち。

しかし、これは、たまたま、論理的にズレのある内容が「テ」で結ばれたとみるべきであろう。なお、こうした背反的事象の接続に仮定が加味された「テモ」「タッテ」「トテ」などの形がある。

親はなくテモ子は育つ。／親はなくタッテ子は育つ。／一人で泣いたトテどうにもならない。

右のうち「テモ」「タッテ」は普通の会話に出てくるが、「トテ」は、古風な言い方である。

以上のほか、「テハ」「トシテ」などの形で、条件や資格を示す用法も見られる。

朝が早くテハ、店が開いていない。／会長トシテ会の発展につくした。

「トシテ」は、やや硬い言い方であるが、現代では会話にもよく使われる。これに似たものには「ついて」「おいて」「関して」などの用法もあるが、これらは全体で一つの辞的単位とみるべきであろう。

「テ」と同じく確定的ないしは必然的な関係を表わすものに、左の「デ」「ニ」がある。

金をもたないデ、そば屋に飛びこんだ。／何のお役にも立てませんデ失礼しました。／夜も寝ずニがんばった。

これらは、否定の助動詞のみにつき、「ニ」は、「デ」に比べて、やや古風な硬い言い方である。ただし、「デ」には、つぎのような慣用句的な用法もみられる。

寒けりゃ寒いデしのぎようもあるさ。／彼が来たら来たデまた部屋割りしよう。

この「デ」にも、さきの「テ」の場合と同様に「デモ」「デハ」の形がある。

わざわざ行かないデモいいと思うがね。

逆説的な仮定を表わすものであるが、「行かなくテモ」の形に比べると、これは、話しことば的なニュアンスをもっている。「デハ」も

本家に挨拶しないデハ気がすまない。

のように「テハ」と同様に、条件を示すが、「挨拶しなくテハ」に比べると、やや、くだけた言い方といえよう。「デモ」「デハ」には、また、つぎのような慣用的な用法もある。

協力しないデモない。／結婚する気がないデハない。

「なくもない」「なくはない」に当る言い方である。

つぎに、恒常的な関係を表わす接続助詞としては、「ト」と「バ」がある。これらは、

十分早く出るト電車がすいている。／湿度が低ければバ、夏もすごしやすい。

のように、現代語に広く用いられるが、どちらかというと、「ト」の方が、現代的であり、「バ」は、やや古風な言い方である。したがって、「犬も歩けバ棒に当る」「命長ければバ恥多し」のように格言・ことわざの類、あるいは文語調の文など伝統的なものでは「バ」が普通である。「ト」の系統には「そうすると」など、「バ」の系列には「そうすればば」などの接続詞があり、これらも、話しことば・書きことばを通じて広く用いられている。

右の例文の「ト」「バ」が示す論理関係は、たとえば、「十分早く出る」という前件が、成立したときには、常に、後件の「電車がすいている」という帰結に至る――という関係であるが、これは、「もしも、十分早く出たらば……」におきかえても、「電車がすいている」という帰結には無理なくつながってしまう。また、「湿度が低ければバ……」を、「たまたま湿度が低いならば……」と仮定に置きかえても、後件の「夏もすごしやすい」に、そのまま結びつけられる。こうした点で、右の「ト」や「バ」の接続は、仮定に、きわめて近い。

万一、失敗するト、大変だ。／もし、君が行けバ大いに歓迎されるよ。

などはそうした例であるが、これらも、純粋な仮定に比べると、すこしニュアンスが異っている。すなわち、純粋な仮定においては、「万一、失敗したなら、おそらく大変なことになるだろう」あるいは「もしも、君が行ったら、多分歓迎されることだろう」というように、主文の方も、不確定ないしは推量の意味合いをもつが、右の「ト」や「バ」による仮定の場合は、それぞれ、「万一、失敗したら、きっと大変だ」「もし、君が行ったら、大いに歓迎されるに違いない」といったニュアンスであり、少くとも、主文の帰結には不確定なものは感じられない。したがって、「ト」や「バ」による仮定の接続は、たまたま、前件に、偶発的な事象が来たために、形成されたものであり、仮定の接続とはいっても、後件の帰結が確定的なニュアンスをもつ点で、純粋の仮定とは区別される。このことは、つぎ

のように、前件が推量形の場合に、一そう鮮明になる。

　誰が来ようト、俺の知ったことじゃない。

前件の不確定性は、後件には、全く及ばず、後件は、きわめて断定的・確定的になっている。同様なものに、

　来ようト来るまいト知ったこっちゃない。

などの言い方もある。しかし、これは、さきの仮定的な「ト」ととれないことはないが、並立の「ト」とも、格助詞「と」の導く同位格とも見ることができる。

なお、「ト」は、また「とする」について「トスルト」の形で、不確定な前件を導く。

　次の汽車で来ないトスルト午後になるね。

これには接続詞としての用法もあるが、いずれの場合も、右に述べた「ト」の仮定と同様に、純粋な仮定の接続とはいえない。

「トモ」の形で、仮定的な逆説を表わす場合もある。

　失敗するトモくじけないでやれ。

さきの「テモ」と同様なものであるが、「トモ」の方が、やや古風な、硬い言い方である。

(4)　不確定な関係を表わす接続助詞

確定しない事象を前件とする接続表現は、広く「仮定」と呼ばれ、接続助詞「タラ」「ナラ」などによって表わされる。これらは、助動詞「た」「だ」の未然形に由来するものであり、「たらば」「ならば」の形でも出てくるほか、「そうしたら」「それなら」などの形で接続詞的にも用いられる。いずれも、話しことば・書きことばを通じて広く

使われるが、「タラ」は用言性の語句のみを導くのに対して、「ナラ」の方は、名詞的な語句も導くことができる。

雨が降ッタラふとんを入れてくれ。／雨だッタラ宿屋でトランプでもしてよう。／雨ナラ車で行こう。／雨になるナラもっと気温が上がるはずだ。

「タラ」も「ナラ」も、仮想・予想など、不定な事象や、未成立な事柄を導く点は同じだが、たとえば、例文の「雨が降ッタラふとんを入れてくれ」の「タラ」を「降るナラ」に置きかえることはできない。また「雨になるナラもっと気温が上がるはずだ」を「雨になッタラ」とすると意味が違ってくる。これは「タラ」の方は、前件が成立するか否かに表現の主眼がある言い方であり、「ナラ」の方は、どちらかというと、前件が成立した場合の結果に表現の中心があるからである。したがって、「雨になッタラ」は、「雨になるか否かはわからないが、たまたま雨になった時には」というニュアンスで、その根底に偶然性を秘めている。それに対して、「雨になるナラ」は、「雨になるという事実があった時には、多分これこれという結果になることだろう。」という意味合いであり、まさに仮定の条件というにふさわしい表現をになっている。このことは、

a　気になッタラ見に来い。

b　気になるナラ見に来い。

の違いが端的に証明している。すなわち、aの方は「気になる」という事実は、成立するか否かはわからないが、「万一、その事実が成立したときには、見に来い」ということだから、「気になる」という事実の生起確率を勘定に入れた言い方である。一方、bの方は、「気になる」という事実が成立した時だけ「見に来い」というつながりであり、成立しない場合は、勘定にはいっていないというわけである。したがって、「タラ」は、事実が起るか否かという、いわば「事実」についての表現であり、「ナラ」は、「ある事象のもとではこれこれだ」という、「論理」についての表現だと考えることができる。

それゆえ、「タラ」には、二つの事実が、偶然に重なった場合の表現、すなわち、さきに(1)で述べた「電車を降りタラ雨が降り始めた」のようなものも成立しうるわけである。

つぎに、やや古風な言い方としては、

急がバまわれ。

のように、未然形につく「バ」がある。これは、現代では、文章、特に文語調のそれに現われるぐらいで、話しことばには、まず用いられない。

また、前項(3)に述べた通り、本来、恒常的な論理関係を表わす「ト」や「バ」が、たまたま仮定的事象を導くと、仮定の接続を表わす。前項に挙げた、

万一、失敗するト、大変だ。／もし、君が行けバ大いに歓迎されるよ。／次の汽車で来ないトスルト午後になるね。

などの例がそれである。いずれも、話しことば、書きことばを通じて広くみられる用法である。

以上のほか、特殊なものとしては、「テモ」「トモ」「トテ」「タッテ」「モ」および「ニ」「ガ」「トコロガ」「トコロデ」などの形で、逆説めいた仮定を表わす用法がある。これらは、「たとえ、前件が成立した場合でも、後件の結果になる」という関係を表わす。

今から行っテモ間に合わない。／いかに反対しようトモ大勢は動くまい。／ここで心配したトテどうにもならない。／冬になっタッテ、雪は降らない。／どんなにおそくモタ方には到着するさ。

などが、その例であるが、右のうち、「テモ」「タッテ」は、話しことば的なニュアンスが強く、「トモ」「トテ」「モ」は、書きことば的な硬い語感をもつ。慣用的な形には、「トシテモ」「ニシテモ」もあり、右の「テモ」などと同じように使われる。

今から行ったトシテモ間に合わない。／帰るニシテモ雨が止んでからにしろよ。

つぎに「ニ」「ガ」の場合は、常に推量形について、

人もあろうニ、あんな奴を信用して。／誰が来ようガ、ドアを開けるな。

のように用いられる。どちらかというと、「ニ」の方が、やや古風な言い方といえよう。「ガ」には、また、つぎのような、並立助詞的な用法もある。

行こうガ行くまいガ君の勝手だ。

一方、「トコロデ」「トコロガ」の場合であるが、これは、常に、助動詞「た」について、

車で行ったトコロデ五分と違わない。／家に帰ったトコロガどうせ誰もいない。

のように使われる。いずれも、かなりくだけた言い方であり、フォーマルな会話や文章には、まず用いられない。これらは、

階段登ったトコロデ先生にあった。／ドアを開けたトコロガ妹が出て来た。

などの用法が本来のものであろうが、前件が、たまたま不確定なものを導いてきたために、仮定的な表現となったものである。

(5) 背反的関係を表わす接続助詞

以上述べてきた、3―(1)から3―(4)までの接続関係は、順説(順接)といわれるものであり、前件と後件との間に、論理的な矛盾やズレが、本来は存在しない関係である。それに対して、前件と後件との間に、論理的なズレが、はっきり出てくる接続関係は、逆説(逆接)といわれるものであり、極端な場合には、論理的に矛盾する事象や、背反的な事象の接続となって現われる。こうした接続関係に用いられる代表的な接続助詞は「ガ」と「ケレドモ」であり、「ケ

レドモ」には、「ケレド・ケドモ・ケド」などの形がある。いずれも、接続詞としての用法をもっているが、逆説の接続詞には、これらのほか「しかし」「だが」「だけど」などがある。

タバコはあるガ、マッチガない。／昨日伺いましたケレドモお留守でした。／疲れたケド(ケレド・ケドモ)がんばる。

「ガ」「ケレドモ」は、話しことば・書きことばを通じて広く用いられるが、「ガ」の方が、やや硬い、強い語感をもち、「ケレドモ」には、もの柔かな丁寧なニュアンスがある。したがって、書きことばの場合、論文のような硬い文章には「ガ」が使われ、「デス・マス体」の文章などには、「ケレドモ」が出て来やすいといった傾向がある。話しことばでは、「ガ」は男性向き、「ケレドモ」は女性向きという区別が、一応あるようである。「ケド・ケレド・ケドモ」の類は、ややくだけた言い方で、ほぼ話しことばに限られる。

これらの接続助詞が、結びつけた前件と後件との間に、たまたま、はっきりしたズレや背反性が認められない場合には、前件は、単に、前おきを述べたにすぎないものとなる。

私は田中ですガよろしくお願いします。／五分ほどありますケド質問ありませんか。

などが、その例であり、こうした用法は、前提条件を示すものとも言われる。

「ガ」には、また、

君が行こうガ解決しないよ。

のように逆説的な仮定条件を示す用法もあるが、これについては、前項(4)ですでに述べた。

逆説の接続助詞としては、このほかに「ノニ」「ニ」「モノノ」「モノヲ」「クセニ」などがある。まず、「ノニ」であるが、これは、

高いノニおいしくない店だ。

のように、「にもかかわらず」に当る意味合いで用いられるもので、前件と全く対立する背反的な結果が成立することを表わす。その意味で、もっとも逆説的な接続助詞だといえよう。これに比べると、さきの「ガ」や「ケレドモ」の逆説は、かなり幅がある。すなわち、「ガ」や「ケレドモ」の逆説は、

見えることは見えるガ小さい字はだめだ。／雪も降るケレドモせいぜい一尺ぐらいだ。

のように、内容が少しでもズレていれば、成立しうる。しかし、右の程度のズレでは、「ノニ」による逆説は、成り立たない。こうした点で、「ガ」「ケレドモ」の逆説は、必ずしも、背反的ないしは対立的な事象に限らず、かなりの部分、共存しうる事象の間でも成立するのに対して、「ノニ」は、きわめて、対比的・背反的事象の場合に限られるということができる。したがって、

a　高いノニまずい店だ。

b　高いガ(ケド)まずい店だ。

を比べると、aの場合の方が、「高い」と「まずい」が、強く対比されるのに対して、bの方の言い方では、それほど強い対比は感じられず、むしろ「高くテまずい店だ」といった共存関係に近いニュアンスになる。

なお、「ノニ」は、全体に、ややくだけた、話しことば的な色彩が強く、論文など硬い文章や正式の文書では、「にもかかわらず」が用いられることが多い。

右の「ノニ」は、文語の接続助詞「ニ」に由来するものであるが、この「ニ」も、時に現われることがある。一つは、

こともあろうニ真夏の熱帯に行くなんて。／辛かっただろうニよくがんばったものだ。

のように、推量の形について、逆説の仮定条件を示すものである。他の一つは、打消の助動詞「ず」について、「～せずニ」の形で、

苦労せずニ勝利を得る道はない。

右のように出てくる用法であるが、これは「苦労しないデ」に対応するものであり、確定条件にきわめて近い用法である。「こともあろうニ」といった慣用句的なものは別として、「ニ」による接続は、現代では、やや古風な言い方である。

なお、男性の仲間うちの会話などでは、

注意しといたニ、こんな間違いをして。

というような用法も、稀に見られる。しかし、これは、「ノニ」のなまった形とすべきものであろう。

つぎに、「モノノ」「モノヲ」に移ると、これらは、いずれも、古風な言い方であり、普通の会話には、あまり現われない。

買ってはみたモノノ柄が気に入らない。／退院したとはいうモノノ仕事はできない。

などが「モノノ」の用法であり、「前件の事象は別として、やはり後件の結果が生じてしまう」という意味合いの接続を表わす。その点で「それはそれとして」あるいは「それはともかくとして」に当たるものといえよう。

「モノヲ」の方は、つぎのように、

歩いて行けるモノヲ、タクシーを使ってもったいない。／よせばいいモノヲ株に手を出して失敗した。

前件の事象を、幾分恨みがましい気分をこめて後件に結びつけるものであるが、論理のうえでは、「ノニ」に置きかえることができる。

「モノヲ」と同じように、感情的な屈折を伴うものに「クセニ」による接続がある。この場合は、非難めいたニュアンスを伴う。

すぐ泣くクセニ兄貴にかかっていく。／年寄りのクセニ派手な格好で歩く。

論理的には、対比的な事象を「ノニ」と同様に結びつけるものであるが、あまり上品な言い方ではない。主に仲間

うちの会話に使われ、フォーマルな場面や文章には、まず出て来ない。

さきに、3―(1)の項において、「ナガラ」「ツツ」による逆説にふれたが、これらのもつ逆説は、共存する事象が、たまたま似つかわしくないときに生ずるもので、たとえば、つぎのような場合である。

結婚していナガラ恋愛する。／事情を知りツツしらばくれている。

前件と後件とが相応する場合には、「学生生活をしナガラ恋愛する」のように、本来の同時進行ないしは共存関係の接続に転じてしまう点に、「ナガラ」「ツツ」による逆説の特徴がある。両者を比べると、「ナガラ」の方が幾分くだけた言い方であり、「ツツ」の方は、やや硬い古風な語感をもつ。これらは、また、「ナガラモ」「ツツモ」の形で現われることもある。

以上のほか、「トコロガ」「トコロデ」「ドコロカ」など、形式名詞「ところ」の系列に属するものもある。これらは、いずれも、くだけた語感をもち、主に話しことばに用いられるが、フォーマルな場合には、あまり使われない言い方である。右のうち、まず「トコロガ」と「トコロデ」は、

入院させたトコロガどうせ助からない。／急いだトコロデ間に合いっこない。

のように、「たとえ前件が成立した場合でも、それと関係なく後件の結果になる」という場合の逆説であり、たとえ〜としても」に似た逆説の仮定条件を導く。全体に、「残念ながらこうなる」といったニュアンスをもつ点が特徴である。なお、「トコロガ」「トコロデ」には接続詞としての用法もあるが、接続詞の場合には、前者はやや強調的な逆説を表わし、後者は話題の転換に用いられる。

「ドコロカ」は、

退屈するドコロカこき使われていたよ。

のように、「前件を否定するような、きわめて対照的な結果が成立する」場合に使われ、「〜どころのさわぎでなく」

に当る意味合いをもつ。したがって、後件の結果を強調する大げさなニュアンスで前件を導くものだということもできる。

五　終助詞と間投助詞

終助詞と間投助詞の区別を、はじめて立てたのは、山田孝雄であり、山田文法では、終助詞を「上接語への接続に一定の法則があり、陳述に関係して命令・希望・感動などの意味を表わしつつ文を終止させる助詞」と定義している。また、間投助詞については、終助詞が文末に限られるのに対して、使われる場所が比較的自由に変えられること、これを除いても、文の成立に影響を及ぼさないことなどを指摘している。終助詞・間投助詞を区別する考え方は、その後も、橋本進吉をはじめ、多くの人々に受けつがれ、橋本文法では、「言い切りの文節に付き、そこで文が終止する助詞」を終助詞とし、間投助詞は、「文節の終わりにつく助詞」すなわち「続く文節にも、切れる文節にも付きうる助詞」と定義されている。

一方、安田喜代門の「孤立(感動)助詞」、時枝誠記の「感動を表わす助詞」、佐久間鼎の「終止助詞」などは、両者を一括して扱ったものである。いずれにしても、文末の助詞と、句末(文節末)の助詞は、意味的にも語形的にも類似のものが多いため、従来の学校文法などでは、文末・句末の助詞を総称して「終助詞」とする傾向が強い。以上のほか、「添意助詞」「感動助詞」「詠嘆助詞」「情意助詞」など、多くの命名が見られる。

1　文末と句末の表現

ここでは、この種の助詞の、文末における機能と、句末における機能とを明らかにする目的から、つぎのように扱

うことにする。

文末のみに用いられる(文中には現われない)もの……終助詞　(文末助詞)
句末に用いられる(文中にも文末にも現われる)もの……間投助詞　(句末助詞)

右のうち、文末のみに用いられる助詞、すなわち終助詞には、まず、

ハイキングに参加しますカ。　(質問)
もっと落ちついて勉強しナ。　(命令)
この川で泳ぐナ。　(禁止)
おお、いい眺めですナア。　(詠嘆)

のように、質問・命令・禁止・詠嘆といった、一定の文表現を成立させうるものがある。これらの助詞は、それが文末につくことによって、文表現を決定する性格をもっている。

これに対して、つぎの例の「ノ」は、イントネーションの助けをかりて、はじめて、特定の文表現を成立させうるものである。

あしたから学校に行くノ。　(平叙)
あしたから学校に行くノ?　(質問)
あしたから学校に行くノ!　(命令)

すなわち、「あしたから学校に行くノ」の文末を下降調に発音すれば、この文は平叙文となり、文末に上昇調のイントネーションをつければ、質問文となる。また、文末を強く発音すると、命令の表現になる。したがって、この種の終助詞は、文末イントネーションを伴うことによって、文表現の成立に参加するものということができる。

一方、句末に用いられる間投助詞には、

今日ネ、ぼくのサ、誕生日なんだョ。

のように、フレーズやクローズの切れ目に、自由に現われて、話し手の、うちとけた、親しみの情を文全体にもりこんでいくものや、つぎの「ヤ」のように、呼びかけに用いられるものもある。

道子ヤ、早くおいで。

以上のほか、本来は、接続助詞など、他の助詞であったもので、次第に終助詞・間投助詞的になってきた類、あるいは、助動詞・形式名詞など、他の品詞に由来するものもある。

はい、お値段は、三千五百円ですケド。／もう、帰ろうッット。／お母さんテバ、どこ行ったの？／そこでダ、我々もダ、団結していかなくてはならない。／だって、この服じゃ、はずかしいモン。

また、助動詞「た」「だ」「ない」などの、つぎのような用法は、終助詞にきわめて近い。[15]

○「さあ、買った！　買った！」「よし、買った」

○あした、映画見に行かない？

○おい、早く、水だ！　水だ！

間投詞「ああ」「ええ」「あのう」「そのう」などの、

○先生の御出身は、ああ、たしか、あのう、九州の方でしたたねえ。

○この書類も、ええ、私の記憶では、そのう、去年の末のものだと思いますが。

というような用法は、間投助詞に似ている点がある。

こんなところが、文末・句末の助詞の周辺にあるものと言えよう。

2　文表現の成立に関与する終助詞

(1)　文表現を決定する終助詞

終助詞によって決定される文表現として、最も代表的なものは、疑問表現であり、これに用いられる、いちばん典型的な終助詞は「カ」である。

健一は、もう出かけたカ。／社長は、いらっしゃいますカ。／あの山は、大雪山ですカ。

あしたは、どこに行こうカ。／いま、何時ですカ。

「カ」は、質問文の文末に広く使われ、右のように、イエスかノーかの答えを求める判定要求の質問にも、のように疑問詞をもつ説明要求の質問表現にも現われてくる。[16] この場合、疑問表現は、疑問詞によって成立するとも言えるが、聞き手への質問のもちかけは、やはり「カ」に托されていると見られるので、判定要求の場合の「カ」と、説明要求の場合の「カ」とを、しいて区別する必要はない。

「カ」は、また、つぎのように、話し手の不確実な意志を表わす言い方、

まあ、十万ぐらいに勉強しときますカ。／二、三日、考えさせてもらおうカ。

あるいは、聞き手に意志決定をゆだねた誘いかけの言い方にも現われる。

そろそろ寝ようカ。／その辺でお茶でも飲みませんカ。

こうしたものを、ひっくるめて、「カ」による疑問表現は、話し手の、不確かな態度を表わすところに、その基調があるとされる。

用法の面では、敬体(デス・マス体)とも敬語表現とも共存するうえ、一般に、単独形においては、話し手の性別・

年齢や、相手との関係、あるいは話の場面等による使い分けを持たない点に、一つの特徴がある。しかし、複合形では、たとえば、「カネ」による質問は、主として年輩者が、同輩あるいは目下に向って使うとか、「カイ」は、男が、うちとけた場面でのみ使うといったように、こうした面での使い分けや制約をもっていることが多い。もちろん、これは「カ」の性格というよりは、「ネ」「イ」など、結びついて来た助詞の性格に負うところが大きい。

また、このような複合用法においては、微妙な意味や独特なニュアンスがつけ加わることがある。右の「カネ」は、時に、皮肉をこめた疑いを表わす。

ほんとに、そんなにうまくいきますカネ。

などは、その例である。

「カナ」は、

あの会社が、あぶないって、ほんとカナ。／今日も暑くなるカナ。

というような、単なる疑いを表わすだけでなく、つぎのように、話し手の迷いや躊躇の気持を表わす場合にも使われる。

映画にでも行こうカナ。／このお金、何に使おうカナ。

「カナ」による質問は、主に、男の老人に使われるのみで、やや古風な言い方になってしまい、現代では、「カナ」は、もっぱら、右のような疑いの表現を担当している。しかし、これも、主として、独り言や親しい間の会話にかぎられ、フォーマルな場面に顔を出すことは、ほとんどない。

現代では、右のような表現の場合、女性は、「カナ」の代りに「カシラ」を使うことが多い。

あの会社が、あぶないって、ほんとカシラ。／映画にでも行こうカシラ。

これは、言うまでもなく、「～かもしれない」から生じてきたものであるが、「カシラ」の方は、「カナ」に比べる

と、かなりフォーマルな会話にも用いられ、
社長さんも、お見えになりますカシラ。
などは、女性の上品な言い方とされる。
同じく「〜かもしれない」から生じたものとして、最近、若い人々、特に若い女性の間では、「カモ」も、使われるようになってきた。
彼女、まだ、会社にいるカモョ。／まあ、百人ぐらいなら集まるカモネ。
もちろん、これは、ごく親しい間の会話に限られ、敬体と共存することはない。
以上のほか、終助詞「カ」をめぐるものの中で、いっぷう変ったニュアンスをもつものに「モンカ(モノカ)」がある。これは、否定へのひるがえりの、きわめて強い反語表現として、
あの男が、金を出すモノカ。／だれが、金なんか出すモンカ。
いくら君の頼みでも、聞けるモンカ。／あの店には、二度と行くモンカ。
というように使われるが、必然的に、拒否ないしは否定的な決意の表現に発展する。
これらは、いずれも、ある程度エキサイトした場面で、おもに男性が使う言い方である。終助詞「モンカ(モノカ)」そのものは、敬体と共存せず、右の諸例の敬体は、すべて「ものですか」の形となるが、「モンカ(モノカ)」の「モン(モノ)」が、本来、形式名詞であることを考えれば、当然といえよう。女性は、「〜ものですか」の形を使うのが普通である。
なお、比較的高い年齢層の男性の言い方として、話し手の疑いや迷いを反語的に述べる、つぎのような表現もある。
この交渉、どうケリをつけたモノカ。／どこで、どう話が行き違ったモノカ。
これは、おそらく、「〜したものかわからない」の系統を引くものであろう。

以上のほか、疑問の終助詞としては、きわめて限られた場面ではあるが、

了解セルヤ。返電ヲ乞ウ。

のように、通信関係には、「ヤ」が出てくることがある。「君よ知るや、南の国」といった文語の「ヤ」の系列のものとして、一応、触れておく。

つぎに、詠嘆表現を成立させる終助詞であるが、これには、

おお、素晴しいですナア。／まあ、素敵だワア。／うむ、見事じゃノオ。

など、「ナア」「ワア」「ノオ」の三種が、まず認められる。そして、これらの間には、「ナア」は男が使い、「ワア」は女が使い、そして、「ノオ」は、年輩の男が主に使うという違いがある。

右のほか、書きことばには、「ョ」を用いた、

なんと不幸な人々ョ！

というような、文語的な言い方も残っているが、純粋に詠嘆の「ョ」と見られるものは、現代の話しことばから姿を消したといえる。しかし、後述の確定表現の「ョ」も、間投助詞の「ョ」も、右の「ョ」の系統をひくものであり、現代の終助詞・間投助詞に、大きな影響を及ぼしている。

命令表現を決定する終助詞に移ると、ここには、まず、動詞の命令形を支えるものが挙げられる。すなわち、

早く、起きロ(起きョ)。／車を止めロ(止めョ)。／仕事をしロ(せョ)。／こっちへ来イ。

の「ロ」「ョ」「イ」の類である。

四段(五段)活用の場合も、「書けョ」「読めョ」などの形はあるが、これは、「書け」「読め」で、すでに命令表現は

成立しうるので、この「ョ」は、命令表現を決定する終助詞とは言えない(後述の押念の終助詞「ョ」の一用法とみるべきであろう)。

さて、例文に挙げた、一段活用の「起き」や「止め」などの形、あるいは、サ変の「し」について、命令表現を決定する終助詞「ロ」であるが、これは、男の、乱暴な、高圧的な命令の言い方であり、きわめて親しい同輩・目下を相手にする場合や、けんかなどエキサイトした場面を除いては、ほとんど現われない。カ変の「来(こ)」の形につく終助詞「イ」も、この点は同じであり、一般の会話には、まず使われない。これらは、いずれも、粗野な、あらっぽい語感をもち、敬体・敬語などとは共存しない。

それに対して、「起きョ・止めョ・せョ」など、「ョ」による命令は、書きことば的な、やや古風な表現といえる。警察・学校などの、公的な命令や、事務的な指示では、口頭語として登場することもあろうが、普通の会話に使われることはない。一般には、

横断のさいには、左右をよく見ョ。／解答は、すべて解答欄に記入せョ。

など、標語・掲示・文書などに使われ、敬体・敬語と共存することは、まず、ないといってよい。文法書には、助動詞「れる・られる」の命令形として「れョ・られョ」の形が挙がっているが、現在、実際に、この形が使われることは、ほとんどない。

右に述べた、命令形を支えるもの以外にも、

もっとゆっくり話しナ。／さあ、早く起きナ。／もう一度考えナ。／早くしナ。／こっちへ来ナ。

といったように、動詞の連用形について命令を表わす終助詞「ナ」がある。これは、「話しなさい」「来なさい」などの「なさい」に由来するものであろう。家族や親しい仲間の間のプライベートな会話で、主に男性に使われ、敬体や敬語とは、共存しないと考えられる。

東京の、特に下町言葉では、この「ナ」は「ネエ」となり、

江戸っ子だってね、すし食いネエ。／親分とでも、よく相談してみネエ。

といった言い方もある。これは、江戸の職人ことばの流れをくむものとされるが、現代では、かなり乱暴な言い方と意識されている。また、高年齢の女性の間には、「早くお行きナ」「こっちを御覧ナ」という言い方、すなわち、接頭語の「お」「ご」を伴った体言形につく「ナ」が、現在でも、残っている。これは、明治中頃ごろまでは、主に女性の間で、盛んに用いられた言い方で、語誌的には、やはり「お行きなさい」「御覧なさい」から生じたものである。その点、さきの「起きナ」「来ナ」の「ナ」と同源ではあるが、この「お行きナ」「御覧ナ」の「ナ」は、これを省いた形、すなわち「早くお行き！」「こっちを御覧！」でも、十分、命令表現として通用するので、命令表現を決定する終助詞とは認められない。

以上のほか、あまり、上品な言い方ではないが、

この手紙を読んでみイ。／時間がないから、早くせイ。

といった「イ」がある。「見ョ」「せョ」の「ョ」のなまったものであろうが、ごく限られた動詞について、男性の乱暴な命令を表わす。

禁止の表現を支える、最も代表的な終助詞は、言うまでもなく、終止形につく「ナ」である。

あいつらに、先を越されるナ。／無駄遣いをするナ。／不平を、おっしゃいますナ。

これは、敬体や敬語とも共存し、性別・年齢層の別なく使われ、場面的な制約も、あまりない。しかし、現代では、目上に対する場合や、フォーマルな場面では、この「ナ」による言い方よりは「〜しないで下さい」「〜なさらないで下さい」などの形を使う傾向が強い。そして、「不平をおっしゃらないで下さい」に比べると、「不平をおっしゃい

ますナ」のような「ナ」による言い方は、やや古風であり、前者の表わすストレートな禁止に比べて、後者は、「たしなめる言い方」といったニュアンスが強い。

禁止の「ナ」は、また、「ナョ」「ナイ」「ナネ」など、さまざまな複合形をもち、これらは、たとえば「冗談言ぅナイ」の「ナイ」は、うちとけた仲間の間で、男性のみが使うといったような使い分けをもっている。これは、もちろん、「ナ」の性格というよりは、結びついた助詞の性格によって生じるものである。

また、どちらかというと、女性に好まれる禁止表現に「ないデ」を使った言い方がある。

こっちに来ないデ。／わたしを一人にしないデネ。

などが、その例であるが、ここに使われる終助詞「デ」は、もちろん、「来ないでくれ」「しないで下さい」から生じたものである。この「デ」は、

無茶なさらないデ。／そんなことおっしゃらないデョ。

のように敬語とも共存するが、フォーマルな場面や目上に対する場合には使われない。

終助詞の働きによって成立する確定表現というべきものがある。たとえば、つぎのようなものである。

あれが、北極星ネ。／あの辺は、すごく静かサ。／そう、あしたから夏休みョ。

すなわち、断定の助動詞「だ」「です」に当るものである。これらには、また、

先生が、御上京なさったそうネ。／まるで火事場のようサ。／あら、もうお帰りになりそうョ。

のように、伝聞・様態にも使われる。しかし、親しい間の、うちとけた会話に限られ、「サ」は、男女とも使うが、「ネ」は、主として女性の会話に限られる。「ョ」は、男は、下降調に発音するが、女性は上昇調のイントネーションをつける。また、「ネ」「ョ」は、敬体や敬語とも共存しうるが、「サ」は、ほとんど共存しないといってよい。

以上挙げたほか、勧めの表現を表わす「タラ」、回想の表現を成り立たせる「ッケ」の二つを、つけ加えておこう。まず、「タラ」は、

あなたも、パーティーにいらしタラ。／幸子さんも、呼んダラ。

のように、相手に勧めたり、サジェッションを与えたりするのに用いられ、きわめて婉曲な命令ともいえる。どちらかというと、女性に好まれる言い方であり、敬語・敬体とも共存しうる。しかし、目上に対しては、本来の形である「～したらいかがですか」「～したらどうでしょうか」を用いることになる。

つぎに、「ッケ」であるが、これは、確定の助動詞「た」について、

あのじいさんには、よく叱られたッケ。／この角には、駄菓子屋がありましたッケ。

のように用いられる。また、時には、

あなたは、どなたでしたッケ。

のような用法も見られるが、これも、回想表現の一環といえよう。「ッケ」は、敬体・敬語表現とも共存しうるうえ、話し手の性別・年齢層の面での制約もなく、目上や客に対しても使用しうる。しかし、あまり上品な言い方とはいえない。

(2) 文末イントネーションを伴って文表現を決定する終助詞

一定の文末イントネーションを伴うことによって、はじめて文表現を決定しうる終助詞として、「ノ」「テ」「コト」などが挙げられる。

「ノ」は、ストレス・トーンを伴った場合には、命令を表わし、上昇調のイントネーションを伴うときには質問を

表わし、下降調に発音されると、平叙ないしは念を押す表現となる。

午後から、練習するノ！　（強勢）　命令
午後から、練習するノ？　（上昇）　質問
午後から、練習するノ。　（下降）　平叙

このような、終助詞「ノ」による表現は、話し手の性別・年齢などに、ほとんど関係なく、広く用いられるが、命令の「ノ」は、その性格上、同輩または目下に対する場合に限られる。また、質問や平叙の表現では、

あした、おうちにいらっしゃいますノ？／はい、父が育てたバラですノ。

のように、敬語や敬体と共存しうるが、こうした用法は、もっぱら女性の用いる上品な言い方である。

なお「ノ」は「ノネ」「ノヨ」「ノサ」など、複合形でも現われ、これらのうち「ノネ」は質問・平叙に用いられ、「ノサ」はもっぱら平叙に出てくる。また、「ノヨ」は、命令・平叙に現われるが、平叙の場合、たとえば、

午後から練習するノヨ。

の「ヨ」に上昇調イントネーションをつけると、女性の言い方になり、「ヨ」を低く発音すると、男の、やや下品なあるいは粗野な言い方になる。

つぎに、「テ」であるが、これも、文末を強く発音すると、命令ないしは勧誘を表わす。

おじさんに返事出しテ！／さあ、早く立っテ！

などは、その例である。

また、上昇調では、

おじさんに返事出しテ？／あなた、もう、大工さん頼んデ？

といった質問の表現を構成し、これは女性特有な言い方である。これを、敬語・敬体とともに用いた、つぎのような

言い方は、上品な、やや気どった言い方とされる。

　なにか、お飲みになりましテ?

「テ」がついた文末が、下降調に発音されると、

　また、こんないたずらしテ。／いつも、バカなことばかり言っテ。

一種の確述の表現となる。これは、やや年輩の人々の身うち・仲間うちの会話に、よく見られる言い方である。

終助詞の「テ」は、無論、接続助詞の「て」の流れをくむものであるが、右の確述の「テ」には、接続助詞の匂いが強く残っている。したがって、「て」のあとを省略した切断表現と見ることもできよう。

なお、「テ」の複合形の中で、「テョ」の形は、ストレス・トーンを伴なって、

　ちょっと、こっち見テョ!

のように命令を表わすほか、平板ないしは下降調で、つぎのように、確述を表わす。

　ね、この汽車、少し遅れテョ。／でも、お庭は、暑くテョ。

これらは、いずれも、女性専用の言い方である。

「コト」も、右の「ノ」や「テ」と、ほぼ同様に、イントネーションを伴って、質問・詠嘆あるいは命令などを表わす。

　今夜、お電話していいコト?　(上昇)　質問
　まあ、素敵なお部屋だコト!　(下降)　詠嘆
　正午までに駅前に集まるコト!　(強勢)　命令

右のうち、質問と詠嘆は、女性専用の、上品な言い方である。もちろん、つぎのように、敬体・敬語とも共存するが、これは、むしろ、気どった言い方として、敬遠される傾向もある。

今夜、お電話申し上げてよろしいコト？／まあ、素敵なお部屋でございますコト！

しかし、最近の若い女性の間では、「コト」による質問や詠嘆の表現は衰退しつつある。

命令を表わす「コト」は、教師が生徒に対して、あるいは上官が部下に対して指示する場合など、監督する立場の者が、命令を下すような場面で見られるのみで、一般の会話には、ほとんど出て来ない。むしろ、掲示や文書などに注意事項を述べる場合などに、よく用いられる。

「コト」の複合形としては、「コトネ」「コトサ」など、さまざまなものがあるが、この中で注目すべきは、「コトヨ」の形である。まず女性が使うものとして、つぎの用法がある。

私は知りませんコトヨ。／御飯の支度はしてありますコトヨ。

これらは、単に、「念を押す」意味合いのものであろうが、これが特定の相手に向けられると、命令の表現になる。

さあ、みんな、今夜は早く寝るコトヨ！

前者の場合は、「ヨ」に上昇調のイントネーションを伴い、後者では、ストレス・トーンを伴う。

この「ヨ」が、下降調に発音されると、左のように、命令というよりは、当然、当為を表わす言い方になる。

疲れた時は、とにかく早く寝るコトヨ。／若い時の苦労は、しておくコトヨ。

これは、どちらかというと、男の言い方といえよう。

以上述べたもののほか、本来、引用に用いられる格助詞「と」から生じたものであるが、つぎのような「ト」がある。

中村先生が｛御病気ですト？　（上昇）　質問
　　　　　　御病気ですト。　（下降）　伝聞

すなわち、文末に上昇調イントネーションがあると、質問を表わし、下降調の場合は、

伝聞の表現となる。といっても、この場合の質問は当然、聞き返しのニュアンスをもつ。
これらは、また「ッテ」の形にもなる。

あしたは{海に行くッテ？（上昇）　質問
　　　　　海に行くッテ。（下降）　伝聞

「ト」による質問・伝聞の表現は、ほぼ、年輩の男性に限られ、現在、一般には「ッテ」の形が用いられる。これらは、いずれも、敬体・敬語とは共存するが、フォーマルな場面や、目上に対する場合には、さし控えられる言い方である。また、伝聞の場合には、「トネ」「ッテョ」「トサ」などの、複合形があり、このなかでは「トサ」「ッテサ」が特徴的である。

一寸法師はお姫様と幸せに暮したトサ。／今日は、勉強するんだッテサ。

なお、「ト」には、意志の助動詞「う」「よう」について、自分の気持を放り出すような言い方もみられる。

もう帰ろうット。／さて、そろそろおいとましましょット。

この場合の「ト」はストレス・トーンを伴ない「ット」と促音化する。
同じように、「ッテ」にも、ストレス・トーンを伴った、つぎのような用法がある。

そんなこと遠慮するなッテ。／ええ、わかってますッテ。

相手を突っ放したような言い方である。
どちらも、性別・年齢に関係なく、割合に広く使われるが、ややぞんざいな言葉づかいであり、改まった場面には用いられない。

3　文表現の成立に関与しない終助詞

(1)　表現内容を相手にもちかける終助詞

終助詞の中には、文表現の成立には関係しないが、聞き手の注意をうながして同調を求めたり、念を押したり、あるいは、話の内容を相手に押しつけたりするものがある。

あした、泳ぎに行くぜ。／これは、いいステレオだゾ。／バスが、迎えに来たワ。

などの類が、それである。「ゼ」「ゾ」は、男性の仲間うちの会話に限られ、上品なものとはされない。特に「ゼ」には、乱暴な粗野な語感が伴う。敬体・敬語とは、共存しうるが、「ゾ」の、

これは、容易ならぬ事態ですゾ。

といった用法は、年輩の男に限られる。

「ワ」は、軽い上昇調のイントネーションを伴って、女性に使われ、これは、日常会話だけでなく、かなりフォーマルな場合にも現われる。もちろん敬語・敬体とも共存しうる。

はい、私がお迎えに伺いますワ。

男性の会話にも、「ワ」は出てくるが、これは、下降調に発音される。

ああ、車で、すぐ行くワ(行かア)。／ええ、今日中にお届けしますワ(しまサア)。

この男性の「ワ」の特徴は、動詞の語尾や、助動詞「です」「ます」などの〔u〕と融合して、時に「ア段の長音」となることである。しかし、この言い方は、上品ではない。

「ワ」の複合形としては、女性の「ワ」には、「ワヨ」「ワネ」があり、男性の「ワ」には「ワイ」がある。「ワヨ」

「ワネ」は、

あたしも行くワョ。／あなたもいらっしゃるワネ。

のように、現代の女性の会話に頻繁に出てくるが、「ワイ」は、つぎのような形で老人に残るのみである。

せがれの不始末にはまいりましたワイ。／まあ、何とか片づけましたワイ。

右の「ゼ」「ゾ」「ワ」は、平叙文の文末のみにつくが、この種の終助詞の中には、つぎの「ョ」「ャ」「ナ」「イ」など、命令文や疑問文の文末にもつきうるものがある。まず、「ョ」は

ぼく、その本、読んだョ。／もっと、ゆっくり話せョ。／もう、来るなョ。／練習がいやなのかョ。

のような形で、男性の仲間うちの間で用いられる。敬体・敬語と共存しうるが、全体に、かなり押しつけがましい語感をもつため、目上や客に対して、

はい、承知しておりますョ。

のように用いるのは、失礼とされる。

右の男性の使う「ョ」は、下降調のイントネーションあるいはストレス・トーンを伴うのに対して、軽い上昇調イントネーションを伴って、女性に使われる「ョ」がある。ただし、これは、常に「ワョ」「ノョ」「コトョ」などの複合形で現われる。

わたくし、先に参りますワョ。／ね、おとなしくしてるノョ。／さあ、今夜は、みんな早く寝るコトョ。

などは、その例である。この女性の「ョ」には、男性の「ョ」ほど押しつけがましいところがなく、ものやわらかな語感をもつため、かなりフォーマルな場面にも顔を出す。なお、もっぱら女性が使う、古風な言い方に、

早くお行きョ。／この写真を御覧ョ。

などの「ョ」もあるが、これは、現代では高い年齢層の仲間うちの会話に残るのみである。

つぎに、「ャ」はもっぱら命令文の文末に用いられる男性専用の終助詞である。これは、

まあ、荷物は、そこに置けャ。／早く、電話しろャ。／もっと、こっちへいらっしゃいャ。／止せャイ。

のような形で、比較的高い年齢層の人々が、ごく親しい間で用いる。敬語と一しょに使われることもあるが、全体に、あまり上品な言い方ではない。

この男性の「ャ」に対応するものとして、女性の使う「ナ」がある。これも、命令文の文末に現われ、比較的高い年齢層の人々の、仲間うちの会話に用いられる。

もっと、こっちへいらっしゃいナ。／ちょっと待ってくださいましナ。

などが、その例である。これは、また、「お行きョ」「御覧ョ」の「ョ」と同様に、

気をつけてお行きナ。／この写真を御覧ナ。

などの形でも用いられ、年寄りの女性の、古風な言い方として残っている。

つぎに「イ」であるが、これには、まず、助動詞「だ」「た」につく、つぎのような用法がある。

まだ起きるの、いやだイ。／あ、雪が降って来たイ。

この用法は、男の子たちの特有な言い方であるが、ぞんざいな言葉づかいとして、親や教師にとがめられることの多い言い方である。「イ」はまた、命令文や質問文の文末にも使われる。命令文につくものには、

もっと、しっかり持てイ。／早くしろイ。／しっかり勉強せイ。／つべこべ言うなイ。

などがあり、もっぱら、男性の仲間うちの会話に使われるが、ぞんざいな荒々しい言い方であり、敬語などとは、まず共存しない。

それに対して、質問文の場合の、つぎのような「イ」は、それほど荒っぽい言い方ではなく、敬体・敬語とも共存し、男の日常の会話には、かなり広く使われる。

高橋君の住所、知ってるかイ。／あした午後、お父さんいらっしゃるかイ。

しかし、目上や客に対して用いられることはない。

以上のほか、やや特殊なものとして、接続助詞「とも」から生じた「トモ」を挙げることができる。これは、相手に対する同意・同調を表わすもので、どちらかというと、男性に用いられる傾向が強い。

はい、お気持は、よくわかりますトモ。／ああ、すぐ行くトモ。

あまりフォーマルな場面には現われないが、敬語・敬体とも共存し、日常会話には、かなり広く見られる。

以上述べた、表現内容を相手にもちかける終助詞は、一般に「押念の終助詞」とも呼ばれ、これらには、共通して「文表現の成立に関与する終助詞と、文末に共存するときには、必ず、それらのあとに続く」という性格がある。もちろん、間投助詞には先行するので、これら三種の助詞が、文末に共存する場合、その前後関係は、「文表現に関与する終助詞＝押念の終助詞＝間投助詞」の順になる。

○そんなバカなことあるカ＝イ＝ネ。

○早くしロ＝ヨ＝サ。

○しらばくれるナ＝ヨ＝ナ。

(2)　文末に余情を残す終助詞

正統派の、まともな終助詞ではないが、終助詞と同じように使われ、文末に微妙な余韻・余情といったものを残す一群の助詞がある。これらは、主として接続助詞から転じて来たもので、本来、接続助詞等の後を言わずにすませた一種の切断表現から発達してきたものであり、文表現の成立には、全く関与しない。この類の中で、最も典型的なものは、逆接の接続助詞に由来する「ガ」「ケド（ケレド）」「ノニ（ニ）」の三種である。

このうち、「ガ」と「ケド(ケレド)」は、

はい、お値段は、三千五百円ですガ。／食堂は、八階になっておりますケド。

のように、現代では、店員や案内係などの接客サービスのことばに特徴的に現われてくる。もちろん、一般社会でも、目上や未知の人々などを相手とした改まった場面では、かなり見受けられる。

書類は、秘書課の方にお回ししましたガ。／東京までは三時間ほどと存じますケド。

これらの言い方は、元来、断定を避けて、ものやわらかに言い収める婉曲表現の一つとして発達してきたものであり、当然、敬体において、敬語などと一しょに現われることが多い。同僚や目下あるいは仲間うちでは、

おやじの方からはうるさく言ってくるガネ。／和子さんも来ると思うんだケドナ。

といったような常体も現われるが、この場合は、まだ、本来の逆接のニュアンスが残っているように思われる。

「ノニ」の方は、文末に、不本意ないしは心残りといったニュアンスを盛りこむもので、つぎのように用いられる。

もっとゆっくりしてけばいいノニ。／お電話下されば、お迎えに出ましたノニ。

また、不本意から転じて、なじるような調子になることもある。

早くしなさいっていうノニ。／あんなに注意しておいたノニ。

などは、その例である。どちらも、性別・年齢層などに関係なく、広く使われるが、後者の「なじる」ニュアンスの「ノニ」は、もちろん、目上や客に対して用いることはできない。前者の「心残り」を表わす言い方は、日常会話ばかりでなく、フォーマルな場面にも現われる。

「ノニ」はまた、男性の発話では、時に「ンニ」あるいは「ニ」の形になる。

だから、注意しろって言ったンニ。／なにも、ひとの事で悩むことないニ。

しかし、この言い方は、あまり上品なものではない。

なお、助動詞の「だ」および、いわゆる形容動詞につく場合、普通は「なノニ」の形をとるが、稀に、「だノニ」の形になる。

この年で苦労するのは、いやだノニ。／あの土地は、御先祖さまの土地だノニ。

しかし、この形は、かなりの年齢の老人に残るのみである。

右の「ガ」「ケド」「ノニ」と同じく、逆接の接続助詞の流れをくむものに「モノヲ」「モノ」がある。「モノヲ」は、現在では、

もう少し整理しておけばいいモノヲ。／捨てないでおけば役に立つモノヲ。

のように使われ、恨みがましい気分を表わす。敬語・敬体とも共存しうるが、やや古風な言い方であり、主に高い年齢層の人々に使われる。

「モノ」は、つぎのように使われ、「モン」の形になることもある。

この着物、雨で濡らすの、いやですモノ。／まだ時間は、たっぷりあるモン。

これは、不本意ないしは不満足のニュアンスをもち、時に、話し手の苛立ちの気分をも表わす。

今、ちょっと手がはなせないモノ(モン)。

いずれも、性別・年齢に関係なく、広く用いられ、敬体・敬語とも共存しうるが、不満がかなり強調される言い方なので、改まった場面に出てくることは少い。

「モノ」には、また、「ものだ」の系列に属するものがある。これには、「モノ(モン)」と「モノデ(モンデ)」の二種が認められ、まず、前者の「モノ(モン)」は、つぎのように使われる。

若い時の苦労はしておくモノ！／そんな不満は口にしないモンョ。

この系統の「モノ」は、決めつけるようなニュアンスをもち、単独形の場合は、特に、この傾向が強く、時に、ス

トレス・トーンを伴う。男女・年齢層の別なく使われるが、改まった会話には、あまり現われない。なお敬語とは共存しうるが、敬体は「ものです」の形に移行する。

一方、「モノデ(モンデ)」の方は、もっぱら言いわけをする時に用いられる。

子どもが、熱を出しましたモノデ。／タクシーがつかまらないモンデネ。

これは、原因・理由だけを述べて、結果を言外に匂わして、相手の許しや納得を求めるもので、接続助詞としての「もので」の性格が、まだ、強く残っている。男女・老若の別なく用いるが、概して弱い立場からの表現なので、敬体・敬語と一しょに、改まった会話に用いられることが多い。

つぎに、順説の接続助詞「で」の系統をひくと考えられるものに、

いいえ、何のお役にも立てませんデ。／まあ、行き届きませんデ。

などの「デ」がある。本来は、「何かと行き届きませんで失礼しました」などと続くものの下略から発達して来た言い方である。この「デ」は、常に「ませんデ」の形で、主として、年輩の女性のあいさつなどに用いられる。

「デ」には、このほかに、「コトデ」の形で使われる「デ」がある。これは、無論「ことだ」「ことです」から生じたものであり、時に「コッテ」の形をとる。

まあ、それは、お楽しみなコトデ。／毎日、よく降りますコッテ。

などが、その例である。いずれも、比較的高い年齢層の人々の、やや改まった会話に出てくるが、どちらかというと、「コッテ」の方は、少し品が落ちる。

以上のほか、接続助詞「やら」に由来するつぎのような「ヤラ」がある。

あの娘もどこでどうしていますヤラ。／この物価高は、いつまで続くのヤラ。

これは、本来、「どうしているヤラわからない」などの下略から生じたものであろうが、普通、疑問文の文末につ

いて、ため息まじりの絶望あるいは落胆といったニュアンスを表わす。若い人たちが使うことは、ほとんどなく、高年齢層の、特に女性に多くみられる。敬体・敬語とも共存し、日常のうちとけた会話にも、改まった場面にも現われる。

この「ヤラ」の複合形のうち、「トヤラ」には、さきに挙げた伝聞の「トサ」に似た、つぎのような用法がある。

噂をすれば影トヤラ。

しかし、これは、現代では、書きことばのみにみられる古風な言い方である。

4　間投助詞の用法

(1)　話し手の親しみの気持を盛りこむもの

親しい間の会話のセンテンスに、しばしば現われ、極端な場合には、句末ごとに出てくる間投助詞がある。その典型的なものは、「ネ」「サ」「ヨ」の三種であり、

君ネ、ちょっとネ、話があるんだがネ。／きのうサ、あたしサ、江の島に行ったの。／いくら祭でもヨ、そんなに騒ぐなヨ。

これらの間投助詞は、いずれも、「いま親しく話しかけている」という話し手の態度を表わすものである。そこには、同調を求めるというか、いくぶん押しつけるようなニュアンスが感じられる。

右のうち、「ネ」が、最も一般的で広く使われ、ある程度、うちとけた場合には、目上や客に対しても使われるし、かなりフォーマルな場面にも現われる。

こちらは国産ですがネ、別に変わりないようですネ。

それに対して、「サ」は、ほぼ、身内・仲間うちのプライベートな会話に限られる。

　約束ですからサ、雨でも伺いますサ。

のように、身内以外に使うこともありうるが、あまり品のいい言葉づかいとは言えない。なお、「サ」が、「ます」についた時には「マサア」と発音されることがある。

間投助詞の「ヨ」は、男性が、主に目下に対して使う、乱暴な、粗野な言い方であり、若い男同士の対話に現われることが多い。もちろん、敬語や敬体とは、まず共存しないといってよい。

以上のほか、「ナ」と「ノ」があり、いずれも、男が、身うち・仲間うちの、うちとけた会話に使用するが、「ノ」は老人に限られる。

　来るはずなんですがナ、まだ、だれも来ませんナ。／お前ナ、先に行ってナ、待ってろよナ。／わしもノ、若いころはノ、あばれたもんだ。

敬体と共存する「ナ」は、うちとけた場合には目上に対しても使いうるが、敬体と共存しない「ナ」は、あまり上品な言い方とは受けとられない。

なお、西日本方言においては、さきに述べた「ネ」と同じように、「ナ」「ノ」は、一般に広く使われる。

　わてナ、あすナ、また来ますよってナ。／のりやのノ、のんちゃんノ、のり食うてノ、死んだとノ、……

以上述べたような間投助詞は、会話のセンテンスに、話し手の親しみの気持をもりこむ点で、生き生きとした会話の一つの大切な要素ではあるが、同時に、慣れ慣れしく、押しつけがましいニュアンスをもつため、その多用は慎しむべきものとされている。

「と」が、間投助詞的に使われることがある。

(2)　ポーズ(pause)を作る間投助詞

会話のセンテンスの途中に間をおく感じで、本来、助動詞であった「だ」「です」あるいは、格助詞に由来する「と」が、間投助詞的に使われることがある。

そこでダ、みんなで智恵を集めてダ、対策を立てなくてはならない。／それだからデス、我々は団結してデス、交渉に当らなければならないと思います。／さてト、もう一働きしてト、風呂にでも行くか。

右のうち、「デス」は、主として、多数の聞き手を相手にした場合に限られる。「ダ」にも、そうした傾向はあるが、かんで含める調子でものごとを説明するようなときには、私的な会話にも現われる。また、「ト」は、独り言などに使われることが多い。これらのうち、「ダ」と「ト」は、男性に限られ、どちらも、あまり上品な言い方とはいえない。

なお、前項に挙げた間投助詞「ネ」「サ」「ヨ」「ナ」「ノ」等には、「ネー」「サー」「ヨー」「ナー」「ノー」と長く伸ばして発音し、一種のポーズをとる用法もある。

(3)　語句を強調する間投助詞

会話の中の、特定な語句を強調する時、よく使われるのは、「コソ」である。

君の将来を思えばコソ、まあ、苦労しておけって親心なんだろう、きっと。／なによ、あんたコソ、図々しいわねえ。

これは、言うまでもなく、係助詞「こそ」に由来するものであり、右のような用法においても、必ずしも、本来の性格を失ってはいない。しかし、かなり自由に句末に現われ、現代の日常会話の「コソ」は、間投助詞とみなしうる

場合が少くない。この種の「コソ」は、性別・年齢層の別なく、比較的広く使われるうえ、敬体・敬語とも共存し、フォーマルな場面にも使用される。

つぎに、「ッテバ」「ッタラ」も、特定語句の強調に現われるが、これは、身内・仲間うちの会話に限られ、同輩あるいは目下に対して使われる言い方である。

いやだッテバ、しつこいわねえ。／時間がないッタラ、早くいらっしゃいよ。

もちろん、本来は、「と言えば」「と言ったら」から生じたものであるが、右のように条件法としての性格の薄い用法が、一般化してきている。そして、これらは、話し手の苛立った気分や、さしせまった雰囲気を表わし、女性や子どもの発話に多い。稀に、敬語と共存することもあるが、かなり乱暴な言い方である。

これらは、また、呼びかけの場合にも使われる。

お母さんッテバ、返事してよ。／良夫ッタラ、どこ行ったの？

呼びかけに使われるものとしては、このほかに、「ヤ」「ヨ」がある。「ヤ」は、家族の間で、子どもや使用人などに呼びかける場合に使われてきたが、現在では、かなり年をとった女性の言い方とみられる。

春子ヤ、ごはんですよ。

一般には、ペットなどへの呼びかけに使われることが多い。

たまヤ、こっちへおいで。

こうした呼びかけの「ヤ」も、俳句の切字の「古池や蛙飛びこむ水の音」と同じ系列であり、本来は、特定語句を強調するものであろう。

一方、呼びかけの「ヨ」の方は、

神ヨ、助け給え。

といった古風な言い方に残るのみで、日常の会話には現われない。

(1) 宮地裕『文論』明治書院、一九七一年、一五五頁。金田一春彦「コトバの旋律」(『国語学』五集、一九五一年)。田中章夫「終助詞と間投助詞」(『品詞別日本文法講座 助詞』明治書院、一九七三年)。国立国語研究所報告18『話しことばの文型 (1)』秀英出版、一九六〇年。
(2) 久野暲『日本文法研究』大修館、一九七三年。
(3) 肯定判断の「彼が長男だ(である・です)」に対する、否定判断「彼が長男じゃない(ではない・ではありません)」の場合も含める。
(4) 時枝誠記は、「鐘が聞える」「山が見える」の「鐘が」「山が」の類も、対象語とする(『国語学原論』岩波書店、一九四一年、三七四—三七五頁)。
(5) 「水を飲みたい」型の表現については、湯沢幸吉郎『現代語法の諸問題』(日本語教育振興会、一九四四年)、松村明『江戸語東京語の研究』(東京堂、一九五七年)にとりあげられているほか、山田巌「「水が飲みたい」と「水を飲みたい」」(『講座・現代語 6』明治書院、一九六四年)などの論文もある。
(6) 田中章夫「「天気がいい時」と「天気のいい時」」(前掲『講座・現代語 6』)。
(7) 松村明「「水を飲みたい」という言い方について」(『東京女子大学論集』一九五一年)。
(8) 青木伶子「「へ」と「に」の消長」(『国語学』二四集、一九五六年)、「ニとへ」(前掲『講座・現代語 6』)。
(9) 松下大三郎『改撰標準日本文法』(紀元社、一九二八年)など。
(10) この「デ」は、助動詞「だ」の連用形。
(11) 湯沢幸吉郎『口語法精説』(明治書院、一九五三年)。
(12) 春日政治『尋常小学・国語読本の語法研究』修文館、一九一八年。山田孝雄『日本口語法講義』宝文館、一九二二年。松下大三郎『標準日本口語法』中文館、一九三〇年。日下部重太郎『現代国語精説』中文館、一九三二年。佐久間鼎『現代日本語法の研究』厚生閣、一九四〇年。松村明「主格表現における助詞「が」と「は」の問題」(前掲『江戸語東京語の研究』)。三

上章『日本語の論理―ハとガ―』くろしお出版、一九六三年。三尾砂『国語法文章論』三省堂、一九四八年。國廣哲彌「日本語格助詞の意義素試論」(『島根大学論集　一二』一九六二年)。永野賢「文章における「が」と「は」の機能」(『伝達論にもとづく日本語文法の研究』東京堂、一九七〇年)。久野暲『日本文法研究』大修館、一九七三年。大野晋「助詞ハとガの機能について」(『文学』四三巻九号、一九七五年)。

(13)　永野賢『伝達論に基づく日本語文法の研究』東京堂、一九七〇年、一九二―二一四頁。

(14)　松村明『江戸語東京語の研究』(前掲)三三六―三四〇頁。

(15)　金田一春彦「不変化助動詞の本質」(『国語国文』二二二・二二三号、一九五三年)。

(16)　宮地裕「疑問表現とその周辺」(『文論』明治書院、一九七一年)。

参考文献

国立国語研究所報告3『現代語の助詞・助動詞』秀英出版、一九五一年。

松村明編『助詞・助動詞詳説』学燈社、一九六九年。

『品詞別日本文法講座　助詞』明治書院、一九七三年。

〈執筆者紹介〉

大　野　　晋（おおの　すすむ）　1919年生　学習院大学文学部教授
竹内美智子（たけうち　みちこ）　1926年生　共立女子短期大学文科教授
山口明穂（やまぐち　あきほ）　1935年生　白百合女子大学文学部教授
北原美紗子（きたはら　みさこ）　1937年生　清泉女子大学文学部助教授
西田直敏（にしだ　なおとし）　1931年生　北海道大学文学部助教授
安　田　　章（やすだ　あきら）　1933年生　京都大学文学部助教授
田中章夫（たなか　あきお）　1932年生　国立国語研究所言語計量研究部第2研究室長

岩波講座　日本語7　文　法 II
第4回配本（全12巻　別巻1）　¥2000

1977年2月15日　第1刷発行

発行所：〒101　東京都千代田区一ツ橋2-5-5　株式会社 岩波書店　電話 03-265-4111　振替 東京 6-26240
印刷・精興社　　製本・牧製本